

燃田子菜

創立五十年誌
(一)

創立五十年誌「燃ゆる柴」(一)

目次

巻頭言 榎本利三郎……1

創立五十周年記念礼拝、感謝会 ……3

創立五十周年に寄せて

—創立五十周年を記念して—

五十の言葉	伊規須 太郎……27
五十周年を記念して	岩井 芙美子……28
ひそかな所に隠した宝物	榎本 百合子……29
八幡前田教会と私	榎本 俊雄……35
神の恵みによって	榎本 和義……45
「燃ゆる柴」に寄せて	榎本 誠……51
主の恵み深きことを	
味わい知れ	高木 ツルエ……57
五十周年記念に当たって	花倉 洋子……59

五十年の感謝	広田 寿……60
神の教会五十年史の中で	野村 末義……63

—八幡前田教会に導かれて—

主が支えて下さる日々	安部 タマエ……65
エベネゼル↓ハレルヤ前進	伊規須 泰子……66
恵みの人工弁	池田 操……69
前田教会へ導かれて	石丸 幸子……73
珠玉の五年間	宇野 恵子……74
「光」を求めて	榎本 民子……77
道程	川越 正……78
感謝	河本 米子……80
思い出	熊畑 恒男……82
前田教会に導かれて	小松 南子……84
荒野の頃	首藤 正……85
前田教会に導かれて	正野 真宏……88
私が神の愛を知った日	正野 悠子……90
私のふる里、前田教会	白神 薫……92
私の天路歷程	高木 敏夫……94
恵みに導かれて	中村 光恵……106

前田教会に来るようになった

時のこと

野口美加……109

ひとたび我に来たる者

我必ずこれを捨てず

林 正二郎……112

前田教会と私

林 磨璃子……113

前田教会に導かれて

林 由記子……115

主のあわれみを思う

原田 シゲノ……117

主の恵みは絶えることがなく

丸山 恵美子……120

—八幡前田教会の思い出—

ある日の夫婦の会話より

安東篤良・倫子……123

思い出

阿部 和子……126

幼い日の思い出

飯田 美紀子……127

ただ恵みによって

鵜飼 英子……128

西原文江さんとの出会い

江島 嘉寿子……130

悔改め

加藤 千代……131

歩み

川越 千恵子……133

「みぎわ」回想記

小羊山人……134

日曜学校に育まれて

K . N……136

「まえだ」(エッケル先生の奨めに触発されて)

首藤 正……138

前田教会と私

谷口 由美子……141

会堂の思い出

中村 光恵……143

先生の情熱

花田 宏・明美……144

父の愛と神の愛

林 信一……145

八幡前田教会を通して

林 伊佐夫……147

主が私にして下さった恵み

林 伊佐夫……147

主に持ち運ばれて

廣田 千穂子……148

主の恵みに生かされて

水村 静江……149

—救いのあかし—

主の愛の御手に導かれて

石田 秀子……151

救いの証

石丸 到……152

救い主との出会い

加藤 千代……155

神の選び

菊池 修……156

我誇るはイエスキリストを

貞 サユリ……158

知る事のみ

島崎 博子……159

私の感銘深いことば

下川 泰広……161

母と家内と私と

神の約束

榎本先生にお会いして

主はわたしの牧者

主の御手に導かれて

一つのみことばと神様のみ旨

恩寵の日々

「にわか求道者」も

今は救われて

主の恵み深きことを

味わい知れ

主と共に歩む

「エル・ロイ」私を見給う主

「トロントだより」主をたたえて

正野 百合子……………164

多屋 千枝子……………165

堤 善弘……………167

長尾 千枝子……………168

野村 美恵子……………169

秦 タネノ……………172

原田 駒一郎……………174

萩原 あさよ……………176

東 伊津子……………177

（匿名）……………178

李 文珠……………183

—信仰のあかし—

幼子のごとく

主の御力に支えられて

恵みのあかし

新しい力を得て

上 島 恵子……………187

瓜 生 美知子……………188

大 口 和子……………189

大 田 邦子……………190

一本のぶどうの木

主の恵み

今より我は主なり

主のあわれみは

尽きることがない

神様のおかげで

ある日の記録

御子の国に遷された者

詩篇第二三篇第一節を通して

神は愛なり

神の召し

—思い出の人々—

選びにあずかっていた父

島崎の奥様を偲んで

河本かつ遺稿

母の思い出

姑の思い出

一粒の麦

父の信仰と私

太田 香代子……………194

緒方 とみ子……………195

柴田 郁子……………198

正野 暢之……………199

正野 栄子……………201

下山 祥子……………202

H . T……………204

津留崎 浩行……………205

松尾 博子……………206

水村 光義……………207

岩 隈 多賀子……………209

大 田 邦子……………211

河 本 米子……………213

片 山 セイ子……………214

島 崎 博子……………215

正 野 サカエ……………217

高 橋 英雄……………225

召天者の遺稿

母の思い出	筑山 寿々子……………	226
母の召天	野村 末義……………	229
母への御礼	野村 美恵子……………	231
絶えず祈りなさい		
全てのこと感謝しなさい	前田 千鶴子……………	232
入信のあかし	大野 季太郎……………	235
「見えない方」に		
生かされている	大口 種義……………	239
生涯を導いた聖言	河本 小太郎……………	240
夫と共に―その生涯の記―	河本 かつ……………	241
俳句「妻との十二ヶ月」	正野 義雄……………	250
夏期学校雑感	島崎 美知子……………	251
旅	西原 ふくよ……………	253
家の仏壇	松村 直行……………	255
与えられた道	丸橋 幸市……………	259

創立五十年誌「燃ゆる柴」(二)

目次

教会五十年のあゆみ……………	1
榎本牧師の八十年史……………	35
写真で見る教会史……………	59
各会のあゆみ……………	83
教会年表……………	91
信徒及び求道者並びに関係者名簿……………	107
結ばれた方々の名簿……………	113
さきに召天された方々の名簿……………	117
あとがき……………	119
集案案内……………	120

巻頭言



牧師 榎本 利三郎

しばは火に燃えているのに、

そのしばはなくならなかった。(出エジプト三・二)

モーセがエテロの羊を飼って、ホレブの山に來た時、柴が盛んに燃えていました。いつまでも柴が燃え尽きないので「なぜ柴が燃えてしまわないのか？」そのわけを知り度くて、近づいて來た時、神様にお会いし、神様からの使命を与えられて、イスラエルをエジプトの王、パロの権力の下から救い出す御用を果たしました。

神様は柴のような弱い、小さい雑木（火に燃やせばすぐ灰になる）に火を燃やしつづけて、モーセを引き寄せ、御自身を現わし給いました。今も少数の弱い小さい私共に、聖霊によって愛を注いで、燃ゆる柴として下さいました。

六〇年前、北九州市戸畑区に在る九州工業大学（当時明治専門学校）に、奥貢教授が着任しました。教授は主の愛に燃やされた一本の燃ゆる柴でした。「どうして柴が燃え尽きないのか？」と教授を通して活ける神に近付けられた青年学徒が、モーセのミデアン時代のように準備の時を一〇年経て、神から新しい使命を与えられて、五〇年前八幡へ燃ゆる柴として遣わされて來ました。

以來柴は燃えつづけ、しかも燃え尽きないで、次から次へと柴が加えられて、燃えつづけ、今日の八幡前田教会となりました。

今、神の火に燃やされて來た小さい柴のような群の、五〇年の歩みと、主のはかり知れないめぐみの御業を記録して、更に聖霊の火に燃やされて、使徒行伝に続くものとせられたく願って祈っております。



創立五十周年記念礼拝

感謝会

八幡前田教会創立五十周年 感謝記念礼拝

一九八九年一月三日(金)

司会 伊規須 太郎
 説教 榎 本 利三郎
 奏楽 松 尾 博 子

奏楽	一九一		
讚美歌	五二七		
讚美歌	一六三		
主の祈		詩篇	一三六
交読			
祈禱	五一三		
讚美歌		エレミヤ三三・一―三	
説教			榎 本 牧 師
祈禱			榎 本 牧 師
讚美歌	四九七		
献金			
感謝			正 野 真 宏
頌栄	五四一		

祝 黙
 禱 禱

榎 本 牧 師

(会衆 一四七名)



創立五十年記念礼拝説教

榎 本 牧 師



エレミヤ三三章一―三節

予言者エレミヤが監禁されていた時に、主の言葉が彼に臨んだのでした。私共の現実にはエレミヤと同じ様に、色々な問題で解決の道もなく、事情境遇・性情・性格……で逃げ道も、避け所も無く、監禁された状態では無いでしょうか。もはや、希望も持てないときにエレミヤは主の言葉によって希望を与えられ、力を与えられ使命を全うしました。

五〇年前の十一月三日午後四時の汽車で、福岡から八幡へ送られて参りました。その当時の実情は、会堂も無く、城様の家庭集會に集った人々の一部で一〇名足らずの集會でした。国を挙げて戦時態勢に組み入れられ、キリスト教は敵性宗教と、一般国民の中に教え込まれておりました。丁度エレミヤが監視の庭に閉じ込められた時の様に、どう考えても希望をつなぐところがありません。

しかし「あなたこそ、生ける神の子キリストです」というペテロの信仰に対して、主は「そこで、わたしもあなたに言う。あなたはペテロである。そして、わたしはこの岩の上にわたしの教会を建てよう。黄泉の力もそれに打ち勝つことはない。わたしは、あなたに天国のかぎを授けよう。そして、あなたが地上でつなぐことは、天でもつながら、あなたが地上で解くことは、天でも解かれるであろう」(マタイ一六・一八一―一九)と仰せになりました。私も現実はどうあれ、「あなたこそ活ける神の子、キリストです」と、活ける主にお従いさせていただくのが、私のすべてでした。

八幡駅に降り立った時、これからどうやって、何をしたら良いのか、全然わかりません。ただ死人の中から甦って、今も万物を支配し給う主に祈る他に何も出来ません。エレミヤ

が監禁された様な状態でした。

そんな時にエレミヤ三三章一―三節のみことが与えられました。周囲の状況、条件がどんなであつても、こんな中へ遣わし給うた方は、地を造り、堅く立たせ給う方……事を行ひ遂ぐる方……です。中途半端で投げ出す方ではない。真実に信頼すれば、どこまでも責任を持って下さる活ける神であり、救い主です。この方が「わたしに呼び求めよ、そうすれば、わたしはあなたに答える。そしてあなたの知らない大きな隠されている事をあなたに示す」。この五〇年、依り頼めば確実に支えて下さる主に呼び求め、支えられて参りました。

取り敢えず、聖日礼拝、伝道会、日曜学校、祈禱会と集会を河本さんの二階で始めました。私の住居は河本さんの倉庫の二階が住宅になつて居て、一軒は従業員の住宅、一軒を私の住宅として用意して下さつて居ました。木の香り、畳の香りのする新築の家でした。現在の八幡駅前であり、集会にここから通つて居ました。朝は三時でも四時でも目が覚めると起きて「わたしに呼び求めよ」と仰せ下さる主に、呼び求めました。戦前戦中の国家神道一色の中で手も足もでない状況でしたが、主は祈りに応えて河本さんの従業員、又河本さんの知人等ポツポツ求道者が起こりました。しかし周囲の状況

は困難になるばかりでした。出来る事は「わたしに呼び求めよ」と呼びかけて下さる方、私を選んでの中へつかわされた方、事をはじめた方が呼び求めよ、と呼びかけて下さるので、切に切に祈りました。

使徒行伝二〇章一八―二五節にパウロがエペソの長老を招いて、決別の言葉を述べております。八幡へ参りました時は、そのパウロと同じ心境でした。パウロも「この主イエスキリストから賜わつた、神のめぐみの福音をあかしする任務を果たし得さえしたら、この命は自分にとって、惜しいとは思わない」と述べて居ります。非国民と罵られ、異端だと誤解され、試練や困難の中も通りましたが、主は約束通り全うして下さいました。

こうして、わたしに呼び求めよ、と呼びかけて下さる方に、呼びつづけて（祈りつづけて）今日まで参りました。ものみの塔の人達のように、一軒一軒訪問した事ありません。何かアトラクションして人集めをした事ありません。トラクト配布した事ありませんでした。又皆様が何処で何をしておられたか、私も知りませんでした。

「わたしに呼び求めよ、そうすれば、わたしはあなたにこたえる」と約束して下さい方は、皆さんを、一人ひとり東

から西から北から南から……呼び出してイエス様の血によって贖い、主に在る兄弟姉妹として、神の家族に加えて下さいました。五〇年前、何もない中から「呼び求めよ、そうすればわたしはあなたにこたえる」と、事をはじめた方が呼ぶ声にこたえて下さいました。こんなに大勢の方々が主の血に贖われ神の家族とされ、共に礼拝を守らせていただけの事をもう一度心をこめて感謝致します。この方がここまで事を始めて、約束を行って下さいました。このお方を主と仰いで、このお方にお従いして参りますならば、必ず全うして下さいます。更に私共の知らない、かくされている事を見せて下さいます。何と素晴らしい事でしょう。この五〇年に神様の与えて下さった恵みを感謝して更にこの方に呼び求めて、未だ知らない、かくされている、大いなる事を示していただきましょう。

感謝会

司会

榎 本 和 義 先生

開会 (あいさつ)

それでは、ただ今から感謝会を始めたいと思います。

本日は、多数の方々にご出席いただきまして、ありがとうございます。遠方からも駆けつけて下さって、大変感謝で



す。何年振りかで、お目にかかる方々もいらっしやっして下さり、嬉しいかぎりです。お顔を拝見していますと、なつかしい思い出が浮かんで参ります。

一口に五〇年と申しますが、その年月は大変長いものです。その間にいろんなことがありました。戦前、戦中、戦後の混乱をくぐり抜けて参りました。前田教会も次々に変わってきました。

しかし、五〇年経ちますと、昔のことを知らない方もいらっしやいます。前田教会とは、昔からこんな風だったと思っいらつしやる方もおいでるかも知れません。だんだんと昔のことを憶えている方々も少なくなつて参ります。この時、ぜひもう一度「あなたがたの掘り出された岩、切り出された穴を思い見よ」と、もう一度よく振り返って、主の恵みを感じたいと思います。

感謝会のおあかし



山口市

安 東 篤 良さん

私が前田教会に導かれたのが、昭和四一年四月で、九年間お世話になりました。

その後、大濠公園教会に九年、東京に四年居ました。今は、山口に住んでおります。

八幡を出まして初めて分つたのですが、前田教会は何という素晴らしい教会だろうかということでした。(詳しくは、記念誌に原稿を書きましたのでそちらでござん下さい)

幾つかの教会に行かせてもらいましたが、この前田教会のように、神様と直結しているということを読まれる教会は、ほんとに少なく、お説教の端ばしには出てきても、初めから終りまでという教会はないようです。

私自身も、非常に素晴らしい神様と結び付けていただき、家族も同じお恵みをいただき感謝でございます。

前田教会に来ていなかったら正直いって、私はどうなっ

いたか分かりません。他の教会に行っても、自分なりに聖言をとおして主を見上げることができません。こういう生活は素晴らしいと思います。

何と感謝申し上げてよいか分かりません。私共のために引き続きお祈りいただきたいと思っています。

「司会者」

安東さんが、まだ青年のころ、教会に来られて、その頃青年会（サフラン会）があつて、非常に活発な活動と言いますか、毎回、礼拝のあと聖書を読んだり、お祈りをしていただくを思い出します。

だいぶ頭の方に白い物が見えるようになったこの歳まで、ほんとに神様が恵んで下さったことを思つて感謝したいと思っています。



岡山市

白 神

薫さん

私が初めてこの教会に出席させていただきましたのが、昭和二三年五月頃だったと思います。教会が出来て間もない頃ではなかったかと記憶しています。

その頃のことを思い出し、今も目の前にちらついておりますのは、河本の奥様だったと思いますが、色の白い、ふくよかなお顔をされていて、お優しい言葉使いで色々お話しをして下さいました。

年月のたつのは、ほんとに早いもので、この教会には三〇年振りでしょうか。あの幼かった和義さんが、こんなに立派になられて、私は「和義ちゃん大きくなられましたね」と、言いたい思いがいたします。

この素晴らしい日に寄せていただきほんとに感謝しております。

私がこの教会に来ました時は、神様も知りませんし、色々

な困難の中を通つて疲れ果てて、生きることさえも続けたくないような失意の時でした。

聖徒達のお祈りに支えられて今は、神様によつて生かされ、身も心も生き生きとしております。

現在は、岡山の方に住んでおりますが、そちらの教会で色々なご奉仕をさせていただいています。

私が初めて前田教会で聖書を読んで与えられた聖言は、

「苦しみにあつたことは、わたしに良い事です。

これによつてわたしはあなたのおきてを

学ぶことができました」

(詩篇 一一九・七一)

でした。「これはいい言葉だなあ——」と思つて、早速

二二三つの聖言と一緒に書いて榎本先生に見ていただいた記憶がございます。

榎本先生によつて受洗し、長い年月を経ました今、自分の通つて来た足跡をふり返つて、ほんとに、苦しみに逢つたことはよいことだったと思ひます。

神様を知れば、知る程喜びがわいて参ります。

体のあちこちと大病をし、また、転勤などで住所も変わりましたが、この前田教会で、まことの神の言葉を聞かせていただいたことが、昨日のようで、何ともいえない喜びで心がいっぱいでございます。

どこの地に参りましても、色々な教会があり、キリスト教ではあるのですが、前田教会は、まことのキリスト教会だと思つています。

ほんとに感謝いたします。有難うございました。

「司会者」

白神さんには、私は三〇年振りと言うか、もう少し長いかも知れませんが、お会いして昔を懐かしく思います。

私が子供の頃に大病をしました時、随分お世話になつたことがございました。

ここには、私が自分をまだ自覚しない頃から来ていらつしやる方が大勢おいでになりますので、何もかもご存じで、今更、格好をつけても仕方がありませんが、こうして神様が恵んで下さつたことを感謝します。



呉市

林

伊佐夫さん

本日の記念集會に出席させていただいて、有難うございました。

安東さんが、山口からおいでたとおっしゃっていたので、私は広島から来たのだから、「少し私の方が遠いかなあー」と思っていたら、先程の白神さんは、岡山から来られたと聞いて、「負けたなあー」と思いました。(一同笑)

私は、中学から高校まで、前田教會に來ておりました。お恥ずかしいのですが、この教會では、チャランポランの生活をしておりました。

それから、社会人になって大阪に行きました。私は、これですと神様から逃れると、ホッとしていました。私の住んでいましたのは、堺の太田という所だったのですが、どういう訳か、自宅のすぐ近くに教會がありました。

私はこの教會に、ある機會から行くようになりました。当

時の私には災いだったのですが、私はギブアップ寸前でした。そのような状態の時に、自分は神様から離れられない、教會に行けばよいのだと思ひ、今から一〇年少し前ですが、その時から教會に行くようになりました。

その時私は、しみじみと思ひました。自分の家族や、教會の皆様が祈っていてくれる。神様から逃げようと思ひ、堺まで來たが、孫悟空の術ではありませんが、神様のみ手の中に在って、そこを逃げ回っていたのだと思ひました。

私の意志で、初めて行つた堺の教會で与えられた聖言は、忘れることができせん。

「主は言われる、わたしがあなたがたに対して
いだいてゐる計画はわたしが知つてゐる。

それは災を与えようというのではなく、

平安を与えようとするものであり、

あなたがたに將來を与え、希望を与えるものである」

(エレミヤ 二九・一一)

私は榎本先生が「聖言どおりに素直な心で、神様にお従ひすることです」と常におっしゃっておられたことを思ひ出しました。

このギブアップの時に、もう、神様におすがりするしかないと考え、主のもとへ逃げ込みました。

神様は、実に真実な方で、与えて下さいました聖言どおりのことを成して下さいました。

大阪から広島まで来ましたので、北九州もすぐそこまでに近づいて来ました。

以前からすると、ほんとに祝福された生活をさせていただいています。心から神様に感謝しております。

榎本先生が、車いすでもお使いになっているのではないかと思つて来ました。こんなにお元気で安心いたしました。

本日は、有難うございました。

「司会者」

伊佐夫君がまだ中学生か、高校生でここに住んでいた頃、私も大体その前後の年頃でした。

彼が今、その頃はチャランポランだったと言つた時に、何人かの方が、フンフンとうなずいておられました。それだけに、今の彼を見て神様は本当に生きていらつしゃると「かくの如く語り明かしている」ことを思いまして心から感謝いたします。本当に素晴らしい神様のみ業だと思ひます。

東京都

熊 畑 恒 男さん

私が初めて前田教会に来ましたのが、二三年ごろで、二六年まで八幡に住んでいました。

今朝、榎本先生が「昔のことを話さない」と言われましたが、当時の記憶としては、礼拝や集会の始まる前のお祈りが皆さん大変熱烈で、神様のご臨在を目の辺りに見るこゝとができます。

私は、一三年ごろまでは神様を知らないで、大分悪い遊びもしました。そして、この世の中をヒネていました。そんな時に、榎本先生にお会いしました。先生が「教会においてなさい」と言われましたが、私は「その方面のことは駄目ですから」と、おことわりしました。

それから、しばらくしてお会いした時にも先生が「とにかく一度教会においでなさい」と、また言われましたので私が「それじゃ神様を見せて下さい。どこにも居ないじゃないで



すか、神様を見せて下さったら行きます」と申しましたら先生が「分かりました。二、三か月後に見せましょう。その代わり、日曜日の朝も夜も、水曜日も、どんな悪天候でも必ずおいでなさい」とおっしゃいました。私が「ハイでは行きませ」ということになり、この教会に来るようになりました。

当時、私は帆柱寮に居りましたが、雨の日も風の日も、そこから下って教会に来ました。来ているうちに、だんだん神様

のことが分ってきました。今思いますと、まことに救われたという実感がその時に初めていたしました。

今は、東京の練馬に住んでいますが、育ったこの前田教会の空気は、いつまでも忘れることが出来ず、よその教会に行っても、何となく物足りない思いがいたします。人を見ないで常に神様を見上げ、聖書の聖言にお従いして、祈って日々を歩んでおります。

「司会者」

熊畑さんは、帆柱独身寮におられました。そこには、外にも何人かの方々がいらっしゃって、教会に連れていかれることを思い出します。私も子供の頃何度か帆柱寮に行って、寮の食堂で食事をさせてもらったことがあります。その頃は、食べ物都非常に乏しい時で、寮の食事がとてもごちそうに思えました。

熊畑さんは、寮のすぐ下の帆柱公園だったでしょうか、そこで、何としても子供達に福音を伝えたい、イエス様のお話しをしないと、青空子供会をご自分で始められました。おそらく、そこからこの教会に導かれた方がここにもいらっしゃるに違いありません。



高槻市
たかつき

石丸 幸 子さん

今日は、このような五〇周年の記念礼拝に出席させていただいて有難うございます。

いつも、大阪集会のためにお祈り下さいまして、厚くお礼を申し上げます。私たち十数名のために、毎月先生が来てくださり感謝しております。ほかでは聞くことのできない、すばらしい聖言に支えられております。そのために、お祈り下さっている皆様に、厚くお礼申し上げます。

大阪では、中々このような礼拝には出られません、先生のテープを通して、豊かに祝福していただいております。

私が前田教会に来ておりましたのは、この五〇年のうちの一三年間だけですが、初めて来ましたが、昭和四九年の秋でした。それから、後日のことですが、ある年のクリスマス祝会に来ました。子供を抱いて、階段の所まで来ましたら、(当時は、旧会堂でした)先生が迎えに出て、子供を抱いて

下さり荷物まで持って席まで案内して下さいました。このことに、私はもうビックリ致しました。私共のような者に、どうしてここまでして下さいのかと思ひ、イエス様にお会いしたような感じが致しました。その時の印象は、今も心に残っております。

私は生来、依存心が強いので、何でも自分で考えることをしないで人に聞くことをよくするのです。信仰のことなども、毎木曜日、集会に出席しオルガンのご用をさせていただいておりますが、集会が終つて、先生に、何回となく同じことをお聞きしていました。

そのような鈍い者ですが、神様を知りたいという気持ちだけは常に持つておりました。中々、伸びない信仰でしたが、神様は憐れんで下さり、不思議なお力で、子供達に信仰を持たせて救つて下さいました。感謝でございます。

私はこの教会に来る前、二一歳の頃、四国で教会に行つたのですが、洗礼を受けた後も、神様を素直に信ずることが出来ず、上ったり、下つたりの信仰でした。

結婚して前田教会に導かれ、榎本先生にお会いできたのも神様のご計画の中にあつたということを感じしております。

今でも、油断しておりますと、信仰の道からそれて確信を



高槻市 たかつき

正岡晶子さん

持てないことがあるような者ですが、アブラハムは「神を信じた。それによって、彼は義と認められた」(ガラテヤ三・六)この聖言を思うとき、信頼する神様に立ち帰って上を向いて「神様」とお従いできるのです。これも、前田教会に導いて下さったお陰だと深く感謝しております。

いつも大阪集会のためにお祈りいただき有難うございます。

私は、一緒に来ました石丸さんの従姉妹です。信仰は、石丸さんの方が早くからもっていて、いつも「教会に行こう」と誘ってくれましたが、私は「行かない」と、はねつけていました。大阪集会に榎本先生がおいででくださっていました。この集会にも、再三誘われたのですが、行ったことはありませんでした。

前田教会が創立五〇周年を迎えましたが、私も同じ昭和一

四年生まれで、救われたのが四五歳の時でした。神様は早くからこの私に目を留めていてくださったのです。

私は元来、我がままで、何んでも自分で出来ると思っていました。

神様は、私の一番弱い所に臨んでくださり、子供の問題を通して神様の前に心砕かれ、お救いのみ手をのべてくださいました。

洗礼は、榎本先生により受けさせていただきました。その時にイザヤ書の聖言が与えられました。

「わたしは神である、今より後もわたしは主である。わが手から救い出しうる者はない。わたしがおこなえば、だが、これをとどめることができよう」(イザヤ四三・二三)。ほんとに、主は常に働いてくださいました。私はすぐ自分の考えで物事を判断するのですが、主は(わたしが神であることを知れ)と、静まって聖言にお従いすることを教えてくださいました。私の母が脳血栓で倒れ、寝たきりになりましたが、当時の私は信仰も弱かったので、石丸さんに助けていただき、信仰の支えとなっていました。

「いつも喜んでいなさい。絶えず祈りなさい。すべてのことについて、感謝しなさい」(一・テサロニケ五・一六)一

七)。この聖言に励まされて、母の看病をすることができました。母が倒れて間もなく、主人がガンになりました。先程、高木先生のおあかしを、お聞きしましたけれど、私の場合、信仰が浅かったので主人に、ほんとうの神様の救いをどうしても伝えることが出来ませんでした。ただ、そのことが心に残りましたが、今年の新年聖会の聖言に、「あなたがたは、さきの事を思い出してはならない、また、いにしえのことを考えてはならない」(イザヤ四三・一八)とありまして、力づけられました。

私の両親は今も健在で、四国に住んでいます。私がお正月には郷里には帰らず、いつも、前田の新年聖会に飛んで参ります。両親が寂しがりますので、四国には一二月の連休に帰って「お正月はこれないからね」と言っておきます。そうして新年はこちらに来て聖言をいただいて過ごさせていたただいております。

今のところ、救われたのは私一人で、子供も両親も信仰を持っていませんが、私がエス様のおどろきの木につながれていて、それによって実を結ぶことを願っております。

どうぞそのためにお祈りください。

杵築市

佐藤シゲさん

昭和二七年、思いもかけず、私は昔取ったきねずかで、八幡前田小学校に勤務できるようになりました。そして四年生を担当させられ、その中に榎本先生のご息和義さんがおられたのでした。小さい頃通った教会学校が懐しく、私は魂が吸い寄せられるように、前田教会の門をたたき、それ以来一家中本当にお世話になりました。

主人の病勢はその後二年間一進一退を続けましたが、幸に体力がありましたので、肋骨七本を切る整形手術を受けることになりました。併し、手術予定の一ヶ月前より、四〇度の高熱が続き、小喀血もあり、手術が危ぶまれました。その時の旨を榎本先生に訴えますと、

「たといあなたがご主人を亡くされるような事があっても主を知る事ができたのは、それに優るものです」

とおっしゃったお言葉と、信仰に満ちた先生の瞳の光を忘



れる事ができません。手術の看護に向かう私へ、先生がしたためて下さったのが、詩篇二三篇でした。「エホバはわが牧者なり、我ともしきことあらじ、……たといわれ死のかげの谷を歩むとも、わざわいを恐れじ、汝、我と共にいませばなり。汝の苔、汝の杖、われを慰む。」 リンゲル注射を受けている主人のベッドのそばで読む声のふるえを今も覚えています。数時間の手術も無事に終わり、順調な経過を辿り、

昭和三〇年の十一月無事に退院する事ができました。

三年間、礼拝のあと、先生が神癒のお祈りをして下さる時、必ず佐藤巽の名を加えてお祈りをして下さいました。私の知らない時もきつと朝夕、奥様とご一緒に、そして前田教会の皆様もそれぞれお祈りいただいた事と思います。今あらためて、深く深く感謝申し上げます。

和子もその間、働きに出る私に代わって、小学校の四年生から、夕食のしたく、弟二人の世話など本当に良くやってくれました。また誠、雄二も、世話をやかせることなく、明るく成長してくれました。主の御導きを思います。子供達も皆高校時代に洗礼を受け、主人も時々教会に出席するようになりました。その後入試・就職・結婚と、人生の難関を主のいつくしみと励ましを得て、今はそれぞれの道を歩む事ができるまでになり本当に感謝です。

私も昭和四六年教職を去り、和子の嫁ぎ先で会計の仕事を手伝っている主人と共に、杵築の地で暮す事になりました。只今は、緑豊かな海辺の町で、杵築教会の皆様の暖かいお交わりに加えていただき、毎週聖日には、キリストのご愛をねんごろにおさとし下さる吉新先生から、人生の指針を得て、心豊かに平安な日々を送らせていただいております。主の御

導き下さいました「カナン」と、感謝でいっぱいの日々です。

今後どの様な苦難に会いますことか、世の勢、老後の身体の事など、時に取り越し苦労をする事もありますが、「我なんじと共にあり。」力強い主の言葉を思い起こし、十字架の苦難を忍ばれた主を見上げる時、ただもったいなく、限りない感謝でいっぱいになります。この喜びを少しでも多くの方にお伝えできれば、とそののみを思うこの頃です。

「司会者」

佐藤先生は、私の小学校四年生の時のクラス担任で、こうして久し振りにお目にかかれたことに感謝しております。



立川市

柴田郁子さん

この度は、教会創立五〇周年おめでとうございます。先程から皆様のおあかしをお聞きしながら私が前田教会に

導かれるまでのことを思い出しておりました。

子供の頃に、初めて母から教えてもらった讃美歌が「主われを愛す」でした。それからの私は讃美歌が好きになり、「一度教会に行つて見たいなあ」と、いつも思っていました。

結婚して、子供を与えられました。以前から讃美歌を通してあこがれていた教会の幼稚園にやりたいと考えていましたので、幼稚園に行くようになって、銀星幼稚園を選びました。子供がこの幼稚園にお世話になるようになってから、母の会で親しくなった方で、前田教会に来ている方から「よい教会を紹介します」と教えていただいたのが前田教会でした。榎本先生には、私宅までおいでいただいて、家庭集会をしていただきました。四、五人の集会で、三度ばかりでした。

初めて榎本先生にお会いした時の印象は、仏様のような感じの方だと思えました。(一同笑い) 神様は、もっと冷たいような感じと思っていたからです。

私の信仰生活はここが、出発点でした。その時が昭和四五年でした。それから、昭和四七年まで木曜会に出席させていただきました。先生のお説教は、うなずきながら漏らさずお聞きいたしました。

牧師館にも、度々お伺いし、先生のご迷惑を省みず、身の上話を聞いていただいたことを思い出します。その時のお話の中で、私が先生に「聖書は、ヒューマニズムが流れているので好きです」と申し上げたら、先生が「そんなものじゃない、もっと大きな神様の愛がありますよ」とおっしゃいました。その時のことが今でも強く頭の中に残っています。

昭和四七年四月に、洗礼を受けさせていただきました。それから、子供も学校に行くような気持ちで、教会の日曜学校に喜んで行ってくれました。日曜学校でのエス様のお話で子供と一緒に励まされたものでした。

住み慣れた八幡を後に、東京に移り住むことになりました。前田教会と、方針のよく似ているのではと思われる、吉祥寺集会という所に行かせていただいています。

ややもすると、日々の生活に追われまして、お祈りすることすらも忘れがちになりますが、その度に、聖書を出して読んで力を与えられています。

昭和五七年の新年聖会での聖言「わたしは神である、今より後もわたしは主である。わが手から救い出しうる者はない。わたしがおこなえば、だれが、これをとどめることができよう」(イザヤ四三・一二三)。

私はこの聖言に支えられ、毎日の生活を信仰をもって歩ませていただいております。有難うございました。



福岡市

丸山 恵美子さん

お祈りの中に覚えていただき有難うございます。感謝しております。

皆様のお話を聞きこのまま帰ったのでは、恵みを半分置いて帰ることになるので、押し出されて立ちました。

主のなされた事を申し上げたいと思います。

何もわからない、信仰の有る様な無い様なものに、主が隣んで家族一同の上に救いのみ手を差し伸べて下さいましたことを感謝します。

ここに来るまで、榎本先生ご夫妻のはげまし、お導きをいただきました。肉親の親に勝る、霊の父親であり、霊の母親であります。

夜中二時に、先生にお電話差し上げたこともあります。

谷底あり山ありで、電話の切れる時に、電話線をたぐって、

先生を引き寄せたい思いをした事があります。その時、主が、

「心を騒がすな、神を信じ、又我を信ぜよ」

と今日まで支え導いて下さいました。そして救われ、洗礼を受け、そのぬくもり、喜びの消え去らない内に、大阪に導かれました。その当時の渴きは、生活の糧の苦しさよりもつらいものでした。

朝五時より起き沢山のお弁当を作りました。三〇分早く起きて聖書を読もうとするけれど、どうしても心が騒ぎ定まらないのです。その時主が願いに勝ることをして下さいました。先生がご用の帰り、立寄って下さいました。その時は天にも昇る喜びでした。主の聖言を聞けない辛さは、どんなものにも例え様がありません。三ヶ月あるいは六ヶ月に一度、その内、大野のおじいちゃん、おばあちゃんが愛の支えと成って下さり、共に祈る時を備えて下さいました。

その間、榎本先生の人の前でなく、主の前に従順にお従いしていらっしゃるお姿は、私の肉碑にくひに刻まれました。

私共はお正月の新年聖会に集うことが唯一の喜びでした。どんなに夜遅くても先生ご夫妻が温く迎えて下さいますし、冷たい井戸の水をわかし、これで顔を洗いなさいー、と恐縮

で、恐縮で申し訳ない様でした。

それから榎本先生が、夜行でいらして夜行でお帰りになる月一回の集会が持たれる様になりました。

先生は「主を知りたいと渴ける一人の魂のためには、どんな所でも参ります」といわれ、百匹の小羊を残して、迷い出た私達のために神様が送って下さることを申し訳ない気持ち働きますが、長い間待ち望んだ集会ですから一回一回これが最後と、「今度は何月何日来ます」と言われる先生のお声に、天にも昇る喜びで待ち望みました。感謝いたします。

主がこの様な素晴らしい人生に入れて下さいました。何も主におこたえすることは出来ませんが、出来るのは感謝と讚美しかないことを示され、今はバスに乗っても台所の片隅でも「主に感謝せよ、主は恵み深く、そのいつくしみはどこしえに絶えることがない」と、主の憐れみに感謝する毎日です。明日のことはわかりませんが、今使命があればこそ、ここに置いて下さっている主が「あなたは、わたしに従って来なさい」と、わが世にある限り主にお従いして参ります。

「傷ついた葦を折ることなく

ほのぐらい灯心とうしんを消すことなく

真実をもって道を示す」

(イザヤ四二・三)

主が温い聖言をもって、今日まで支えて下さいました。

この弱い愚かな者に、皆様のお祈りがあればこそ、この席に集い感謝させていただくことが出来ました。

主のお働きを感謝します。

「司会者」

丸山さん達が大阪に行かれて、大阪集会が月一度持たれるようになりました。

丁度私も西宮に行っておりまして、父が大阪集会の度に来ては下宿に泊って、夕食は梅田辺りで栄養を補給してもらったという懐かしい思い出があります。

その大阪集会は今も続いておりますが、丸山さんご夫妻はそこから都城に行かれ、今は福岡の方に来ておられます。そして、教会の一番近くに住んでおられ、朝の早天から各集会に出られる所に神様が導いて下さったのです。

神様のなさるみ業というものは、私共は、知り尽くすことが出来ません。



神戸市

水村光義さん

いつもお祈り有難うございます。

神戸の関西聖書神学校に行っております。

五〇年と言うと、自分の年令から比べても、とてつもない程の長い年月、神様から恵まれ祝された教会に、導かれたことを、心から感謝しています。

いつも向こうの教会でも証するのですが、「私には祈りの軍団がついているんだ」と、皆様が朝に夕に祈っていて下さる、先生ご夫妻がいろいろの面で支えて下さる、若しそれがなかったら到底立って行けない、私の一番大きな課題はそこから離れること、杖とするパンをくだと神様は言われている。いつまでも先生に母教会に頼っていたらいけない、エス様一本、その方に頼って行くだけの独立した信仰を持たなければいけないと思っておりますが、そこが今の私の戦いです。

今二年生、あと二年間あります。そこで充分訓練されて、榎本先生からいつも言われているんです、「私ではない、イエスキリストなんだ」。それだけ言われるので、そうすると又、先生は素晴らしいなあー、と思うのです。本当にエス様について行きたいと思わされています。

五〇年というのはヨベルの年です。この所で、エス様にお会いし、十字架にお会いし、たしかな罪の許しを神様がくださったことを聞きました。よきおとづれを聞きました。私も多くの人に、このおとづれを伝えて行きたいと思えます。つづいてお祈り下さい。お願いします。



小倉
島 山 英 子さん

神様は私を今日まで憐れんで恵んで下さいました。

榎本先生は昭和一四年に牧会されましたが、その前の昭和一二年に昔の伝道館ができた時から、日曜学校の一年生に入っていただけ、座ってお話を聞いてました。

その時は榎本先生と野村先生が交替で来ておられました。それから五〇何年たちましたが、今日は神様が曾根の地から私をこの教会の一年生として迎えご招待していただきましたこと、何と感謝申し上げます。

エス様は五〇何年前の昔の八畳二間の教会の初めの時に、私を用いて雑巾バケツと箒を持って朝夕、神の宮の掃除をさせて下さいました。教卓の前にバケツを置き、「神様あなたの宮の掃除をさせていただきますお恵を感謝致します」と祈って掃除をさせていただきました。それからずっーと神様は私を憐れんで、早天祈禱会、水曜の夜、日曜礼拝伝道会と

座らせて下さいました。

「汝ら世にありては悩みあり

されど雄々しかれ 我すでに世に勝てり」

すべての災いの中、戦火の中から恵んでいただき、河本のおばあちゃんについてずっーと榎本先生のお話しを聞きながら、今日まではぐくまれて参りました。

けれど、ある私の身内が「カツさん（河本のおばあちゃん）についても駄目だから、家の方に来なさい」と迎えに来たことがあります。その時は自分はこの教会にいて神の宮の掃除をさせていただく光栄にあずかりながら、こんなに悪いのだから、私はこの所から離れ他所に行ったらどんな者になるかわからないから、もうここでいい、河本のおばあちゃんについて行く、と断ったのです。それを榎本先生にお話ししましたら

「よく言いました、それでこれからイエス様が、あなたを全部責任もって下さいます」

とおっしゃって今日に至りました。一・二才の時からイエス様の前田教会に座らせていただき、六四才になりました。有難うございました。

和義先生も小さい時からよく覚えております。色が白くて、

まん丸い顔をしてもらったので、私はよく言いました、「和義さんはテレビの、マル米味噌の 一休さんの様な坊やだったよ」と。榎本先生のお使いの時、必ず先生から入口で、お使いに行く用事を一回聞いて、先生が「ハイもう一度言いなさい」と言われると、「ハイ……」ともう一度言って河本さんに来ておられました。

野村先生は、本当にいつもきれいにいらして、河本の実さんがよく言っておられました「野村先生あなたは一枚の洋服が、五枚持っている様に見える、普通の人は一枚でポロポロになるけれど」と、…思い出はつきません。



榎本牧師夫人

ひとこと感謝させていただきます。

五〇年と言いますと長いようですが、たって見ますとアツと言う間に過ぎたような気がいたします。

神様が、こんな私のような者を救いにあずかせて下さった

ばかりでなく、この尊いご用にもちいて下さり、四九年の間、この八幡の地に遣わして下さいました。私自身を見ますと、とても、そういうご用にあずからせていただく様な者ではございませんが、イエス様の血潮によって、こんな者を召していただいたということは、何という素晴らしいことだろうかと思えます。ほんとうに感謝にたえません。

この五〇年の間、神様がお一人でお働き下さって、私共はなんにもいたしておりませんが、今日教えられましたように、「汝われに呼び求めよ、われ汝に応えん」と仰せ下さるイエス様に、ただ、ひたすら祈らせていただいております。

主は、教会を初めから今日まで、「昼は雲の柱、夜は火の柱」をもって、イスラエルの民を導いて下さいましたように、導いて下さいました。

東から西から、私共の思いも及ばない「隠れた事を汝に示す」と今こうして主によってあがなわれた皆さんと共に、この素晴らしい感謝のむしろを開いていただいたことは、考えもありませんでしたけれども、こういうことを神様は見せて下さいました。

「水を汲みし僕は知れり」私共は、ほんとうに主にお従いして歩ませていただいただけで、主にこのような恵みを与え

ていただきました。このみ力をもって導き給う主を知らせていただいた五〇年でございました。

これから先も、主がこのみ力をもって、ご愛をもって、多くの方々を主のもとに導いて下さることを祈らせていただくこれからでありたいと、切に願っております。

すでに、天国に召された多くの聖徒たちが、このために祈り続けて下さったことを忘れることができません。また、今日この席に来ることのできない方々、「ひとたび我に来たる者、われこれを捨てじ」と、このお言葉を信じて、今はこの中にはおられませんが、やがてまた、主のもとに引返して下さいることを信じてお祈りさせていただいております。

有難うございました。

閉会（あいさつ） 榎本牧師

長時間にわたって皆さん有難うございました。

私共が、こうして主をあがめることができる陰に、すでに、主のみもとに帰った聖徒たちのことを、私は、忘れることができませぬ。その中には、河本さんのご両親、それから城さんの奥さんや丸橋さん、その他多くの方々がおります。この

方々の走って下さったその足跡を見ておりますと、主が、お一人お一人を素晴らしくお取り扱って下さって、あの輝く、栄光の主の前に勝利をもってがい旋されたことを、いま、目の当たりに見るような思いがします。これらの方々が残して下さった足跡というものは、非常に尊く、大切なものだと思います。そういうものを大切にして、主を主として、お仕えして行きたいと思えます。

「事を行ない、事を成して、これを遂ぐる方」この神様がことを始めたからには、何者も、この神様のわざを妨げることができないのだと、皆さん、ここでしっかりと心に受け止めていただきたいと思います。

昨晚、熊畑さんと話しておりましたら、熊畑さんが「先生はもう五〇年なら、その後継ぎはどうするのですか」と、言うのです。それで私は「人間的方法で考えたことも無いけどね、教会は神様の教会でエホバ・エレ、神様が備えて下さると信じています」と言って笑ったことです。見ゆるところにも後継ぎがいなくても、見ゆるところも、見えないところも、すべてはこの神様の手の内、だから私は心配しません。

私が病気をして回復期に向かった時、和義が心配して大学祭を利用して見舞いに来てくれましたが、元気になったのを

見て安心して「お父さん、お母さん、僕はね、もう九州に帰る気持ちは更々ないんだから、仲良く晩年を暮しなさいよ」と、言って帰って行ったのです。その和義を神様は、ちょっとひねりなさって、こういうふうに変えなされたのです。

その主が生きていらっしゃるのだから、皆さん、どんな問題があっても、この主に信頼して、今日教えられたように「われに呼び求めよ」と、おっしゃるこの主に呼び求めて、やがてあそこで皆さんと喜んで主を讃美する時まで、走り続けていただきたいと思います。

また、もう一つは、主はそのように何から何まで、頭の先から足の先まで過去から現在、未来まで、すべてを責任を持って下さる方だから、もう私共は、何も心配することはないのだから、感謝して、神様の恵みに感じて主の御心に従って毎日を送りたいと思えます。

だから、この教会では当番もなく、何々という義務も責任もありません。皆さんが恵みに感じてさせていただく、心に神様から示されたことをしていただく、それが今日までこうして皆さんが主の前に、自由に恵みに感じて喜びの日々を送る生活ができたのです。

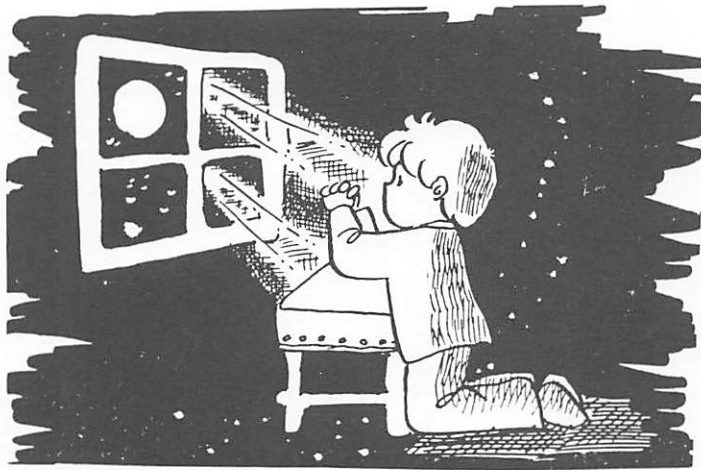
こういう生活が世界中に広まったら、何と素晴らしいで

しょうか。どうか、その時を望んで、これからこの福音が福音として、世界中に伝えられるように祈っていたいただきたいと思ひます。

今日、何々伝道、何々伝道とキリスト教新聞を読むと、まあ、忙しいことですが、何々宣教大会、何々会議で人が救われると思うところに、まだまだ人間の甘さというか、神様を知らないと言つてもよいのかも知れませんが。

「この活ける主にふれて、わが証人となる」。これだけの証人が、それぞれのところで、主が生きていらっしやるといふことの証人となって歩んでいただきますと、そこに、ほんとうの神様のみ業が行われて来るのです。私はいまから感謝して恵みに感じて、更に、この地上に置かれる限り全力投球で、主の前に祈りをもって待ち望んで参りたいと思ひます。

お祈り



創立五十周年に寄せて

— 創立五十周年を記念して —

五十の言葉

——この信仰によって救われた幸い——

伊規須 太郎

- ◆安息||安息日の休みが神の民の為にまだ残さ(へブル四)
- ◆奥義||神の奥義なるキリスト/知恵と知識(コロサイ二)
- ◆委任||私の思いではなく御心が成るようにし(ルカ二二)
- ◆贖い||その命を贖うには余りに価高くてそれ(詩篇四九)
- ◆義冠||今や義の冠が私を待っているばかり(二テモテ四)
- ◆希望||あなたが霊を送られると/地表を新(詩篇一〇四)
- ◆記名||むしろあなたがたの名が天に記されて(ルカ一〇)
- ◆謙遜||汝らキリスト・イエスの心を心とせよ(ピリピ二)
- ◆原点||我々の神、主は唯一の主である。心を(申命記六)
- ◆10攻撃||主の戦いだから/あす彼らの所に攻(歴代下二〇)
- ◆孤児||あなたがたを捨てて孤児とはしない(ヨハネ一四)
- ◆婚宴||すべての用意が出来ましたさあ婚宴(マタイ二二)
- ◆悟り||隠れた宝を尋ねるようにこれを尋ねなば(箴言二)
- ◆賛美||わが魂よ主をほめよ、わがうちなる(詩篇一〇三)

- ◇嗣業||諸々の国を嗣業としておまえに与え地の(詩篇二)
- ◇志操||全き平和をもってこころざしの堅固(イザヤ二六)
- ◇視点||主はとこしえの神地の果ての創造者(イザヤ四〇)
- ◇自由||自由を得させる為にキリストは開放(ガラテヤ五)
- ◇主権||あなたの名は地に遍くいかにかに尊いことで(詩篇八)
- ◇20準備||目を覚ましていなさいその日その時(マタイ二五)
- ◆食物||私の肉は真の食物、私の血は真の飲物(ヨハネ六)
- ◆信仰||望んでいる事柄を確信しまだ見ない(へブル一一)
- ◆親交||その所であなたに会いあなたと語る(出エジ二九)
- ◆審判||主は義をもつて世界を裁き真をもつて(詩篇九六)
- ◆心服||まことに、この人は神の子であった(マルコ一五)
- ◆真理||真理はあなたがたに自由を得させるで(ヨハネ八)
- ◆尽力||持っている人は与えられていよいよ(マタイ二五)
- ◆聖霊||聖霊を受けよあなたがたが許す罪は(ヨハネ二〇)
- ◆全能||人にはできないが神にはできる神は(マルコ一〇)
- ◆30立場||人に呼び掛け/あなたはどこにいるか(創世記三)
- ◆着眼||人は外の顔形を見、主は心を見(サムエル上二六)
- ◆聴従||しもべは聞きます、お話し下さい(サムエル上三)
- ◆調和||私達の卑しい体を栄光の体と同じ形に(ピリピ三)
- ◇堂々||歩きぶりの堂々たる者が三つあるいや(箴言三〇)

- ◇熱心Ⅱ万軍の主の熱心がこれをなされるので（イザヤ九）
- ◇派遣Ⅱ父が私をお遣しになったように私も（ヨハネ二〇）
- ◇播種Ⅱ霊に蒔く者は霊から永遠の命を刈り（ガラテヤ六）
- ◇万有Ⅱ万物は神からいで神によって成り神に（ロマ一）
- ◇貧困Ⅱ自分の為に宝を積んで神に対して富ま（ルカ一二）
- 40 富者Ⅱ富む者となる為に私から火で精練され（黙示録三）
- ◆復活Ⅱそれにより私達を新たに生まれさせ（一ペテロ一）
- ◆不撓Ⅱ途方にくれても行き詰まらない迫害に（二コリ四）
- ◆報酬Ⅱ信心は今の命と後の世の命とが約束（一テモテ四）
- ◆本心Ⅱ悪しき者はその道を捨て正しからぬ人（イザヤ五五）
- ◆報いⅡエジプトの宝にまさる富と考えた。（ヘブル一一）
- ◆名義Ⅱ命はキリストと共に神の内に隠され（コロサイ三）
- ◆持物Ⅱ人の命は持ち物にはよらないのである（ルカ一二）
- ◆良心Ⅱキリストの血はなおさら私達の良心を（ヘブル九）
- ◆令名Ⅱ良い忠実な僕よよくやった多くの物（マタイ二五）
- 50 和解Ⅱ神の和解を受けなさい神は私達の罪の（二コリ五）

八幡前田教会五十周年を記念して

岩 井 芙美子

皆様は心より「おめでとうございます」とお祝詞申し上げます。

戦前戦後を通して、先生御夫妻が命をかけて献げて下さいましたひとすじの伝道の歩みに心を寄せて参りますとき、神様の心が私達救われる者にとって、どんなに重く深く高いかを思わずにはおられません。「神の言葉はみな真実である、神は彼に寄り頼む者の盾である」と、ただ聖名を崇めさせていただくのみでございます。そしてこの囲いの中で救われ生かされ、祈られて、この私達の家族一人ひとりの名が覚えられて今日の日のある事実には、わたしは恐れおののくのみでございます。なんとという光栄でございます。

今は戸畑教会に籍を置き、朝ごとに祈りの生活に加えられて、神様はどんな小さな祈りであっても耳を傾けて下さっている事を身をもって触れさせていただいております。今感じ

ます事は、様々な戦いの中で祈り勝利された五〇年の御生涯の尊さと豊かさを、先生のお姿に拝せしめていただいて、小さいとは言ってもこの御足跡にならって、確かな神様の救いの御心に進み行くべき事を、改めて教えていただいたように思いました。本当にありがとうございます。

三七年の秋に初めて前田教会に導かれました時に「わたしのもとにきなさい。あなたがたを休ませてあげよう」との聖言に私はびつくり致しました。それは私が戸畑伝道所で初めてお聞きした聖言と全く一緒だったからでした。今思い起こしても、神様がどんなに人々を憐れみ愛して、この確かな約束を与えて生かし、御自身を現わして下さいとおられるかを思わずにはおられません。けれども長く自分は正しく歩んできたと思いついていた私には、心が開けずになおも苦しみながら、先生の目を逃れるようにしては人の陰からこそこそと帰るわたくしでした。そんな私を思いやって、先生は「聖書を読みなさい。お祈りをしなさい。お祈りをしていますよ」と絶えず話しかけては大きな忍耐をもって接して下さいました。

そんなある日「自分が正しいと言い張るところに罪がある」と神様は私の罪を示され、「主はわたしたちのために命を捨

てて下さった」と十字架の御愛の光を照らして下さいました。更にたたみかけるようにして、「わたしはあなたの神、主であつて、あなたをエジプトの地、奴隷の家から導き出した者である。あなたは、わたしのほかに、なにもものをも神としてはならない」と迫って下さった時に、私の心は神様の御愛にいちどきに押し流されて一夜を泣きあかしたのでした。

それからは、主人の仕事を助けてのミシン踏みの前に聖言を掲げ、又、買物の行き帰りの手の中に、いつも小さな紙切れに書いた聖言がありました。思わぬ所から開かれた出版社の仕事の道すがらに、小型の聖書は私の無くてはならない友であり、宝物でした。こうして神様は私を導かれて、どうにもならなかった私達家族を、霊肉共に、生かす道に導いて下さったのでした。様々な困難はわたしを強め力づけて、自分でも驚く程に育てていただきました。

「あなたは、わたしに従ってきなさい」と、先生によって洗礼を受けさせていただいた時から、御霊は常に臆する者を励まし助けて「涙の谷を通つても、そこを泉のある所とします」とあるように導いて下さいました。これまでの歩みは、戦いが大きかったからこそ恵みに満たされ、ただ主によって覚えられる者の幸いを感じるとともに、神様の御真実のいか

ばかりかを思わされております。

まことに、前田教会五〇年史に組み込まれての私の今日までの歩みは、会堂で聞く神様の御真実な聖言の解き明かしによって与えられた力であり、先生をはじめ聖徒の熱い祈りの中で育まれて参りました。ただ「ありがとうございます」と感謝するのみでございます。

「しつかりするのだ、わたしである。恐れることはない」
「では、わたしに命じて、水の上を渡ってみもとに行かせてください」

八幡前田教会から、戸畑教会に移って参りました私の前にありましたのも、ただ主の励ましだけでございました。

「もし彼と共に死んだなら、また彼と共に生きるであろう」と、死んでいた者が生き返らされた私達です。「すべては、主から賜わったものです」と、足を洗いながらお従いさせていただきありがとうございます。

「わたしに賜わったもろもろの恵みについて、どうして主に報いることができようか。

わたしは救いの杯をあげて、主のみ名を呼ぶ」

ひそかな所に隠した宝物

榎 本 百合子

創立五〇周年を迎え神様のみ業を崇めさせていただき、どんなに主が私共の魂を愛し、御業を成して下さったかを感謝致します。主はこの地の民を愛し、一、二人の方々をおこし、祈らせられました。その祈りに応えて、今日多くの魂を主の御救いにあずかせて下さったことを思います。

私も主のはかり知れない憐れみの故に、尊い御用に召していただき、主の御旨を求め主にのみ頼りすがって八幡の地に來させていただきました。「わが義人は、信仰によって生きる。もし信仰を捨てるなら、わたしのたましいはこれを喜ばない」
(ヘブル一〇・三八)との聖言を信じ、恐れたり不安になつたり致しましたが、いつも主は、聖言をもって励まして下さり、霊肉共に弱い者を懇ろにお導き下さいました。

河本さんが店の二階の二間を集会所に提供して下さい、早天祈禱会を始め各集会所が持たれていました。戦災で焼ける

まで度々の空襲にも拘らず一回も休まず集会を守らせていただきました。子供一人を歩かせ、一人を抱いて、一人を背負って集会に励んだ事は、今、二人三人と小さい子供さんを連れて集会に出て来られる皆様の苦勞や喜びをよく分らせていただける基盤となりました。

戦災に遭った時、主の憐れみと恵みにより、一人も傷つく事も無く守られ感謝でした。住宅も食糧も無い時でしたので、私と子供達だけ郷里に疎開致しました。昭和二年一月疎開先から帰ってまいりました。

会堂、牧師館を建てるのはまだ何年先か見通しがつきませんでした。当時、戦災住宅へ入居する事も困難な程の住宅難でした。ところが、会堂と牧師館を与えられる事を伺い、驚きと喜びで一杯でした。主は、人の思いと計画をはるかに越えた事を成し給うと主を崇めました。昭和二年八月末、焼け残った僅かな物を持って木の香も新しい牧師館へ初めて入らせていただきました。その大きな喜びにも増して主のなし給うた御業を思い、感謝で一杯でした。周囲に家もなく、広々とした焼け野が原の一角でした。家財も少なく、部屋が広々と感じました。窓枠が緑色のペンキで色どられた奇麗な教会で、電車の中からよく見え周囲の雰囲気を明るくしました。

主人はそれまで西南女学院に、週何時間かお手伝いさせていたおりましたが、お断りして専心伝道させていたのだと伺った。切なる願いでした。当時、わずかな手当をいただいていたおりましたが、それが生活のすべてでしたので不安でしたが、すべてを知り給う主に一切をおゆだね致しました。

主は信頼する者を辱められる様な事はなさいませんでした。エリヤをカラスを用いて、朝に夕にパンと肉を運ばせ、やもめ女を用いて多くの祝福を与えて下さいました。主は昔も今も変り給わず、必要を満たして下さいました。「かめの粉は尽きず、びんの油は絶えなかつた。」(列王上一七・一六)と事実をもって主の御力をあらわし、主は今も信頼する者を守り支えて下さいました。

同時に主が生きておられ、小さい者を省みて下さっている御愛を肌で知らせていただきました。風呂場がありませんでしたので河本さん宅にお世話になっておりましたが、大勢でしたのでなんとか風呂を与えられる様に祈っておりました。ところが不思議な様に、上等ではありませんが、風呂桶が与えられましたので、主人が風呂場を造ってみようと言っておりました時、製鉄所の下請業者で中原兄と言う方が風呂桶を見て、「風呂場でしたら私に造らせて下さい」と自発的に言っ

て下さり、板張りのかこいと鉄板^{ブリッキ}屋根と煙突でしたが助かりました。床にセメントを流し、主人の手造りのすのこの板台でお風呂が入れる様になりました。今思ひ出すと、ほんとに粗末な風呂場でしたが、祈って与えられた喜びで入浴する度に感謝しておりました。何年かする内にすのこ台が壊れそうになってぎっこぎっこゆれて、いつつぶれてしまうかとひやひやしたものでしたが懐かしい思ひ出のひとつです。

その後大野さんが来られ、掘りコタツを大きくされたり、あちらこちらと気をつけて補修して下さいました。その時風呂場も子供達が手伝ってタイルを張り立派な浴室が出来、風呂おけも教会の隣のおけ屋さんが立派な桶を作して下さいました。

主の恵みを数えると尽きることがありません。井戸から水道へ替えられた事も楽しい思ひ出です。一つの井戸を共同でしたので、主人によく水をくんでもらいました。子供達がくめる様になった時はブリキでといを作って風呂場まで入れる様になり、ポンプをつくだけで運ばなくて良くなりました。

当時は、高木兄、東兄、伊規須兄、泰子姉、池田姉、調悠子姉と、次々に私の弱きを助けていただきました。

アメリカの中古衣料販売に協力して皆さんが手伝って下さ

るなら、売上の一部を謝礼に差し上げますとの申し入れがあり、当時衣料品に不自由だったので頼みました。荷物も沢山で青年の方々が荷物を運ばれ、婦人会の方々が売り手になって沢山の方が来られ、よく売れました。どれだけいただいたか覚えていませんが、全額を投じて藤村先生をお招きして聖会を開いていただき皆さんが恵まれました。

その後このバザーを二、三回して水道を引くことが出来ました。お台所、手洗場もちょっとひねると水が出る、大人も、子供も大喜びで、感謝致しました。この様に主は必要を満たして下さいました。

会堂も牧師館も、三回の増築により便利に、また住み心地よくなりましたがやはり狭く、しかしもう広くする余地もなく、新会堂が与えられる様祈っておりました。何時頃でしたか建築献金箱が置かれ、目標一、五〇〇万円と書かれてありました。その当時はとても思う様な金額でしたが、神様は私共の思ひよりはるかに勝れる事をなして下さい、恵みに感じて献金箱に入れられただけで必要一切が与えられ感謝致しました。

大阪から丸山兄を送って下さり一年がかりで誠心誠意全力を尽くして従事されました。また、信徒の方々老いも若きも、

旧会堂の撤去から基礎のコンクリート打ち古材の釘抜きなどを
ごみを被つて、毎日一〇人、一五人と来て下さり心から感
謝しながら従事されました。

さながら初代教会を思わせる様な主の御働きを覚えまし
た。お金をかければ豪華な会堂を建てることも出来たでしよ
う。この会堂はそういう豪華さはありませんが、神様の恵み
が隅々に行き届いて作業員を一人も雇うことなしに、皆さん
が恵みに感じ喜びをもつてこの会堂を建てられたという事は
神様がどんなに恵み豊かな方であるかをその御業で見せて下
さいました。

二二年一月、三男の豊が六ヶ月半で召され、一月には四
男の恵が一日で召されました。豊の時、私の手おくれでこ
んな結末になった事をどんなに悔いても豊に申しわけなく、
胸が痛み主を仰ぎみる事ができず、これではいけないと思っ
ても自分でどうする事もできない状態でした。主人は「神様
の許しが無ければ一羽の雀も地に落ちない。祈つて主が御許
に召してくださいださつて、私共の手にあるよりもっとすばらしい
事をして下さつて居るのだから、善にして善をなし給うお方
を信じよう」と言ってくれるので、その時はそう思うのです
が、又しても自分を責め、神様もこんなに祈つたのに、祈り

を聞いて下さらなかつた。自分の思い通りになればよろこん
で神様、神様と言いますが、思い通りにならないと神様に白
い眼を向ける様な申し訳ない者でした。

十一月に恵が生まれ喜んだのも束の間、三日目に黒い物を
吐いて驚き、早速病院へ行きましたが先天性の腸閉塞との事
で当時はどうすることもできなかった様です。

それまで豊の時には人の力で何とか出来たのではないかと
悔いてばかりいましたが、人の力の及ばない事実に向面して、
主の御前に出た時、自分がどんなごう慢な者であるか神様を
どんな神様と思っているか等々、今までの私の信仰態度が全
く違つていた事を示されました。それにも拘らず父なる神様
は独子をこの私のために十字架につけてくださり、私の罪を
赦して下さいました。父なる神様と主イエス様の御愛にふれ
させていただいたのです。「ああ深いかな、神の知恵と知識
との富は。そのさばきは窮めがたく、その道は測りがたい。

『だれが、主の心を知っていたか。だれが主の計画にあずかつ
たか。また、だれがまず主に与えて、その報いを受けるであ
らうか。』万物は、神からいで、神によつて成り、神に帰す
るのである。栄光がとこしえに神にあるように」(ロマ一・
三三―三六)、この聖言の一句一句を信じさせていただきま

した。「私たちに賜わっている聖霊によって、神の愛が私たちの心に注がれているからである」(ローマ五・五) 主イエス様の御贖いと、はかり知れない御愛にどうしてお報いすることができようか。涙と共に主の御前にひれ伏す者としていただきました。二人の子供は短い人生でしたが、愛なる主の深い御旨によって御許に召していただき、私に多くの事を残してくれました。

その後四人の子供達も成長し、受験時代、高校、大学、結婚と様々な問題もありましたが「感謝して受くる時捨つべきものなし」(一・テモテ四・四) 一つも無駄な事を無し給うこと無く、その中を通つた事により主にお従いする事を学ばせていただいたと感謝しております。

五年前和義は、「信者として主にお従いさせていただくけれど、伝道者にはならない」と言っております。然し突然一八〇度方向転換させて下さいました。神様のみ力と憐れみは感謝に絶えません。

かえりみますと、五〇年間、小さき者を憐れみ御用に用いていたいただいたこの恵みに、如何にお報いするか、そのすべもありません。ただ、主の御旨にお従いして歩ませていただきたく思っております。



(礼拝の光)

八幡前田教会と私

榎 本 俣 雄

一 不従順の子、生まれながらの怒りの子

八幡前田教会の誕生から二年後、昭和一六年牧師の息子としてこの地上に命を与えられ、神様の豊かな許しとお恵みで満四八才を迎えることが出来ました。私の心の成長と八幡前田教会とのかかわりについてまずお証させていただきます。

赤ん坊の時から讚美歌と聖言と祈りの中で成長し、もの心つき始めた六、七才頃は日曜日が来るのが楽しみであったことを覚えていきます。それは日曜学校に出席して神様を礼拝できるからではなく、日曜日は学校が休みの上に教会には多くの方々が来られ、少々のイタズラをしても両親からしかられることがないからだだったと思います。その頃は未だ幼なく割合素直に毎週教わる金言を、礼拝後、牧師館に来られるお客様にはこらしげに暗唱して見せていた時代がありました。以上から想像できますように、私は小学校上学年になるまで(そ

の後も同様であった)「おとんぴん」「調子に乗って……」とよく両親にしかられたものです。この性格は学校生活でも同じでしたが……。こんな事もありました。冬の日の午後のこと、旧会堂の階下が牧師館で、食堂兼居間の二帖の板ばりの堀りごたつ(中には当初木炭、後に煉炭その後電気アンカ)があり、青年会の方々が両親とお話をされていました。

私も仲間に入りたく何をしたのかは覚えていませんが、堀ごたつの中に入れてある私の足、ふくらはぎのあたりを突然誰かにギューとつねられ、痛さにふと反対側の父の顔を見るとこわい目でしかついているのに気づき、おとなしくしたこと思い出します。その時父は私がいにも調子に乗っているのをたまりかね、反対側からお客様に気付かれないよう足をのばしてつねったようでした。

小学校時代は学校でアーメンソーメン冷やソーメンと、かわられるのがいやで、教室で友人と喧嘩をして二人で廊下に立たされたこともありました。

中学生になると段々自我が芽ばえ、学校で先生や友達から「牧師の息子がこんないたずらをしてどうなっている」「キリストは右のほほをうたれば、左の方も出さないと言っているからお前もそうしろ」とか「隣の人を愛しなさいと教

えているのに、お前は人をいじめて良いのか」と言われるのがくやしくて「なぜ私は牧師の息子に生まれたのだ」「父が友達と同じ八幡製鉄の社員であれば良かったのに」等々不平を思うようになり、日曜学校へも親に言われるから仕方なしに出かけるようになりました。昭和三一年中学三年生になると、父母から大人の礼拝へも出るように言われ「なぜ強制されねばならないのか、自分の自由ではないか」と反発を感じていました。

昭和三二年高校生になってからは、運動部（バレーボール部）に所属し、勉学はそちのけで練習、試合、友人との遊びに熱中し、口実をつけては礼拝にも一回休み、二回休みと段々出席しなくなりました。しかし、高校生活も後半に入る頃、青年会の人数も同年輩の人々が増え、親友の尼田君が礼拝に出席する様になり、私も友人にひかれて礼拝に出席するようになりました。大学に進学したいが、勉強をしていないので神様の助けを借りたいと、どちらかと言えば苦しい時の神だのみで礼拝を守り、教会の奉仕も進んで、聖書も少しは読むようになったのだと思います。

神様は永年痛い思いで待って下さったと思いますが、一八才の時、自分の思い、行動、生活を反省し、神様にたち帰る

ことを決心し昭和三四年三月に受洗、まことの神様にお願いした生活をする様にならせていただきました。しかし、この素晴らしい生活も長続きせず、大学入試に失敗し浪人生活の三年間はなんとか続きましたが、大学に無事合格すると大学生活が楽しく、段々神様をはなれるようになり、決定的には社会生活にふみ出したとたん、世の中の生活、酒にタバコに女性との交際と世の中の楽しみに魅せられ、自分の力をたのみとし、再び神様を恐れないふるまいをするようになってしまいました。

心もすさみ、生活もみだれておりましたが、神様は不思議なことに、神様に救われた妻を与えて下さり、高校、浪人、大学時代に、神様をうやまい、恐れる家庭がどんなに素晴らしいか、前田教会の教会員のご家庭を通し、父母の生活態度を通し、充分承知させられていた為か、結婚を契機に再び神様のもとに立ち帰らせていただきました。結婚してからは大きくは神様から離れることはなくなりましたが、やはり同じ様なくり返しであったと反省させられます。

旧約時代のイスラエルの民と全く同じで、ものごとが順風満帆に運ぶ時は神様を忘れ、忘れるだけでなく邪魔者扱いをし、何か事が起きないと神様にたち帰らない私であったと思

います。まさに不従順の子であり、牧師の息子として聖言と讚美の内にながら、生まれながらの怒りの子であったと罪の深さを思っています。

この様な不従順な子、生まれながらの怒りの子に対し、神様はあわれみをもつて、神様のひとり子を私の不従順と罪のために十字架につけて、全てをあがなって下さったことを決して忘れてはならないと思っています。現在は長女の泉と長男の悟が丁度私が若い頃たどった道を通っているようで、神様、神様、礼拝に出席しなさいと言われることに反発をしています。しかし神様は必ずや私と同様たち帰らせて下さると信じて祈っております。

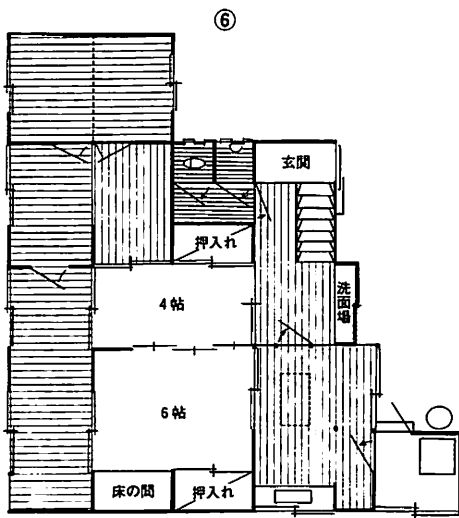
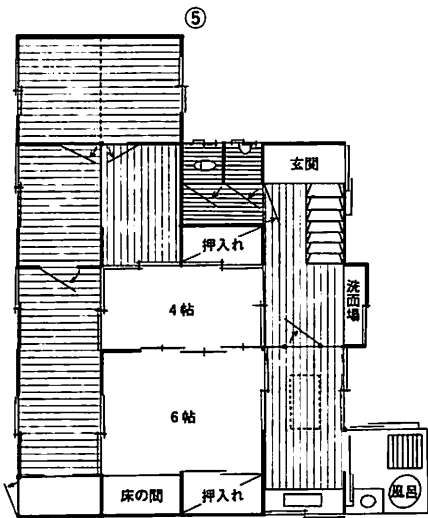
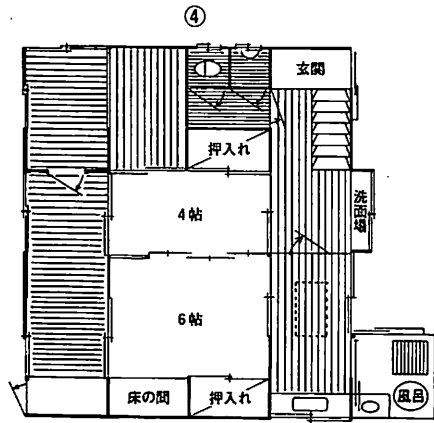
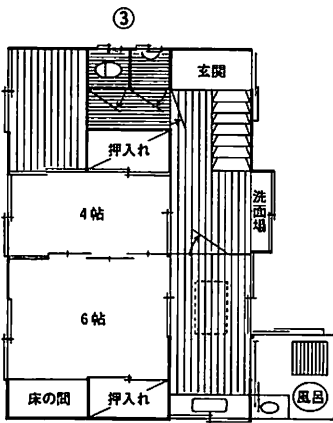
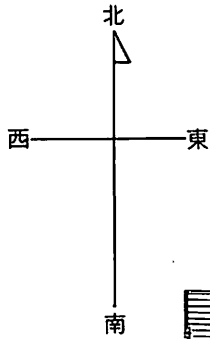
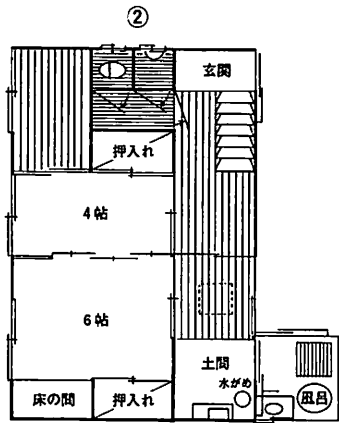
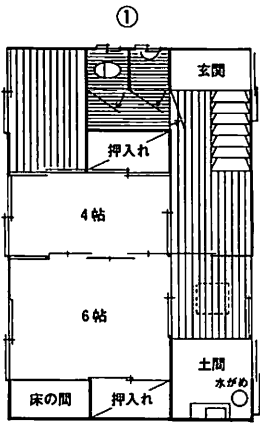
二 桶の粉は尽きず、びんの油は絶えなかった

八幡前田教会での生活は、生まれてから結婚生活に入るまで二六年間にもなるわけですが、ふり返ってみる時、神様は父母の何をおいても神様を第一にする信仰の故に、「まず神の国と神の義を求めなさい、そうすればこれらのものは全て添えて与えられるであろう」の御約束の通り余りある御恵みを下さったと明らかに確信できます。神様がどの様に恵んで下さったかは、書き表わせない程多いのですが、大きくは第

一に、会堂と牧師館の変化にあると思います。別添の平面図にあります様に、神様は一度に大きくされたのではなく、祈りに答えて必要に応じて、大きさ、タイミング、質を変えて下さったことがわかります。

小学生の頃、強く印象に残っていることは、会堂の窓ガラスは（戦後で物資が不足していた中、懸命に調達して下さった）一枚ガラスが全部ではなく、ところどころ一枠が二枚あるいは三枚を切り合わせて、ガラス窓が組み込まれてありました。

牧師館は玄関の腰高の引違い戸の上部に二枚の透明のガラス戸が唯一で、他の外側の窓は全て障子であったことを思い出します。夏休みであったと思いますが、父母が留守で、私と弟妹で留守番している時、突然の夕立で雨戸を閉めることも出来ない私達であった為、全ての障子が雨にうたれ、障子紙がみるみる破れ中が見えるようになり、何か子供心に寂しい気持ちを持ったことがありました。近くの家々がガラス窓に変わってもしばらくの間、牧師館は障子のままでしたが、神様は私達の願いに答え、障子窓を一ヶ所づつ、期間をおきながらガラス窓に変えて下さいました。ガラス窓が一つ増えるたびにうれしくて家族中で開けたり閉めたり喜んだことを



覚えています。

平面図を記憶をたどりながら書いてみると、神様がなさった様々なことが思い起こせます。北側の三帖の板ばりにはその後、高木先生と一緒に生活したこともありました。会堂北側の小部屋では東先生が献身され、木のベンチを向かい合わせ、ベッドにして生活を共にしたことがありました。神様は教会員の方々が增える度に、私達子供の成長にあわせて会堂を牧師館を大きくして下さいました。

昭和三三年高校へ進学すると、簡易保険（母が少ない生活費の中からためておいたそうですが）を前借りして、三坪程度のベニヤばりの屋根はスレートぶきで、若者にはうつつけの冬寒く、夏暑い勉強室を北側奥に作ってくれたのですが、親の心子知らずとは良く言ったもので、私はそこではほとんど勉強はせず、ほこりだらけの部屋にしたことがありました。現在はどこでも水道が当たり前、そのうえ温水まで出る生活に変わっていますが、昭和二五年頃までは牧師館、会堂の水まわりは、牧師館東側勝手口から五、六メートル離れた、隣の中川さんと共用の井戸水を使っていました。最初の内は父がブリキのバケツで台所の水がめに、後になっては風呂まで両手に何度も運んでいました。昭和二九年頃だと思っています

が、父のアイデアで、ブリキの丸い雨ドイを井戸から、水がめ、風呂まで渡し、手動式ポンプをつくだけで水が送られる様になりました。このポンプつきが私と弟の日課となりました。その合理化された雨ドイも風雨と私達がぶらさがる為、補修には苦労したことだと思えます。水道も近所では一番最後に引かれたと思えます。しかし、水道が引かれた時の喜びは忘れることが出来ません。お風呂は、献堂後約二日程河本さんお宅で家族中がお世話になっていたことを思い出します。

昭和三三年暮に待望の風呂場とカマド（薪で御飯をたくレング作り）が与えられました。七輪、風呂ガマ用、会堂の暖房用（ダルマストーブ）のエネルギー源は市販の木炭、マメ炭、煉炭を求めのお金がなく、父と母が鹿児島本線の北側にある八幡製鉄の操車場で、石炭車の操車中に落下する石炭あるいはコークスを毎朝ひろって来ては、リング箱（木箱）にためておいて、エネルギー源にしていたと思います。父と母は苦労したと思いますが、私達子供にとって寒い思いをした記憶はありません。

第二に食生活面は、戦後でどこの御家庭でも同じであったと思いますが、私は丁度食べざかりで、人一倍食い意地がはっ

ていたせいか食物については記憶がすっかりしています。

八幡製鉄に勤められたお父さんを持つておられる方は記憶にあると思いますが、残業食だと思えますが、会社から帰宅時に黒いパンを持つて帰られるのを良く見かけ、私はそのパンが食べたくて、なぜぼくの父は製鉄所につとめていないのかと思つたことがあります。父母は私達子供のお腹を満たすため、今考えると、赤間や東郷辺りと思えますが、買い出しに出かけていました。買い出しから帰るのを楽しみにしたことを覚えています。その後牧師館の東側ではニワトリ、ウサギを飼い、西側では（現在河本さんの倉庫になっている）父が焼けあとを掘おこし畑をつくってカボチャ、おいも、トマト、キュウリ、ナス、トウモロコシ、等々を作つてお腹を満たしてくれました。当初はだんご汁が主で次第に麦御飯になり、時折朝食にたまごが二人に一個（大人も子供と同一割り当て）もらえると半分に分けた、どちらが少しでも多いか目を皿の様にして観察し、すばしっこく一番多いのを取るのが私であつたと思えます。今考えると父母は自分達の食べるものも食べないで、私達子供に食べさせてくれたのだと頭が下がる思いです。子供を持つ身となつた現在、私にその様なことが出来るかと考えますと、私では出来ないのではと

思います。

父の説教の中で、柘植先生の奥様が明日食べるお米がなく、神様に「明日食べるお米がありません、お与え下さい」と祈つたと良く聞きましたが、全く同じ様な祈りを子供ながらに耳にし、本当に明日は何も食べられないのかなあと心配したことがありました。一度として食事が出来なかつたことはありませんでした。神様がエリヤを鳥をもつて養い、ザレパテの女の家で養つて下さつた様に、神様は父と母そして私ども子供達を養つて下さつたと思います。

第三は衣類についてですが、小学生の頃は（昭和二二年―昭和二九年）、特に衣類が不足していました。父の文通で戦後の日本の苦境を知つた、アメリカのカイザーさん（その当時で大分お年をとられた女性）から何年か定期的にその頃ではとても手に入らない大人用、子供用のシャツ、ジャンパー、オーバー、ズボン、デニムのGパン等々をプレゼントしていただき（私としては友人が着ている学生服が着たかったので）補修に補修を重ねて小学校を卒業するまで着用させていただきました。中学に入学する前年（昭和二八年）のクリスマスプレゼントに、詰襟の学生服がまくら元に置かれていたことが大変うれしく、ダブダブの学生服を着て父と中学

の入学式に勇んで行ったことが昨日の出来ごとの様です。教会の会堂ではアメリカ中古衣料のバザーが何度か催され、近隣の方々が大勢衣類をもとめに来られていました。我家もその恩恵にあずかり、父母も含めしばらくの間はハイカラな服装ができたことでした。こうやって思い出して行けば神様が前田教会に、そして牧師館に住む私達に、一番良いことを数々して下さったことが次々に思い起こされます。例えばラジオ、自転車、オートバイ、高校、予備校、大学の学費等、どうしても必要にせまられれば、神様は不思議な様にお与え下さいました。この様に衣、食、住において、何一つ欠けることなく備えて下さり、満たして下さいました。

神様が今も、これからも生きて働いておられる何よりの証拠であると確信できます。

三 神様のご計画は人知では測り知れない

私ども兄弟（俊雄、和義、咲子、誠）の他に咲子と誠の間に二人の兄弟がいました。昭和二三年一月に、六ヶ月程の短い人生でしたが豊が天に召され、同じ年の一月に、恵が、一三日で先天性腸閉塞で天に召されました。私は小学校一年生でしたが豊が病気がいやされる様、恵が元気になる様、神

様に祈りました。もちろん、父母も祈っていたのですが結果は願いをきかれることなく召天してしまいました。記憶に鮮明に残っていることは豊の頭の髪の毛はブラウンで、元気な時は頭の上になつており、丸顔のキャキャと口をあけて笑う顔と、豊の葬儀の時、高橋光子さん（たぶん小学校三年生だったと思います）が送る言葉を読まれ、その中で「豊ちゃんの写真を見る事ができない」と言う所で強く悲しみを感じ、神様は僕のお祈りをきいて下さらなかつたと思つたことが忘れられません。その時讚美された四五八番「再び主エスのくだります日、召さるる幼児、み国にて、みそらの星とかがやきつつ、主の御冠りの玉とならん」を歌いながら涙がとまらなかつたことがあります。今でもこの四五八番を歌うと豊のことを思い出します。恵については、あまりにも短期間であつたため、小さな赤ん坊が口から苦しそうに黒いものを出しながらも、一生懸命に生きようとしている姿と父母の看病の姿が目には焼きついていきます。この二人の兄弟を神様が地上に与えられ、私達人間の願いに反し、早くも天に召したもうた神様のご計画は測り知ることには出来ません。しかし少なくとも私には幼児の清らかさ、人の死、そして天国のあることを小さいながら教えられたことには違いありません。私の子

供が大好きな所もその辺からではないかと思えます。

高校三年になって、大学進学を希望したのですが、一、二年と排球部で勉強より練習に専念しており、現役ではとうてい無理と一年間の浪人は覚悟していました。結果は、家計の苦しさの中、三年間もの浪人生活となってしまいました。一年間浪人生活後は自分でも良く努力したと思うくらい頑張ったつもりでした。従って受験時には神様、是非私に道を開いて下さいと祈りました。しかし結果はダメでした。二年目には希望校のランクも落とし、再度、道を開いて下さいと祈りました。しかしそれでも聞かれませんでした。三年目は、二校だけに受験を決めこれがだめなら大学の進学はあきらめようと思つて、チャレンジしました。結果やっと夢がかなえられ、大学生生活を送れたわけですが、その当時、「これだけ自分は努力したのに神様は道を開いて下さらない」と不満を持つていましたが、今振り返って見る時、無駄に思えた三年間が私にとっては大切な時期であつたと確信できます。それは一つに大学に入学しての勉強であつたと思う。現役生とは異なり、真剣に勉強したいと言う気持ちが強くなりました。出来るだけ多くの授業を受けよう、教室では一番前列に陣どり教授の講義を一言たりとも逃さない様にしようと勉強に対

する姿勢が正されたことであると思えます。おかげで三年生の時にはすでに卒業単位以上に取得出来、卒業時は他の人の一・五倍の単位取得して卒業できました。第二に社会に出てその勉強が生きていることと合わせて浪人三年間の精神的戦いが、会社の中で人の失敗を許すことができ、劣等感に悩んでいる人をはげますことが出来、思いあがっている人をたしなめることが出来る様になりました。現在四五〇名もの人と一緒に仕事が出来るのはその三年間があつたからだと神様に感謝しています。

昭和六〇年のお正月に和義夫婦が献身したい旨の話しを聞いた時の驚きと恐ろしさについてお証します。それは弟とは高校時代から「兄貴は長男だから牧師になれ、僕は先生になるから」「いや牧師は世襲制ではない、文学部出身のお前の方が牧師には早道だ」と神様は信じてても牧師になることだけは何とか逃げたいと思つて、兄弟でおしつけ合いをしていました。それは父母の生活を見て、この様な貧乏生活は絶対いやだと思つていたことが本意であつたと思う。昭和三五年頃、西ドイツの宣教師エッケル先生が牧師館に来られたことがあり、その帰り際に、先生が「俵雄君は将来何になるのか」と質問され、「進学します」と答えた所、先生は「神学」と受

けとられ「それは良いことだ」と喜ばれましたが、父が訂正すると「神様はもうすでに兄弟をとらえられているから大丈夫」と言われたこと、また河本のおじいちゃん、おばあちゃん、おやさんが口をそろえ何度も「俵ちゃん、和ちゃんは神様がとらえられているから逃しはしないよ」と言われていたことを思い出し、信仰のある人の祈りは確実に聞かれる、次は自分の番ではと、目には見えないが偉大な神様の御働きを感じ、恐い思いをいたしました。

昭和六一年の年末に父が肺炎で入院したことを電話で聞き、心配しながら神様に祈っていましたが、昭和六二年の新年を迎え、仕事始めで、お客様への挨拶まわりのスケジュールで一月は全て埋っていましたが、七日に弟から「おやじが危ない、お医者さんから、肺ガンの疑いがあると言われた」と連絡を受け、全てのスケジュールをキャンセルして九州にあわてて帰りました。空港からまっすぐ病院にかけつけ、担当医の先生からお話を伺いました。先生は年末入院時に撮ったレントゲン写真と、年明け一月五日に撮った写真を示しながら（後者は肺の九〇%が白くなっていた）「老人性肺炎で、極度に悪い状態である。普通の人ならもうだめな状態ですが、お父さんは精神的な寄り所を持っておられるからでしょう、

私達専門家から見ると不思議なくらい生命力をもっておられる。私達も全力を尽くすが、ここ一兩日が山場でしょう」と言われました。看病しながら真剣に祈りました「父の使命は未だ残っているはず、是非病氣から救ってほしい」とくり返して祈りました。父は不思議なことに、看病できた四日間の間に見えなくなる様子が下がり、食欲も出て来た様に見えるが、お医者さんは、しろうと目には良くなった様に見えるが、内側は変化ないと言われましたが、神様はきっとなおして下さるとの信仰を持つことが出来ました。神様は私どもの祈りに答えて全くいやし、再び神様の御用が出来る様にして下さいました。

昭和六三年六月には岳父、中島丈一が召された時にも不思議な、思いもよらぬことを神様は見せて下さいました。結婚当初から妻の両親が神様に救われる様に祈っておりました。特に妻の祈りは真剣でしたが、二〇年間、神様は答えて下さりませんでした。岳父はガンコな無神論者で私とよく議論をしようとして、話しかけておりましたが、私では物足らなかつたのか、召される二、三ヶ月前に前田を訪れ、父と色々信仰の問題を話して帰ったとのことでした。その後病床で葬儀をしてくれるなら私はキリスト教でしてほしいと言って、亡く

なったとのことで、召された知らせを聞いた時も考えてもいなかった八幡前田教会で葬儀を、行なっていたとき、神様は九回の裏ツアーアウトのどたん場に岳父を救って下さる離れ業をお示しなさいました。そのうえ姑が三〇年余り創価学会の信者でしたが、岳父の死から創価学会を全くやめ、現在はキリスト教に関心を持って、時折は教会へも出かけるようになりました。前述の「桶の粉は尽きず、びんの油は絶えなかつた」の項でお話ししました衣食住についても、私ども人間のその時の願いとは異なつたことがあります、神様は善にして善をなしたまい、信じる者を恥ずかしめないことを備えて下さる方であることを、痛い程わからせて下さいました。

今後のことも人の知恵や知識ではとうてい予測できるものではありませんが、神様は必ずお約束を守る方であることを、これらの事実を通して教えて下さっているものと確信しています。

以上、私と八幡前田教会のつながりの中で、私自身の心の変化、牧師館での衣食住、神様がなして下さったお恵みのほんの一部を思い出とまじえ、書かせていただきました。私の人生の四八年間、神様は讃美歌の五一七番の歌詩のごとく「われに来よと主は今、やさしく呼びたもう。なごて愛の光を避

けてさまよう。かえれや、わが家に帰れやと主は今呼びたもう」あらゆる事を通して「われに帰って来なさい」と私の心の門をたたかれていたのだと思い、どんなことをして神様に感謝したら良いかわかりません。

ただ神様に従って行くこと以外にはないと思っています。私の名前は詩篇二七篇一四節「エホバを俟ち望め、雄々しかれ、必ずやエホバを俟望め」から俟雄と名前をもらっています。名前の通り、全ての道、歩みで神様を認め、神様によりたのむ人生を、これからも歩み続けたいと願っています。



神の恵みによって

榎 本 和 義

昭和四四年四月から、愛知県にある大学に勤めることになりました。大学院の博士課程の一年目が終わった時でしたが、勤めながら大学院での研究・勉学を続けることにして、西宮から名古屋へ移りました。

さらに、二年後、結婚して名古屋の東部に住居を定めました。西宮にいる頃は、ほぼ毎週教会の礼拝に出席していましたが、名古屋へ移ってからは、夜中まで起きていたことが多くて、日曜日に礼拝へ行くことが少なくなりました。しかし、結婚後住いとしたアパートの近くに教会があり、家内と一緒に礼拝に出るようになりました。初めの頃は礼拝だけで、終わるとすぐに帰っていましたが、そのうち家内が教会学校のお手伝いをさせていただくようになり、それに引かれるようにして、私も次第に教会でのいろいろなお手伝いをさせていただくようになりました。

私は牧師の家庭に育ったものですから、教会の生活が忙しく、落着かず、常に突発的なことで個人の生活が乱されることに耐えられませんでした。ですから、早くそんな生活を離れたいと思い、出来るだけ遠くの大学へ行きたいと願っていました。自分は決して教会の煩わしい事柄に巻込まれたくない、自分の好きな生活を楽しみながら、信仰生活も続けられたい、と思っていました。

ところが、幸か不幸か、私共には子供がいませんので、家内は時間的にゆとりがあり、教会も歩いて十分位でしたからなにかと牧師館に出入りするようになりました。

大学の仕事が比較的時間の自由がきくことから、私もすこしづつ、事があるたびに、教会や牧師館のお手伝いをさせていただくようになりました。そのうち、住いが名古屋の郊外にある団地に移りましたが、そこから車で四、五〇分かけて、教会へ通うようになりました。気がついてみたら、青年会の指導、教会学校の教師、壮年会、ヤング・ミセスの会、婦人会、教会役員など、教会での仕事が生活の中心になってしまっていました。

生まれてからずっと、教会と牧師館で生活してきましたから、教会がどんなところで、なにが大切なことか、教えられ

なくても身に染込んでいるところがあるのでしょうか、牧師先生が言わなくても必要なことが理解できる手軽さからでしょうか、牧師先生も大変信頼してくださいました。しかも、両親の生活を見てきたものですから、他人事とは思われず、なんとかして、牧師先生の手助けが出来ればと願っていました。

しかし、現実には大学での仕事、研究活動もありますので、思うように時間が取れず、中途半端なことしか出来ないもどかしさと、一方では、いやで逃出した筈の教会生活の泥沼から早く脱出したいと思っていました。

ひとくぎりつける気持ちで、アメリカへ留学することになりました。昭和五二年から五四年まで二年間留学して帰国しました。これを機会に、余り教会の事には深入りすまいと思いましたが、帰国した翌年、昭和五五年に郊外の団地から、名古屋市内にマンションが与えられ、ふたたび教会の近くに住む事になったのです。

当時の価格としては高価なマンションを、ローンで購入できる生活のゆとりもできて来ました。生活を楽しみながら、同時に信仰をもって、教会ではあまり犠牲を払わない程度のお手伝いをさせていただければ良いと思っていました。それ

にしても、他の人に比べれば真面目な、優秀な信者であると自認していました。

そんな思いをもっていたときに、大きな事故におつかりました。昭和五九年の二月末に、牧師先生と伝道師の方と一緒に城崎温泉へ出掛けました。先生方の日頃の労を慰めてあげられればと思い、車の運転を引受けて参りました。

目的地にあと五分程の所まで来た時に、急に雪が降りはじめました。チェーンをつければよかったです、あとわずかな所でしたし、自分の力を過信して、雪の怖さを侮っていたのです。狭い橋の上で対向車と離合するのをさけるため、スピードを落そうとブレーキを踏んだ瞬間、車はスリップして一〇メートルほど先の橋の欄干に四〇キロ余りの速度で激突しました。一瞬のことで、なにが起こったのかわかりませんでした。助手席にすわっていた家内は頭をフロント・ガラスにぶつけて、頭を抱えてうづくまっていました。後部席の先生は鼻血を出しながら祈っておられました。私も頭をフロント・ガラスにぶつけ、胸をハンドルに強打して、眼鏡も飛ばされ、呆然としていました。

やがて、警察官がきて救急車を呼んでくれました。私は現場に残って事故状況を説明する一方、家内と先生方は病院へ

運ばれて行きました。すべての手続きを済ませて、やっと病院へかけつけました。どこか大きな怪我でもしてはいないかと、気掛かりでしたが、誠に不思議な事ですが、だれ一人怪我をした者はいませんでした。あれだけ車は大破していながら傷ついた者がいなかったのは、全く神様の憐れみによって守られたからでした。

この事故を通して、私も家内も心に大きな変化を受けました。それは、私共が生かされている者であり、生かしておられるお方は神様であるという、当然のことが、実感としてずしりと腹の底まで悟らされたのです。あの事故の中で、死んでいて当然の者が今生かされているのは、神様の憐れみであり、恵みであるからです。それから、心新しく、生かしてくださった神様の恵みに答えて、生きたいと願いました。

ところが、神様の思いはもつと大きなものであった事を思い知らされたのは、この事故から約一〇ヶ月目の事でした。

私が勤務していた大学は数年来、組織の改革に就いて論議を続け、次の年の新年度から準備を始めて、これまでと違った大学に変貌しようとする時期でした。

師走もおし寄せまった年末に大学から新年度に備える心構えとして、これまでもまして教員は奮起して研究業績をあげ

るようにと、部長の所信が述べられていました。私は一六年間、大学にあつて研究教育に携つて来ましたので、それなりの自信もあり、このような時こそ自分の研究に精をだして、これまでの成果をまとめたいと思いました。

しかし、一方ではなんだか心が重く沈んでいくように感じました。これまで誇りとし、自慢としてきたことが音もなく心の中で崩れ始めたのです。大学が求めるように、研究教育の仕事に励んで人生を終わるのが、私に与えられた使命なのか、という疑問が湧いて来たのです。「これからの人生をどのように生きようとするのか」という囁きが付きまとい、魂が激しく揺さぶられました。

一二月二九日頃から新年にかけて、寝てもさめても、心を締付けられるような、胸を突上げる痛みを感じ始めました。昼間も何かが追掛けて来るような気がして、落着いている事が出来ません。夜も眠られません。横になって、眠ろうとすると、胸が苦しくなり、じつとしておれず、書斎にはいつて、聖書を読んだり、祈ってみますが、心が落着かないのです。「どうしようか、どうしようか、…」頭の中で堂々巡りを繰り返していましたが、この苦しみの中にあつて、絶えず心から離れない聖言がありました。甦ったイエス様がベテロに語る

れた「ヨハネの子シモンよ、あなたはこの人たちが愛する以上、わたしを愛するか」とのヨハネの福音書のお言葉でした。それはまるでイエス様が私に直接問いかけているようにでした。確かに、私はイエス様を愛していると思っていました。これまでも教会生活を忠実に守り、奉仕もし、聖書も読み、祈ることもする。自分ほど、立派な信者はいない。ましてや、あの事故以来、出来るかぎりを尽くして、主に従いたいと願って来た私。なにがまだ足りないのか、と思ってみますが、神様は日を追うごとに「あなたは、わたしに従ってきなさい」との言葉が強く迫って来ました。

それと同時に、神様がどんなに大きな愛をもって顧みてくださっているか、様々な具体的な事を通して知らされました。かえりみて考えると、住宅・衣服・食物・仕事・友人等々…神様は願いどおりに、否、それ以上に、我儘な願いに答えてくださったのです。それであるのに、まるで自分の熱心と努力で得たかのように心に高ぶり、思いあがっている高慢な者、自己中心な者であること、自分の願いと思いをぶつけるだけで、神様のみごころを知ろうとしない、従おうとしない者である事を知りました。

しかし、イエス様はこのような罪人のために命を捨てて、

血を流し、父なる神様に「父よ、彼らをおゆるしくください。彼らは何をしているのか、わからずにいるのです」と、とりなしてくださいっているからこそ、今日も生かされていることを知りました。十字架のゆえに許して、あの事故の中からも生かし、「もう、そろそろ私の願いに答えてくれないか」と焼けるような熱い思いを、私のような者に注いでくださっている主のご愛が溢れるように、心に満ちて来ました。

命を捨てて、私を愛してくださいなさっているイエス様にたいして一体私は何をしていいのか、イエス様の思いを考えてみようとしなくて、自分の事や人のことや、ただ目に見える恵みをもとめていた申し訳のない自分であった事がはつきりわかりました。眠れない夜を過ごしながら、まざまざと、このような事を悟られました。それにつれて、その時まで、自慢に思っていたもの、価値あると得意になっていた事などが、次々と色褪せて、何の魅力も感じなくなっていました。大学の仕事も、これまでやってきた研究業績の事も、何も惜しいものは無くなりました。唯々、何としてもイエス様にお従いしたいと願いました。

一月二日に、父から年賀状がとどきました。それには「あなたに、さきの事を思い出しはならない、また、いに

しえのことを考えてはならない。見よ、わたしは新しい事をなす。やがて起こる」(イザヤ四三・一八―一九)とありました。主のご愛を深く感じながらも、様々な不安を抱いていたのですが、この聖言によって強い衝撃を受けました。神様が私共の上に「新しい事」をなし始めておられる。そして、いま神様がその事を始められたのだとはつきり信仰を与えられました。

それから、さらに数日、祈りつつ聖言による確信を与えられるように静まっていました。心に堅く信じながらも、神様のご愛を手でさわるように魂の奥底に感じながらも、なお不安や恐れが絶えずおそってきます。これは一時的な感情によるものではないのか、職を止めてこれまでの収入も無くなり、やっていけないのか、等々。このような状態の中、一月六日の礼拝で、黙示録二章一〇節「あなたの受けようとする苦しみを恐れてはならない。死に至るまで忠実であれ。そうすれば、いのちの冠を与えよう」との聖言を与えられました。神様が私にもとめておられる「愛する」こと、「従う」こと、具体的なありかたは献身の生涯である確信させてくださいました。苦しみが無いわけではないが、「恐れてはならない」とおっしゃるお方を信頼して、「死に至るまで忠実に」従う

ことであると確信を与えていただきました。

この間に、魂の中にはつきりと進む方向を定めてくださいましたが、しかし、具体的な道は決っていませんでした。神学校に進む道もあり、海外宣教の道もあり、名古屋に止まる道もあり、など、幾つかの道がありました。ただ主の導きに、と委ねて祈っておりました。

一月八日に両親が弟の所へ行く途中に寄ることになっていましたので、簡単に献身への願いが与えられているから、祈って欲しいと電話で伝えておきました。両親は大変驚いて、これは止めさせなければと、思っ、急いで名古屋へやってきました。私が年老いた父への同情心から、そんな思いになったと誤解していたのです。と言うのも、両親の心には子供たちが献身するようにとの願いはありましたが、私が長い間、献身して直接主に仕える道を強く否定していたから、このような事態を信じられなかったのです。その夜、これまでの事情と神様の働きとを語りました。神様のなさったことに驚嘆し、畏れおののくのみでした。

翌日、早速、大学に退職の手続きを致しましたが、ここ一〇日近くの中で始めてぐっすり休むことが出来ました。主に従う喜びと平安を得ることができました。

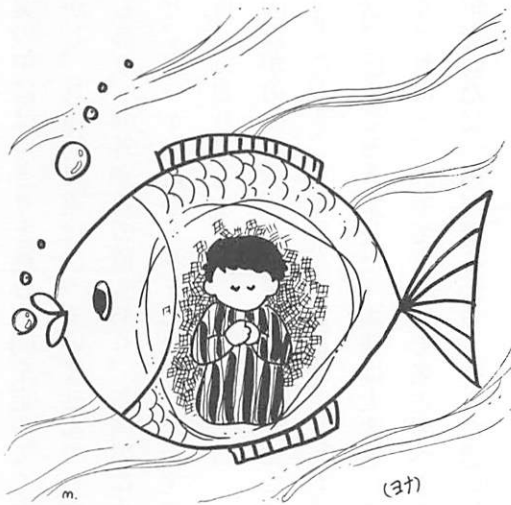
振りかえって見ますと、昭和三六年四月三日紫川でパプテスマを受けながらも、神様の声に従わず、ただ世の誉れや富や力を憧れていた者を、様々な事柄を通して、絶えず神様は呼掛け、焼ける思いで待ちつづけてくださったのです。かたくなで、強情な者を神様は見捨てなさらず、寛容とご愛をもって、耐え忍んでくださった事を思う時、ただ感謝する以外はありません。

「わたしはあなたをまだ母の胎につくらないさきに、あなたを知り、あなたが生れないさきに、あなたを聖別し、あなたを立てて万国の預言者とした」と、エレミヤに告げられた主は、同じく弱く小さい私にも、聖霊によって確かな確信を与えて励まし、後ろだてとさせて頂きました。

わたしが生まれたときは、すでに八幡前田教会の中であり、子守り歌として、調子はずれの「靈感賦」や「リヴァイヴァル唱歌」、「讚美歌」を聞きつつ育ってまいりました。また、幼い時から、聖書の聖言を心に植えつけていただき、神様の変らないご愛の育みを受けて来ました。今思いますが、神様とく主の恵みでありました。さらに、大学への進学、就職、結婚、名古屋一麦教会へ導かれたこと、アメリカへの留学、教会での訓練、また城崎での事故、どれもこれも神様の深い

ご計画のもとでのことでもあります。

文字通り、城崎への途上で死んだものであります。今、主は肉体の命を生かして下さっているだけでなく、罪に死んだ魂をキリストと共に甦らせて下さって、新しい命を、使命を与え、主のご目的のために用いていただけることは、このうえない幸せであります。



「燃ゆる柴」に寄せて

榎 本 誠

「あなたがたの切り出された岩と、

あなたがたの掘り出された穴を思いみよ。」

(イザヤ五一・一)

主の御名を崇めて讚美いたします。現在は静岡県の三島市に導かれて、家内と三人の子供たちそれに犬一匹の、五人と一匹家族で、主の豊かなお恵みのうちに歩ませていただいております。五〇年間牧会の御用を全うさせていただいた父のことについては、いずれまた書くことにしまして、今回は前田教会の五〇周年記念誌に寄せて、私の記憶の中にある教会のことや「忘れ得ぬ人々」といった角度から、思い出されるままに少し書かせていただきます。

【旧会堂のことなど】

私は昭和二六年三月に、八幡前田教会牧師榎本利三郎の三

男（実際は五男ですが）として生まれました。その頃からすでに教会に來られていた方々が多くおられますので、偉そうなことはいえないのですが、末っ子で年寄り子のうえに、すぐ上の二人の兄が幼くして召されてしまったので、まさに蝶よ花よとそれはそれは大切に育てられたということです。私物が物ついた頃に、私の身近によく出沒（失礼）されていたのが、野村さんをはじめとして、高木さん、伊規須さん、東さんご兄弟姉妹、といった方々でした。ご存知のように旧会堂は階下が私の居住区であったのですが、その当時から教会の方々がよく來られて、難しい話をされていました。

その当時の我が家には、応接間兼食堂兼居間兼台所しかありませんでしたので、教会の方が來られると、年長の子供達は別の部屋に（と言っても障子を隔てた隣の間ですが）追いやられ、私は幼かったせいやお茶菓子欲しさに、父母と一緒に炬燵に入っただけの難しい話を訳も分からずに聞いていました。ただ、子供ですからすぐに退屈して、ぐずぐず言い出して、話を遮ってしまうこともよくあったようです。そんな時、父はお客さんの手前怒るに怒れず、にこにこしてお客さんと話をしながら、炬燵の中で足の親指と人差指で私のふくらはぎをつねっていたことを、今は亡き、いや今も元気な父の思

い出(?)として覚えています。(どうも父の記念会のようになつていけません)

ただ、困った事には、いつもこうした話は長引くのが常で、母も父と一緒にお客さんと話してありますから、当然夕食はいつまでもおあずけといったこともありました。決して私が発案者ではありませんが、このような事態にしびれをきらしてお客さんが早く帰るといふ、一種のおまじないのようなものをよくしたものです。それはこつそりとほうきを逆さに立て、その上に手拭を掛けておく、というものです。効果の程は定かではありませんが、後年にほうきが掃除器に代わつても、掃除器のノズルを使ってやっていたところを見ると、かなり効き目があったのでしよう。しかし、時々来客された方と一緒に夕食を食べたりすることがあり、そんな時は賑やかで楽しいひとときであつたことを思い出します。

旧会堂の階下が私の居住区域であつたわけですが、天井裏というものはなく、会堂の床がそのまま下の天井になつていふという、素朴な(珍しい)造りになっていました。ですから、階下においても二階の会堂の様子が手に取るように分かつたのです。夕食時など、夜の集會に早目に来られた方の足音で(歩き方や座る場所に特徴があるもので)、それが誰であ

るかを判別したものです。また、我が家のその日の夕食のメニューが会堂に充滿する匂いで、皆さんはよくご存知であつたようです。こうした環境の中ですから、まさに讚美歌とお祈りを子守歌に育つたといえるでしょう。朝は早天祈禱會の靈感賦で目を覚まし、夜は伝道集會や祈禱會の讚美歌で眠りに就くといふ、今にして思えば素晴らしい環境でした。ただ、あの父の大きな調子つばずれの歌声を聞きながら、私が音痴にならなかつたのは、幸いにして教會の皆さんの素晴らしい歌声が、父の声をかき消してくれたお陰だと、感謝しております。

また、我が家は結婚式の日には新郎新婦の控え室になつたり、クリスマスのときは樂屋になつたりと、様々な行事に使用されるのが常でした。ですから、よく子供ながらによそごく普通の御家庭のような家庭生活というものに憧れたものです。しかし、このような公私の区別もないような牧師の家庭というものが、やはり前田教會特有のあのなんともいえぬ、運命共同體の如き家族的な交わりを育んできたのだなあといふくづく思います。といふのも、後年各地の教會に導かれましたが、いつも私の脳裏に浮かぶのは、旧會堂當時のあの解放的な(ごちゃごちゃな?)、暖かみのある教會なのです。ま

さに、牧師館でお茶を飲む回数が多いほど恵まれる、という伝説は（私の場合は全然だめでしたが）あながち作り話ではないような気がします。

【忘れ得ぬ人々】

我が家には家族以外の方が一緒に生活をされてきました。時代と共にその方々も変わられたのですが、その中に東さんがおられます。弟の哲ちゃん、妹の泰子ねえちゃん（当時私がそう呼んでいたのですが）と一緒に教会に來られていました。泰子さんには本当によく可愛がってもらったことを覚えています。黒崎の保育園かどこかに連れて行ってもらったことと、東さんのお宅に遊びに行ったとき、道を隔てた前の家が火事になって炎をあげて燃えて、怖かったことなど、今でもその情景が目には浮かびます。東さんが献身されて一緒に生活をするようになって、いつも一緒に遊んでもらえると思ひ、嬉しかったことを覚えています。東さんの後を付いて回っていたのではないかと思ひます。石炭風呂の火の起し方も、薪割りのしかたも、東さんの傍らで覚えたように思ひます。余談ですが、東さんがバイクを教会に捧げられて、父はジャンパーを着て、ゴーグルをかけ、ハンチング帽子を被り、そのバイクに乗って颯爽と（？）信者さんのお宅を訪問していま

した。先日この話を家の子供たちにしたところ、「それじゃおじいちゃんは暴走族だったの」と皆で大笑い。まあそういう若い日もあったわけですね。

ほかに、広瀬さん、調さんにも大変お世話になりました。この紙面を借りてお礼申し上げます。広瀬さんは我がままな私が、かんしゃくを起こして大騒ぎするのを、父によく執り成してくださいました。また、大野のおじいちゃんも一時期一緒に生活していたように思ひます。大野のおじいちゃんも鋸の引き方からカンナのかけかた、砥石の使い方などよく教わったものです。数え上げればきりが無いほどに、いろいろな方々が懐かしく蘇ってきます。

【日曜学校の思い出など】

さて、教会の思い出と言うと日曜学校のことになるでしょうか。私の場合には昭和三〇年代の頃であったと思ひます。幼稚科から始まり高校生まで、様々な思い出がよぎります。幼稚科は泰子先生で、聖書物語や紙芝居をしてくれたこと、金言を一生懸命覚えたことなどが思い出されます。クリスマス誕生劇では、メーメー鳴きながら講壇の上を這い回る羊の役で華々しく（？）デビューしました。その後、羊飼いなりに、宿屋の主人、三人の博士、そしてヨセフ役と、次第にそ

の演技力が認められ（? ? ?）、昇格したのでした。クリスマスはこの劇は元来内気で小心者の私にとつては、悩みの種でした。それがある年、小学校の高学年でしたが、取税人の役が割り当てられて、練習のときから嫌がっていました。その頃クリスマス会の祝会は、八幡駅前を上がったところにある中央公民館（でしょうか?）の大ホールを借りて、本格的な大舞台で行っていましたから、余計に精神的負担が大きくなっていました。この時初めて神様に真剣に祈ったように思っています。そして当日、スポットライトの中で不思議に落ち着いて、自分でも思いもかけない名演技（?）をやつてのけたのでした。神様は自分の祈りに応えてくれたという実感を初めて得たのですが、おまけにそれ以来、人前に出ることに快感を（?）覚えるという変な癖がついてしまったのです。

クリスマスの劇といえば、あの「バラバ」が思い出されます。若かりし日の正野さんや尼田さん、ほかに多くの青年会の方々（固有名詞が出てきませんので三人称複数にしておきますが）が練習を重ねて上演したもので、その迫真の演技に観客は思わず涙を流したとか、好評につき翌日の愛餐会でも再演したという、今や伝説的な名演だった事が今でも記憶に残っています。

小学生のクラスは高木先生でした。高木先生のお話は私たち子供にとつては、経験し得ない、非常に興味の在るものでした。戦時中の貨物船員の頃の話や、製鉄所での危険な体験談など、まるで冒険物語を聞いているかのようで、どきどきわくわくしながら聞いていたことを思い出します。しかし、その逸話のそれぞれが、今も生きて働く神様の御手の業を示している事にあかしでした。この頃でしょうか、神様を選ばれた者の額には、目には見えないが、羊の刻印が、そうでない者には狼の刻印が押されているという話を聞いて、自分はどうだろうかと心配したこともありました。高木先生はよく「こんな話は覚えんでもいいけどね。みことばを覚えんないけんよ。」と言つては、豪快に笑っていました。まさにこうした幼い頃に覚えたみことばが今も私の中で息づいているといえます。そして、中学になると正野真宏先生のクラスでした。聖書の話もさることながら、よく土曜日の午後には黒崎の保健所を尋ねて、卓球の指導をしてもらい、クリスマスには手作りの人形劇を指導してもらったことが懐かしく思い出されます。今にして思えば、大事なデートの時間を奪っていたのではないかと、申し訳無く感じています。

【信仰のことなど】

こうして成長してきたわけですが、信仰については必ずしも確実に成長したというわけでは無く、思春期になって温室育ちの弱さからか、それまでとは全く違った方向へ走り出したのです。「牧師の子供」ということがいつもどこかに引っ掛かっているようでした。この「牧師の子供」というレッテルは、なにか一種の模範的子供像、人間像を強要している（自分でそう思っていただけでしょうが）ように思われたのです。つまり、年と共に自分を見つめることができるようになってくると、自分がこの「牧師の子供」という枠の中におとなしく納まり、教会の皆さんの無言の期待（そんなものはないのですが）に応えるように振舞わなければならないように感じて、非常に偽善的に思えてなりませんでした。そして、教会から出来るだけ離れようとしたのです。かくして、父母や皆さんの祈りの種となり、父の説教の例話の題材を多く提供するようになったのでした。

その後様々な状況の中を通りましたが、その中であって神様は見捨てること無く、「われ限り無き愛をもって汝を愛せり。ゆえにわれ絶えず汝を恵むなり」とのみことば通りに、深い憐れみをもって支え導いてくださいました。今振り返ってみますと、「汝ら今これを知らず、後これを知るべし」と

ありますとおりに、自分の力で何でも出来るかのように思いついていた私を、懇ろに導いて主の許に立ち返らせて下さっていたことを知らされます。結局神様の御手の中で、そして計り知れないご計画のもとで、一人悪あがきをしていたにすぎないことを悟らされたのです。

神様は思いもかけないことから、引き戻して下さいました。ある年のクリスマス夜の夜、未信者だった（私も同じ様な状態でしたが）家内が教会へ行きましたよと言いつつ出たのです。それがきっかけとなって、渋谷教会で礼拝を守るようになり、御聖霊の不思議なお導きによって、昭和五八年の春に家内共々受洗させて頂きました。

九州を離れて以来これまで、各地の教会へ導かれてきましたが、「父と子と聖霊の働きを信ず」と信仰告白まで読み上げながらも、決して聖霊の働きを説く事のない教会、旧約聖書を神話として、寓話としてしか捉えない教会など、様々な教会があるなかで、今も生きて働いておられる全能の主を証するこの前田教会は、いかに恵まれていることだろうか、つくづく思うものです。この前田教会に連なるものとして、私たちもこの信仰を全うさせていただけられるように、歩みを整えさせていきたいと思います。祈っております。

前田教会五十年記念にあたって

川 越 シヅエ

戦前から、戦後のあの苦しい時代の中にあつて、多くの兄弟姉妹のあつた信仰により、神様の守りとお導きにより、輝かしい今日があることと信じます。

このすばらしい教会に籍をおく一人として、そのお恵みに感謝しております。私は、丸山兄姉を通して、早くから教会を知り、榎本先生ご夫妻には大変お世話になっていました。

でも自分には、教会は、高い所にあつて手の届かないように感じていました。そんなある日、妹が「姉さん、月に一度でもいいから教会に行つてみなさい。心に感じるお恵みがあるよ」と言いました。

丁度、新会堂が完成する直前ごろだったと思います。何も分からず不安もありましたが、礼拝に出るようになり、色々な抵抗ものり越えて、榎本先生や教会員の皆様にささえられてまいりました。

そのうち、日々の生活にあつて、先づ自分が変らなければと思うようになりました。

昭和五二年四月、次男と共に受洗させていただきました。ほんとうに何も分からないまま、年齢からしても、よくも決心できたものと自分でもあきれたものでした。

今は、何の働きもできない愚かな者を、恵の中に置いていただき感謝しております。

あれから一三年になります。さまざまの中を通りましたが、ただ神様を信じることを教えられ力を与えられました。

祈りによって、平安が与えられ、信仰のすばらしさを感謝せずにはおられません。

「主イエスを信じなさい。そうしたら、

あなたもあなたの家族も救われます。」

(使徒行伝 一六・三一)

みことばを信じて、皆さんと同じお恵みにあずかる信仰に生きるように、祈りもとめてまいりたいと思っております。

アーメン

主の恵み深きことを味わい知れ

高 木 ツルエ

「あなたこそ、生ける神の子キリストです。」

(マタイ一六・一六)

八幡前田教会が創立以来、この信仰に堅く立って今日に至り、平成元年一月三日をもって満五〇周年の記念の日を迎えることになりました。この日、記念礼拝と感謝会が催されるのでございますが、このことは、私たちにとつても言葉に言いつくすことのできない大きな感謝と喜びでございます。

この日を迎えるにあたり、限りないご愛と恵みをもってお導き下さいました神様に心から感謝を捧げます。また善き牧者として、榎本先生と百合子奥様を私たちのためお遣わし下さいました主に感謝いたします。一人の牧会者によって、五〇年のあいだ養われた私たちはなんと幸いなことでしょう。

私は、昭和二七年二月二八日、結婚と同時に前田教会に

導かれ、先生を通して十字架の福音にふれて罪を許され、神の子として永遠の命にあずかる幸いな身分とされました。また救いの確信が与えられたことは何ものにもかえがたい喜びです。

神様の大きなご愛を感じつつ、朝に夕に集会に近づけていただき、聖言に信頼しながら生活しているあいだに、み言葉には命があることを少しずつ悟らせていただきました。

早天祈禱会でも恵んでいただきました。今は天にある河本ご夫妻、丸橋兄、高橋唯市兄。そして伊規須兄、東兄妹、そのほかの兄弟姉妹に私達夫婦も加えていただき、靈感賦二六番「いまにいたるこそ主のめぐみなれ」などを、喜びあふれて讚美し、先生よりその日のために聖言を与えられ、それぞれの道に踏み出させていただきました。

私が前田教会に導かれた頃の先生ご一家は、四人の子供さんとで六人家族でした。入れかわり立ちかわり牧師館をおとされる信者さんたちで、こたつのある部屋はいつもにぎやかでした。どんなにお忙しい時でも喜んで迎えて下さり、聖言によって教え、祈って下さいました。それによって私はどんなに信仰を強められ、励まされたかわかりません。また温かいもてなしは今でも忘れることはできません。更に牧師館で

の先生ご夫妻の歩みをとおして、神様をおそれ敬い、神様に従うということがどんなことであるかを教えていただきました。

私共の長い間の祈りの課題でありました娘のゆりと、主人西岡隼人が主イエス様を救い主と信じ、昭和五六年四月二〇日共にバプテスマを受けさせていただきました。

「主イエスを信じなさい。そうしたら、
あなたもあなたの家族も救われます」

(使徒行伝一六・三一)

祈りに答えて下さったご真実なる神様のいつくしみとあわれみにつきない感謝をささげました。更に二人が真理を悟り、神第一の信仰生活ができるよう、祈りつつ待ち望んでおります。

五八年八月一日、孫の西岡恭が、青信号で横断歩道を渡っている時、市営バスに自転車もろともひかれ六回の手術と、五か月にわたる入院生活を送りました。主人と共に代わるものなら代わってやりたいと切なる思いでいっばいでした。重症の恭を前にして、家族一同心を一つにして全能なる神様の助けを祈り求めました。そのとき次のみ言葉が与えられま

した。

「人にはできないが、神にはできる。」

神はなんでもできるからである」

(マルコ一〇・二七)

この力づよいみ言葉に信頼してひたすら待ち望んでゆくうちに、恭は日に日に強められました。神様の恵とあわれみによつて今では、心身ともにすこやかに成長し、中学三年生となりました。

私達は、恭の命を救って下さった神様が、魂も救いに導いてご愛に報いる者となりますよう、感謝とともに祈りつづけています。恭のためお祈り下さいました先生をはじめ皆様に心から感謝いたします。

六三年五月、主人が首に異常を感じ、産医大病院での精密検査の結果、「悪性リンパ腫瘍」と診断されました。以来三回にわたる入院生活をくり返し、現在は大学病院外来で「抗がん剤」の点滴をうけています。

医学的には希望のもてないこの病気を思うとき、私の心は不安と恐れで大きく動揺しましたが、「あなたがたは、心を騒がせないがよい。神を信じ、またわたしを信じなさい。」

(ヨハネ一四・一)のみ言葉に心がむいたとき、平安と勝利を与えられました。

主人は、がん患者という状況の中にあっても堅く信仰に立ち、すべてを主にゆだね、感謝、讚美の毎日です。そして残された使命のため、主を仰ぎつつ祈っています。

ここに創立五〇周年を迎えるにあたり、恵みふかき主のお導きをふりかえり、「主は今に至るまでわれわれを助けられた」と感謝の石をすえ、み名をあがめます。更に心を新たに、恵に感じて神様にお従いさせていただきたいと切に願っています。

「主の恵みふかきことを味わい知れ、
主に寄り頼む人はさいわいである」

(詩篇三四・八)



五十周年記念に当たって

花 倉 洋 子

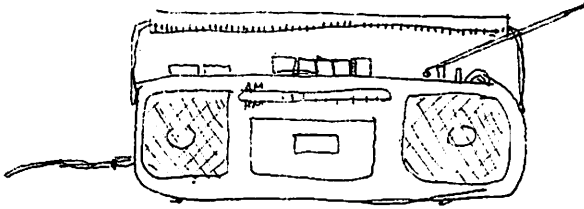
八幡前田教会の五〇周年記念に当たって、主の豊かなお導きとお恵みを感謝致します。

神様に豊かに豊かに守られて今まで歩ませていただきました。本当に感謝でいっぱいです。こんな不信仰な者でさえ、「神様が共にいて下さる」と思えば勇気が出て大胆に歩むことができましたし、困った時は「神様! どうしたら良いのでしょうか?」と神様に祈れば心は平安になりました。嬉しい時も悲しい時も、すべての事情や状態の中を通る時、心の中にはいつも『神様』がいて下さいます。この神様を教えて下さったのは八幡前田教会の榎本利三郎先生です。

教会とつながってもう三〇年以上が過ぎました。熱心さに欠ける信者ですが、教会から離れてしまう事は到底考えられない者です。これからも色々な中を通り問題に直面して行くことでしょう。けれど、全知全能の主、神の中の神、真実で

すべてをご存知の神、愛に満ちた神様が共にいて下さいますから安心です。

上よりの祝福と恵みに満ちたこの八幡前田教会につながって信仰をもって励んでいきたいと思えます。



五十年の感謝

廣 田 壽

(一) 機に合う助けとなる恵みを

教会創立五〇周年を迎え、今日までお導きいただいた主に、心から感謝を捧げます。

私が前田教会に導かれたのは昭和二五年、やがて四〇年になります。大阪高石教会で求道し、洗礼を受けて二年余りで転会してきました。教会生活四二年余のうち、転勤のため東京志村栄光教会、逗子教会、渋谷教会に導かれた一〇年余を除く、三〇年を前田教会でお交わりいただいたことになりました。

この間、昭和二九年に結婚、式も披露宴も教会でお世話になり、三人の子供も日曜学校で育てられ、家族ぐるみでお導きいただきました。長女は昭和五五年、同じ教会で結婚、今では孫三人、歴史を感じさせられます。

いろいろな中でありましたが、お証して参りました通り、

その都度、救われた者に与えられる『機に合う助けとなる恵み』（ヘブル四・一二）を受けて、奇しくも今日まで生かされました。改めて心から感謝し、ここから更に主をまち望んで歩み続けたいと思います。

大阪では、入信当初のことでもあり、聖書研究会、青年会等を含め、教会生活について厳しく訓練されてきましたが、前田教会にきて、聖書に忠実に“との、徹底した純福音の信仰に、私はもう一度、はじめから鍛え直されました。お恵みいただいた数々の賜物に唯々、感謝の外ありません。

(二) 今に至るまで助けられて

この度、教会創立五〇年誌をつくることになり、編集に当らせていただきます。はじめてのことで、何も判らぬままに、教会員の皆さんにこのためお祈りをお願いし、編集委員の皆さんと一緒に、祈りをもって取りかかりました。

幸いなことに、この場合も、編集委員会の度に榎本牧師先生を通し「機に合う助け」の聖言をいただき導かれております。この恵みを分ちたく、感謝をこめて次にその要旨をお伝えいたします。

第一回 『あなたこそ生ける神の子キリストです……』

わたしはこの岩の上にわたしの教会を建てよう』（マタイ一六・一八）教会は主イエスを信じ、みたまによって与えられ、選ばれ導かれるところ、神が愛して下さるその恵みに感じて主に仕えていくのが教会、道場やクラブでもなく、数も問題ではない。恵まれた五〇年、主の恵み主の証をもって記念の塚をたて、ここから真の教会として新しく出発する。ここでみたまの導きをいただき、五〇年の記憶を掘り起こして記念誌をつくらせていただきたい。（祈り）

第二回 『だから愛する兄弟たちよ、堅く立つて動かさず、いつも全力を注いで主のわざに励みなさい。主にあっては、あなたがたの労苦がむだになることはない、あなたがたは知っているからである。』（一・コリント一五・五八）今日まで五〇年、思えばあのこともこのことも、主にあっては何一つむだになっていない。詩篇にマスキール（教え・反省）の歌がある。今、立ち止って神のみ業を感謝し、味わう恵みの時である。聖言に堅くたつて動かされず、前に向かって全力をあげて主に従っていく。栄光につながっていく恵みにあずかる特権を感謝し、主にあって業をさせていただき、主にあってむだでなかったという証の五〇年誌でありたい。（祈り）

第三回 「その時サムエルは一つの石をとってミズパと

エシヤナの間にすえ、「主は今に至るまでわれわれを助けられた」といって、その名をエベネゼルと名づけた。」

(サムエル上七・一二―) イスラエルは「心を主に向け、主へのみ仕え……」たので、(サムエル上七・三一―四) 主の手がペリシテ人を防いだ。エベネゼルの石をたて「ここまで助けて下さった」とするとき、勝利を得させて下さったのである。

この五〇年、前のみめざして走ってきたが、今、振返って神の恵みをかみしめ感謝したい。ハンナの祈り(サムエル上二・一―)にあるように、このように五〇年、恵んで下さった事実がありながら、神を畏れ敬っているだろうか、と反省させられる。

栄光を主に帰して五〇年誌を綴り、新しく石をたてて恵みを感じて歩んでいきたい。(祈り)

このように、懇ろに、主の聖言にお導きいただける実に恵まれた、何とも楽しい委員会であります。今、皆さんからたくさん貴重な証の原稿を寄せられ、これからいよいよ編集にかかります。更に続く委員会でも、時機を得た助けの聖言をいただいて、一人ひとりが整えられ、信仰もってこのご用を

果たしていききたいと願っております。



神の教会の五十年史の中で……

野村末義

「あなたがたがわたしを選んだのではない。わたしがあなたがたを選んだのである。そして、あなたがたを立てた。それは、あなたがたが行って実を結び、その実がいつまでも残るためであり、また、あなたがたがわたしの名によって父に求めるものはなんでも、父が与えて下さるためである。」

(ヨハネ一五・一六)

八幡前田教会の創立五〇周年の記念の時に当り、心から敬意と感謝を捧げる者であります。これは活ける主イエスキリスト様が教会の首として教会を守り支えられて来た事はいうまでもありません。実に素晴らしい五〇年であります。

同時に、この栄光と祝福に満ちた教会の五〇年の歴史の中に於て、僭越せんえつな言い方かも知れませんが、この卑しい小さなしもべの歴史も多くの聖徒と共にその一コマが記されているのではないかと思っております。

使徒行伝の弟子達の様にとは、とても考えられませんが、

どこかで小さいけどスターでもなくエキストラでもない、まあただの通行人の一人かも知れませんが、偉大なる栄光の歴史の中に入られて来たのではないかと、今にして考えておる所であります。神の教会の歴史に連なりつつ、私も福岡で一五年八幡に来て四二年間、考えた丈でも並大抵の事ではありません。神が私の如き卑しい罪人を憐れんで選び、十字架により救い神の子として受け入れて下さって、この貴い栄光ある御教会のプロセスの中に止められるとは、誠に誠に幸せな者と言う外はありません。これは、普通では到底願ってもできない事であります。実に有るに難き事でありまして、正に有難い事ではありませんか。誠に大感謝な大事件であります。

「わたしは自分のあわれもうとする者をあわれみ、いつくしもうとする者をいつくしむ。故にそれは人間の意志や努力によるのではなく神のあわれみによるのである」(ローマ九・一五―一六)

どんなに感謝しても足りぬ程の有難い事だとしみじみ感じている所であります。

今後この栄光の歴史の中に残されてどこまで行かせてい

ただくわかりませんが、行きて実を結ばしめようとして下さる主に従って、多くの聖徒方と共に励んで行きたいと願っています。

やがて、これから六〇年七〇年と前田教会の歴史は主によつて益々輝き、後の栄は先の栄より更に勝れる栄に満たされて、主の聖名が崇められる様になる事を信ずるのであります。

筆舌に尽しきれぬこの有難き主の恵とあわれみにいよいよ感謝と讃美を捧げて聖名をあがめます。ハレルヤアーメン



創立五十周年に寄せて

— 八幡前田教会に導かれて —

主が支えて下さる日々

安 部 タマエ

私が前田教会に初めて行きましたのは、脳血栓で倒れ、その後遺症で人様から質問されると、すぐには返事が出来ない状態の時でした。

導かれるままに、早天祈禱会に一週間位出席させていただきました。お説教を聞いているうちに、神様のご臨在にふれ、今まで、葉書一枚書くのにも一週間位机にしがみついていたのですが、すらすら書けるようになり感謝しました。

このように神様が私に対するご愛を示していただいたことは、ただただ驚きでございました。

当時、私の主人は獄に捕らわれの身でした。榎本先生にお願いして手紙を出していただいたりしましたが、主人も予想外に早く帰って来ました。

先生を始め、いろいろな方々のお世話で、すぐ八幡製鉄所に就職できましたが、その製鉄所も墮落の末、職を失うこと

となりました。

その後もいろいろなことがあつて、主人のことで折る日々の連続でした。そして発病、入院、死去と大きな試練の中を通らせていただきましたが、主のお恵みによりその度ごとに乗り越えさせていただき感謝でございました。

昭和六三年三月末、右大腿項部骨折で、香月の外科病院に入院しましたが、先生を始め婦人会の方々が、再三お見舞に来て下さり、祈って下さいました。

私が現在のホームに入所する時は、姉の一存で決まり、私は同意するしか道はありませんでしたが、主に祈って一切をおゆだねしていますので不安もなく、平安な日々を過ごさせていたいただいています。

最近の病状ですが、教会の皆様、篤いお祈りによって右足の甲のはれも減り、その部分の神経も、元どおりに回復し癒されました。お祈りまことに有難うございます。

わたしは知ります、

あなたはすべての事をなすことができ、

またいかなるおほしめしても、

あなたにできないことはないことを。

ヨブ記 四二・二

エベネゼル→ハレルヤ前進

伊規須 泰 子

さまざまの 中を歩みし 五〇年

ああエベネゼル 喜びささげん

ハレルヤ主 恵み受けたる 我なれば

いざ走りなん 御国めざしつ

◆いつの間にか

「わたしの知らないうちに、わたしの思いは、わたしを車の中のが君のかたわらにおらせた」(雅歌六・一二)

自分で選んで求めた教会と生きていました。人生の苦しみの中から、私が求めたから得たのだと生きていました——それは一九五一年(昭和二六年)五月のことです。

そっと押した前田教会の扉の中で喜びを与えられたのでした。だんだんと心が満たされ、命にあふれてきました。

そこに命を見出したから、私は絶対に離れないと自分の力を過信していました。

——しかし、気が挫かれるような事につかつたら、たちまち萎んでしまつて落ち込んだものでした——

そんな中でも、引つ張られる力があつて、どうしても教会に行く事だけは止められず、おそるおそる近付けば力を与えられたものでした。でも、通り過ぎてしまえば、やっぱり私は意志が強いからだなんて高ぶつたりもしましたが。

——神様のあわれみがどんなに大きなものか——私が自分で求めたと思つていたよりずっと前、主の大きな大きなご愛があつた事をやつと悟りました。

自分の駄目さ加減が見えて、はじめて十字架のあがないの尊さを知り、涙ながらに悔い改め、神様のこの御愛に触れたとき、飛び上がるような新しい喜びにあふれました。

その頃から何年たったことか、あれこれ繰り返しながら、知らない間に私は主の花園に入り、喜びをもって従わせていただいていたのです。

一九八九年(平成一年)の現在は、主の御愛の中に安んじながら、花園の中で小鳥のように喜びながらも、悩み苦しんでいる人々が何とか主に帰るようにと祈つているところですね。

最近、改めて旧約聖書のイスラエルの民の姿——従つて

は背き、立ち返っては背く——を見て、それ以上に背いていた自分であった。しかし愛の故に立ち返らせていただいたことを知り、それなら、どのような人をも、主に帰らせていただける祈り、感謝を新たにしているところです。

◆エベネゼル

※見られる者、読まれる者を——見て、読んで——

一九五二年（昭和二十七年）頃のある日、ある時、前田教会の一番下の子供さんは、小児結核とかで命を危ぶまれていました。そんな中での親の信仰を見たのです。まだ信仰の何たる事か良く分からなかった私にとって、いかに強い感激になったことか——丁度ヘブルの三青年の姿のように思いました——こういう姿勢がとれる宗教を、私は信じて行こうと思ったのでした。それが今の信仰の土台の一部になっていると思います。

※日曜出勤

信仰を持って行こう、と思っている時に、ぶつかったのが勤務先での日曜出勤の問題でした、一九五二年ごろ、まだ私の若かった頃のこと。

礼拝を重んじる大切さを教えられたのに、日曜出勤があつ

てとても困ったのです。こうと決めたら（礼拝がいかに大切かを知って）その通りにしたい私の性質とも相まって——いま考えると、少々律法的な思いを持っていたような気がします——どうしてよいか分からなくなって悲しみました。しかし思い切って主に従った事によって、私の幼い信仰に火がともりました。幼い、それなりの姿勢、まず主の御旨を伺うことを学びました。

※牧師館での交わり

まだ若かったころ、土曜日の勤務帰りに教会のお掃除に行つて、（昔の）若い人たちと共に教会の家族と交わったり一緒に食事をさせていただいたり、夜遅くまで話し込んだりしました。一九五一年ごろですから、そんなに御馳走はありません？ でもとってもおいしかったです。幼い信仰の者にとって做^なう良い機会だったのではないのでしょうか。なつかしい思い出もあります。先生ご夫妻にとっては、きつと大変だったことでしょう。でも、実際の生活に触れることとても良い事です。触れて学びます。

※一九五一年ごろの早天祈禱会

あの頃は先生もお若かったし——勤務前、六時からの早天祈禱会に出てから出勤していました。他の集会より人数は

少なかったし？ 恵みが直接に来る感じでした？ 朝早く主にお会いし、聖言によって力づけられ一日が始まりました。従う事を訓練された、とてもさいわいな時期でした。

現在（一九八九年）——少々眠たい事もありますが、幸いな朝の交わりを持ち続けています。

◆恵みのベルト

「あなたがたの切り出された岩と、あなたがたの掘り出された穴を思いみよ」（イザヤ五一・一）

前田教会は五〇歳ですって？ そのベルトに載せていただけ、私は信仰年齢三八歳——年数なんて問題ではないのですが、ここまで来させていただいたことに、ただ驚く訳です。切り出された岩はもう穴には戻らず、新しい目標を持って行きます。

背水の陣——「わがすべてにます 愛するイエスよ、橋落ちにければ 永遠とわにつかえなん」（靈感賦九二番）——
ベルトは前に進んで行きます。感謝はあっても振り向きません。主の所に帰る日を望んでいるから、そして……

◆前を望んで

「うしろのものを忘れ、前のものに向かつてからだを伸ばしつつ——」（ピリピ三・一二）

かくして前田教会で養われて、今は戸畑教会に来ています（前田の五〇年の中の自分の三八年を感謝し堅くした上で）。今は前に向かつて十字架を仰ぎつつ走っています。

様々な過去がある。しかし過去を感謝はしても、それにとらわれたくはない。過去は救われた土台、救われたあかし。今は前進あるのみの日々で、天国に着くまで走り続けます——。

◆礼拝

- ・ 五月雨や 血潮崇めて 今日主日
- ・ くちなしの 香りと共に 主を讚美
- ・ 「われに来よ」 主の声嬉し 梅雨の朝
- ・ みどり爽やか 今日礼拝 心満つ
- ・ 朝起きて 先ず主を讚美 風爽か
- ・ 会堂に ゆかしき香り 薔薇さんび
- ・ 選挙カー 説教の中に 割り込みり
- ・ 祭り太鼓の 練習響く 今日礼拝
- ・ ワープロを 打ちつつ讚美 今日雨

・今日は梅雨 礼拝の席に おさな子も



恵みの人工弁

池田 操

戦後の焼け野原の中に色塗りの建物……電車の中から行きも帰りも、不思議な思いで眺めていました。それが前田教会とは、知る由もありませんでした。昭和二四年の初夏だったと思います。友達の話を聞いて、夕方尋ねる事にしました。

入口の所で、男の方が「どうぞ」と言って中に入れて下さいました。後でわかりましたが、何時もニコニコしていた丸橋さんでした。後ろのベンチに腰掛けて、讃美歌を聞いてうつとりしていました。先生のお話しはあまりわかりませんでした。が、気持ちには落ちついてきました。帰りに牧師先生ご夫妻が「よくいらつしゃいましたね。又いらつしゃい」と声を掛けて下さり、教会通いが始まりました。心の中の暗いものが晴れていくように、平安に変ってきました。

その頃は電車か自分の足で歩く時代だったので、歩く事も楽しかったものです。帆柱ケーブルの下からよくぞ通ったな

あとと思います。後になって山田さん、下松さん、水村さん達と通いました。

昭和二六年、伊規須さんご夫妻、東さん、高木さん、畠山さん、私、他数名と洗礼を受けさせていただきました。緊張もしましたが、日が立つにつれて、罪のゆるしも確信となり、潔められて新しい歩みに導かれて行きました。

「十字架の言は、滅び行く者には愚かであるが、救いにあずかるわたしたちには、神の力である」。

神様が、何の取り柄もない私を選んで下さり、喜びと共に感謝をもって、これからもエス様に従わせて下さいと祈りました。

朝の早天祈禱会や各集會に出、河本さんご夫婦の神様に対する至誠をもって教会の為に尽くされた事、信仰と祈りの器であられ、とても素晴らしい方だったと思います。

私が牧師館で生活させていただいた事、家族で家拝をする事も教えられました。百合子先生の作られるお寿司、初めて見るマヨネーズ作り、七輪にかけて天火で焼くケーキなど、洋裁にも通わせて下さいました。今はなつかしい思い出となっております。

その後、自宅で洋裁をしていましたが、風邪を引いて床に

つきました。少し心臓が悪いとは聞いていましたが、日頃は元気にしておりました。榎本先生が見舞って下さり、私の背中をさすって、祈って下さいました。だんだん楽になった事を忘れません。毎日往診して下さいました医師が心臓専門の医師を連れてこられ、診察の結果、黒崎の年金病院に入院しました。暫くしてから、手術と決まりました。手術の恐れより、医療費などの負担を掛けるのに、心痛みました。「神はわれらの避け所また力である。悩める時のいと近き助けである」。信じて委ねているつもりでも、涙ばかり出しておりました。今思うと、何と信仰の足りなさよと、恥ずかしくなります。市の援助もありまして、手術を受ける事になりました。榎本先生が見舞って下さり、祈って下さいました。「とこしえにいます神は、あなたの住家であり、下には永遠の腕がある」(申命記三三・二七)

昭和三八年、兄弟姉妹方の祈りに支えられ、執刀医の先生方、看護婦さん達で無事手術は終わりました。有難うございました。

術後二年目に結婚、主人に男の子がおりましたが、現在は独立して結婚しております。主に支えられながら、家事に従事しておりましたが、七年目に主人が亡くなり、姉の所へ帰

りました。姉は勤めもあり、母もいましたので、家事を受け持ちました。次の年に元気だった母も亡くなり、昭和五〇年、二度目の手術を受ける事になりました。そして入院。

医療費も国の負担の為、安心して受けられました。感謝です。高木さんの会社の同僚の方達の献血をいただき、兄弟姉妹方のお祈りを受けて、無事終りました。術後は、外科の主治医先生に見ていただき、風邪もほとんど引かずに、一〇年が過ぎました。その後、心臓に変化が起こってきました。少し意識がなくなるようで、心臓が飛び出すかの様に、「ぼん」と打たれ、座り込む様になりました。主治医先生の紹介で、年金病院へ行きました。診察の結果、手術と言われびっくりしました。先生は昼も夜も心臓は働いておるのだから、悪くなるのは当り前と言われ、入院手続きをして下さいました。姉が定年に成りましたので、助かりました。私も二回目の手術が楽だったので、軽い気持ちでおりました。詩篇二三篇を心にとめて祈っておりました。聖言を信じて、三回目の手術を受ける決心を致しました。

今度は人工弁を入れるため新鮮血が必要との事、教会の藤掛さん、小松さん、海江田さんの血液をいただきました。有難うございました。榎本先生に祈っていただき、聖言をいた

だきました。「主はわたしの命のとりでだ。わたしはだれをおじ恐れよう」(詩篇二七・二)

術前は体調を整え、検査などして待ちます、手術日の朝は点滴をしながら、車の付いた台をゴロゴロいわせながら足速でナスセンターへ、これからタイムトンネルに入って行く様な気持。準備も出来て、ストレッチャーで手術室へ、後は夢の国。目が覚めて周囲を見ると、ここはICUだなあとわかりました。術後の苦しさもありましたが、経過もよいそうで、主に感謝致しました。先生、看護婦さん、ご苦労様でした。榎本先生、兄弟姉妹方の祈りの賜物です。有難うございました。

家族の面会も許される様になりました。枕元では、医療器具が置かれて、ガチャガチャ、ゴトゴト、カチャカチャと伴奏入りです。後は体力の問題、ヒステリーがでらんばかり、「忍耐は練達を生み出し、練達は希望を生み出すことを知っているからである。そして希望は失望に終る事はない」(ローマ五・四一五)。この聖言をくり返しながら、気持ちを落ち着かせておりました。

数日後、大部屋に移されました。胸が重く、鉄が置かれているみたい。一ヶ月目には忘れた様に軽くなりました。暫く

して歩行練習です。足が立たず、姉か姪が付き添っていました。一人で歩く様になりましたが、千鳥足で右に、左への状態でだんだん快方に向っていましたが、発作を起し、先生方を慌てさせた事もありました。退院寸前に、内科へ転科させられました。寂しい思いもしましたが、良くなつて帰るべきだと、今、主が私に時を与えて下さつておられると、感謝致しました。ここでも何度か発作に見まわれましたが、その度に、主に委ねる事にしました。

退院後も発作が出て逆戻り、先生方も大変だったと、後で聞かされました。治療中に幻覚症状が出て来ました。信じる事さえ消されてしまいそうです。病の試練に会いましたが、生命を与えて下さいました。

退院後、三年が過ぎました。神様から与えられてた、心臓弁は、取り替える事になりましたが、恵みの人工弁のお陰で、発作も肝臓も落ち付きました。毎日の生活にも支障なく過ごされる様になりました。主に信頼して祈る時、心がやすらぎます。神様の限りないご愛とあわれみだと感謝しております。多くの方々の支援を受けて、榎本先生のお祈りとご指導を受け、兄弟姉妹方の祈り、ご奉仕、交わり、家族の助け、本当に有難うございました。厚くお礼を申し上げます。

前田教会の上に、主の栄光が豊かに満たされます様お祈り致します。



前田教会へ導かれて

石 丸 幸 子

前田教会へ、はじめて寄せていただいたのは、昭和三九年の十月でした。今こうして、イエス様のすばらしい完成された恵みの福音を聞き、御愛によって生かされ、望みと期待をもって生きることの出来ますことは、前田教会へ導いて下さった神様のお恵みによるものと、感謝しております。振り返ってみると、神様は色々な方法で、今日ここまで導いて下さり、これからも、もっと近く神様のところへ導こうと、愛をもって、招いて下さっていることを感じて、何と幸いなことかと感謝しております。

私は、一三才で母を亡くし、その頃丁度、級友の家で集会が開かれていて、さそわれました。わけもわからず、聖餐式のパンを食べたのを思い出します。その後、松山へ転居しましたが、母のいない寂しさや生きるよりどころを求めて、聖書を読んだり、父が毎日禪の話をしてくれて、神様のことを

私なりの理解をしていました。家の近くに、改革派教会があったので、行くようになりましたが、私には、長い間イエス様という方が神様の間に入ることが、受け入れられませんでしたが、牧師先生の弟さんの信仰をみて、ローマ三章二四節の「働なしに神の恵みにより、キリスト・イエスによるあがないによって義とされるのである」と受け入れました。昭和三年のクリスマスに、いつまで迷っていても、信じる他に私の頭ではとうていわからないとあきらめ、一か八かのような気持ちで受洗致しました。

昭和三七年に結婚して、北九州へ参りました。

二年間は、渴きを感じながら、定まった教会もなく過ごし、昭和三九年に道子が二才、到がお腹にいる時、社宅に移り、電話帳を調べておたずねしたのが、前田教会でした。火曜日で教会の戸が閉っていましたが、大声で「ごめん下さい」と言うと、先生が出て来られ、裏へ回って下さいと言って、先生のお部屋へ案内して下さいました。奥様がお茶を持ってきて下さり、今までのことを話して、ほんとにほっとした気持ちで帰りました。それから一三年間、迷ってばかりいる私を、礼拝と木曜会を通し、問題のある時はいつも祈って下さり、その中で信仰を養い育てていただきました。「主のいつくし

みは絶えることがなく、そのあわれみは尽きることがない」

(哀歌三・二二)と、あわれみによって、小さな信仰でも持ちつづけていると、この世にない希望と喜びと感謝にあずからせ、弱った時も、主によって力を得て守られてきました。

(陰のお祈りを感謝致します。)

昭和五三年に大阪に転居することになりましたが、大阪の集会が開かれており、本来にありがたいことでした。

毎月榎本先生を通し、命のみことばにあずかり、もう一年になりました。先生は大病をされた後の今も、主の御用として、大阪まで直接イエス様の命を運んで、私達に注いでくださる御愛を感謝しております。そのためにお祈り下さっている教会の皆様にお礼を申したいと思えます。

先生にお目にかかる、聖霊によって強められて、喜んでいのですが、この世のちよつとしたことで、すぐ恐れたり、不安になるという不徹底な者ですが、最近特に、先生からの強い気迫とともに、神様の光に心を照らされ、「心から信頼しているのか」と問われています。

神様は、愛する故にいつもかかわり、導いてくださっていることを感謝し、素直に従えるように、祈っていききたいと思えます。

珠玉の五年間

宇野恵子

前田教会創立五〇周年の記念の時を迎え、心からお祝いを申し上げます。

「見よ、わたしは世の終りまで、いつもあなたがたと共にいるのである」(マタイ二八・二〇)

「わたし自身が一緒に行くであろう。そしてあなたに安息を与えるであろう」(出エジプト三三・一四)

サフラン会で送別会をしていただいた時、私はこの聖言をいただいて、新しい道へと旅立ちました。

それから二六年、主は、陰になり、日なたになって導き給いました。

昭和三三年八月(安川電気に就職した翌年)それ以前に出席していた教会から離れ、モヤモヤしていた時に、大谷体育館で市内合同の伝道集会があり、母と一緒に出席しました。集会の最後に各教会の紹介があり、その中に榎本先生もい

らっしゃいました。前の教会で前田教会はとてもいい教会だと母が聞いていました。一度行ってみたいと思っていましたので、思い切って出掛けました。榎本先生が紹介の時に仰言ったように敷居はなく、ドアを開けて階段を上ると会堂でした。はじめて聞く榎本先生のお話に、キラリと光る何かがあるような気がして、続けて出席するようになりました。

榎本先生は、取りたての魚のように生きがよくて、聖言の御馳走を実体験という味付けで、つきからつきへと出してもてなして下さるように魂を満たして下さいました。あふれるお恵みに圧倒されながらも、弱い私は消化しきれず、マイペースで一言一言聖言をかみしめながら歩きました。だれの紹介者もない通りすがりのような者に、暖い愛の手を差しのべ、慰めはげまし祈って下さいました。先生は、私個人にそのようなことをした覚えはないとおっしゃるかもしれませんが、先生を通して御聖霊が働いて下さったのだと思います。

昭和三四年五月に、小倉の紫川でただ一人受洗させて下さいました。今は亡き、加藤さんのおじいさんとおばあさん、樋口姉（現在の小松姉）と母が付添って下さいました。榎本先生はオートバイに乗ってさっそうと来られました。バプテスマを受けて川から上ると、加藤さんの奥様が用意して下

さった暖かいコーヒーをご馳走になり、そのおいしかったこと、その日会社に行く時、体がフワフワして雲の上を歩いているような軽い足取りでした。罪ゆるされ、魂が開放されるということ、こんなに身も心も軽くなるのだろうかと思議に思いました。

女子青年会のサフラン会に出るようになって、皆様の真剣なお証を聞くうちに心が開かれ、親近感が湧き、親しくお交わりさせていただくようになって一層教会が身近な存在となりました。

昭和三八年四月に結婚するまでの五年間は、かけがえのない時でした。先生のお話は実生活に裏打ちされた確かなもので説得力があり、聖霊と愛と信仰と希望に満ちていました。神様に近づくことは、教会に近づき、先生のお話を聞くことと同義語でした。聖言は若かった私の心をとらえ、魂に刻み込まれました。新年聖会、クリスマス、夏期学校、サフラン会、聖歌隊、そのほか教会生活の一つ一つが心の糧となり、私の信仰生活の原点となりました。

ある年のクリスマスキャロルで、夜遅く、私の知らない信者さんのお宅の前で合唱しました。お留守だったのか、夜も更けていたのでぐっすり休んでおられたのでしょうか、だれ

も出て来られませんでした。

今は渋谷教会におられる、小森谷兄のお宅（小倉）だったのです。後年、私共が東京に参りました時、小森谷夫人からその話を伺い、「そうだったんですか」と楽しく語り合ったものです。

前田教会における小森谷夫妻と、私の唯一の接点を神様が準備して下さっていたのです。

その当時、聖歌隊の指導は西原文江姉がしておられ、新しい讚美歌を沢山教えていただいたことを感謝しております。旧牧師館には、思いあまつて伺ったこともありましたが。先生御夫妻は温かく迎えて下さり、折っていただいただけで心が落ち着き、体が軽くなつて、牧師館を出た時の晴々とした気持ち忘れられません。

結婚して、最初の赴任地山形（二年滞在）を振り出しに、東京（一年）仙台（四年）東京（六年）箱根（二年）北海道（三年）東京（二年）京都（二年・主人のみ）、そして東京……現在に至っております。転勤九回、引越一二回でした。

その度ごと、追いかけるように、週報、説教プリント、説教テープが送られて参りました。ことに、北海道は道東の川湯という小さな町で、地の果てに来たような心細い思いをし

ました。しかし神様は、地の果てまでも「私がついている。私があなたと一緒に行く」と語りかけて下さり、榎本先生の説教テープや「活水」を通して、力付けて平安を与えて下さいました。

また、良き信仰の友を与えて下さり、神様の手になる、雄大な自然の中で有意義に過ごすことができました。

その間に、主人の母も昭和五三年に受洗させていただきました。今は大濠公園教会におられる、内田喜代姉が渋谷教会に在籍中、母を実によく導いて下さいました。内田姉がいらつしやらなかつたら、母は受洗まで導かれたでしょうか。本当に感謝にたえません。

内田姉を導かれた折滝先生がお召されになった後、榎本先生は、大濠公園教会も兼牧され、大阪へも定期的においでられ、集会を持っておられるお忙しいお体にもかかわらず、私共渴いた魂のために、東京へも度々おいで下さいました。

筈原、金町、平塚、渋谷の各教会、小森谷家、三軒茶屋、南青山の各集會、そして藤村忠子奥様が、お召されになった直後の、悲しみに打ちひしがれている渋谷教会の特別集會で「いつも喜んでいなさい。絶えず祈りなさい。すべてのことについて感謝しなさい」（一・テサロニケ五・一六―一八）

の聖言によって、忠子奥様がいつも笑顔を絶やさず、主に
従いすることが忠子奥様の喜びであり、神様の喜びであると
語って下さり、大いなる慰めとはげましをいただきました。

榎本先生の、生死をさまようような二度の大病をも乗り越
えさせて下さった主は、五〇年間休みなく、働き続けて下さ
いました。これからも止むことはないでしょう。

「イエス・キリストは、きのうも、きょうも、いつまでも
変ることがない」(ヘブル 一二・八)

いつまでも、一人立ちできない弱い愚かな者ですが、信仰
の原点に立ち返って、もう一度新しい生命に満たされ、主の
ご栄光を拝させていたきたいと、思いを新たにさせていた
だいております。



「光」を求めて

榎 本 民 子

私がイエス様を、知ることができましたのは、昭和三四年
八月一〇日、TOTOに入社しまして、その職場で一人の友
と、会うことができたのが、教会に来るきっかけでした。陶
器を造っている会社ですから、暑いのは当然ですが、一年中
で一番暑い季節に、入社したのです。最初は、仕事を覚える
のに夢中でした。少し慣れてきますと、まわりの事も、気が
付くようになりました。そんな中で、一人の女ひとが気になり、
とても不思議でした。いつも、にこにこしているのです。

暑いし又楽な職場ではないので、ブツブツ言っている人は
居ましたが、嬉しそうにしている人は、ほとんど無かったか
らです。ある時、たずねました。「どうして、いつも嬉しそ
うにしているの」と、彼女は「教会に行っているの」「教会
に行くと、そんなに、にこにこしていられるのなら、私も行
きたい」「じゃあ日曜日に教会に行きましょう。八幡の前田

道程

川越 正

の電停で待っています」。それから教会に行くようになりました。私が彼女を見て、気になっていたのは、会社に入社するため、大分の田舎から、都会に出て、又親の元をはなれ、気持ちが暗くなっている時でした。だからでしょうか、彼女に最初出会った時、「暗やみの中に歩んでいた民は大いなる光を見た」とイザヤ書にありますが、まさにそのとおりでした。その光の元が、イエス様であるのを、知りましたのは、教会に行くようになってからです。彼女は、イエス様によって、輝いていたのでした。

私は生涯において、大きなプレゼントを二つもいただきました。一つは、イエス様です。イエス様を知らないままだったらと思えます時、選んで下さった事を本当に感謝しております。二つ目は、生涯の友とめぐりあえたことです。長い間いろいろな事がありました。そんな時、常に共に居てはげまし、なぐさめて下さったのはその友でした。また人ではとどかない所まで、とどいて下さったのはイエス様です。幸いな生涯に導いて下さいましたことを感謝します。

いきなり強く押され、体は水の中へ、まだ水の冷たさの残るときであり、先生の気迫のこもった力で押えられ、一瞬不安を感じました。そしてその瞬間が私の新しい人生のスタートでした。

およそ宗教というものは、無縁な生き方をしなくて、入社して四年程、大阪市中西の丸山叔父夫婦の家に、下宿をさせてもらっていました。

その丸山の家では、月に一回、家庭集会が開かれ、榎本先生が当時まだ新幹線のない時で夜行で往復されておられました。私は集会が苦手なため、夕方の集会の頃帰っていても、外へ出かけたり、仕出しの弁当や寿司などを買って来て自分の部屋で食べたものです。そのくせ、叔父夫婦に対し、当時ベトナム戦争が社会的にクローズアップされている時期であり「キリスト教文明の国アメリカが、アジアに攻め込んで、

クリスチャンの兵隊が農民を殺しているが、キリスト教の教えとその行為と、どう結びつくのか」などと質問し、困らせました。

結局、社会に対して斜めに構えていたし、距離をおいて世の中を見、対応していた訳です。モラトリアムの気分を引きずっていました。

人生、まして実業の社会で生きるものにとって、いつまでも態度留保、猶予が許されるはずがなく。「あなたの若い日にあなたの造り主を覚えよ」徐々に私も、夜の家庭集会へ参加するようになりました。

家庭集会というものはいいなあと思いますし、先生の肉声を間近で聞き、讚美歌も、オルガンの伴奏がないだけに、歌にも力が入ります。密度が高く感じられ、恵みも深く広く与えられました。

キリスト教の福音の原点は、こういう家庭集会から広がっていったでしょう。その集会で最も感銘を受けたのは、榎本先生の伝道に打ちこまれる姿勢です。

大阪集会でも、その参加する人の数の少ないときも有る訳ですが、「たとえ一人といえど我行かん！」という気迫。そのおう盛なる意欲。そして夜行列車で北九州、大阪をトンボ

帰りされた体力。それらにも増して、主に全てをゆだねて全ぶくの信頼をおいてご用にあたっておられるお姿。そういう先生を通して、信仰を考え聖書に親しんできました。

初めに書いた洗礼は、母と同時に受けさせてもらうことができました。信仰へのスタートの違う、又、住む場所も生活も違う親と子が、同時に洗礼を受けたことに神のお導きを感じ謝するものです。

私は、信仰（キリスト教）に現世利益を期待はしていません。伊東先生のお話しても、「信仰を持っているから幸せばかり続くことは有りません。むしろつらいことも多いのです。ですがやはり感謝して祈りなさい」と。

生きてゆく上での証として、支え、バックボーンとして高めそれに堅く立ってゆきたく願っております。

ところでその後、前田教会で志を同じくする信者の娘さんと結ばれ、二人の子供に恵まれ現在に至っています。しかし、これらは家庭生活のスタートであり、今からが私の（夫婦の）人生の本番です。小一になった直樹の、未知のものへの貪欲なまでの興味を驚くと共に、その面でもまだまだ自分も信仰への意欲が足りない。渴きがないことを感じています。

雷の鳴る日、自転車で帰る私を案じて「神様、お父さんが

帰ってきますが、どうぞ雷にうたれないようお守り下さい。
「アーメン」と祈ってくれる息子を見、手応えを感じつつ、こ
れからの人生に幸あれと祈ります。

感 謝

河 本 米 子

「主の恵みふかきことを味わい知れ、主に寄り頼む人は、
さいわいである」(詩三四・八)

神様の奇しき御愛の摂理のうちに、宗像市福岡にて約一年
間の求道生活をおくらせていただいたのち、昭和三五年のク
リスマスに津屋崎教会で森分牧師より受洗しました。

翌年四月に八幡前田教会で榎本先生に司式していただきま
して結婚、河本に嫁いで参りました。

爾来二〇数年、前田教会の皆様の篤きお祈りのうちにおい
ていただきました。神様は今日までこの小さき者を、どんな
中にあっても顧みて下さって、はかり知ることの出来ない大
きな御愛のみ手をもって守り、支え、お導き下さいました。
まことに感謝でございます。

それまでの私は、家に神棚をかざり仏壇に手を合わせ、お



正月は神社に、お盆はお寺にと、何の疑いももたず違和感もなく、両親にうちは真宗だと言いきかされて育ちました。

キリストは、わたしには関係のない外国の神で、ギリシャ神話の神々もその仲間だろうし、世界には色々な国があるように神の種類も沢山あるのだと思っております。

しかしクリスチャンと言われる人々には、同じ人間でありながらどこか違うところがあるな、と穏やかな言動物腰に憧憬の気持を抱いてはおりました。戦後、日本の政治経済道徳的混乱期に女学生時代を過ごしたのですが、願っていた進学の途を断たれて世の中や周囲の人々に失望し、一時期は真剣に修道院入りを考えたこともありました。

物が豊かになった今とは違って本の数も少なく、本屋でようやく探し出した粗末な紙の新約聖書を一生懸命に読んでみただけのもの、書かれた内容がさっぱりわかりません。空しく日々の生活に追われているうちに、いつともなく聖書のことばは忘れてしまいました。

その後何年も経ってからですけれど、キリスト教の家庭集會に導かれる機会が与えられまして、お説教のあと個人伝道していただきました。

「万物の創造主でいらっしやるイエス・キリストの父なる

神様と、日本で古来言い伝えられている八百萬やっぴやうの神々との區別がわかりますか」と尋ねられましても、まことの神様を知らない私には返事をする事ができませんでした。

このようにかつての私は、神なく救いなく希望のない者とエペソ書二章に述べられている通りの人間でございました。

「しかるに、あわれみに富む神は」とございます。

「あなたがたの救われたのは、実に、恵みにより、信仰によるのである。それは、あなたがた自身から出たものではなく神の賜物である」と。無きに等しき者に、唯々一方的に為して下さる神様の御愛を感謝し聖名をあがめ称えます。

今に至るこそ 主の恵みなれ

守りの御手をば など疑うべき

如何なる折にも あいなる神は

全てのことをば 善きに為し給う

靈感賦二六番



思 い 出

熊 畑 恒 男

昭和三年一〇月、一度教会へ行って、見覚えのある榎本牧師と、電車の中でバッテリー会い、「だいぶ長い間来てないけど、今度の日曜日に来る様に」と言われましたが、「神様が居るなら、今此処へ出してあげよう！そのかわり、三ヶ月間いましたら、「では出してあげよう！そのかわり、三ヶ月間一生懸命、教会にいらっしやい」と言われ、仲町電停（今の尾倉町電停）で降りて、帆柱街道の急坂道を登って帆柱寮の六人部屋に疲れた身体を横たえました。

その後は毎日曜、水曜、雨が降るうが、風が吹こうが休まずに礼拝に：祈禱会に出て、少しづつではあるが、神と主イエス様の御恵みがわかって来ました。

又奥様が作って下さったラーメンが大好きでした。戦後食糧難で最も苦しかったのは、昭和二年——二五年で、帆柱寮の食事も昼食・夕食ともサツマ芋ということが多くあり、

栄養失調で身体がだるく、製鉄の重労働にやっと耐えられる体力だったので、あのラーメンは最高の珍味でした。

昭和三年一月二八日は、成人に成った日ですが、昔なれらもつと早く元服、今では成人式で身近な人々から祝福されますが、当時は何も無し。当日の日記には「我が成人の日、自身で祝福す。以後は大人として行動するのだ。幼稚な殻を一切捨て、今までの生活と決別し、熟慮深謀の人と成らん。そのためには、信仰、博愛、至誠、であれ！」と書いていますが、全く青二才の感じ。第二高炉で起重機運転をしていました。当時島根君、山下君、松本君達を一、二度教会へ連れて行ったことがあるようです。高い理想を立てながら、実生活はルーズで貯金もたまらず、宝くじの夢を買い、女性の愛にあこがれていました。

この一二月初めてクリスマスに招待され、カレーライスを初めていただきました。二四年、「正月や何処を吹く風のひとり者」と一人で正月も寮で寂しがつて居ました。三月に「イエス心に宿りて、われを宮と成し給え……」四月「女おば深く正しく見ることを教え給えり神の子イエス」となり、幼児から母の愛情に飢えていた心（五才頃母離婚）が信仰にすがってゆきました。

「いつくしみ深き、友なるイエスは、罪咎^{とが}憂いを取り去り給う。……この歌によつて、私も洗礼を受けよう……という心境になつたわけです。

当時私あてに某君から手紙を受け取りました。内容は「君の性格の反面、つまり裏をのぞけば、小心で神経質で常にものかにおびやかされているような、危ない精神の持主だ。君のこう慢は実にその危い精神に根ざしているのだ。そして君は、君の心の中の矛盾を悩んだあげく、キリストに助けを求めたのだ。ところが君の心を支配する孤独の淵は益々深まるばかり。君の顔から孤独とこう慢の陰、色が消えることを期待する」。何と小憎らしい奴と思ひながら、信仰のない人から見れば、そう思われているのかな、と思つていました。

そこで子供会が始まつたのです。初め一〇人位だったのが百人になり、大変忙しく、市の児童課や小学校の先生から、校外指導員にさせられ、やり甲斐のあることとして始めました。児童課には紙芝居、指人形、その他外で遊ぶものもあり、大変重宝しました。子供会で、海に汽車で行つたり、帆柱登山をしたり、鳥取県水雪見舞募金活動で何班かに別れて、募金し、教会から送ってもらいました。純真な子供達は私達を見てそのまま見たまま発言し、本当に我身を鏡に映したよう

にはね返つて来ます。

この事も、一年経たないうちに、東京行になつてしまいました。先生の御忠告も無視して……。然し私も自信を無くして逃避行のようでした。

今二三年——二五年の日記を前にしてなつかしく、そして主によつて道を踏み外すことなく、歩かせていただいたことを心から感謝いたして居ります。

光の子供会

会長 熊畑恒男 副会長 近藤武夫

助教師 広瀬操 友松博 川崎静代

白百合子供会

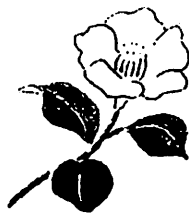
三九名 (小一年・下松トモ子の名がある)

光第一子供会

三一名 (山田伊智子?才・山田新小

一年・兎洞光子中一・等がある)

光第二子供会 二四名



前田教会に導かれて

小 松 南 子

「わたしは神の家にある緑のオリブの木のようにだ。

わたしは世々かぎりなく神のいつくしみを頼む。

あなたがこの事をなされたので、

わたしはとこしえに、あなたに感謝し、

聖徒の前であなたのみ名をふれ示そう」

(詩篇五二・八一―九)

人は、人との出会い又一つの出来事によって、人生が変わると申しますが、私も前田教会に導かれ、榎本先生にお会いした事で、人生が大きく変えられた事を思います。それは、すべて主の御計画であり、主のあわれみであり、一方的な選びである事を覚え、ただ感謝にたえません。

私は両親が老いてからの子供であり、父親が病身だったことから、ただ愛され、六才の時父を亡くし、周囲からただ哀れな子として育ったせいも、弱虫で泣きべそで、依頼心の強

い少女でした。自分の愚かさ弱さを、何時も嘆きながら悔いながらも、悲劇の主人公になりきっておりました。

一八才の頃でしょうか。肺結核で、八幡市立病院に入院いたしました。多くの素晴らしい友を得、楽しい闘病生活をつづけ六ヶ月で退院する事が出来ました。その時の一人の方と愛し合う様になりましたが、しかし友を通して、身体が弱い嫁ではと、親の反対を受け、はじめて現実にぶつかり、失望のどん底でした。

その時期、藤本(旧姓本庄)様に誘われて前田教会へ導かれ、主の御愛を知る事が出来ました。十字架の救い、神様の深い御愛を単純に信じ、自分が今まで探し求めていたものに、はじめて出会えた喜びでした。

威厳のある近づきがたい牧師先生でしたが、礼拝の後、見送って下さる先生は、お優しく又教会へ行きたいと弾む心で帰っておりました。しかし単純に信じただけに根が浅く、だんだん教会から足が遠のき、恵みによって、良き夫が与えられましたのに、その事を心に留めずして、結婚によって教会を離れてしまいました。

しかし主のあわれみと、兄弟姉妹の祈りによって、また教会へ帰らせていただきました。(教会を離れての生活がどん

荒野の頃

なに空しく、力のない事かを経験させていただきました。それから、主を求めて集会に近づけていただき、主によって養われると共に、現実の生活の中で主の恵みを知り、祈りと喜びと感謝の日々を過ごさせていただいております。

主に生かされて五三年。しかし、私の人生は、三二年に洗礼を受けさせていただいた時には始まり、「私の愛のうちにいなさい」とおっしゃる主に寄りすがり、又兄弟姉妹の祈りに支えられて、幸福な人生を過ごす事が出来たと思います。

信仰の歩みは、いまだによりよき歩みですが、主の御愛の高さ、深さ広さを味わわせていただき、「恵まれた女よおめでとう。主があなたと共におられます」ほんとうに恵まれた女として、幸せをかみしめております。まだまだ未熟な酔っぱい実ですが、主が熟して下さる事を信じて祈って行きたいと思えます。

「主よ、わたしは心をつくしてあなたに感謝し、
もろもろの神の前であなたをほめ歌います。

わたしはあなたの聖なる宮にむかって伏し拝み、

あなたのいつくしみと、まこととのゆえに、

み名に感謝します」(詩篇 一一八・一一二)

首 藤 正

わたくしが、前田教会の扉を叩いた直接の動機は、生来の性格についての悩みであった。わたくしを最も悩ましたもの——それは、人にたいする異常なまでの恐怖心であった。後年、その心的状態をさして「対人恐怖症」ということを知った。

街を歩いていて、むこうから顔見知りか、こちら向きに来るのを認めると、できるかぎり、横道に外れて、顔を見合わさないようにした。同じ方向を知り人が、先に歩いているのを見つけると、絶対に追いつかないように、歩調をゆるめた。顔を合わすと、何といったらよいか、見当がつかず、言葉そのものが、浮かんでこなかったから、人と接することを、極度に恐れた。この傾向は、自覚に比例して、益々高じた。心理的には、自縄自縛であった。

普通に会話している人々をみると羨ましくてならなかった

た。人と話せない自分自身の影におびえ、わたしは、人から逃げた。

このままだと進学しても無駄だと考え、折りから募集のあったいまの会社へ、ほかにいくあてもないまま、はいった。一年も経たないうち重度の神経症となった。「生長の家」「断食療法」「精神強化修養所」と経めぐったが、なんの甲斐もないばかりか、徒勞と失望と自己不信とそれから現実逃避心とが、とめどなく深まっていった。

丁度その頃、昭和二〇年代の終り頃だったと推定されるが、戦後建てられたときそのままの教会の玄関口に掲げられた

「日本基督教団、八幡前田教会」

の看板が、偶然、電車道から目にとまった。

わたしの側からいうと全くの偶然としか、いいようがない。なぜというに、そのときのわたしは、とりたててキリスト教の教会を探していたわけではなかったからである。

なぜ、人を恐れてばかりいるわたしは、教会へはいいいく気になったのか。いや、はいつていったのか、今もってわからない。

わたしが、はいつていったとき、どんな集会があつていたか、全く記憶がない。

ただ、やけに上から下まで同じ巾に見える竹のような榎本先生の若かりし日のお姿と、日やけたようなお顔、手狭に見える説教壇、あふり止めで掛けたり外したりする狭巾の棚が背もたれの裏にとりつけられた木製ベンチ、寸詰りの窓ガラス、玄関前の何段かの階段、などが妙に鮮明に記憶に残っている。

「溺れる者は、わらをもつかむ」

のたとえのとおり、悩みにいても立ってもいられず焦燥感に駆られて、当時週日の朝に行われていた「早天祈禱会」へも通った。席に座って待つっていると、下の牧師館から階段を上ってきて、講壇横のドアを、カチッとあけて、はいつてこられ、向かい合わせの席につかれた先生は、かならず、目をなんかいか、しばしばと、しばたかれた。

見ていて、ああして、きつと眠気を追い払われているんだろうとおもった。

そうこうしているうちに、われにもあらず、牧師館へ、階段伝いに、おりていくようになった。余程、先生ご夫妻が、わたしに恐怖心を忘れさせられたにちがいない。

こころよく歓迎されるので、つい遠慮も恐怖も、感じなくなつてしまつて、それも、茶の間に相当する食卓の部屋へ、

度々、お邪魔した。

当時、先生は、四〇才前半であったことになる。

その頃、教会専用のトイレはなくて、どうしてもという信者は、牧師館のを使わせていただいていた。

あるとき、おたずねすることがあって、牧師館の玄関の方へまわると、鉢巻きに長靴というスタイルで、肥おけをかついで、小走りにゆかれる先生の、おもいがけないお姿を目撃して、ショックをうけた。

牧師先生が、こんなことまでなさるとは、と、立ちつくしてしまった。

信者と家族と共用なので、すぐ満杯となるので、こうしているんだけど、これもまた、主のご用だとおもって、させていただいているとのご述懐を後日伺った。

日本の経済もしだいに復興の軌道に乗り、家庭用電気器具製品が生まれ出した初期の頃、攪拌式の、のんびりと右にまわったり、左にまわったりする電気洗濯機をいちはやく、導入された先生が、ゴロゴロ音立てて稼働している洗濯機の傍らで

「これは平田商店から、月賦で買ったんですよ」

といかにも嬉しそうにおっしゃったお声が、忘れられない。

平田商店とは、製鉄西門電停近くの電気製品販売店で、その美人の奥さんが、その頃、教会へきていた。

先生の奥様は、あまり健康でなく、両頬は結婚当初の豊頬とはうってかわって、どちらかというところ、内側にそっておられた

当時三才くらいの末っ子の誠ちゃんをお産みになってから、言うところの「赤ん坊に歯をとられてしまった」状態であった。

洗濯板から解放してあげようという先生の優しいお心根の表われが、電気洗濯機の早々の導入であったときく。

当時は、戦後の食糧入手困難時代の名残りが、まだつよく尾をひいていた。

茶の間で、手打ちうどんをご馳走になったことがある。ああおいしいとよろこんでいただいたのだが、若気の至りで、そのかけには、惜しみなく与えることを、よろこんでなさっておられた先生ご夫妻の尊いあり方があったなどは、その頃のわたしにはとんとわからなかった。

「まこ、お祈りは」

といわれると、

「ニヨゴ ニヨゴ ニヨゴ」

と早口で、言葉にならない言葉で、食前の祈りを祈っていた誠ちゃんが、今は、神奈川大学で教鞭をとっておられるとは、歲月匆々とはいえ、うたた今昔の感に堪えない。

ことしの春、出張で滞在した千葉県の君津で、現地の者に、いくらわたしが八幡では、無口この上ない者であったといっても、信じてもらえなかった。

さいごにひとつ

三〇年前位だったとおもいますが、英彦山修養会でのことだった。民家を山の家に仕立てた木造家屋の大広間で一杯にフットンを敷き並べて宿泊した翌朝、起きると先生から、

「ゆうべはたいへんだった。いきなり首藤さんの足が、どすーんとほくの腹の上ののったよ」

と寝相のわるいのを指摘されて、いくら睡眠中のこととはいえ恐縮してしまった。しかし世界広しといえど、榎本先生のおなかの上に足をのつけたことのある者は、わたし以外にあるまいといまでも確信している。

前田教会に導かれて

正 野 真 宏

私が八幡前田教会へ初めて行ったのは、昭和三四年九月六日である。もう三〇年にもなるのかと感無量である。

それまでの私達一家は宗像郡東郷町（現宗像市）で食料品店を経営し、日本キリスト教団東郷教会に出席していたのだが、黒崎の地にうどん屋を開業する道が開かれたため、食料品店をたたんで、その年の七月に引越してきた。父が五二才、私が二一才の時である。

そもそも私達がキリスト教に接したのは、昭和二五年にある事情で大分県東国東郡榑来村から東郷町に引越してきた時、たまたま、家の前の薬局の主人が熱心なクリスチャンで、母がこの方に導かれ教会に行くようになったことに始まる。

当時は、津屋崎教会しかなく、ピート先生という婦人宣教師がジープに乗って、東郷で日曜学校を開いていた。私は同級生であった薬局の長男と一緒にその日曜学校に出、また、

クリスマスの時などは母と共に津屋崎教会にも行っていた。

昭和三〇年頃、津屋崎教会から独立して東郷教会が設立されたので、そこへ行くようになった。

私は、昭和三二年に当時の八幡市役所に就職した。教会へは時々休むことはあっても、比較的まじめに出席していた。しかし、その信仰は、神の存在は信じ得ても、十字架による罪の贖いのはつきりせず、私にはわからないだと半ばあきらめていた状態であった。

そういう時に、黒崎に移っていった。

母はすぐに前田教会の礼拝に行くようになった。東郷にいた頃、榎本先生の説教筆記（多分伊規須兄が筆記されたものと思う）が手に入り、それを読んだ母は心を動かされ、一度行ってみたいと行動派の母は、商売（電球の卸し業）で黒崎に行ったついでに、榎本先生に会いに伺ったことがあったらしい。以来、母はこの教会の礼拝に出てみたいと思っていたにちがいない。それが東郷での商売が行きづまり、黒崎に道が開けて、前田教会に行けるようになったのである。神の不思議な導きを感じざるを得ない。

母は八幡生れで、榎本先生が五〇年前八幡に来られた時は、どこかですれ違ったのではないかと思われるほど近くに住ん

でいた。それから大分県へ疎開し、神とは縁のない生活を送っていたが、天地の造られる前から母を選び給うた主は、東郷の地で神を知らしめ、この前田に導いて真の信仰を得させ、安息を与え下さった。それは、イスラエルの民が神なきエジプトの地から導き出され、試練の荒野を通過して、遂にはカナンの地の安息に入ったことを思い起させる。

私はといえば、すぐには前田教会には行かなかった。どこかの教会も同じと考えていた。しかし、母が家拝の時にいろいろ話してくれるので、私も行ってみることにした。あたかもザーカイが、主イエスを見ようとイチヂク桑に登ったように、その日の印象を、日記に短く次のように記している。

「初めて前田教会へいった。

小さな、みすばらしいくらいの教会であるが、親しめる。非常に燃えている。そしてしっかりしている。

それは祈りがあるからだと私にもわかる。

榎本先生は手には何も持たず、多くの証をもって

切々と説く。今までにない感銘を受けた」

私には、神がここに生きて働いておられるように感じた。それから、私の前田教会通いが始まったのである。それまで、神の愛について遠いことのように考えていたが、そうではな

い、神は今、この私を愛して下さい下さっているのだということがわかって、目のさめる思いであった。

そして、昭和三十六年四月三日、紫川上流でバプテスマを受けさせていただいた。感謝である。



私が神の愛を知った日

大濠公園教会 正野悠子

「主は私達のために、生命を捨てて下さった。それによって私達は愛ということを知った。私達もまた、兄弟のために生命を捨てるべきである」(一・ヨハネ二・一六)

この聖言が大きく響きわたりますと、それまで真暗だった私の心に明るい光がさしこんだ思いがいたしました。

昭和三十六年五月第一日曜日の正午ごろの出来事です。私をはじめ前田教会の礼拝に出席させていただいた時のことです。その前日まで、自殺を考え睡眠薬を求めて、近くの薬局の前に立った私でした。同日受け取った、小学校の恩師からの一通のハガキで「教会へ行つて下さい」の一言と、その横に小さく書き連ねられた八幡市内の全キリスト教会名とその住所の中から、浮き出るように私の目に飛び込んできた「八幡前田教会」の文字に引き付けられるように、出向いてゆきました。

礼拝も終わり近くで、三〇分もなかったように記憶しております。生れてはじめて、魂に聖言をいただいたその瞬間「生きよう！生きてゆこう！」と心の中に叫びました。

その三年前に母を亡くし、アル中の父に、おびえる生活に疲れ果て、高校卒業と同時に、八幡の中央町にある八幡市役所（現在八幡東区役所）に就職・黒崎田町から、毎日市内電車で通勤しておりました。しかし、人間恐怖症的ノイローゼにかかり、人の顔を見ることがこわくていつも、下向きの姿勢でしたから、満員電車の往復時、いつ前田教会を見ていたのか、その屋根に立つ十字架を見ていたのか、自分でも不思議でなりません。

ハガキに、ぎっしりつまった行間から、迷いもなく、「八幡前田教会」という名をまるでだれかに紹介されて、さがし出すかのように見つけ出し、「前田教会というところに、一度だけ行ってみよう」と考え、次の日（丁度日曜日）時間もわからず遅く起き、一一時過ぎに教会に入らしていただいたように思います。全く神のお力によるものでした。

玄関を入れて正面に小さなガラス戸があり、その下に横長く下駄箱がありました。左手に四段ばかりの階段があつて昇ったところに受付けの机がありました。会堂は、頭にえが

いていたイメージとは違っていました。その中には、世になり静寂がみなぎっていました。六、七脚づつ三列にベンチが並んでいました。その真中の最後部、左端に座らせていただきました。座ったその瞬間、先に書きましたように一・ヨハネ三・一六のみ言葉が与えられたのでした。心はおどるようになって、人に会うのが苦手な私は礼拝終了と同時に逃げないようにして、失礼しました。でも、次の日曜日を首長くして待ちました。

イエス様が、こんな卑しい者の為にその尊いお命を捨ててまで愛して下さった。その一事のみが、私の生きる原動力であり、イエス様にお従いさせていただくことが生きる喜びとなりました。

私の青春時代は、前田教会に始まり、終わりました。前田教会という温室の中で、温かく、平安の中に豊かな信仰のおやしないをいただいた幸せ者でございます。

歳月のみ多く重ねた実り少ない信者ですが、その年月の中の数年間、この前田教会に住まわせていただき、幸いな学びの時をすごさせていただきましたことは、なんとという分不相応な恵みかと、今更ながら、おそれおののく思いでございます。

このようにまで愛して下さる神様に深く感謝いたします。

私のふる里、前田教会

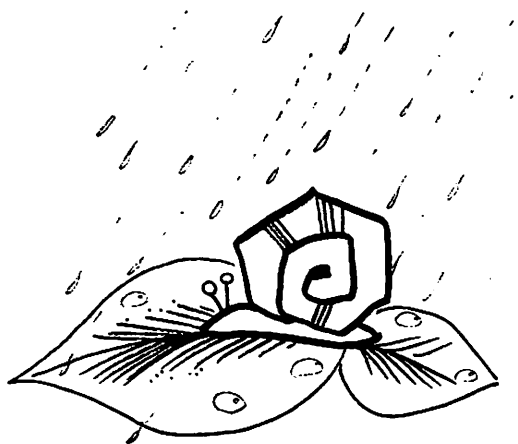
白 神 薫

姫路の末永先生のおすすめで、初めて前田教会に出席させていただいたのは、昭和二三年頃だったでしょうか。

戸畑から電車を乗り継いで西前田電停で降り、少し歩くと車線沿いのやや奥まったところに、教会の三角屋根の玄関があり、石段を二、三段上りドアを引くと、下駄箱にあふれる程の履物が並んでいました。

礼拝に少し遅れて入った私を説教中の先生が講壇の上からニコニコして迎えて下さいました。右端が男性の席、左が女性中央列が同伴者の席であったように見えました。モーニング姿の先生は、右左に向きをかえたり身ぶり手ぶりで、始終笑顔で話され、そのお話につられて、笑ったりしました。他所の集会で味わえないような明るく親しい感じがしました。

幼い長男をつれての出席は、時たまにしか出来ませんでした。だが、礼拝後階下の畳敷きの先生宅で過ごさせていただく時

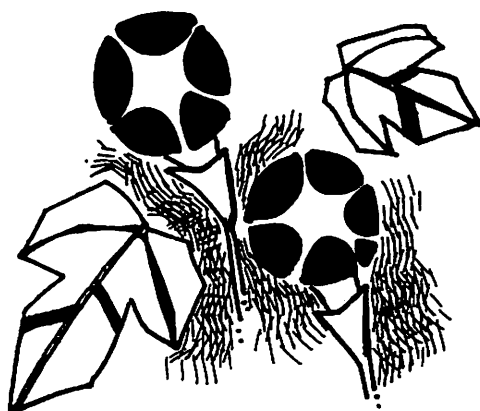


がよくありました。二、三人の方々と話したり、先生奥様のおもてなしにあずかりお話を伺ったりして、何時までも居すわりたい思いでした。或時、信者の婦人が相談事で来られ暫く先生と話をされてから、帰られる時明るい顔付になられ「元氣になりました」と言われているのを不思議に思いまして先生に尋ねましたら「神様に全部おまかせなされたのですよ。クリスマスとはそういうものです」と言われました。私はおまかせするとはどういう事だろうか。そんなに簡単に他人まかせによく出来るものだと思います。でもそんな事が本当に出来るなら私も教えていただきたいと思いました。

その後、長い間重症の肺結核で闘病生活を余儀なくさせられました。神様のお守りに支えられていやされ、看病してもらっていた身が、他人を看とる側にとさせて下さいました。苦しみの中を通過して来ましたが、神のなさる事はおりにかないて美しいと感謝しております。

九州の方面に出てきます時は、いつもお邪魔させていただいていますが、先生のお話の声や調子も昔のまま、やっぱりここが私の故郷だなあどこか他所とは違うと思わされております。言いつくす事の出来ない程一杯、思い出のつまっている教会、先生御一家、いつまでもお元気で新しい節目を

つ上へとのびてゆかれるようにお祈りいたします。



私の天路歷程（一）

高 木 敏 夫

「信仰の戦いをりっぱに戦いぬいて、永遠のいのちを獲得しなさい」（一・テモテ六・一二）

はじめに

六月おわりの礼拝後、榎本先生より「八幡前田教会は、平成元年一月三日をもって、創立五〇周年を迎えることになりました。この記念行事のひとつとして、五〇年誌「燃ゆる柴」を編集、発行することになりましたので、皆さんのご投稿をお願いします」とのご報告がなされました。

私はこのため、神様の前に静まり、何を書くべきかを祈り求めました。そして示されたことは、私が前田教会にどのようにして導かれ、榎本先生の伝えるイエス・キリストの福音に接し、いかに変えられたかを、お証することであるということでした。

私の入信前の歩みと、入信後の信仰生活は、一直線に今日に至ったのでは決してありませんでした。むしろその反対で、煩悶あり、失望落胆あり、挫折あり、霊と肉との戦いあり、罪の苦悶ありの様々な浮沈を経験しました。私はこれらのことを、神様と読者の前に正直に告白し、どん底の中から、神様が私を、不動の信仰、永遠の命の最高の生涯へと導かれましたことを書き残したいと思い、ペンをとった次第です。

第一章 神の選びと召し

昭和二三年八月一五日、私は満三年にわたるソ連での抑留生活から解放され、夢に見た祖国舞鶴の土を踏みました。二日後、故郷の福岡県浮羽町の実家に復員しました。早速私を待っていたものは、今後の身のふりかたでした。私は軍隊に入る前、神戸の山下汽船会社の船員でしたので、籍はそのまま残っていました。

一〇月のある日、会社の門司支店に行き、復帰の手続きをとりました。その夜は、旧八幡市の都町に住んでいるいとこの家に泊まりました。その夜、叔母といとこが私に、「敏夫、今から外国航路の船になんか乗ったらろくなことはない、それより製鉄所（現新日鉄八幡）に入ったらどうか」とすすめ

てくれました。

私はその夜、床の中で将来について考えました。私はソ連での抑留生活中、「日本は戦争に負けてしまったんだ。もし復員したら元の船乗りになり、密輸をやって大儲けをしよう。そして太く短く世を渡ろう」と考えていたのです。

私は一晩考えた末、二人の説得に応じ製鉄所の試験を受けました。そして一〇月二〇日付きで採用になりました。配属先は、いとこと一緒に、条鋼部・第二圧延課・二、三大形掛りの現場でした。そして会社の枝光寮に住むことになりました。

さて、それまでの私はた然な性格と生活の者でした。特に船乗り時代は、飲み、打つ、買うの三拍子がそろって、恐い者なしの無法者でした。「おのれの恥を替とする」とありますが、私がそうで具体的に罪を犯しながら、悔いるところか得々としていました。また「彼らには苦しみがなく、その身は健やかでつやがあり、ほかの人々のように悩むことがなく、ほかの人々のように打たれることはない」（詩篇七三・四一五）とあるように、自分のことや、人間関係で悩むことはありませんでした。仕事のほうは誰れにはばかることなく、バリバリとやってのけ、ある面においては実に痛快で

した。

こういう私でしたが、八幡製鉄に就職して考えました。「俺も今は、鉄鋼製品を造るお堅い会社に入ったんだ。だから以前のようなでたらめはいけない。それにもう身を固める年頃だから、この際心機一転して真面目な人間になろう」と。真面目人間になろうと努力するとき、そこに当然自分を反省するということが生じてきます。自分で自分を見つめていくと、弱いこと、愚かなこと、無能なことなどが次々と現れてきます。また、他人と自分を比較してみると、私には他人にまさるものは何ひとつありません。私は段々と劣等感をもつようになりました。仕事の方も人ばかり気兼ねして出来なくなりました。やがて人間関係もうまくゆかなくなり、意識して人から遠ざかるようになりました。

「これではいけない、このままゆけば自分は駄目になってしまう」とあせりを感じ、この中からどうにかして脱出したいと、修養書や、人生の書、仏教書など乱読しました。しかし、これらの本はみな善いこと、立派なことが書いてありますが、実行する能力を私に供してはくれません。ある冬の日、冷水を全身にかぶって心身の鍛練につとめたこともありましたが、しかし何の効果もなく、かえって反対の結果のみが

現れてくるのです。人生の華といわれる青春の真ただ中にいながら、このようなみじめな毎日、実につらいものです。

二五年一月のある日、私と一緒に仕事をしていた人が、製品の下敷きになり、右下腿部切断という災害に会い、一年余り入院しました。私は彼を製鉄病院に時々見舞いに行きました。

二六年二月のある日、病院の長い廊下を歩いていると、壁に大きな貼り紙があるのに気付きました。私は思わず立ち止まって見ると、「キリスト教大講演会」と大書してあり、続いて「世紀の大伝道者賀川豊彦先生来る」とありました。さらに少し小さく場所、期日等が書かれていました。私は心の中で「キリスト教、キリスト教」と反復しました。キリスト教なるものがその時、私の心にクローズ・アップされたのでした。

私は少年時代、仏教の日曜学校に八年間かよったことがあります。私の母は、真宗の熱心な信者でしたので、母に連れられて坊さんの説教を聞きに行ったことも度々ありました。しかしキリスト教とは、それまで縁もゆかりもありませんでした。私は当時、自分でどうにもならず絶望状態の中にありましたので、即座に「よし、この講演会に行ってみよう」と

決心しました。

講演会は二月下旬、八幡警察署講堂で行われました。私が入場した時はもう満席で、仕方なく後部の壁にもたれながら賀川先生のお話に耳を傾けました。

私は当時ノイローゼ気味で、五分間も精神を集中できない状態の中にありましたが、不思議にも先生の講演を一時半分に亘り、熱心にきき耳をたてていたのです。講演が終つて帰るとき、隣に居た人のオーバーに白い壁土がついているのを見て、手で払ってあげたのです。当時の私としては見ず知らずの人にこのようなことは絶対に出来なかつたのです。これはご聖霊の働きとしか思えません。

帰りに受付けで、八幡にある教会の所在地、集案内など書いたピラをもらい、住んでいる所に近い日本基督教団のE教会に印をつけて提出しました。

この賀川先生の八幡伝道が縁となつて、私は、二月の終りからE教会で求道することになりました。教会側は、私たち求道者を暖かく迎えてくれました。

私は、勤務の都合をみて、礼拝、伝道会、祈禱会に出席しました。何とかして自分の悩みを解決していただきたいと願つたからです。ところがこの教会は私の切実な願いにこた

えてくれませんでした。当時の私は教理について何も知りませんので、教会とはこんなものかと思いつつ、皆さんの親切にほだされて求道をつづけました。

二六年五月、私が住んでいた枝光寮が廃止されることになり、寮生は希望する他の寮に移ることになりました。私は同室の先輩のすすめに従い、彼と共に黒崎の東浜寮に移りました。

ある日、出勤途上の電車の中からふと外を見ると、緑色に塗った教会堂がポツンと建っているのが目に入りました。私は、「ああここにも教会があるな、今度の日曜はこの教会に行ってみよう」と心に決めました。

当時前田地区は、二〇年八月の米軍の空襲で焼野が原となり、以来復興も進まず、電車道でありながら人家もまばらで、教会堂だけが目立つ存在だったのです。

昭和二六年五月二〇日の聖日は、私が初めて八幡前田教会の門をくぐった日でした。(註、これからのことは、教会誌「ぶどうの木」一七号に「入信当時の思い出」と題しくわしく掲載されていますので御参照下さい。)

私は前田教会の礼拝に出席し、榎本先生のご説教をたった一回聞いただけで、大きな感動と変化が起きたことを全身に

感じました。

「暗やみの中に歩んでいた民は大いなる光を見た。

暗黒の地に住んでいた人々の上に光が照った」(イザヤ

九・二)

とありますが、私の真暗な心にパッと光がさしこんだのでした。私は直感的に、「私の悩みを解決してくれる所はこの教会だ」と感じました。この日を契機に私の前田教会での求道生活が始まったのでした。

私は今でも、入信前後のことにしばしば思いを馳せ、神様の不思議な導きと摂理というものを深く感じます。そして、神様に心からの感謝を捧げるのです。

私は復員後、山下汽船に復職の手続きをとりましたが、神様は、叔母といとこに働きかけ、私の願いを変えて八幡製鉄に就職させ給いました。私があのまま船に乗っていたら、おそらくこの尊い救いにあずかる機会がなかったことでしょう。次に、製鉄所に就職後、自分の性格や能力などについて悩み、どん底まで落ちこんで「ああ、俺は人生の敗者だ」と心に悲歎の声をあげるようになったのも、神様の愛の干渉でした。人は悩みや苦しみがなければ、人にも神様にも頼りません。人は、自分でどうしても解決できない問題に直面し

て何かにすがろうとします。

神様は、どん底まで落ちた私をごらんになり「頃よし」と賀川先生をお送り下さり、私をE教会へと導びかれました。

私はE教会にそのまま残ってれば、或いは熱心な信者になっただけかも知れません。しかし、この尊い十字架の福音にはあずかることができなかったと思います。

神様は、そういう私を枝光寮廃止という問題を起こして黒崎に移し、ついに前田教会にみちびかれたのです。旧約のルツ記を見ますと、「ルツははからずもボアスの畑に足を踏み入れた」(ルツ二・三)とありますが、これも背後に神様のお導きがあったのでした。私もルツと同じく「寮に近いから、通勤途上でもあり、定期券もあるから」などの軽い理由で前田教会に足を踏み入れた者でしたが、その背後には神様のご計画、お導きがあったことを深く感じる者です。

「人は心に自分の道を考え図る。しかし、その歩みを導く者は主である」(箴言一六・九)とあるように、私が少年時代から将来について計画していたことは一つもならず、神様のご計画のみが私の上に成就されたのでした。私はこれらのこと思い起こし、「ああ深いかな、神の知恵と知識との富は、そのさばきは窮めがたく、その道は測りがたい」(ローマ一

一・三三)とありますように、神様が私を救うための限りなきご愛、遠大なご計画、絶妙のタイミングなどを思うとき、感嘆の声をあげ、感謝の涙を流すことがしばしばです。

「みまえにきよく傷のない者となるようにと、天地の造られる前から、キリストにあってわたしたちを選び、わたしたちに、イエス・キリストによって神の子たる身分を授けるようにと、御旨のよしとするところに従い、愛のうちにあらかじめ定めて下さったのである」(エペソ一・四一五)

第二章 求道——救い——新生

当時前田教会の定期集会は、聖日礼拝と、夜の伝道集会、水曜日夜の祈禱会、それに火曜日から土曜日までの早天祈禱会でした。私は、一回でも多くの集會に近づいて神様を知らせていただき、恵みにあずかり、悩みを解決していただきました。いと切に願いました。

七月のある祈禱会の日でした。その日の説教主題は、「何事も思い煩ってはならない。ただ、事々に、感謝をもって祈りと願いとをささげ、あなたがたの求めるところを神に申し上げるがよい。そうすれば、人知ではとうてい測り知ること

のできない神の平安が、あなたがたの心と思いを、キリスト・イエスにあつて守るであろう」(ピリピ四・六―七)でした。この聖言こそ、当時の私にずばりそのものでした。私が教会に近づいた目的は実に煩悶、劣等感などの解決でしたから。私は榎本先生のお顔を食い入るように見つめながら、一語も聞きもらさじと耳を傾けました。この時ご聖霊は、鮮やかに私のうちに働き、この聖言を私の魂に刻印して下さいました。私には「生涯の聖言」というものが多くありますが、これがその第一号となりました。

先生はご説教中、「あなたがたは、現在直面している切実な問題を、そのまま神様の前に持ち出して、真剣に祈り求めてごらん下さい。神様は必ず祈りにこたえて下さり、あなたがたの願いをかなえて下さいます」と言われました。

私はそれまで、声を出して神様の前に祈るということができませんでした。この時感動を与えられ、この聖言をより所に事々に祈つていこうと決心しました。

当時私が住んでいた寮のすぐ前は、城山と言ひ旧城跡でした。私は勤務(三交替)の合間をみてこの山に登り、木立ちの中に入って神様に向ひ、自分の悩みを率直に打ち明け、この中から解放して下さいよう切に祈りつづけました。

ところが不思議なことが起こりました。祈り出していくらか月をすぎた頃には、私の煩悶は日に日に薄れて、祈り出していきかなくな、祈りの力や、祈りにまされるものなし」と讚美歌にあるとおりでした。

私はそれまで、目に見えない神様について半信半疑でありました。しかし現実に祈りにこたえられたのです。私はこの体験を通して、「神様は目にこそ見えませんが確かに実在し、私の祈りに耳を傾け、聞いて下さるお方である」とはつきり信じさせていただきました。私の心の暗雲は全く晴れて、「日は輝きて空は晴れ渡り、悲しみは更になし」と歌の文句のように、喜びと感謝と希望に満たされました。以来私は今日まで、思い煩ひ、劣等感等からは免疫となりました。この体験後は、礼拝を除く各集会には、皆さんのあとにつづいて声を出してお祈りが出来るようになりました。こうして私の祈りと交わりの生活が始まったのでした。

九月は、八幡前田教会献堂満四周年になり、そのため記念聖会が開催されることになりました。期日は、九月二二日から二六日までで、講師として御殿場在住の、藤村壮七老師をお迎えすることになりました。私は城山に登り、この聖会の

ため切に祈り、待ち望みました。

藤村老師は、もう八〇歳を越えておられましたが、ご説教中のお顔は輝き、神々しいばかりでした。当時は教会にマイクがありませんでしたが、そのお声は会堂いっぱいひびき渡りました。

私はこの聖会で次の四つの聖言を魂に刻印されました。

①「我限りなき愛をもて汝を愛せり。故にわれ絶えず汝を恵むなり」(エレミヤ三二・三文語訳)

②「それ神はその独り子を賜うほどに世を愛し給えり。すべて彼を信ずる者の亡びずして永遠の生命を得んためなり」(ヨハネ三・一六文語訳)

③「御前に潔く傷なからしめん為に、世の創の前より我らをキリストの中を選び、御意のままにイエス・キリストにより愛をもて己が子となさんことを定め給えり」(エペソ一・四―五文語訳)

④「この民はわが頌美をのべしめんとして、我おのれのために造れるなり」(イザヤ四三・二二文語訳)

私は以上の四つの聖言をとおし、天地万物を創造し、今も運行、支配、統御したもう全智全能なる神様が、私のような無きにひとしい者をも、限りなき愛をもつて愛して下さって

いる事を知り信じました。また私の罪のため、御子イエス様を身代わりとして十字架につけ、その流された御血の故に、私の罪をすべて赦して下さり、ご自分の宝の民として下さった神様のご愛が私の全身全霊に満ちあふれました。更に、神様の選びは一方的で、天地創造以前からキリストにより愛をもつてお選び下さったことなどを知らせていただきました。

つづいて神様がそれ程まで私を選び愛して下さったご目的は、「神の栄光を現わす」ためであることを初めて悟らせていただきました。それまでの私は、ただ自分の問題解決のためにのみ集會に励み、祈り求めてきました。しかしご聖霊は、この聖言をとおして鮮やかに私にのぞみ、百八十度の方向変換をなして下さいました。それは、自分第一、自分中心から、神第一、神中心の生涯へと変えて下さったのでした。

私は決心しました。「今後は、私を限りなく愛して下さいた神様と、私の身代わりとなり死んで下さったイエス様のために生きよう」と。そしてその証として洗礼を受けさせていただけようと数日後、その旨を榎本先生に申し入れました。先生は快く受け入れて下さり、「他にも希望者がいるので期日を待ちなさい」と言われました。私は祈りつつ待ち望みました。

やがて洗礼の日時について報告があり、受洗者に対して、洗礼の意義、今後クリスチャンとしての生き方についての個人指導が行われました。私はこの時先生から、「まず神の国と神の義とを求めなさい」(マタイ六・三三)の聖言を与えられました。先生は、「まず神第一の生活をする事、礼拝は必ず守る事、什一献金を守る事」などの具体例をあげ、すすめて下さいました。この時、「先ず神の国と神の義とを求めよ」の聖言が六番目に与えられた生涯のものとなり、それ以来神第一の生涯をつづける原動力となりました。

一〇月二二日早朝、八人の兄弟姉妹と共に受洗の恵みにあずかりました。(註 詳しい事はぶどうの木一七号参照) 水から上った時は世界が全く変わったように感じられました。讚美歌「わが君イエスよ罪の身は」を歌いながら感激の涙が止めどなく流れました。その夜は嬉しくて嬉しくて眠れず泣き明かしました。私はこの洗礼をとおして新生の恩恵にあずかりました。「だれでもキリストにあるならば、その人は新しく造られた者である」(一・コリント五・一七)の聖言は、この時私の上に成就されたのでした。

私は救いにあずかって後、はつきり感じたことは、以前の悩み苦しみが跡かたなく消え、喜び、平安、感謝の思いに満

たされたことでした。私は以前他人の事などにかもう余裕など全くありませんでしたが、新生後は、絶えず他人の事に心が向き行動に移しました。雨降りに傘をささずに歩いている人を見ると走りより、傘をさしかけてあげたりしました。また電車の中でお年寄りの人が立っているのを見かけたら、サッと立って席をゆずりました。満員の旧国鉄列車の中で、自分の荷物や幼児を座席に一人前に置いて平気で見ている人と近より、「荷物は網棚に上げ、赤ちゃんは抱いて下さい。大勢の人が立っていますので席をゆずって下さい。」と車掌の代りをつとめました。これらの出来事は聖霊の感化によつてごく自然のうちにできるようになったのです。

私は以前、自然界を眺めても、美しいと感じたことがありませんでした。新生後は全く変わり、空を見ても、山川草木を見ても、道端に咲いている花を見ても、みな輝いて神を讚美しているような美しさを見いだしたのです。

新生後の私は、益々渴きが与えられ、一回でも多くの集会に近づき、神様を知ることにつとめました。しかし三交替勤務のため、礼拝や各集会に出席できないことも多いのです。

私は全部の集会に出席することを切に望みますし、受洗前に先生から、「礼拝には出席すること、これは信者の信仰生活

の基本です」と宣言されているのです。私はこの問題の解決のためピリピ四・六の聖言に立ち、常昼勤務になれるよう折りつづけました。約一週間後、職場の組長（現作業長で約七〇名の責任者）の所に行き、事情を話し常昼勤務にしてくれるよう申し入れました。組長はその場で「丁度交替に行きたいという者がおるので早速交替させよう」と言ってくれました。私は常昼勤務になって全部の集会に近づくことができ喜びと、私の祈りに短期間のうちに的確にこたえて下さった神様に対する感謝が二重になりました。

しかし私はこれでもまだ満足せず、更に進んで牧師館に住まわせていただき、先生から直接指導を受けたらどんなにか素晴らしいだろうと思ひ、このためにも今までの経験を生かし、信仰もって祈り求めました。ある日思い切つて先生にこの事をお願いしました。当時先生ご夫妻に四人の子供さんがあり、一番下の誠ちゃんは医者も見放した重病人だったので、こんな状況で私を受け入れる余地など全くないのですが、先生は私の渴きと熱意を見て、受け入れて下さいました。（註 牧師館での私の生活は、ぶどうの木一七号参照）これは受洗一か月後の事でした。以来四か月半の牧師館での生活は、私にとって忘れることのできない充実した毎日でした。

こうして、私のクリスチャンとしての生活が始まったのです。私は職場でクリスチャンとしての旗色を鮮明にし、聖書の教えをそのまま実践しました。

まず職場では飲むことが多いのです。新年宴会、花見、忘年会、その他事あるごとに一緒に飲み、果ては喧嘩けんかです。以前の私は男のつき合いとしてその仲間に入っていたのですが、ある日「酒を飲むことは乱行のもとである」と示され、職場の伍長（現工長、一〇人の責任者）に、「私はクリスチャンになりましたので、今後は酒を飲みません。また酒の座にも出席しません。」とはっきり断りました。彼は私に「高木君、信仰は程々にせいよ」と言いました。

私はまた職場の人々に熱心に伝道しました。「人を見て法を説け」と格言にありますので、まず対象となるべき人を見まわしました。その対象の人とは、以前の私のように行き詰まった人、遊んで借金して首が回らない人々です。当時の私の考えでは、「この人たちは、イエス様の福音を知らないから、希望も喜びもなく毎日をすごしているが、ひと度イエス様を知ったら、私が変わったように彼らも変わるにちがいない」と単純に思っていたのです。しかし仲々どうして私の注文どおりにはいきませんでした。「彼らは聞けども聞かず」とあると

おり、心はにぶれ、頑固になっています。たまに教会に来たかと思えば長つづきしません。そして私を利用しようとするのです。こんな事が重って私は思いました。「豚に真珠を与えるな」とイエス様は仰せられたが、この言葉は彼らに当てはまると。今度は対象を変え、真面目な人を選んで近づき、教会行きをすすめます。彼らはそれぞれ一国一城の主あそびです。「俺は神なんか信じない。頼りもしない」と言って応じません。たまに集会に近づくと人がありますが、彼らの目的は、あくまで自分を磨き向上させるための手段です。これは長つづきしません。いつの間にか教会から足が遠くなってしまします。

私は失望せず祈りました。今度は、事務所にいる掛長、技術員、事務員の人々にトラクトを配って歩きました。また、自分の職場ばかりでなく、他の職場にも進出して彼らに伝道しました。この職場伝道は、労多くして実りが少ないことをつくづくと経験しました。私は上司に対してもはつきりものを言うので、或る人からは煙たがられ、或る人からは憎まれました。同僚や後輩からは、敬遠されたり、利用されたりしました。人の評価は様々です。しかし当時の私は、靈に燃え、主に仕え、祈りを常にしていましたので、くじけることはあ

りませんでした。或る時他職場の上司が、「高木君の顔から御光がさしているよ」と言いました。私は主にあつて喜びあふれ、その顔も主の光を受けて輝いていたのでしょうか。その頃は、職場内外の人々から人生上の相談を持ち込まれるようになりました。

私はまた、常昼勤務の休憩所の入口正面に、イエス様がゲツセマネの園で血の汗を流して祈っている額を掲げ、あちこちの柱や壁に「神は愛なり」とか、「汝主イエスを信ぜよ」とかの聖言を貼りつけ、人々がそのわけをきくのを待つて彼らに神様とイエス様のことを伝えました。また神棚があつて、責任者が毎日さか榊をあげて拜む所に、私が休憩時間に読む聖書を置きました。彼らがいつか偶像を捨てて真の神に立ち帰ることを心ひそかに願つてのことでした。

そんな或る日のことでした。三交替A組の河野伍長（二〇名の責任者）が私の所に来て、「高木君、君に是非A組に来てもらいたい」と三交替復帰の話を持ちかけて来ました。私は即座に、「私は田村組長の許可を得て常昼勤務になったのですから交替番には行きません」とはっきり断りました。河野伍長は一旦帰りましたが数日後、今度は田村組長が来て、「高木君、河野伍長が是非君を欲しいと言つて来ている。日

曜日の勤務の日は休んでもいいからA組に行ってくれ」と言

いました。私はそのまま残りたいたいのには山々でしたが、河野伍長ほど私の事を評価してくれる人はいません。「人生意気に感ず」でA組に行くことにしました。A組は私にとって初めての職場（以前はB組）です。私はA組でも職場伝道に励みました。

さて私が常昼勤から三交替に変わることによって、牧師夫人が、時間不規則な私の勤務に合わせるのが益々無理になりますので、これを機会に先生ご夫妻にそれまでのお礼を申し上げます、もとの東浜寮に移りました。一七七年の三月の事でした。

「わがたましいよ、主をほめよ。わがうちなるすべてのものよ、その聖なるみ名をほめよ。

わがたましいよ、主をほめよ。そのすべてのめぐみを心にとめよ。主はあなたのすべての

不義をゆるし、あなたのすべての病いをいやし、あなたのいのちを墓からあがないだし、

いつくしみと、あわれみとをあなたにこうむらせ、あなたの生きながらえるかぎり、良き物をもって

あなたを飽き足らせられる。こうしてあなたは若返って、わしのように新たになる」

(詩篇一〇三・一一五)

あとがき

私はいまこの原稿を書き終え、深い感動をもって、入信からこのかたをふりかえり、あのような中からお救い下さった神様と、主イエス様に対し、万ここの感謝を捧げるものであります。

神様は、榎本先生を八幡に遣わし、五〇年の間用いられました。神様は、先生の伝道をとおして多くの魂を救いに導かれました。今後さらに、先生を強め満たし、この尊いご用のためにお用い下さるよう、お祈りするものです。

前述のように神様は、不思議な摂理をもって私を、この八幡前田教会にお導き下さいました。そして、先生が実験体得して伝える「福音」によってこの尊い救いにあずかったのです。このことは、他の何物にも比べることのできない、尊い最高のものであると、しみじみ思います。

使徒パウロは、コリントの信者に「福音によりあなたがたを生んだのは、わたしである」と言明しています。私も先生からこのように言っていただきたいと思ひ、そのように受けとめています。しかし、「福音の真理」を私の魂に啓示して

下さったのは御聖霊であります。

さて、私の原稿は今回第二章で終っておりますが、実はまだ続くのです。参考までに列記しますと。

第三章 信仰から律法へ——信仰の戦い——罪の苦悶

第四章 福音の啓示——律法から福音へ

第五章 永遠の生命の具現

第六章 発病——がんの宣告——背水の陣

第七章 神の訓練——こわれた壇を築き直す

第八章 乳と密との流るるカナンの生涯へ

第九章 残された使命とその達成について

第十章 天国の希望と歓喜

以上十章で終ります。

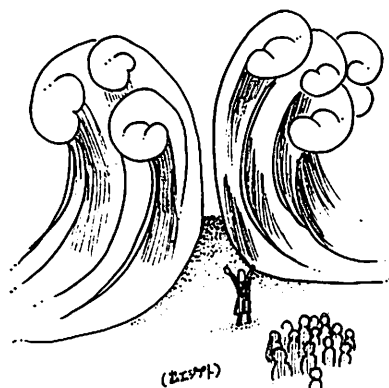
私は去年五月より「りんぱ腺がん」という病気にかかり、産業医大病院で「抗がん剤」の点滴を受けています。平成元年九月の末に二七回目の点滴を終えました。そんなわけでいっまで地上の生涯が許されるか私には分かりません。

そのため私は、残された今の時を生かし、遺稿集のつもりで「私の天路歷程」と題し、信仰の自伝を残そうと思いついたのです。

私はその中で特に、律法の下にある時のサタンとの戦い、

内面の悩み、葛藤、罪の重荷と苦悶等を赤裸々に告白したいと思えます。そしてその中から、十字架による罪の赦しの福音を啓示され、永遠の命の最高の生涯に入れていただいた喜びを書き残し、皆さんの信仰生活の一助ともなればとの願いをこめて、この長編の自伝を書くことになりました。しかし、あまり長文になると「燃ゆる柴」編集上不都合があることを思い、今回は第二章で打ち切らせていただきました。

残りの八章については、主がお許し下されば教会誌「ぶどうの木」に分割して掲載させていただきたいと願っております。このことは、私に残された使命の一つと思ひ、祈りつけている次第です。



恵みに導かれて

中 村 光 恵

前田教会に導かれましたのは、私が西南女学院に行くようになってからです。昭和一九年だったと記憶しています。

まず、先生から教えられた聖言は、「神は我らの避け所また力である。悩める時のいと近き助けである」(詩篇四六・一)これを一生懸命覚えたことを思い出します。この聖言が、さまざまな出来事に会った時に、力強い、生きた御言として私を慰め励ましてくれました。主の恵み深きことを味わい知る聖言です。

それから一年通い、二年生になった頃から戦争がひどくなりました。このため、学徒動員で導火線の会社に行くようになり、榎本先生(当時、西南で非常勤講師をされていた)も一緒に働かれたことを覚えています。そして、そこで働いている時に、八幡の大空襲がありました。私と一緒に洗礼を受けた上月ふじこさんと勤務中、空襲に遭ったんです。帰る

道々、いろんな情景を目の当りにして、戦争の悲惨さを味わいました。

戦争も終り、シオン山(西南)に帰って勉強をしていた昭和二一年か二二年に、榎本先生に声をかけられて「西南の今西先生が教会に来て讚美歌練習をするのでいらっしゃい」とお誘いを受けましたので、また前田教会に行くようになりました。

高校二年生の時、天国のお話を伺って「主イエスを信ぜよ、さらば汝も汝の家族も救われん」(使徒一六・三一)という聖言を与えられました。イエス様を信じたなら、家族みんながイエス様に導かれること、信じないならば陰府の暗い所に行くということを知った時に、幼な心に本当に恐ろしいことだと思い、私一人がクリスチャンになったならば、家族全部が天国に入ることができ、こんなすばらしいおとづれがあるだろうか、すぐに洗礼を受ける決心をしました。

カラシ種のような小さな小さな信仰ではありましたが、主が共に居給うて、今日まで豊かに恵んでいただき心から感謝いたしております。洗礼を受ける時も、主のあがないによる罪の許しということよりも、ただ天国に入りたいという一念であったと今覚えます。

後に主人が洗礼を受けました時、大きな感激をもって、世界何十億といふ中で自分のような者が選ばれたと感謝して帰ってきましたが、その姿を見て、私はそれこそ二、三〇年前のことになります。もう一度、主の選びの尊さをかみしめさせていただきました。当時は、そういう信仰もなく、愚かな者でありました。

洗礼を受けた後、そんなに悩むということもなく過ごさせていただきましたが、昭和三六年に父が友人の保証人になったことからその借財を払うことができず、家を売って家族が離散したことがあります。その時も、アブラハムが八〇才にして家を出ていった、私は二〇代でまだ若い、神様は善くして善よりほか成し給わないことを信じて、黒崎から小倉の方に移りました。

小倉の砂津の地では、父と一緒にラーメン屋を開業いたしました。初めての飲食業だったので、毎日毎日が祈りの生活でした。神様がそこにおいても恵んで下さいましたので、五年ぐらいいして借金全部を返済することができました。

家族が離散して、兄は東京の方へ働きに行っておりましたが、親が年を取ってくるにつれ、兄達が家族で帰ってくるようになり、また楽しい日々が戻りました。

両親はいつまでも私が一人であることを心配して、いい人がいれば店をバトンタッチしたいと言っておりました。

私も神様を敬う人と一緒にいたいとの願いをもって以前から祈っておりました。

その年は多くの縁談があり、何度もお見合いをしました。その時の私の気持は、主の御心ならばということでした。しかし、どこに主の御心があるかわかりません。そこで、ひとつのことを心に決めました。それは私からは絶対におことわりはしまい、神様が導いて下さる道を歩もうということでした。

中村と会うまで、七つか八つのお見合いをしたと思います。私は何が御旨かわかりませんので、ただ祈っていくだけでした。すると「あれは光ちゃんには無理よ」とか「光ちゃんがかわいそうよ」とか、私が返事を出す前に周りの方が心配してくれたり、先方からことわられたりで世話して下さいました。全部シャットアウトして下さいました。そういうことで導かれて、中村と一緒にした次第です。

中村とお見合いした時、中村から立正佼成会に三度ほど行ったことがあるという話を聞きまして、私は立正佼成会をキリスト教の聖公会と間違えたために、教会に三度も行った

方ならばいい、この方と一緒に生涯を歩んでいこうと決めたんです。今から考えるとおかしな話ですが、これも神様が導いて下さったと思います。

主人は船乗りであるため家にいないことが多く、二人の子供との生活でした。岩隈さんが、最初が大事だからよく祈って第一歩を踏み出さないよ、と言ってくれましたので、親子三人でまず主の前に祈って歩み出したことを思い出します。

新米母親のため失敗も数多くありましたが、いつも主人が「あんたと私の子供ではないんだよ。神様が私達に与えて下さった子供なんだから、神様の子供なんだから主の前に歩みなさいよ」と、私がぐちる時、いつもそう言ってくれました。心の思いの行き違いなどもありましたけれども、その時も「神様が許しておられるのだから、感謝して受けなさい」と、私の信仰の弱いところを補って助けてくれました。私の信仰が弱いものだから、憐れんで主人を神の人に加えて下さったのだと思います。

遠回りしたようにあっても、神様は不思議なように一つひとつ祈りに応えて下さいました。二人の子供は、まだはつきりと主を受け入れていませんが、祈って祈っていけば、神様

は必ず成就して下さることを信じています。

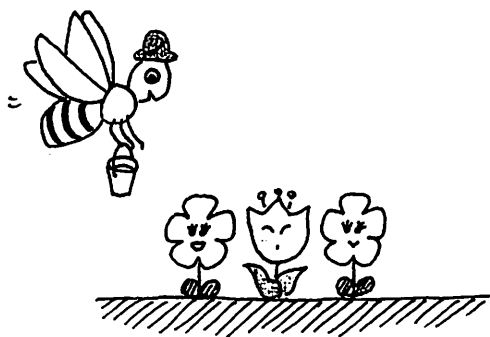
「主に仕えるように自分の夫に仕えなさい」(エペソ五・二二) 妻として歩むべき道も教えていただきました。主人も「己のごとく妻を愛せよ」「病めるときも、健やかなるときも…」とあるように、結婚してズーッとそのとおりにしてくれて感謝です。

私も主人が言うことには何でも逆らわずに従ってきたと思っていましたら、ある時「あんたは頑固だね」って言うので「まあ、私は何でもお父さんの言うとおりに聞いてきたんだよ」と言いますと、「いや、僕はあんたがむさぼり食べるのをいつも心配していた。僕の言うことを聞かなかったから病気になるんだ」と示されたときに、アー主人はそんなことを思ってくれていたのか食べることひとつわがままだったことを反省させられました。何度か入院を繰り返しましたが、食べることひとつも神様が導いて下さったことを感謝しています。

私が己の道に歩むのではなく、主の道に歩むことがどんなに辛いなことであるか、生きるも死ぬるも主のため本当に私は自分のために生きていくようなわがままなところがありました。どんなことがあっても、病氣(糖尿病)のために視力

障害者になっても、それを素直に受け入れて歩みたい。

私達二人はもう若くはありません。第二の人生を歩まなければならぬ時期になっておりますが、すべてを主にお委ねして、主が備えられた道を二人で歩いていきたいと願っています。



前田教会に来るようになった時のこと

野 口 美 加

私達家族は二〇年程前田教会で養われ、お世話になりました。初めて八幡前田教会に来るようになった時の事を、なつかしく思い出します。正直に卒直に書かせていただきたくペンを取りました。

昭和四三年一月に父の転勤で、大阪の堺市から、八幡の紅梅町に移って参りました。私達は、以前行っていた大阪の初芝教会の牧師先生から、まだその頃は八幡前田教会も、日本キリスト教団に属していたそうですから、住所を見て、一番近い教会（日本キリスト教団で）ということから、八幡前田教会があると教えていただきました。

初めて前田教会の門をくぐったのが、私が、小学校五年生の一月二四日（日曜日）だったと、記憶しております。母と妹と三人で家の近くのバス停からバスに乗り桃園あたりで下車しました。そこから前田教会を歩いて捜したのですが、

「あちこち歩いていると、『神は愛である』の看板が目止まり「ここがそうじゃない」と母に声を掛けました。

教会に入った時の第一印象は、とつてもお掃除の行き届いた教会だなあとのことです。建物は年期が入っているけれど、階段を登った時の手すりのサンの所など、きれいにぬれぞうきんで拭かれているのではと、子供心に感心したものです。

私は日曜学校の二級に、妹は幼稚科に入れていただいたのですが、初めて来た当日から、日曜学校のクリスマス祝会の聖誕劇の練習を礼拝後からさせていたたくことになりました。それからクリスマスまで練習したのですが、旧姓広田章子さんや、旧姓長尾美子さんたちと一緒に、お昼は旧姓調悠子先生に、三角山形のおいしい菓子パン二個と銀紙で包んだクリームチョコ二個をそれぞれいただいて、それをお昼ご飯にして、楽しく練習しました。私は羊飼いの、妹はナレーター役、写真にも取っております。

そのころ日曜学校の礼拝は、毎週岩隈先生がされていました。前田の日曜学校に出はじめの頃、よく岩隈先生が、「この話は榎本先生が、おっしゃっておられたことなのですからね」と気恥かしそうにおっしゃっておられました、それを

聞いた私は失礼にも榎本先生で誰だろう？ 芸能人のエノモトケンイチのことかな（そのころ、その人もマスコミでは先生と呼ばれていたと思います）などと前田教会の牧師先生のお名前を知らない私でした。そうそう、いよいよクリスマス祝会の時になって、野村先生が、子供達にメッセージをされたので、この方がつきりこの教会の牧師先生だろうと思いいこんでいた頃もあるようです。

又、分級の時では、毎週金言が与えられるので、その箇所を教えていただくと、島崎さんやあと数名の方が、お話を聞きながら、その週の金言をノートに写していたので、私も毎週家に帰ってからノートにその週の金言を書き記すようになっていました。

又、長尾美子さんが、河本さんのお家の近くに住んでおられて、日曜学校にいくと長尾さんがみえていないし、未だ始まるまで時間があつたので、私は教会を抜け出て、長尾さんを、さそいに行つたことがあります。その時急に私が教会からいなくなつたので、日曜学校の先生方が心配されたことがあるそうです。

話をクリスマス祝会にもどしますが、私は、聖誕劇の他に二級の皆と一緒に金言を言いました。つるえ先生から小さな

紙に書いていただいて覚えた聖言ですが、エレミヤ三一・三の「わたしは限りなき愛をもってあなたを愛している。それゆえ、わたしは絶えずあなたに真実をつくしてきた」をクリスマスに発表いたしました。長尾さんは、ヘブル一二・二の「信仰の導き手であり、またその完成者であるイエスを仰ぎ見つつ、走ろうではないか」広田さんの金言は何だったか覚えていませんが、列の中ごろに、向って左側から、長尾さん、私、広田さんと並んでいて、長尾さんから順に、出番前、ひかえ所で緊張して、皆発表したのを覚えています。

祝会の最後あたりだったかしら、皆、それぞれ（子供ですから）大きさの違うプレゼントをいただき、また河本のおばあちゃんからの板チョコもいただいて感謝して帰りました。そのプレゼントは今でも部屋に掛けて飾ってあり、愛望信という文字に、慰められています。

祝会の帰りだったと思うんですけど、母に「こっちの教会の方がいいね。」と言うと母が「どうして？プレゼントをもらえるから？」と聞いたので「そんなんじゃない、なんとなく全部がいいと思う」と返答したのを覚えています。

その日には、河本の潔子ちゃんと恵ちゃんが「クリスマスおめでとうございます」とあいさつされたように思います。

いつも可愛らしいお洋服を着ておられて、いつも二人でおられるので、私は恵ちゃんがオルガンの御用をされる頃まで、ずっと、お二人は双子なんだろうと思っていたこともありませんでした。

前田教会に来た時の一年目のことをおもに書かせていただきました。

今思いますと、皆様それぞれ立派になられて、私だけ、なんだか、恥ずかしい思いもしますが、前田教会の二〇年間本当に貴重な恵みの時を過ごさせていただいたと、感謝の気持ち絶えません。

ありがとうございます。

恐縮ですが、これからお祈り下さいますようお願い申し上げます。

私も天草の地で、前田の皆様のことを、お祈りし、互いに愛し合う者として、この地上で、光の子らしく助け合って行けたら幸いです。

では、主の祝福が皆様の上に豊かにあふれますよう心からお祈り致しましてペンを置きます。

シャローム



ひとたび我に来る者、我必らずこれを捨てず

林 正二郎

私が前田教会に最初に足を踏み入れたのは、姉が西南に通学している関係で、日曜学校に出席することになり、行きたくもないのに姉に連れられて行ったのが初めです。

小学生の私は、その時の先生のお話などは全く覚えておらず、ただ小さな教会と中に入った時木製の長イスがあり、暑かったことしか覚えがありません。

その後前田教会があることすら忘れてしまいました。それから十数年を経て教会に足を運ぶようになったのは、わが家において様々な問題が起こり、教会の門をたたく事になったからです。

昭和三五年五月、母の重病を通し、神様を求める様になりました。

生死をさまよう母の状態をみて、その中で、あわれみ深い神様に、呼び求め、神様は私共一家を立ち返らせて下さいま

した。

昭和三七年、両親、姉妹私と洗礼を受けさせていただきました。

それからの私の信仰の歩みは、神様から今にも離れそうになる事もしばしばありましたが、そのような私に、愛に満ちた神様は良き助け人を与えて下さり、前田教会で結婚式を挙げさせていただきました。

それからは、様々な問題の中を、夫婦ではげまし合い、祈りあいながら、集会に出席させていただいておりました。

数々の主の恵みとあわれみといつくしみにより、神様は今も生きて働いて下さっている事を、深く深く知らしていただきました。

日々の生活の中で、ひとつずつ神様を知る事が出来て、ふり返ってみますと、どれもこれも、私にとっては益となっておりません。

コリント第一の一五章に、「しかし神の恵みによって、わたしは今日あるを得ているのである。」おことばどおりに、この身になして下さいました。

今は、ただこの神様のご愛に、なんとかしておこたえさせていただきますたいと祈っております。

前田教会と私

林 磨璃子

前田教会は、私にとって滅びの道から救い出された尊い主の宮です。

五〇年前、八幡の地に一粒の麦としてまかれた榎本先生を、神様は豊かに祝福され、水のほとりの大樹のようにしっかりと根をはり、枝は青青と繁り、あたかも旅人を休ませるように「重荷を負うて苦勞している者は、わたしのものにきなさい。あなたがたを休ませてあげよう」との聖言が、形となって現われているような気がいたします。そしてお元氣な榎本先生を拝見していますと、あの重かったご病氣が神様の御栄光に変ってしまい、主と共にいるパラダイスとも思えてなりません。

かつて、私は離婚の苦しみに直面し、涙ながらに前田教会の牧師館をおたづねしたのが始まりでした。その時先生は、神様はきっと素晴らしい人生を備えて下さっているのだから

ら、神様を信じる様に、そして「主にあつて、その偉大な力によって、強くなりなさい。」の聖言で励まして下さいました。

その後、今は亡き母の病気を機会に、再び先生をおたづねして御足勞願い、生死をさまよう母の枕許で祈っていただきました。神様は、先生のお祈りにこたえられ、母は奇跡的に快方に向いました。そして母の回復と共に、先生は私共家族のため、長い間家庭集会を開いて下さり、一人ひとりの救いのため祈って下さいました。

やがて前田教会に導かれ、家族の者皆が神様のお救いに入っていただき、それぞれが信仰の歩みをふみ出さしていただくようになりました。

しかし私は、このように恵まれた状態にありながら、まちがった道をふみ始めたのです。

それは、常に経済的に弱い生活のため、自分がなんとか頑張らなくてはいけないとの気負いが、神様の前に、大きな罪であるという事に気付かず、自分の健康を頼みとして、長い間、滅びの一途をたどる勢いで、昼と夜との二つの仕事を生甲斐のようにして頑張りました。

その間、娘も結婚、母も召されて、全く一人になりましたが、まだまだ頑張らなくてはいけないという気持ち一杯で、

落ちついて自分を見つめる事はありませんでした。

これは、「民よいかなる時にも、主に信頼せよ」「自分の知識に頼ってはならない。」との聖言に、全くさからった反逆行爲そのものです。

でも神様は、このような私にも、あわれみと忍耐と御愛とをもつて立ち帰る機会を与えて下さいました。

それは、頼みにしていた健康の視力に衰えが与えられ、小さい数字や文字を扱う夜の仕事（料亭の帳場）がこれ以上出来なくなつた事です。更に又結婚した娘が、今では神様から離れている状態にある事に気付き、娘と共に生活をしていた時の私の姿を知らされたようで、自分勝手に進んでいた罪の深さを示されました。

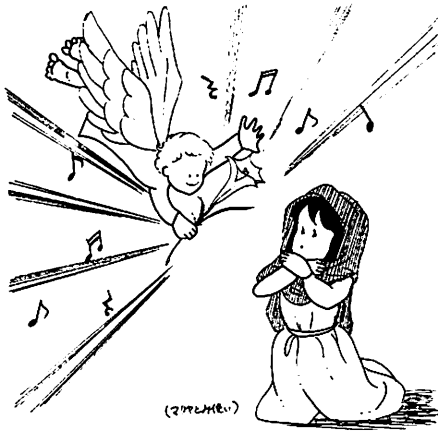
長い間の滅びの生活の中から、神様に悔い、イエス様の、十字架を仰いで、罪の中から立ち上り、神様のみ前に悔い改め、総てを神様におゆだねした時「重荷を負うて苦勞している者はわたしのもとに來なさい。」との聖言に導かれて、再び前田教会をたづねる者とさせて頂きました。

現在では、住いも教会のすぐ近くに備えられ、主と共に在る素晴らしい生活を与えて下さいました。

それは、私をはじめて前田教会の牧師館をおたづねした時、

先生がはげまして下さいましたお言葉どおりの素晴らしい人生です。

滅びの道から救い出されたこの喜びを、八幡前田教会創立五〇周年記念誌に寄稿させていただきます事を感謝し、前田教会が、神様の祝福によって、益々御栄光を現わして下さいますように、心よりお祈りさせていただきます。



前田教会に導かれて

林 由記子

私が前田教会へ導かれてまいりましたのは、昭和四三年の主人との結婚がきっかけでした。

その三年前、神なく望みない生活の中をさまよっていた私は身も心も疲れはてて、病床にありました。その私に神様のあわれみのみ手がさしのべられて、まことの神様に立ち返らせていただきました。四二年にナザレン八幡教会で洗礼を受けさせていただきました。新しい生涯へ入れていただきました。結婚と同時に前田教会にて信仰生活を送らせていただきました。になり、現在に至っております。

この間に神様が私と共にいて下さり、私をどのように導いて下さったか、この記念の時にもう一度主の恵みの数々をふり返って、更に感謝を新たにしたいと思います。

前田教会へ出席させていただくようになりましたが、まだ神様という方が漠然として分らず、聖言に信頼することも知

らない私でした。

当初は主人と夜の伝道集会に出席させていただいておりま
した。

神様は日々の歩みの中で、格別にこのような者に目をとめ
て下さり、ねんごろに御自身を示して下さいました。あつち
にぶつかり、こつちにぶつかりの私の歩みを絶えず教え、さ
とし、強め、導いて下さいました。

集会に出席するたびに、私の渴き求める魂に生ける主のみ
言葉が、ぐんぐんしみ込んでまいりました。一回一回のメッ
セージが私に対して語られているようで涙あふれてお聞きし
た事を、今でも鮮やかに思い出します。

その頃の私は一週間毎日集会があつて欲しいと切に思つて
おりました。(実はそうでもない私は歩めなかつたのです)
牧師先生が生命をかけてお言葉にお従いしてこられたお話
をお聞きしているうちに、段々と神様の御愛を悟らせていた
だき、又お言葉の力も日々、体験させていただきました。

色々な問題も次から次とやってまいりましたが、どれもこ
れも神様を知らしていただける機会となして下さい、信仰の
階段を一步ずつ登らせて下さつたのだと、今は感謝で一杯で
す。

「あなたのみ言葉はわが足のともしび、わが道の光です」

(詩一一九・一〇五) お言葉どおり、私の道をたえずお言葉
が照らして導いて下さいました。

「ああ深いかな、神の智慧と知識との富は、そのさばきは
窮めがたく、その道は測りがたい」(ローマー一・二三)

今ふり返つてみますと、病床の中から救い出して下さり、
深い深い神様の摂理の内に前田教会へ導かれ、豊かな恵みの
中でこのような素晴らしい生涯に入れていただけたとは、想
像もできませんでした。

神様がこの前田教会において、私になして下さつた恵みの
数々は、とても紙面では書き尽くすことは出来ませんが、
「あなた方が、足の裏で踏む所はみな、わたしがモーセに約
束したように、あなたがたに与えるであろう」(ヨシュア一・
三) このお言葉のごとく、私の心の中に、ひとつひとつ刻み
込まれております。

今、私はダビデが、「あなたはわたしの主、あなたのほか
にわたしの幸はない」と讚美している様に、心の底から主に
感謝し、主をほめたたえております。

こうして神様に愛され、生かされ、支えられてまいりまし
たが、今、切実に思う事は、かつての私が多くの方のお祈り

によって今日があるように、私も多くの魂のために、とりなしのお祈りの御用に、はげませていただきたいと願っております。



主のあわれみを想う

原 田 シゲノ

あなたがたの救われたのは、実に、
恵みにより、信仰によるのである。

それは、あなたがた自身から出た
ものではなく、神の賜物である。

(エペソ二・八)

忘れもしない、昭和五〇年六月一四日の楽しい夕食のひとときのことでした。それまで、教会のことは余り話したことのない主人が、以前教会に行っていた時のことを話し始めました。戦後、間もなくのころ、初めて教会に行くきっかけとなったこと、郷里の伝道所でのこと等々、を話してくれました。

それを聞いて、好奇心の強い年頃の娘が早速「教会に行こう」と言い出したのです。丁度その日が土曜日でしたので明

日は礼拝があるというのです。

主人が以前、大濠公園教会の藤掛さんに「八幡前田教会に行きなさい」と紹介されていたのを思い出し、「それじゃ八幡前田教会に行くか」ということになり、主人が、榎本先生に早速お電話しました。

教会の所在、交通の便などをお伺いして「明日、教会に行きますのでよろしくお願いします」と申し上げていました。

でも、私は養父母の仏壇を祭るといふ世のならわしがありどうしても、他の宗教の集会などに行く気がしませんでしたので「あなた達二人で行っていらっしやい」と言いました。

しかし、「せっかくの機会だから、一緒に行こう」と娘が申しますので、仕方なく一緒に行くことにしました。

ここから、私の生涯が変えられ、神様の大きな救いのみ手がすでに私の身を覆って下さっていたのです。

当日は、教会に行って初めて神様のお話しを聞くというよりも、むしろ、その後のレストランでの食事の方を楽しみに行ったような記憶が今も残っています。

教会には、礼拝の始まる二〇分位前に着き、受付で記名し、一番右の列の末席に座っておりました。主人が以前大分県の日出教会ひでで使っていた、文語訳の新約聖書と、讚美歌を持つ

て行ったのですが、いずれも、ひと昔前の代物で今は使っておらず、高木兄が、聖書と讚美歌を持って来て下さり、その日の箇所を開いて、ご親切にいろいろ教えていただいたのがつい昨日のことのように思われます。

初めての教会の雰囲気というものは、私がそれまで経験したことのない特異なもので、皆さん笑顔で明るく、とても奥ゆかしく、教養のある方々ばかりに思えました。

その時の直感として、信仰を持つと皆んなこうなるのかなあ——と思いました。「私は学もないし、教養もない、所詮私なんかの来る所ではないわ」と、その日に決めてしまいました。

そんな第一日目でしたので、その日のみことばが何であったのかなど特別に心にとめることはありませんでした。

この「燃ゆる柴」の原稿を書き始めて、あの日のみことばは一体聖書のどの箇所だったのだろうと思ひ、ご迷惑かと思いましたが、高木先生にお電話し、先生の日記から次のみことばであることを教えていただきました。

ダビデの子孫として生れ、

死人のうちからよみがえった

イエス、キリストを、

いつも思っていないさい。

これがわたしの福音である。

(二・テモテ二・八)

——昭和五〇・六・一五——

前に述べましたように、私は再び教会に行く気はありませんでしたので、主人と娘から、次の日曜日にも「教会に行く」とすすめられたのですが、「バス代がもつたないからあなた達二人で行って、帰ってからお話しの内容を教えてください」などと言って、続いて行ったのは、主人と娘だけでした。

このような愚か者の私にも主の憐れみのみ心がひそかに働き数々の曲折を経て、やがて私も一緒に礼拝に出るようになりました。そうして、私のために罪のあがないをして下さった神様の前に許され、しもべとしていただく幸いを得ました。

昭和五五年四月七日、忘れることの出来ない、あの大蔵川での新生のバプテスマ、私のこれまでの生涯でこの日ほど明るく輝いた日はありませんでした。石田姉外五名の方々も一緒に受洗されました。

神様の救を受けてやがて一〇年目を迎えますが、主人も退職し、つつましい生活の中にも、平安な日々を感謝とよろこびをもって過ごしているこのごろですが、ただ一つだけの切

なる願いは、娘達夫婦が救われることです。朝な夕なの祈りに「神様どうか、私がこの世に在るうち、娘達夫婦を救って下さい」とひたすら、希望と確信を持って、主にお願ひしています。いつ、どのようにこの祈りに、主がおこたえ下さるか楽しみにしている毎日でございます。

主イエスを信じなさい。そうしたら

あなたもあなたの家族も救われます。

(使徒行伝一六・三二)



主の恵みは絶えることがなく

丸 山 恵美子

あなたがたがわたしを選んだのではない。

わたしがあなたがたを選んだのである。

(ヨハネ 一五・一六)

私が友人と一緒に、前田教会の礼拝に出席させていただいてから、三五年の月日が流れました。私は、多くの群れの中でも、一番弱い手にかかる子羊でした。

その間、全く、つかみ所のない私のために、絶えず背後の祈りと、お導きをいただきました。

私は昭和二八年五月、結婚と同時に初めて県外に出て、春の町の主人の師匠の家に間借りをしました。半年程して、六田にアパートが与えられ引越しました。

私共がここに住むようになって間もなく、お隣りに、田平恵子さんご夫婦が引越して来られました。このご一家とは、なぜか良く気心が合い、昼食を持ち寄って、楽しく話しなが

らの食事をした思い出があります。

一年位して、恵子さんは、おめでたでご主人の実家に帰られ、私共もまた、七条の知人宅に間借りして引越しました。

その時から、私の主人は、近くのナザレン教会の夜の集會に自分から進んで行くようになりました。そんなある日、教会の奥様がわざわざおいでになり、「今夜は奥様も一緒にどうぞ」と、お誘いを受けましたが、うちは仏教だから、という思いがあり、表向きでは「有難うございます」とお礼を言いましたが、全く渴きを感じることはありませんでした。

そうこうするうち、前田教会の近くに引越すことになり、引越のたびごと手伝ってくれる恵子さんが、その時も手伝いに来てくれました。その日は、何やかやとあって、遅くまで手伝ってくれて帰りましたが、「かさ」を忘れて帰っていることが後で分かりました。

翌日、早速忘れ物の「かさ」のことを恵子さんに連絡すると、「水曜日に教会に行くのでその時取りに行く」とのことでした。やがて、その日がきて恵子さんは、夜になって「かさ」を取りに来ました。私が「こんな時間に教会に何しに行くの」と聞きましたら、恵子さんが「祈禱会があるのでお祈りに行くの、あなたも一緒に行かない」とすすめられました。

しかし、私は気が進まず「うちは仏教だから教会には行かない」と言って断りました。

この時、そばに居て聞いていた主人が「お前も行って来いよ、教会という所はどんな所かよく見て来いよ」と言っすすめてくれました。それで私も「そうね、いっぺん行って見ようか」ということになり、別にこだわらないことにして、ただ、恵子さんの後について行きました。

教会に着くと、先生を始め皆様も静まっておられました。恐縮して一番後の席に掛けました。何も分らず、聖書という書物があることすら知らない私でしたが、この時、今までに感じたことのない何かを感じました。

そうして、恵子さんに誘われ、前田教会の聖日礼拝に初めて出席させていただいたのです。初めてのことで、分からないことばかりでしたが、先生のお説教を聞いているうち、心が休まってきて、神様がお説教を通して、私一人に語りかけておられるようでした。

私の欠点やいろいろなことが、大きく、紙に書かれて壁に貼り出されたような思いがして、自分が今まで感じたことのないことが次々に示されました。

「神様、全くそのとおりです」と最後の讚美歌は、涙で文

字が見えなくなり、声もつまり感泣しました。

それからというもの、聖日が来るのが待ち遠しくて、あらゆる集会に出席させていただきました。また、どなたかの自宅で、家庭集会がもたれると知ると、先生ご夫妻に連れて行っていただいたことを覚えています。

あるとき礼拝で「神には、なんでもできないことはありません」という、みことばが私に示されました。このとき私は「自分の進むべき道はこれしかない」と決心しました。

今までの自分の、醜さ、愚かさを悔い改めることができて、全く新しくされました。

それからというもの、うれしくてたまらず、家族や親しい友人などのために「神様、どうかお救い下さい」と祈らずにはおられない日々となりました。

主人が、初めて行橋の京都館の仕事を請け負った時、八幡から現場までが遠いので、完成まぢかになると、いろいろな部門の職人さんが大勢泊り込むようになり、多い時には、三〇人程にもなりましたが、今までは、二人分の食事の用意さえもまともに来れない私に、神様は、不可能を可能となして下さり大いなる力を私に与えて下さいました。

三〇人もの食事の用意となりますと、燃料のマキの準備や、

御飯炊き、それが終ると洗濯（その頃は洗濯機のない時期でしたので、大勢の職人さんの分を手洗いでしました）と、それこそ目の回る忙しさでした。

このように、日増しに忙しさは加わるばかりでしたが、毎日の家事を楽しく、感謝をもつてすることができました。

日曜日が来ると、早目に昼食の用意をして、礼拝に出席しましたが、帰って見ると、足の踏み場のないようになっていて、後片付けがそれはもう大変でした。

私が丁度二七才の時でしたが、罪の赦しの確信と、お救いの恵みをいただいて、主人と決心し、一緒に洗礼を受けさせていただくことができましたことは、感謝にたえません。

その時、受洗記念に先生からいただいた、聖言のしおり「わたしに従って来なさい」の聖句は、常に私の聖書の中にあつて大切にしています。そして、このみことばに、私はいつも励まされて毎日を過ごしております。

このおあかしをすることにより、尊い主のご愛がどのような私共にもたらされたかを、もう一度ふり返って、更に従順にお従いすることができるよう、お祈りしている毎日でございます。

主に感謝せよ、主は恵みふかく、

そのいつくしみはとこしえに

絶えることがない。

（詩篇 一〇七・一）



創立五十周年に寄せて

—八幡前田教会の思い出—

ある日の夫婦の会話より

安 東 篤 良
倫 子

(夫) 私たちは前田を出てもう一五年になりますが、早いものですね。(大濠九年、東京四年、山口一年半)

(妻) 長男が一寸、長女がお腹にいる時でした、北九州から福岡に移ったのが。

(夫) 私は前田で九年、大濠で九年、計一八年間榎本先生の導きをいただいて、その後もカセットテープを聞いて……信仰の土台というか基本というか、あるものがあるので、失敗しても帰るところが分かるから安心というのがあります。

(妻) 私は前田が六年でしたが、こうしているんな所に導いていただいて、前田教会のすばらしさが分かるんですね。

(夫) たしかに説教を批判してはいけないうし、批判をすることは私自身がごう慢であるということだから、良くないこ

とだけど。あの頃はごう慢だったんだな。今でも時々やっているけど。

(妻) いつもじゃないんですか。

(夫) そんなにぶつぶつ言っているか。

(妻) 冗談ですよ。……それで。

(夫) 私は自己中心な人間なんだな。自分が納得しなければ、ここが間違っている、私ならこうすると、すぐに思ってしまうんだ。

(妻) 昔から自分中心でしたよ。……これも冗談ですが。

(夫) 私が、納得するかしないかの無意識の判断の基準には榎本先生の説教があると思うんだ。

(妻) その違いというのは何ですか。

(夫) どこだろうね。……一つには聖言に対する姿勢があると思うよ。私共が導かれて来たのも、御言が働いて下さるという信仰だったんだが、どうもそれが少し違うんだな。

(妻) あなた以前、こんなことも言っていましたよ。「ここでは聖言を料理している。バラバラにして、筋の一本、肉の一切をつまみ出して、どんな栄養があるかを、外国語で解説してから、さあ食べて下さいと出されるから、食べる気がしない」と。

(夫) やはり魚は丸焼が一番うまい。頭から尾っぽまで、全てを、栄養価等は知らなくても、食べていれば力になる。

これも榎本先生が良く言っておられたことだけど、そのとおりだよ。

(妻) それに、聖言に身をゆだねることは、自分の働く手を引っこめることにあるわけですが、祈りながら、働きもする必要があると強調する先生もいますね。

(夫) だから、自分がやったのか、主がやって下さったのかはつきりしない。あかしがない。解説が多くなる。料理はまずくなる。私は食べたくなくなってくる。

(妻) それで、良く何年間も我慢できますね。

(夫) いつもがそうであったわけではない。榎本先生が言われた「礼拝では、内容はどうであれ、必ず主があなたに語って下さる聖言がある。主からこの聖言をいただくように」とのことを思い出しては日曜日に礼拝に出ているよ。「わたしはその所であなたに会い、あなたと語るであろう」

(出エジプト二九・四二) ですよ最近は。

(妻) それで、最近は落ちついてるんですか。

(夫) もうひとつは、CSの御用をさせていただいた昨年末では、自分が御用のために、いやでも何でも主の前に立た

なければならなかった。この準備の時が私にとって大変大きな恵みの時でした。

(妻) それと私にとっては家拝ですね。毎日三〇分―一時間の家拝の中の聖言と、子供達との語らいの時間が持てたことよって、ズッコケママも子供達の反抗期を乗り切れたと思う、本当にお恵みですね。

(夫) この一五年をふり返って、この時も、あの時も、いつも聖言を与えていただいて、守られ、助けられ、恵まれてきたね。…時々、こっちが信じ切れなくて苦しんだこともあったけれど。

(妻) 苦しむというのは、自分があって思い通りにならないから苦しむんですね。主を信じて手を離せば楽になるのに。

(夫) それと二つ目は、君もそうだと思うけど、福音が徹底していることだと思う。私にとって生涯の聖言のひとつに、「あなたがたの救われたのは実に恵みにより信仰によるのである。それはあなたがた自身から出たものではなく神の賜物である」(エペソ二・八)があるが、主はこれを私に徹底して下さい。

(妻) でも今は、この福音があまり聞こえませんか。福音とこの言葉は多く使っているのですが。

(夫) 私は四一年に大分から八幡に来て、礼拝・伝道会、サフラン会、祈禱会等の集会でそして聖会で先輩方の信仰生活の姿勢を見て、また各集会での証に対して榎本先生の「主はどう言われますか」と、厳しくも的確な私達をイエス様の前に引っぱり出さずにはおかないアドバイスによって、潔められたい、満たされたいという願いが強くなり……四年の夏に、いくつかのステップを経て、この主の十字架の血の愛を知らせていただいたのです。

私の全ての罪のために、過去・現在・未来にわたるまでの全ての罪のために、また、良いと思うことができないで悪いと思うことをやってしまう、このどうしようもない性格のためにも、主が十字架にかかれ、血を流された。

そのことが分った時、私は涙が出て、たまりませんでした。ガラテヤ二・一九―二〇の聖言のとおりでした。

(妻) それが奥義なのです。体験しないと分りませぬね。

(夫) 「すべてが終った」(ヨハネ一九・三〇)。完成されている。私は何もする必要がない。

(妻) ただ感謝するのみですね。……でも、前田以外では、何か奉仕が伴わないと悪いような気にさせられるんですが。

(夫) そう感じ始めると喜びが無くなるでしょう。

喜びが無いと言うのは、こちら側に問題があるんですよ。さつきも言ったけど、聖言をいただく姿勢に問題があるんです。もう一度原点である聖言に立ち帰るより他にないと思います。

(妻) 私共は立ち帰る聖言があるから感謝ですが。

(夫) 祈らなければなりません。もっと、感謝できるように、周囲のためにも。私共自身のためにも。「どんな被造物も、わたしたちの主キリスト・イエスにおける神の愛から、わたしたちを引き離すことはできないのである。」(ローマ八・三九)から。

私共は今、この主の十字架を見上げて神様に尽きない感謝を捧げて居ります。



思 い 出

阿 部 和 子

前田教会創立五〇周年本当におめでとうございます。母が前田小学校勤務の時、和義さんの担任でした。和義さんは色の白い上品な顔をしていましたが、机の上を飛びまわる腕白小僧さんだったそうです。

その頃、我家は父が結核で入院して、大変困っていた時期でした。母は子供の頃教会に通っていた事があり、教会に導かれ救われました。その後、私も結婚前十年位、教会で皆様と親しく交わりを持たせていただきました。

今と違って女性が働くという事は、悪条件で大変でした。職業婦人である母に家庭的な事は余りできませんでした。母は私達子供には余り色々な事は要求しませんでした。私達は一生懸命明るく働いている後姿をみて育ちました。母はいつも、あの頃は主の聖言を聞き、優しく信仰あついで奥様の御姿をみて力づけられ、とても幸せだったと申します。近頃はテ-

ブを送っていただいて、それを聞く事によって前田教会にいるようで、とても幸せになるといつております。

私も高校生の頃、早天祈禱会や夕拝に出席して、聖言を聞くのが楽しみでした。高木様御夫妻、東様、伊規須様、独身でした泰子様・東哲郎様・正野様・その他の方々との力強い祈りの会の交わりでとても恵まれました。

汝の若き日に汝の造り主を覚えよと、その頃はいろいろな聖言を与えられていましたが、今は、ただ日常の生活に追われる毎日です。でも受洗した時にいただいた聖言「私に従ってきなさい」、結婚でこちらに来る時いただいた色紙には「見よ、神は、我が救いである。わたしは信頼して恐れる事はな」と書かれています。この二つの聖言で、迷い多く弱い私を方向づけ、力づけて下さいます。また商売していますが、「天国ソロバン」のお話を思い出す事が度々あります。本当に必要なものは備えて下さいますね。

でも、「唯信じなさい」という言葉をいつも思うのですが、なかなか我が強く、結果を早く求めておまかせできず、もがいております。

前田教会は祈りの教会だと思えます。若い幼稚な考えで先生に御相談すると、先生は「和子さん祈りましょう」と必ず

共に祈って下さいました。離れている今でも、皆様に私達家族の事を祈って下さっていると聞いて有難く思っております。父もこちらで受洗し、毎日祈りながら穏やかに過ごしております。弟達も忙しく働いておりますが、きっと祈りをもった生活をしている事と思います。

和義さんと母との出会いにより、神様の御計画で恵みを受け、私達家族に色々な事が起こっても、皆で共に祈り、乗り越える事ができる幸せを感謝しております。

「あなたがたは、主にあつていつも喜びなさい。
繰り返し言うが喜びなさい。

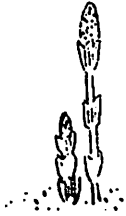
あなたがたの寛容をみんなの人に示しなさい。

主は近い。何事も思い煩ってはならない。

ただ、事ごとに感謝をもつて、祈りと願いとをささげ
あなた方の求めるところを、神に申し上げるがよい」

(ピリピ四・四一六)

前田教会にますます神様の祝福がありますよう、お祈り申し上げます。



幼ない日の思い出

飯 田 美 紀 子

私が前田教会を覚えている一番古い記憶は、確か四、五才の頃の事です。それはクリスマス祝会の日でした。私は教会の舞台の上で、ちょこんと座って一人で鉄琴をひきました。

父に教えてもらった「もろびとこぞりて」と、そして、もう一曲をひきました。終って、大きな箱に入ったおままごとセツトをプレゼントでいただき大喜び、いつもクリスマスだったらしいなあ、と思ったものでした。それから、毎日曜日父につれられて日曜学校へ通うことになったようです。

その頃の前田教会は、階段を数段登ったその上に教会の扉がありました。子どもだったので、教会の玄関はずいぶん高い所にある様に思えました。今よりも小さな会堂で、講壇に向って左側は小さな部屋があり、右の扉を開ければ、階段になっけて、牧師館へ下りて行きました。

日曜学校が終って、礼拝の間は下の牧師館で子ども達ばかり

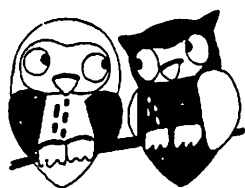
りで遊んでいました。加藤のおじいちゃんが、いつもグリコを下さしました。又咲子さんが最年長者で、いつも私達は遊んでもらっていました。

日曜学校で学ぶよりも、その後の楽しかった思い出の方が私には深く残っています。そんな私の心の中に、小さい頃からさざみこまれている、大きなみことば、

「いつも喜んでいなさい。絶えず祈りなさい。

すべてのことについて、感謝しなさい。これが、キリスト・イエスにあって、神があなたがたに求めておられることである。」
(一・テサロニケ五、一六―一八)

日曜学校の時期から、青年期、そして二人の娘の親となつた今も信仰薄い私ですが、困難な時も、又どんな所でもこのみことばにささえられて来ました。これからも主のみむねが何であるかを教えていただきながら、過ごしたいと願っています。



ただ恵みによって

鵜飼英子

私は、小さい頃から歌が大好きで、青春時代はコーラスに明け暮れ、人生は何と素晴らしいのだろうと満足でした。

そんな私に、神様が必要とは思われませんでした。でも母との約束でコーラスをやめてからは、やはり寂しく、讚美歌を歌いたくて教会へ行ったのが動機でした。会堂に入った途端、何とも言えない、なごやかな雰囲気、あたたかさを心に感じ、更に初対面の方々がとても親切にして下さった事は、今でも鮮やかに思い出されます。

それなのに、すぐ帰れるようにと一番後の席に腰かけて、メッセージを聞いていますうちに、考えても見なかった自分の罪が示され、悔いの涙を流すのですが、しばらくすると、でも毎日がこんなに幸せなのは、やはり自分の努力、又運が良かったのだと考えて、遊びを優先させ、ひまな時だけ教会に行くといった有様でした。

そんな自己中心的な私をも忍耐強く、本当に愛深く導いて下さった、先生御夫妻はじめ多くの兄弟姉に心から感謝するばかりです。そして、岩隈姉、調姉のご労によつて、九才になる娘のいる主人の処（大阪）に嫁いで参りました。主人はやさしい人ですし、娘もすぐなついてくれましたが、誰一人知人も居ない遠くに来て、予期せぬ問題が次々起こり、私のこのつらさは誰にも分かってもええないと涙の日々で、心身共に参ってしまいました。

これが神様の御計画か知ら？そんな私の為に、いつもお手紙や機関紙をお送り下さった正野姉、又背後にあつて、熱き祈り続けて下さっていた前田教会の皆様の事を思い出してどれ程励まされ感謝した事でしょう。

こちらの教会でも弱い私共の為に、とても親切にして下さり、聖書のお話を通して、少しづつ神様の愛が分かる様になりました。「すべて、疲れた人、重荷を負っている人は、わたしのところに来なさい。わたしがあなたがたを休ませてあげます」（マタイ一一・二八）とあり、私だけがどうして、という思いを捨てて、天地を造られた神様にすべてを委ねて従つて行こうと決心し、洗礼を受けさせていただきました。

神様は「私がしている事は今はあなた方には分からないが、

後で分かるようになります」と言われていますが、半年後には主人が、数年して娘も洗礼を受けさせていただき、クリスマスチャンホームとなりました。

今でも色々な問題はありますが、家族で祈り聖書によって解決し、平安に過ごしています。そして御聖日に家族揃つて、教会に行ける事は、この上もなく幸せに感じております。

主人、私、娘と最も小さき者にも、神様は常に目を留めて下さり、教会の様々な御奉仕に加えていただき感謝の毎日を送っております。二年前の夏、教団（メノナイト、ブレザレン）の青年キャンプにて、娘が献身の召命を受け、一年間神学校にて学びと訓練を受け、この春牧師の助け手として結婚し、名古屋の地に遣わされて参りました。

今、多くの方々の祈り、又先輩の教会員に支えられ、二人が協力して宣教に励んでいる姿を見る時、ただただ、主の御計画の素晴らしさ、あわれみ深さに感謝し、汝死に至るまで忠実なれ、と祈る毎日でございます。

主に感謝せよ。主はまことにいつくしみ深い。

その恵みはとこしえまで。

西原文江さんとの出会い

江 島 嘉寿子

西原文江さんとはじめてお会いしたのは、私が高校に入学して同じクラスになった時でした。西原さんは、いわゆる秀才でした。しかし、秀才にありがちな、冷たく気取ったところがなく、いつもニコニコと春風を思わせる様な方でした。

当時、父が経営していました店が、段々先細りになっていきました。父は不機嫌になるし、当然の様に、家庭内は暗い感じになっていました。そうした状態の中で、学校で西原さんにお会いすると、何かしらほっとする気持でした。

高校時代は、心の中でひかれながら、ことさら親しく付き合うということはありませんでした。高校を卒業し、しばらくたって、折尾の町中でばったり再会しました。その時も、西原さんは高校時代と変らない、暖かな感じを漂わせておられ、思わず、手を取り合いたいと思ったほどでした。

一方、父の店は破産一步手前の状態で、食べて行くのがやっ

と、といった感じでした。それで、家の中はとげとげした状態にあり、ついに私は父と衝突してしまい、家を飛び出しました。さて、家を飛び出したものの行先に困り、どうしたのかと途方にくれました。その時ふと西原さんのことを思い出して、うろ覚えの住所を頼りに、必死の思いで尋ねて、やっ

と西原さんのお宅にたどり着きました。

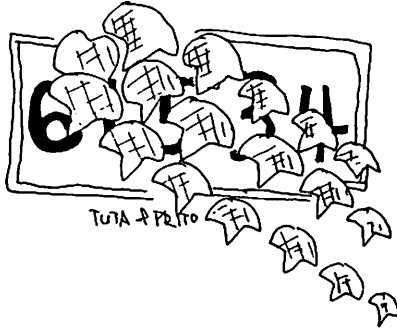
西原さんは、お母さん、妹さんと三人でつゝ、ましく暮しておられました。そのところに、一面識もない、ただ文江さんの同級生だったというだけの者が、飛びこんできたのですから、さぞびっくりされたことと思います。しかし西原さんのお母さんは余分なことはいわれず、やさしく応待して下さい、その晩泊めて下さいました。

翌日、日曜日でしたので、西原さん御一家は教会に礼拝に出かけられることとなり、私も、御一緒にどうですかと誘って下さったので、なんの抵抗感もなく、前田教会に導かれました。礼拝の後、西原さんが榎本先生に紹介して下さいました。厚かましくも、私は初対面の先生に、自分勝手な苦しみを訴えました。先生は親身に聞いて下さり、又折っても下さりました。先生の祈りは、今日に至るまでも、続けて下さっていると、後になって気づかせていただき、深く頭の下がる

思いました。

その後、紆余曲折があり、すぐには、教会には行けませんでしたが、西原さん御一家の温かい見守りがあり、数年後、再び、前田教会に導かれました。

今、当時を振り返る時、前田教会の存在さえ知らなかった私に、西原文江さんという導き手を与えて下さり、主イエス様の救いにあずかせていただいた、この神様の計り知れない御愛を思い、深く感謝し、讚美致します。



悔改め

加藤 千代

私は昭和二九年二月一八日に忘れることのできない、主の聖手による御救いをいただき、神の子としての出発をさせていただきました。それから半年経った八月でしたか、九州の英彦山で教会キャンプが持たれ、その時先生のメッセージの中にありました、「ある牧師が牧会に疲れ果て、もう牧師を辞めてしまおうと悩み考えている内にうとうとし夢を見た。ある方の大きな胸にハッシハッシと矢が打込まれそこから血が流れている。又しても矢が―あ、主よどうぞもう止めて下さい。と彼は泣き声を上げる。すると優しいその方のお声が『お前が私に背くその思いがこうして一つひとつ私の胸に刺さり血を流すのだよ』と言われた。彼は『ごめんなさい。許してください』と大声で叫んだ。…と目が覚めた――』。

今考えると御聖霊が働いて下さったのだと思います。その御血を流させたのは私です。主よ、私の背きの罪がその御血

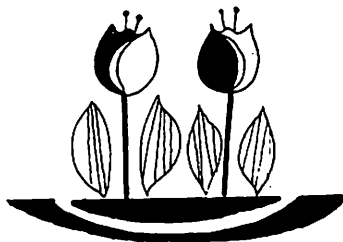
を流させたのです。私が、私の罪が、との叫びが胸の中に湧き起こりました。——お話終って私はバッグを攜んで立上り外に出ました。多分血相変えてという形容が当たっていたと思います。牧師先生が心配して後から追って来られたそうですから。

どんどん歩いて高い所に登って人気のないその所で天を仰いで祈りました。「天のお父様、ごめんなさい。長い間あなたからそっぽを向いて歩いていた私の罪をお許してください。このような者の為にあなた様は御血を流して下さいました。ありがとうございます。申訳ありません。許してください。」涙がドツと溢れ流れて来ました。その時何を祈ったかもう忘れてしまいました。とに角、あなたはこのような者の罪の為に御血を流して下さいました。申訳ありません。許してください、とこゝまで来ると又しても涙が止めどなく溢れ流れて来ます。何度も何度もその所に来ると胸が迫り涙がこみ上げるのです。私の中に一体どれ丈涙の池があるのかと思ひました。私は、そうだこの涙が涸れるまで私はこゝでおわびをしなければいけない。幾度でも幾度でも涙が涸れるまで、と心を定め祈りに祈り泣きに泣きました。もう主よ、お許しただけなのでしょいかと涙が出なくなったので、感謝して

宿舎に帰りました。

皆がずらりと輪になっておあかしの時になりました。私は是非この事を感謝しなければと話し出したのですが、私の罪の為に主が御血をとそのところに来ると、もうすっかり涸れたと思っていた涙がどつと押し寄せて、こんなに沢山の人の前だからとの制止も利かず泣きくずれてしまったのです。

この時御聖霊は徹底的に、私の罪の為に主が御血を流して下さいましたお恵みを体に教えてくださったのだと思います。先生のメッセージは毎回必ず十字架の御贖いに言及して下さっておられましたから、幼い信仰はごく自然にかの御血汐とこの御血汐とを重ね合わせて覚えさせていただいたのだと思います。感謝が尽きません。



歩み

川越千恵子

幼年時代

私は小さい時から、母に連れられて前田教会に通っていました。日曜学校での思い出は、クリスマスにプレゼントをもたらった事が一番の思い出です。六歳頃の事も少し覚えています。旧会堂で、出入口の横をカーテンで仕切った所で、従姉妹の千代ちゃんと同じクラスでイエス様の話しの紙芝居をしてもらった事などです。

色々な事の記憶はあまりないのですが、私が三歳の頃に父と山登りに行き、道に迷ってしまった事がありました。辺りを見ると、林の中に入り込んでしまえば右も左にも道がないような所でした。私も不安になり、神様が意地悪しているように思えたのか父に「お父さんが悪いんじゃないよね、神様が悪いんじゃない」と、言った事や、その場所などが鮮明に今でも思い出されます。

少女時代

小学校の頃はあまり、日曜学校に出席しなかったように思います。三年生か四年生の頃だったと思いますが、クリスマスで言う聖言を覚ええました。「信仰の導き手でありまたその完成者であるイエスを仰ぎ見つ走ろうではないか」。その頃のクラスの先生は、旧姓、調悠子先生でした。この聖言は、現在の私の心の中に、いつまでも残る聖言になりました。

青年時代

中学生の頃の私は、神様の話を誤解していました。神様には出来ない事はないと教えられた時、ほんとに祈りました。父の事や経済的な事など自分に都合のいい祈りをしたり、神様を試すような事ばかりしていたように思います。

高校に入って宗教部に入り、聖書を毎日読むようになって初めて自分勝手な私だと分かり、弱者だと悔い改めました。「恐れてはならない、わたしはあなたと共にいる。驚いてはならない、わたしはあなたの神である。私はあなたを強くし、あなたを助け、わが勝利の右の手をもって、あなたをささえる」(イザヤ四一、一〇)。

こんな私を、神様は共にいて強くして下さると信じて、受洗する決心をし、洗礼を受けさせて頂きました。

高校を卒業してからの私の信仰は、色々なレジャーや、楽しい事の誘惑にまけ、日曜礼拝に出席しない時がしばしばありました。

主の導きにより、このような私なのに同じ信仰を持つ主人と結婚し、二人の子供達にも恵まれ、家族の一人ひとりが主に従って行けるお恵みを感じます。

また、毎月一回の大阪集会では、母教会を離れている私達にとつては大きな支えになっています。

こうして、八幡前田教会が五〇周年記念を迎え、ほんとに今思う事は、母達が前田教会との出会いがなければ、弟の献身や私達の今の生活はなかった事でしょう。私達は、主イエス・キリストによってすばらしい歩みが出来た事を感謝し、また百周年にむけてこのすばらしい福音を、新しい世代の者に伝えて行きたいと思えます。



「みぎわ」回想記

小 羊 山 人

主はわたしの牧者であつて、わたしには乏しいことがない。主はわたしを緑の牧場に伏させ、いこいのみぎわに伴われ。主はわたしの魂をいきかえらせ、み名のためにわたしを正しい道に導かれる。たといわたしは死の陰の谷を歩いてもわざわざいを恐れませんが、あなたがわたしと共におられるからです。あなたのむちと、あなたのつえはわたしを慰めます。あなたはわたしの敵の前で、わたしの前に宴を設け、わたしのこうべに油をそそがれる。わたしの杯はあふれます。わたしの生きているかぎりはず恵みといつくしみとが伴うでしょう。わたしはとこしえに主の宮に住むでしょう。(詩篇三三・一一六)

八幡前田教会創立五〇周年の記念の時を迎えて、主の限りなきご愛と恵みとを、心より感謝し聖名をほめたたえます。

さて、教会誌ぶどうの木三号にて、「みぎわ騒動記」として書きました。教会週報紙みぎわも、誕生以来四二年になりました。教会の歴史よりは若いですが、昭和二二年に、河本実兄と計画し祈り求めまして、毎週日曜礼拝に皆様に見ていただこうと考えて造り出しました。それから今日まで、騒動記に書いたように色々な事がありました。四〇年以上も、（たしか途中で一、二度休んだ事がありました）よく続いて来たことだと思えます。ぶどうの木四号には、M・S兄が命の泉と題して証を書いてありましたのに、みぎわが愛兄ととって命の泉であったと述べておられました。命の泉とは勿論主の事に相違ありません。詩篇の三六篇九節において、いのちの泉はあなたのもとにあり……とあります。

小さな週報みぎわの一枚でも、大げさな言い方かも知れませんが、一人でもその様な喜びと望とが得られたのでしたら、こんな感謝な事はありません。

最初の頃の週報は洋紙六分の一の小さなものでした。今はもう少ししか残っていませんが、取り出して見れば、何かしら昔の親しい友人にでも出逢った様な懐かしい気持ちになるのを覚えます。

四〇年以上を経た現在は、タイプでこしらえたもので、見

た目は少しは美しく読めるようになり、更にコピー機を与えられてより一層鮮明になって汚い垢もとれたかと思うようになったものの、その反面出発当時のような温かさや、ぬくもりみたいな物が無くなり、冷たくなったのではないかとも思われます。

然し、晴れた日、曇の日、風や雨の日、暑い朝又寒い朝も、礼拝の席に多くの兄弟方と共に、主を崇めた聖日に、生命の泉は主の聖言の中より流れて、それぞれのぶどうの木々に注がれて行くパイプになって来たのではないかと考えています。

ともあれ、教会の永い歴史と共に之から更に五〇年、六〇年と、聖言が伝えられて行くこの命の泉となる、みぎわとしての使命を果たして行きたいものだ、心から祈っております。

主は必ず恵まれたみぎわとなして下さると信じます。

今日まで、皆様の篤き祈りに感謝いたします。今後共よろしく願います。尚、良き信仰の友であり、みぎわの発案者、河本実兄にも心からお礼を申し上げます。

主の恵みによる四〇年のみぎわを回想しつゝ、ハレルヤ!!

みぎわ

川崎新田教会

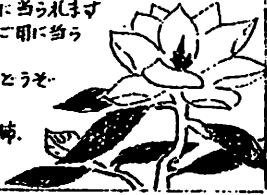
☆週報☆

1965.6.27. - NO.27.

礼拝プログラム

1. 讃美歌	136	9. 祈禱	267
2. 美全	301	10. 讃美歌	
3. 美全	11	11. 讃美歌	
4. 主交	シヘン 145	12. 讃美歌	542
5. 交		13. 讃美歌	種本牧師
6. 祈禱		14. 讃美歌	
7. 讃美歌	292	15. 讃美歌	
8. 説教	種本牧師	16. 讃美歌	
	シヘン 34:1~7		

明二十八日午後七時三十分より永代丸家連集會を
海江田兄お宅にて行いますおほえてお祈り下さい
七月の朝旺のマナが来てお祈り下さるお返取下さる
教会誌がどうの木二号の祝詞を募集申すのみならず
多数の方々寄ってご参加下さい。
来る七月十一日(日)は葛藤夜使の行方礼拝して
飯の種本先生の御用にお祈り下さる
種本先生は行徳教会に於てご用にお祈り下さる
七八月の寄着は種本先生に
よろしくお祈り致します
お日礼拝部 副部 永谷時



- 主の恵み みぎわにいこい 四十路来ぬ
- 教会の 歴史にうつる みぎわかな
- はかりなや 命のみぎわ 主のめぐみ
- かくなりて 今に至れり 神の愛
- 栄えあれ 主イエスのみ名を ほめうたわん

日曜学校に育まれて

小学校低学年までは伊規須先生に、高学年では高木先生に
そして中学・高校の頃は正野先生をとおして、みことばに
ふれさせていただきました。

三〇年近くも昔の事です。当時の日曜学校のお話など、も
ちろん覚えていませんが、何故か、お話しして下さる先生の
顔や、その時の部屋の様子は今でもはっきりと頭の中に焼き
付いているところがあります。

他の人(この場合、学校や近所の友人たち)と同じでない
日曜日の過ごし方に不満や不安を持つたり、いやいやながら
日曜学校へ出席したことも多々ありました。また、どんなに
抵抗しても、逃れようとしても、結局「神さま」というもの
にしか行きつかない、そんな葛藤も味わいました。

ところが、そうやって拒んだり闘ったりしてきたものが、
実は自分にとっていちばん大切なものであったということ

K・N

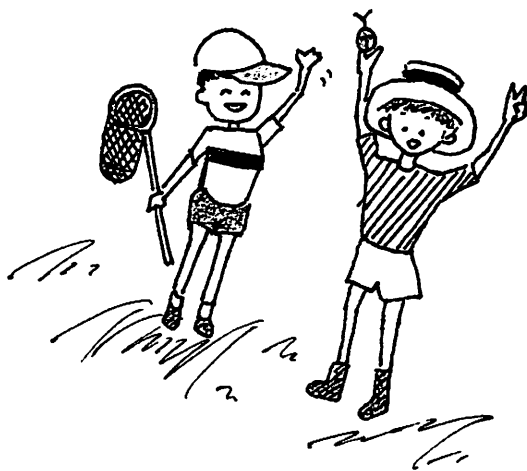
を、後になって教えられることになりました。

ろくに話も聞かず、どの席に誰が座っていたとか、部屋がどうなっていたとか、そんなことしか覚えていない、そんな私を、神さまはちゃんと目をとめ、とらえて下さっていたんだなと思います。いつのまにか心の中に「神さまは本当にいらつしやるんだ」という思いが浸みこんでいたのでしよう。

やがて成長し、大人になるにつれ、自分ではどうする事もできないような様々な状況を体験した時、この幼ない頃に与えられた思いが、どれほど勇気となり力となったか知れません。

あれから二〇数年を経て今、神さまからの召しをうけ、日曜学校の御用をさせていただくようになり、事の大切さを実感しているところです。と同時に、神さまが私に対してなして下さったのと同じように、今、目の前にいる子供さんたちにも、神さまはいつか必ず、「あの時日曜学校に行っていたよかったな」という思いと、孤独な時にも悩みの日にも支えて下さる神さまがおられるということ、そして、この神さまに信頼している限りどんなおそれも不安もないということをはっきりと示して下さいと思います。

子供さんたちと共に日曜学校に出席させていただき、幼ない頃と同じように、今もこの日曜学校によって育まれています。



ま え だ

—エツケル先生の奨めに触発されて—

首 藤 正

きみよ

ひとよりも

ひとの前よりも

まず

神に

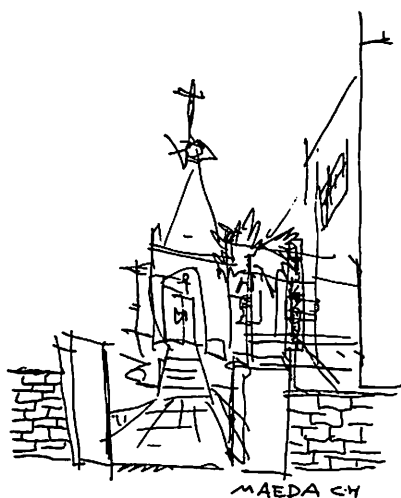
神のみまえに

どうあるか

どうあらねば

ならないかを

問う



このあり方が

この教会を

このように

なりたたせ

そしてきみと

わたしを

どんなにたえず

きよめ

ととのえてきたか

きみは

知っているか

わかっているか

そう もちろん

知っているのだ

わかっているに

ちがいない

きみが

この教会にいるって

ことがすでに

そのことを

示している

その信仰の持主で

あることを

表している

きみよ

このあり方が

根幹であること

命でさえ

左右してしまう

だいなもので

あることを

自覚しているか

知りぬいているか

わたしたちは

まず 神のみに

あるのだ

ひとりではない

神のみ前だ

右でもなく

左でもない

ましてや後では

けっしてない

神の前だ

招きにしたがい

導きに応じて

前にゆく



一歩

そして 一歩

一泳ぎ

そして 一泳ぎ

前へ出よう

沖をめざそう

あとがえる国は

すでになく

しがみついて

たゆたう岸は

遠ざかってしまったのだ

いみじくも

まえだ という

名を冠する

この教会

たえず

み前にあつてこそ

生きてある教会

たゆみなく

前へむけて

進みゆくしかない

そのあしどりの上に

きずかれる教会

これぞ

前田教会

つぎの世紀へ

ひらかれた

望みと信仰と

惜しみなく

注がれた

恵みと愛とに

かたく立って

両手を挙げ

大きな口をあけ

神へのさん美と

感謝と

献身と

かぎりない信頼とを

告白する

こころからなる

歌をうたい

み名を

崇めて

いこうではないか

アーメン



前田教会と私

谷 口 由美子

前田教会創立五〇周年を迎え、主の御名を讃美致します。
私が教会を知って、早三〇数年の歳月が流れたのだなあと思
うと教会に通っていた色々な思い出が、走馬燈のように思い
出されます。母の手につながれて、日曜礼拝に行っていた頃
はまだ幼なすぎて、教会の会堂の中で飛び回っていました。

あの頃の思い出といえますと、何と言ってもクリスマスプ
レゼントをもらった時の喜び、今だに覚えています。色とり
どりのおはじきセット、ままごとセット、お人形、私にとっ
て、毎年のクリスマスプレゼントは教会に行く唯一の楽しみ
でした。

私の本気になって、主を求めたのは中学校二年の時でした。
日曜礼拝に家族の者たちは出かけ、私一人家に居た時の事
です（日曜学校をずる休みしていました）。急に左耳が痛くな
り、次第に激痛となったのです。この時、「神様、痛い、助

けて下さい」と叫びました。すると、先程の痛みがうその様に消失したのです。私はこの時初めて、神様の存在を知ったのです。それからというもの、私の記憶では日曜学校はかさず行ったと思います。

中学三年の時、自分はどの高校へ進むべきか迷っていた時、お祈りをしますと、神様は道を開いて下さいました。姉達がつ通っている高校に衛生看護科ができるとの知らせがありました。私は迷わず受験し、入学することができました。そして高校三年の四月一五日の月曜日の朝、洗礼を受けました。この年の一月三日に前田教会創立三〇周年を迎え、この時洋子姉の伴奏で、クラスメートや正野（旧姓調）さんと讚美歌を歌いました。なごやかな中で、記念会を終えましたが、私の心の中は、さわやかな気持ちで一杯でした。

振り返ってみますと、次々と思い出され、とりとめもなくペンを走らせてしまいました。

子供の人格形成には、子供をとりまく周囲の環境が大きく左右するといわれていますが、私の場合前田教会という第二の家を持っていましたし、信者の皆様の温い心といつも触れておりましたので、私はとても恵まれた環境で育ったと感謝しております。今の私の存在は前田教会の存在があったから

こそと言っても決して過言ではないと思っています。前田教会の中には常にイエス様がいましたし、又イエス様から愛される人々がいました。

私は現在看護学校で看護婦の育成に携わっていますが、学生にいつも言っているのは「相手の立場になって物事を考え、患者さんの痛みがわかる看護婦になって欲しい」ということです。いつ臨床に戻るかわかりませんが、私が看護婦で働いている限り、このことを後輩に指導して行きたいと思っています。「看護婦」それは中三の時祈り求めた私に、神様が与えて下さった私の道だったのです。

「わたしに呼び求めよ。そうすればわたしはあなたに答える」神様は常に私を見ており、また必要に応じて適宜聖言を与えて下さいます。

前田教会がこれからもずっと、私達一人ひとりの第二の家であることを願ってやみません。



会堂の思い出

中 村 光 恵

私が八幡前田教会に導かれた頃（昭和一九年）は、河本さんの家の二階で礼拝が守られておりましたが、河本のおじさまとおばさまが、いつも榎本先生と八幡三〇万人の魂のために祈っておられたことを思い出します。

空襲で全部焼けましたが、間もなく河本さんが、使徒行伝にある使徒の足元におくように、へりくだったお気持ちで教会を捧げられました。

最初の会堂は、四人掛け長椅子五脚が二列並んだ小さなもので、人も少なかつたけれども、みんなで多くの方が導かれるよう心を注いで祈っていました。その祈りに応えられて、一人増え、二人増えて多くの方が来られるようになり、段々会堂が狭くなってきました。それで左側を増築し、後ろの玄関部分を増し、右側に和室を増築しなければならぬように神様が祝福して下さいました。

ある時、河本のおばさまから「預金していたのが賞金に当たって、それで増築ができた」と伺い、本当に神様は祈り求めていけば、必ず応えて下さることを教えられました。

震災という大きな災いと見えることも、神様はすばらしいことをなしてここに会堂を与え、私達が救われるように備えて下さいました。

また、丸山さん御夫妻の奉仕によって、今日の会堂が建てられたことも感謝です。

我が家に車が与えられまして、礼拝中に駐車違反ということがありましたが、私達二人で教会に駐車場が与えられるといいねと祈っておりました。その後、車もなくなり、祈りも途絶えておりましたが、このたび神様は真実にすばらしい駐車場を与えて下さいました。私達は忘れていても、神様は「汝の信仰のごとく、汝になるべし」と必ず応えて下さいます。

「汝の願いをことごとく主に求めよ」

この聖言が与えられたときに、「人には能わねど、主にあっては能わぬことなし」御約束を一つひとつ思い起こして感謝しています。

「わが恵み汝に足れり」大いなる恵みを受けたことを感謝します。

先生の情熱

花田 明 美 宏

私達は約三〇年前、前田教会で結婚式をあげさせていた。私は大学時代、東京で洗礼を受け、妻は前田教会で受洗した。色々な事情もあり、結婚式は大変感激の内に終わった。その時、上品なお婆さんが、教会で結婚式をしても、後、教会に来なくなる人が多いと言われた事が、今でも耳の底に残っている。

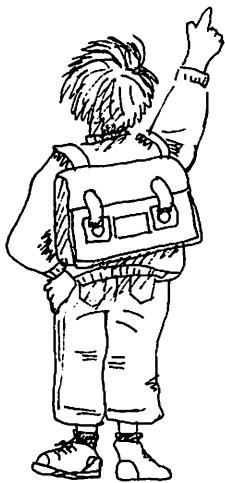
東京での教会は梅ヶ丘教会と言い、穏やかな性格の牧師さんだったが、帰郷後、前田教会に通いだして、先生の情熱的な説教に圧倒された。

私は昭和一けた生れだが、戦争中は神国日本、鬼畜米英で鍛えられ、敗戦後は一変して民主主義萬歳、米兵を見れば「ギブミー・チョコレート」で価値の逆転を経験させられた。そのせいか物事にクールで、いつ世の中がどうなるか分らぬ、

不変の価値があるものかとの思いがある。自分の生れた世代に責任をかぶせるのもどうかと思うが、同年代の者を見てもその様な気がする。その点、先生の情熱的な説教には、ただただ圧倒されるものがある。

現在、長男は大学を卒業し、大阪に勤務して三年目になる。長女も今年、美大を卒業して福岡の設計事務所勤めている。次男は今年、大学に入学した。平凡だが真面目な子供達で神に感謝している。

今後とも先生の御健闘をお祈りすると共に、先生の情熱の千分の一でもあやかり、頑張っていきたいと思っている。



父の愛と神の愛

林 信 一

私の父はカメラの修理業で、私がそれを手伝っていました。父は期日までには必ずちゃんと修理をやっていました。時には気分の乗らない時もあったと思いますが、それでも間違いなくやってくれ、私はそれが当り前に思っていました。家を持って帰れば必ず父親が間違いなくやってくれるので、大船に乗った様な気持で毎日を過ごしていました。

最近つくづく思ってみますと、自分は出来ないが父親が必ずやってくれると、信仰に似た様な気持でした。それで本当に自分自身は楽でした。当時は未だ教会には来ていない時代でした。

私は何事も自分自身では出来ませんが、神様は何事も出来る方である事を知るにつけ、どの様な時でも仕事に関しては父親でも子供である私に安心して修理をさせ、あとは自分に任せなさいと一生けん命やってくれた事を思い出しま

す。

この事につけても、私共の信仰もあの様にすべてを任せれば、あとは神様が一番良き時に一番良き方法で何事もやっていただき、心の平安を持ち続けて毎日感謝をもって過ごす事が出来ると確信を持つ事ができます。

神様に背を向けていた時でも、常に私共を導いて下さった方に感謝します。どうしてあの苦しい時にも無事通り抜けて来られたかと思う事が数多くあります。それには私共に近い人々や知らない多くの人々の祈りが有った事を忘れる事が出来ません。

これから先は数多くの人々のため祈りの人になりたいと思っています。

私ども一家全員が前田教会へ導かれる様になったのは、今から考えて見ると、実に安易な気持でした。(家族の他の者はそうでは無かったかも知れませんが、私は特にこの気持が強く今でも心の中にしっかりと残っています)。本当にこの様な気持ちで良かったのだろうかと思われる位です。

小さな子供がその親について、とことこと行く様に教会へ来た事を思い出します。

確かに母の病気など色々な事も有りましたが、ただ本当に

気軽るに來た事のみが頭の中をかすめています。

終戦後の生活も、日本国中がそうであった様に、毎日の生活もなんとか過ぎれば「ああ一日がどうか無事に過ぎ良かったね」と思うだけで、今の様に神に感謝する事も知らない自分勝手な生活でした。

仕事の事为例にとりますと、写真の事は多少知ってはいるもののカメラの修理は全く知らない時でした。

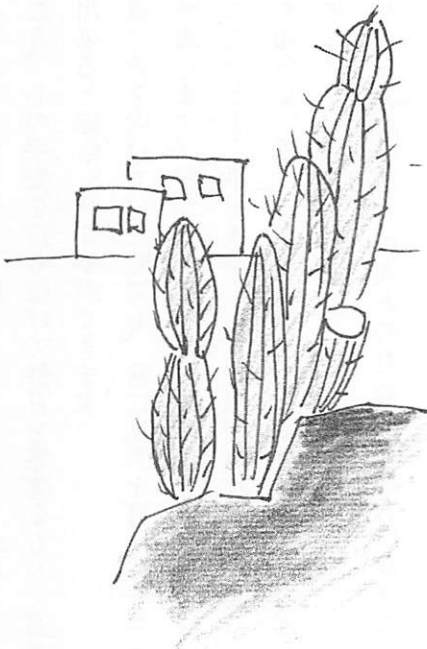
父親は私の生れる以前、タクシーの営業をしている戦前からカメラをいじり、今でいうアルバイトの様な事でカメラ店から持って来るカメラを修理してあげる位の技術の持主でした。

終戦後の昭和二三年より井筒屋で現在の仕事を始めるに当たり、私は本当に何にも出来ない有様で修理を受付けて家に持帰り父親にすべてをやってもらう毎日でした。

デパートでは期日を守り、期日までには必ず御客様にお渡しするのが何んといっても大切な事でした。

その後、母の病氣を通して教会に行くようになり、神様に祈ることを教えていただきました。今は解らなくても毎日祈って何事もなせば、心の安らぎを必ず受ける生活に入らせていただいている事を本当に感謝しています。

前田教会に導かれていなかったら今どんな生活を送っていたらどうかを考えると、本当に恐ろしい思いで一杯です。神様との交わりに入れていただく事ができ、家族共々感謝をしております。



八幡前田教会を通して主が私にしてください さった恵み

林 伊佐夫

八幡前田教会の五〇周年記念を心よりお喜び申し上げます。そして、主のみわざを心より讚美致します。

私は現在、広島県呉市で、呉ライオンズ教会へ連なっています。今こうして、信仰の幼年期を過ごさせていただいた前田教会のことを思うとき、どうしても忘れる事の出来ない聖言がございます、それは、ヨエル二・一二―一三「心を尽くし、断食と、涙と、嘆きをもって、わたしに帰れ。あなたがたはたは衣服ではなく、あなたがたの心を裂け。あなたがたの神、主に立ち帰れ。主は情け深く、哀れみ深く、怒るのに遅く、恵み豊かで、わざわざを思い直してくださるからだ」。この聖言をもって、神様は悔い改めに導いて下さり、『私に返れ』と大きな御愛を示して下さいました。

それから一〇数年間、神様は確かに真実なお方で、聖言に

は大きな力があることを体験させて頂きました。又、この悔い改めの為に私の母親を始め、多くの前田教会の皆様方の『とりなしの祈り』があったことを、救われてから初めて気付かされました。当時のことを思うと何とも情けない、高慢な自分であったか恥ずかしさでいっぱいです。私の子供達も、三人共中学生で、ただ今、青春真っただ中ですが、幸いにも家族揃って礼拝を守らせていただいております。

私の前田教会の思い出も、なぜかこの中学生時代に集中しているようで、その時は、榎本先生のメッセージを（失礼ながら）それこそ、うわのそら、うたた寝の中で聞いていた情けない者ですが、しかし、そのような状態の中であつても、主は、憐れんで下さいました。その頃の聖言が信仰の形成に重要な役割を果たしていることを今驚きと共に知る事ができます。神様は前田教会を通して信仰の幼年期をしつかり養って下さり、悔い改めに導いて下さり、その後の成長に大きな力をお与え下さいました。これは私にとって大きな恵みで感謝で一杯です。本当にありがとうございます。

主に 持ち運ばれて

廣 田 千穂子

「わたしに呼び求めよ。そうすれば、わたしはあなたに答える。そしてあなたの知らない大きな隠されている事を、あなたに示す。」(エレミヤ 三三・三)

主のお導きを祈ってペンを取りました。榎本先生は「まず祈りましょう」と 事ある毎に祈って下さいます。神様のお導きがなければ、話すことも、書くことも、何もできない私であることをこのたびも教えられました。

古いアルバムをひろげてみますと、昭和二九年頃、教会は白っぽいレンガの門から入り、左側に入口があつて数段上るようになつていました。屋根の上に十字架が立っていますが、塀に取り付けた八幡前田教会の看板がなければ、見落してしまいそうな感じでした。

厳しい戦争中、荒野での開拓伝道、そして戦後焼跡からの復興、この地に尊い一粒の種子が蒔かれ、今年五〇年を迎え

ようとしています。前田教会の五〇年、私どもの小さな家庭も三五年という道のりを、主に導かれて、歩ませていただきました。心から感謝いたします。

「あなたがたがわたしを選んだのではない。わたしがあなたがたを選んだのである。……」(ヨハネ、一五・一六)

昭和二九年、はじめて教会に導かれた時は、私どもの意志で、この教会で結婚式をと決めたように思いましたが、実にそれもこれも主の御計画にあつたのだと、今はそのお恵みに、ただただ感謝でいっぱいです。

先生の力強い説教と熱心な信徒の方々とのあたたかいお交わりを通して、こゝまで私どもの家族は導かれて参りましたが、三五年の間にはさまざまなことがありました。

転勤で東京志村栄光教会へ、そして逗子教会へ、それから九州へもどり、再度の転勤で渋谷教会へと、前田教会を離れましたが、前田教会はいつかは帰る教会だという思いでした。

渋谷教会の頃、榎本先生は、何度も九州から東京までいらっしやうて、わずかな信徒のため祈り、集会をもつて下さいました。先生は「御旨であれば地の果てまでも主のご用に走りますよ」と言われ、私どもはその恵みに感謝いたしました。

礼拝説教テープ等も、次々と送って下さり、さながら前田

教会で礼拝を守らせていただいているようでした。

「わたしはあなたがたの年老いるまで変らず、白髪となるまで、あなたがたを持ち運ぶ。わたしは造ったゆえ、必ず負い、持ち運び、かつ救う」(イザヤ 四六・四)。

何の功もない私に、このような聖言をいただいて今日まで支えられてきました。五〇年の記念の年このことをしっかりと心に刻み、造られた者として礼拝を守り、聖言によって整えられ、今一度十字架を仰ぎ見、歩みつづけたいと思います。



主の恵みに生かされて

水 村 静 江

私が、いつもこの教会で皆様とお交わりさせていただきます喜びを感謝いたします。

教会は夏は涼しく冬は暖かく、四季折りおりの沢山な花で、いつも迎えてくれます。教会に座らせていただく時は、すべて無で、ただ神様の前に座らせていただいています。だから、私は教会は安住の地と言っており、神様のあたたかい手の中にいるのです。親は、出来の悪い子供ほど可愛いと申しませんが、きっと神様もそのように思っているんじゃないかと、私一人の思いですが……。

小さな信仰ではございますが、神様と共に歩ませていただく今の私は、不安がないのです。神様は私の柱であり杖ですから、いつも主にあつての喜びがあり感謝です。

神様を知らなかった頃の私は常に不安がつきまといましたが、今では何が起きようと、主がおられる事の喜びをもって

歩ませていただいています。

「ぶどうの木」にも書きましたが池田操姉妹との出会いがなく、当時変わった建物だと思っていた前田教会に近づかなかつたら、おそらく神様を知らない人生を送ったかも知れないと思います。

つぎからつぎと色々思い出され、又、どんな風に私が変わって過ごしていただろうかと思うと、本当に不思議な出会いだと感謝いたします。

池田操姉から教えていただいた聖言は「何事も思いわずらうな」「幼な子のようにになりなさい」という聖言で信仰のありかたを教えていただいた事を今も思い出します。

水曜日の集会で初めて歌った讚美歌は、「いつくしみ深き友なるイエス」でした。又、前田のおばさんにさそわれて帆柱から前田までよく歩いて通いました事など、つい最近のように感じられます。榎本先生が私を初めて見た印象はどこか寂しそうな人だと思われたそうで、後で池田姉より聞きました。私が、小学校四年の時に死別した母は、誰よりも私を可愛いがっていましたので、私もひと時も母から離れずいつも、母にびつたりりの甘えん坊でした。だから大人になってもどこか甘えがあり、依頼心の強い人間だったからでしょう。

私は、このような自分自身がイヤでした。そのような時に教会、キリスト、信仰が私の弱い心を変えて、自分で歩める生涯が送れるようにと願うようになりました。

三人の子供を育てましたが、子供は神様に祈っていたいた大事なことですから、神さまを恐れる子供になってほしいと思います。親の心子ならずで、それぞれ親元を離れていきましたが、神様はこのような私でさえ、すばらしい力を教え導びいていただいたのですから、子供達も神様によって素晴らしい人生を送る事を確信しています。



創立五十周年に寄せて

— 救いのあかし —

主の愛の御手に導かれて

石 田 秀 子

尊い聖名をほめたたえて感謝致します。

五〇年の記念の時を迎え、小さな者も群に加えていただき、喜びを持って、主を待ち望んで感謝致します。

私は五五年四月七日に洗礼を受けさせていただき、九年目を迎えました。本当にあつという間の短い年月のような気がします。具体的な罪を持って主の前にころがりこんだ私は、なぜ私は生きていなければならないのか、と本当に生きる希望もなく「わたしの愚かによってわたしの傷は悪臭を放ち、腐れただけました」と詩篇に有るような、絶望的な状態の中で滅びの一步手前にいた私を、主は目をとめ、憐れんで下さったのです。

「暗黒の中に住んでいる民は大いなる光を見、死の地、死の陰に住んでいる人々に光がのぼった」との、聖言通り光を見たのです。

この様な罪人の頭である私の為に、主は十字架にかかって下さり、完全な救いの道を与えて下さったのです。

「恐れるなわたしはあなたをあがなった、わたしはあなたの名を呼んだあなたはわたしのものだ」。

「あなたがわたしを選んだのではない、わたしがあなたを選んだのである」。

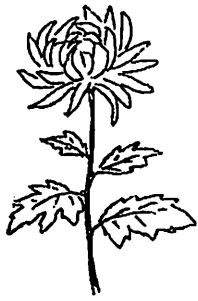
この聖言によって、私は主のものとされ、主に生かされている者とされたのです。今その時の事を思い出すと感謝で涙があふれます。

九年の間色々な出来事がありました。が、「あなたは善にして善を行われます」との聖言の通り、常に主は私に最善の事しかなさらない方でした。こんないやしい者を、ひとり子を賜うほどの愛を持って愛して下さい、全ての罪を許して神様の家族、子供として受け入れて下さって全責任者となって養って下さいました。そして恐れなく「アバ父よ」と祈り、深い交わりをいただいて信頼させて下さった事、又主の前に、罪なき者として、新しく生れ変らせていただいて、平安と喜びを持って、常に主と共に、日々を歩ませていただくいま、この大きな主の祝福と恵みを深く思い、心から感謝をささげます。この様な幸いな者として下さったのは、主の一方的な

「ご愛と、尊い御血潮のゆえである事を本当に心より感謝致します。」

この記念の時を迎えるに当たり、心を新たにし、原点に立ち帰って、主の前に姿勢を正し、「わたしたちは主を知ろう、せつに主を知ることが求めよう」と主ご自身を深く知る事を切に求めて行こう。そして、日々の歩みについても、常に主のみ旨をお伺いしつつ恵みに感じて慎しみ深く、素直にお従いする事の出来る者になりたいと願っております。

「みよわたしは世の終りまでいつもあなたと共にいる」といって下さる主から離れる事なく、主のご愛のみ手の内に留まり、主が与えて下さる私の使命を果たす事が出来る様に、聖言をもって導いて下さる事、又主が、み心のままに生かして下さる事を信じ、いのちの書に名がしるされている事を、希望とし喜びとして、み国に帰るその時まで、主を仰ぎ望みながら、歩み続けさせていたきたいと切に願っております。



救いの証

石 丸 到

私の家では、母が前田教会の信徒であったので、私は赤ん坊の頃から（正確には母親の体内にいる時から）教会に通っております。日曜学校も、当然のごとく通っております。私は子供の頃から神経が細やかで、家族以外の人の中では、人一倍気疲れする方でした。ですから家へ来客がある時などは、挨拶するのが嫌で、顔をあわせないように、客が帰るまで外へ出ていたりしました。また、親戚の家へ家族で行った時には、よく熱を出して寝込んだりしました。家へ帰ると、すっかり治ってしまうのですが。

そのような私でしたので、日曜学校の分級で声を出してお祈りをさせられたり、クリスマスに劇をしたりするのが嫌で、学年が進むにつれてだんだんと教会へいく足どりが重くなってきました。

ちょうどその頃、私が中学一年の冬、父の転勤で大阪へ引

越すことになったのです。クラブ活動での挫折など、嫌な中学校生活であったので、私にとって大阪への引越しは気楽なものでした。しかし、苦勞してやっと建てた新築の家を売り、長年勤めた会社を辞し、氣心のしれた友人と別れなければならなかった父や母にしてみれば、大変なことであったと思います。

大阪へ引越してきてから、母はすぐに教会を捜し礼拝を守っていたようですが、私は全く教会へは行かなくなりました。しかしお祈りは続けていました。続けていたというよりも、習慣づいて生活の一部になっていましたし、夜寝る前には祈っておかないと、明日事故に遭ったり病氣になったりするのではないかという不安があり、ほとんど義務的に祈っていました。そしてその祈りも、神様に対する感謝もなく、ただああしてください、こうしてくださいという自己中心的なものでありました。そして聖書も読まず礼拝にもいかずで聖言に触れることがなかった為、解決もなく、祈っても神様に委ねることができず、すぐに自分の殻の中に閉じこもって悩むという状態でした。

今にして思えば、その頃の私は、神様が天地万物を創造され、今も支配しておられ、祈りに応えてくださる、力あるお

方であるということ、知識としては知っていても、実感としては知らず、神様を「自分」が生きるための一つの手段くらしい程度のものにしか考えていなかったように思います。

しかし、そのような私をも神様はしっかりと捕えていてくださいました。ヨハネの黙示録三章一九節に「すべてわたしの愛している者を、わたしはしかつたり、懲らしめたりする。だから熱心になって悔い改めなさい」とありますが、神様は私を愛してくださっているが故に、私が本当に神様を知り、神様に立ち帰るように、懲らしめの中を通されました。

高校三年生くらいになると、自分の性格について悩むことが多くなり、自意識過剰で人の目ばかりを気にするようになっていました。すぐに自分と他人を比較し、ダメな自分を見て劣等感に悩むという毎日でした。

そんなある日、国語の授業で教科書の朗読を指名され、読み始めた時、途端に異常に緊張して頭がポーンと熱くなって激しい動悸に見舞われ、足がガクガク震えて声が出なくなってしまうしました。それ以来、クラスの中など、人前に立って話そうとすると、異常に緊張して激しい動悸で、苦しくて声が出なくなるようになってしまいました。それからというもの、国語の時間が恐ろしくて、あてられたらどうしようという不

安がいつも付きまとうようになりました。

なんとか治らないものかと、周りの人間はみんな石ころだと自分に言聞かせたり、声を低くしたり小さくしたり、いろいろやってみましたが治りませんでした。医者に見てもらくと「自意識過剰による精神的なものが原因で青年期にはよくあることです。」と言われました。

そのような中であって、人間というのは、自分の意識さえも思うように操ることのできない弱い存在であるということ、を思い知らされました。そして人間の知識や努力では解決できない事があるんだということをもっと知らされ「神様に寄り頼む以外に道はない」と思いました。そして再び教会（高槻バプテスト教会）へ行くようになり、聖書の聖言に解決を求めるようになりました。そうしているうちに、不思議と人前に立つ機会から遠ざけられ、いつの間にかいやされ、今では、出たがり・目立ちたがりといわれるまでに変えられてしまいました。

振り返ってみると、神様は、御自身から離れてしまいかけていた私を引戻すために、あのような中を通されたのだということがわかります。もし、なんの問題もなく安隠と生活していたなら、きっと私は神様を求めることはしなかったでしょう。

う。ローマ人への手紙八章二八節に「神は、神を愛する者たち、すなわち、ご計画に従って召された者たちと共に働いて、万事を益となるようにして下さることをわたしたちは知っている」とあるように、私にとつての精神的な苦しみも、神様に立ち帰るといふ最も大きな恵みへと変えられました。

それから、いろいろなことがありましたが、神様に信頼し祈り求めた時、自分の欲するとおりにならなくても、常に結果としてもっともよい様に導いて下さっています。

このように、現実をもつて神様の御力を体験させていたばかりながら、わたしの日々の歩みは神様に感謝することの少ない、罪深いものです。しかしこのような者をも神様は自分の子として受け入れ、罪を許し、導いてくださいますから、感謝しつつ、いつも神様の御心を求めて、一足一足歩ませていただきたいと思っております。



救い主との出会い

加藤千代

「あなたの足の靴を脱ぎなさい。あなたが立っている所は、聖なる所である。」聖書

「靴を脱ぐとは過去の汚いものを捨てる事だ。どうやって？告白しなさい。神の前に祈りなさい。」プリントにはそう書いてありました。この時私の心は強い光に照らされ、今まで誰もがしている事だものと自分で自分をゆるしていた私の中の汚いものを、どうしても捨てねばならぬものだと迫られ、そこに座って祈り始めました。長い間、主人と教会に行っていました。自分で祈るのは初めてです。ただ思いつくまま、その汚いものを吐き出すように「私はこうなんです。こんな思いを持っていました」と見えなお方に申し上げていきました。涙があふれ流れ、その涙のうちに祈り終え、頭を上げますと、さっきまで千さんの重荷のように頭を押えていたものが無いのです。そして私は自分でも愛想がつかるような汚

れた事も赦して下さい、ただ赦して下さい優しいお方を覚えたのです。其処そこにおいて下さって——ああ、なんと優しい!! 私は生まれてかつて覚えたことの無い、その優しさの中に、ひれ伏しました。今まで誰にも従おうとしなかった強情な私ですが、こんな優しいお方に従わないで私は誰に従うだろうか、

「あなたにお従います！」と決心したのです。

昭和二九年二月一八日、九州のアパートの一室でした。

長女の幼稚園入園不合格の通知をアパートの郵便受けに発見し一緒に受けた他の三人の方が合格なのに娘はどうして？見栄坊の私は奈落の底に突き落とされた思いで自分の部屋に入り、うずくまりました。小さい時から劣等感にさいなまれ、しかも表面は明るくふるまおうとする、二〇才ぐらいになると、この心の葛藤に疲れ果て、私のような心の動きをする者があるだろうか、と医学書を引いてみると「精神衰弱」という項目に私の状態は当てはまっている、それは治療の見込み無しとの診断がなされていて絶望した記憶もあるのですが、結婚し主人の愛の中に、子育ての繁忙の中に、どうにか三三年の歩みが続けてきました。

しかし、こんなショックに遭うとたちまちひどい劣等感に

陥ります。——でもよく考えてみると、あれは仏教の幼稚園なのにも申し込み書の宗教の欄にキリスト教と書いて出した、それなら落ちるはずだ、娘はキリスト教の幼稚園でなくてはいけない、最近いそがしくて行けなくなっていたあの教会の牧師先生にご相談しよう、でもお名前を知らない、そうだ、メッセージのプリントが届いていたはずだ、先生のお名前は？とプリントをめぐってゆくうちに、その内容に捕えられ、前述の恵にあずかったのです。私は目が覚めたように、あのお優しい方がイエス様に違いない、イエス様とは？と家にあつた聖書をむさぼるように読み出したのです。かたくな屈折の限りを尽くした私の心も、この主の愛に溶かされ、包まれ、正され、まさ道をひた走りに走る者とされました。感謝は尽きません。「わたしたちは、神がわたくしたちに対して持つておられる愛を知り、かつ信じている。神は愛である」

(一・ヨハネ四・一六)



神の選び

菊池修

兄にクリスチャンの友人がいて、農繁期になると託児所を設けて、イギリス人の宣教師と共に子ども達を集めて保育をしておりました。兄は子供集め等を手伝っていた様で、私も先に立って近所の子供達を引き連れ託児所に行き、イエス様のお話しを聞いたり、遊戯をしたりして楽しく時を過ごしました。その後、土曜日の午後、土曜学校(教会学校)が開かれる様になり、学校から帰って来ると友人達を誘って出かけたものでした。そのためか、小さい時から「私が死んだら坊さんのお経なんかいらぬから、讚美歌を歌って欲しい」と言っていました。又何か信仰するならキリスト教信者になりたいと言っていました。田舎の事として近くに教会はなく、そのすべを知らないまま時を過ごしてしまいました。

成人して色々苦勞をし、境遇が変わり、声楽の勉強をしなくては上京し、役所に勤める様になりました。役所の寮から

の通勤の途中でも、歌の好きな私はいつも歌を歌いながら歩いていました。寮の近くに小さい印刷工場がありましたが、その前を通るときいつも戸を開けて見る人がいました。

ある日の夕方、コーラスの練習に行く為に、何時もの様に歌いながら歩いていると、印刷工場の戸を開けて見る人が出て来て、前になったり、後になったりして、同じ都電の停留所まで行き、電車を待っている間にその人が私の所に来て話しかけ、「歌が好きの様だが、チャペルセンターの聖歌隊に入らないか」と誘われました。国会議事堂の前で役所に隣接していたので、「昼休みにでも指揮者に逢う様に」との事を出かけて行きました。テストを受けたら、「次の土曜日から来なさい」と言われ行く様になりました。その頃は何も知らない私でしたが、指揮者は教会音楽家として有名な中田羽後先生だったのです。

今にして思えば、神様は私の様な者を、何とすばらしい牧師先生方の下に呼ばれたのかと感謝で一杯です。中田先生のすばらしい信仰の下で信者とさせていただきました。主人の仕事で北九州へ来て、あちこちの教会を尋ねても、何となく感激がないため、電話番号簿で調べていたら、何と、家から一番近い歩いて行ける前田教会が目に入り、訪ねてみました。

礼拝に出席して私の求めていたのはこの教会だと感じ、それからずっと礼拝に出席させていただきました。教会の皆さんが、それぞれ強い信仰を持っておられる事を感じながら、約一五年間礼拝に出席させていただきました。そして家庭の事情で市原の地に来てしまい、今は仕事の都合で行けない事も多々ありますが、近くの伝道所に出席させていただいております。同じ神様を信じるのだから、どこでも良いではないかと思いますが、何か少しづつ違う様な気がしてなりません。もう聖書に忠実な前田教会を離れる事は出来ません。息子の公治もやはり前田教会でなくてはと言っております。

神様は何事も最善に導いて下さる事を信じ、おゆだねして感謝しつつ毎日を送らせていただいております。

「あなたがたがわたしを選んだのではない。わたしがあなたをたを選んだのである」(ヨハネ一五・一六) アーメン。



我誇るはイエス・キリストを知る事のみ

貞 サユリ

前田教会の五〇周年、唯々感謝で一杯です。当時の事を、私は何も存じませんが、その時期私は幼少の頃でした。

同じ八幡のナザレン教会に、母に手を引かれ集会に行っていた頃だと思えます。私の記憶に残っている事は、五才の頃でしょうか。最初に覚えた聖言、「エホバは我が牧者なり、我乏しき事あらじ」。五〇年前に覚えた聖言が、今なお新鮮で、昔も今も変る事のない主の御愛に触れる喜びと感謝で一杯です。中学の頃は日本基督教団、二〇代以降はバプテスト、ホーリネス（松江時代）と教会を離れていた時期はあまりありません。

長いばかりで、まだまだ幼稚な信仰に過ぎませんが、「この他、別に救いある事なし。」（使徒行伝、四・一二）の信念は、中学生の頃から脳裏にきざみ込まれていた様な気がします。長い月日をふり返って見ると、いばらの多い道程でした。

でも主がいつも共にいて助け、力と勇気を与えて下さり、又私の人生に神様なしでは生きて行けなかったのです。

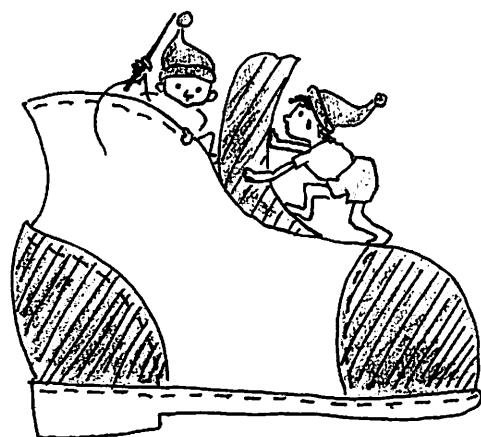
前田教会に導かれて一七年目を迎えます。唯、単に年輪を重ねるだけでなく、絶えず主と共に生きて働き、この尊い御救いにあずからせていただく喜び、言い尽くす事の出来ない感謝に浸っています。まだまだ実生活の面に於て訓練され、精錬された鋼はがねの様な逞ましい信仰を持ちたいと願っています。

現在は、家族共々主に従いつつ歩んでいる、とは言っても、子供達は、親の理想通りの行動も出来ず、静かに主を呼び求める姿勢も弱く、生活の基本的な重要性について（信仰）語りかけの足りなさを覚えます。すべて子供の信仰は主が導き、主が助けて下さり、時至らばきつと…と信念を持っています。こうして今生かされている幸せ、主が私を支え働かせていただける喜び、（家事に過ぎませんが）一日一日を大切に生き、集会の度に恵みと力をいただきながら、聖言に従って歩みたいと願っています。口を大きく開き、声を出して祈り讚美が出来る。まなこを開いて聖書を読む事が出来る。両足で歩き、教会で御霊に触れる事の幸い、数限りない大きな恵みをいただいでいて感謝せずにおれません。今後も益々主の愛

にこたえ、一歩一歩前進して行きたいと願ってやみません。

私の感銘深いみことば

島崎博子



「わたしが来たのは、義人を招くためではなく、罪人を招くためである」(マタイ九・一二)

「兄弟たちよ。あなたがたの召された時のことを考えてみるがよい。人間的には、知恵のある者が多くはなく、権力のある者も多くはなく、身分の高い者も多くはない。それなのに神は、知者ではなく、この世の愚かな者を選び、強い者ではなく、この世の弱い者を選び、有力な者を無力な者にするために、この世で身分の低い者や軽んじられている者、すなわち、無きに等しい者を、あえて選ばれたのである。それは、どんな人間でも、神のみまえに誇ることがないためである。あなたがたがキリスト・イエスにあるのは、神によるのである。キリストは神に立てられて、わたしたちの知恵となり、義と聖とあがないになられたのである。それは、「誇る者は主を誇れ」と書いてあるとおり

である」(一・コリント一・二六―三一)

私は若い頃、ある自力宗教に凝って自分より偉い者はないと思っていた。ある事件が起こり自力で行おうとして私は全くうちのめされてしまった。大きな挫折だったのである。今まで自分は何でも出来ると、大きな自信を持っていた私は、無力な自分、即ち何も出来ない自分を感じ、自己嫌悪におち入り、また人に大きな迷惑をかけ、罪をおかしたのである。

その時キリストの「重荷を負える者はわれに來たれ」のみことばを思い、二、三教会の門を叩いたが、縁あって前田教会の一員に加えていただいたのである。

「わたしが来たのは罪人を招くためである」と仰せられるキリストのみことばに罪深い私は大きな慰めと感動を覚えさせていただいた。又一・コリント一・二六―三一にありますように神様の選び召されるのは、無きに等しい者であると言う事、又それはキリストのあがないによる事で本当に有難い事だと思ふ。又何も出来ない自分、出来るのは神様のあわれみによる事を深く感じさせられる。自分の無力をつくづく感ずる時「無きに等しい者をあえて選ばれた」とのみことばに全き救いをおぼえさしていたのである。

「感謝して受けるなら、何一つ捨てるべきものはない。そ

れらは、神のことばと祈とによって、きよめられるからである」

(一・テモテ四・四―五)

私は主人を亡くした時、やはり主人を亡くした近所の人で、又子供もない人から短歌に入らないかとしきりにすすめられた。短歌はあまり好きではないし、他にする事はあるし気持はすすまなかつたが、その人があまりすすめるので、近所に友達の出来るのもいいと思つて入つたのである。ところがその人は多く病を持ち、高血圧、喘息、又エコーで見れば内臓のほとんどに囊腫があるとの事だった。

さつそく喘息のため呼ばれた。息が苦しくてたまらない状態なのであるが、もう病院もしまつた時間だったので、一緒に救急病院へ行き、吸入してやつとおさまつた。これはしよつちゆうである。それに高血圧のため蜘蛛^{くま}膜下出血で夜中に発作がおこり、救急車で一緒に行き頭蓋骨を切つて中の動脈瘤を除いてクリップで血管をつないで命が助かつたのである。これが五年前であり、昨年三年八ヶ月ぶりに又それと同じ病で手術して助かり、今度も救急車でついて行つた。身の回りの品や必需品を持って行き、通帳をあづけられ金銭の出し入れから又借家の家賃の取立てまでした。

こうして入った短歌だが、短歌もともと好きでないのでちっとも上達しない、私には才能がないのだ、何のために入った、この人の手伝いするために入ったようだ。そう思った時、はっとみことばが浮んだ。それは「感謝して受けるなら何一つ捨てるべきものはない」というみことばである。私はどれだけの人のためにつくした事があるだろうか、おばあちゃんにも主人にも、あまりつくす事なく別れている。つくすどころか、私の持病のため、子育ては全部おばあちゃんにしてもらったようなものだ。人につくす事の少なかつた私に、短歌に入る事によって、神様は人につくす事を教えて下さったのである。

ある方の坊ちゃんが小倉で野球に凝って高校を二年ダブられたそうだ。その時奥様は感謝しようとして祈られたそうだ。そうしたらその坊ちゃんがガダルカナルの激戦で食べるものもなく死ぬ人が多いのに、野球できたえた体力で無事帰還されたと榎本先生が言われた。本当に「どんな事でも感謝して受ければ捨つべきものはない」のだ。私も短歌はちっとも上達しないが、神様は私に人につくす事を教えて下さったのである。有難い事だと思う。又自分が病気をするより人の病気の手助けをさせて頂くのは大いなる感謝と思う。

母と家内と私と

下 川 泰 広

榎本先生がこの地に遣わされて五〇年の歳月を経たこの素晴らしい前田教会に導かれ、多くの信者の皆様と共に主を讃美する事が出来る事は、神様のあわれみによる御恵みと感謝致します。

神様に背を向けて頑固なまでに神様を認めようとしなかつた私の心を、神様の計画のもとに様々の問題の中を通して、四五年間かけてかん養され、神様のもとに立ち返るように導いて下さいました。私の一切の罪を神様のひとり子であられるイエス様の尊い血潮によって贖われ、今、神の子として生かされて居る事が不思議に思われます。

私の四八年の生涯を振り返ると、人生の節目節目に神様の偉大な力と、人知では測り知る事の出来ない御業を感じます。私の母は先妻の八人の子供の居る農家の後妻として嫁ぎ、私と年子の妹と3才下の弟が生まれ、妹は一才の時病死、私も

子供の頃大病を患い、一時は医者にも見放されたそうですが、どうか一命をとりとめたそうです。母は私が心配をかける度に「お前が死んで妹が助かって居たら良かったのに」と口癖の様に言っていました。

又、子供が多くて、母の遠縁の子供に恵まれない家に養子の相談があったそうですが、母にとって私が最初の子供で手離す事が出来なかったそうです。もし、この時母が手離していたら当地に来る事もなく、神様を知る機会に恵まれる事はなかったと思います。

優しい働き者の母が、私が小学校五年生の時、過労から眼病にかかりあらゆる治療を受けましたが、光を取り戻す事はできませんでした。当初は悲歎にくれ、死ぬ事も考えていた様ですが、子供の為に生きなければと思い直し、次第に明るさを取り戻し、食事、洗濯や孫の子守りと以前と変らぬ生活に戻りました。しかし、当時の田舎の事ゆえ、障害者に対する理解が今程ないためいろいろな偏見があり、子供心に辛い思いもしましたが、それを何時も慰めてくれたのは母でした。失明してから、私達に対する愛が一層強くなったようです。

母は独りでは何処に出かけることもできなくなり、何処かに行く時に母を引率して行くのは私の役目でした。当時は交

通機関も少なく、幹線しかバスの便がありません。バス停から何キロも歩く事が当り前で、田舎道を母の手を引いて周囲の情景を説明しながら歩いた頃の母の手の感触は今も忘れる事ができません。時折すれ違う人が「あの人はメクラだ可哀そうに」と哀れむ声を耳にする事もありましたが、恥ずかしうと思つたことはありませんでした。母は人の往来が多くなると手を離して私を一足先にやり、私の背中を掴んで歩き、一見して盲人である事が解らない様に気遣いをしていました。それは子供に少しでも辛い思いをさせまいとする、母の精一杯の愛情だったのです。複雑な家庭環境の影響もあり、非行に走りかけた時も叱る事はありませんでした。

一九才の時、家庭の事情もあつて家を出る事になり、生れて初めて母と離れ、八幡に来て現在の会社に就職し、寮生活を送っていました。ある年の秋も終ろうとした頃、母から冬の寝具が届き、中に一枚の便箋が入っていました。その便箋には母の直筆で私の安否と寝具の手入れについて書かれていました。目の見えない母が一生に一度私に宛てた手紙でした。不出来な子供であっても、親にとって子供はかけがえのない者である事を痛切に感じました。

その後、三年間程寮生活を送っていましたが、寂しさと自

由の身、次第に生活が乱れ、このままでは自分自身が駄目になりそうで寮を出る決心をしました。下宿を捜している時、尾倉町の不動産屋に紹介されたのが、下松の家でした。当時、下松の家は祖父、父と相續いて亡くし、大変な時機にもかかわらず、全員が信仰に支えられて実に明るい家庭でした。そして全く素性も知れない私を受け入れ、家族同様に接し、私が味わう事の無い家庭の暖かさでした。

その後長女であった家内との結婚話が出た時は、周囲の心配な声もあった様ですが、母と家内は総てを主に委ねて従って行けば大丈夫と確信を持って問題解決に当たり、私達は前田教会で結婚式を挙げました。しかし神を認めない私と神中心の生活を送っている家内とは全く価値感が違い、辛い思いもさせました。私が何をしようとすると言葉を浴びせようと一言の反論もしないのに、私は一人で立腹して遊ぶことに奔走していました。いくらこの世の享樂に熱中しても、一時は楽しいようですが決して心を満たすことなく、空しさだけが残る毎日でした。その様な時に家内は祈ってくれたのです。神様はその祈りに応えられて私はとらえられる時が来たのです。

帰郷の折に見た晩年の母の姿に、私は自分勝手な人生を

送って来たのかと胸を刺される思いがしました。何の代償も求めないで、どんなに辛くても子供の為にと生きて来た母、そして私の我がままを受け入れて来てくれた家内によって、私はやっと目が覚めたのです。そして六〇年四月、これまで神様に背いて来た罪を悔い改め、主イエスをまことの神として受け入れさせていただくことができました。そしてその記念すべき年の一月二四日に母は安心したかの様にこの世を去ったのです。母の死も私に信仰が与えられていたからこそ神の御業として受け入れられ、主によって慰められ、心の傷をいやされました事は感謝でございました。このように母の無償の愛と家内のひたむきな愛によって、神様の偉大なる愛を悟らしていただきました。



神の約束

正野百合子

私の母は昭和六年に結婚して、直方に住んでいました。

近くに教会があり、集会のたびに、教会の奥さんが誘いに来られたそうです。父は仕事で留守が多く、母は誘われるたびに教会に行き、まもなく洗礼を受けました。ところがそのことが父の両親に知れ、ヤソ教になるなどともない嫁だ、自分達の近くにおいて監視しなければと、植木町の両親の近くに移り住むことになりました。教会もない古い因習のある小さな町です。私の生まれた頃もそこに住んでいました。戦争中は父の仕事の関係で佐世保にいましたが、私が小学校一年の時帰ってきて、植木町で小中高校まで過ごしました。生活が大変な時代だったこともあって、母は教会に行っていないでいましたが、困った時や試験の日等は、お祈りしているからねと言って安心させてくれました。

中学一年の時、宿題で読書感想文が出ました。作文の苦手

な私は母に手伝ってもらって、やっと提出しました。そしてら良くできていると言って、全校生徒の前で発表することになりました。それがイエスキリストという題だったのです。イエス様が処女マリヤから生まれられましたと読んだら皆が大笑いして恥ずかしく思ったことを覚えています。

直方の教会ではいつも母のために祈り、文書を送って励まして居て下さったのでしよう。母も父には内緒で献金を送っていました。

私が高校三年生になって、進路のことで、思うようにいかず、自分に失望し、父が頑固だから、もっとお金持ちだったらと悔んでいました。そしてこんな者でも何か人の役に立つ道に進もうと製鉄病院の看護学校に入りました。全寮制で父から解放されて自由になりました。そしていつとはなしに、教会に行きたいという気になり、母の知人の行かれていた北九州復興教会に行くようになりました。

初めて教会に行った時、大分遅れて行きましたが、讃美歌を聞いていると涙があふれ出て来て止まりませんでした。

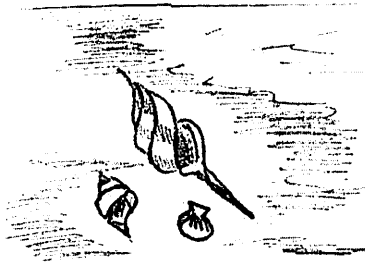
ここに私の求めていたものがあつたと思えました。その時姉と一緒に来てもらっていたのですが、それから姉も教会に行くようになり、妹も続いて行くようになって、救われまし

た。

神様の不思議なお導きにより私が正野に嫁いでからは、母も前田教会に来られるようになり喜んで楽しみにしていました。

父も数年前から身体も弱り病気がちで、不安になり、今までの仏教の信仰では、どうにもならず、お寺とも縁を切って、教会に近づけさせていただくようになりました。長い間かかりましたが、「主イエスを信ぜよ、さらば汝も汝の家族も救われん」(使徒一六・三一)とお約束を成就して下さいました。一番母を困らせた私を用いてわが家に信仰をリバイブさせて下さるから不思議です。

「わが思いは、あなたがたの思いとは異なり、わが道は、あなたがたの道とは異なっている」(イザヤ五五・八)



榎本先生にお会いして

大阪集会 多屋千枝子

尊き主の聖名を心から崇め、讚美申し上げます。

この秋八幡前田教会が、五〇周年を迎えられますこと、心からお喜び申し上げます。神様が御地に牧者をおたてになり、尊く御用いになり、主の御栄光を御地にあらわして下さいましたこと、心から感謝申し上げます。

二度にわたり、重い肺炎にかかられましたが、主の御いやしにより、更にお元気で御地のみならず、遠くここ大阪までも、足を運ばれ、主の御恵みを私共に、熱心にのべ伝えて力強く励まして下さいますこと、本当に心から感謝致しております。

私は一〇年程以前に、大阪集会に愛する加藤千代姉に連れて行っていただきました。昭和五三年三月に、頼り切っていた、主人が天に召されました。浜寺聖書教会で主人も私も救いを受け長い信仰生活を歩んで来たつもりでしたが、急に

主人に死別しますと、全くお手上げ状態で、主人が居てくれたらと思う事ばかりで、暗い谷間に落込んだような有様で、どうしようもありませんでした。そんな折、加藤姉にさそわれて、大阪の御集会に参りました。

先生は、慈父のような優しさと、落着きをもって、メッセーヂを力強くされ、又一人ひとりの姉妹のことばに、ニコニコと耳をかたむけ、私の悩みも、熱心に聞いて下さいました。

先生は「イエス様があなたの胸ぐらをつかんで、『こんなに、あなたを愛しているのが、分りませんか』と仰言っているのですよ。多屋さんは、これから、しっかりとした信仰を持つて、主ののみお従いして、歩みなさい」と力強く励まして下さいました。十年前の事ながら、昨日のように、今も耳に残っております。人や状態や、環境に左右されず、主ののみ信頼するように、みことばにはしっかりとお従いすること、頭だけの信仰では、歩めないこと、筆舌につくし難い程、いろいろと教え導いて下さいました。

非常に困難な事も、「あなたの道を主にゆだねよ。主に信頼せよ、主はそれをなすとげ」（詩三七・五）又、余りにも、かたくなな人と対して困惑した時、「王の心は、主の手のうちにあって、水の流れのようだ、主はみこころのままにこれ

を導かれる」（箴言一一・二）を教えていただき、かつ「あなたがたは強く、かつ勇ましくなければならぬ。彼らを恐れ、おののいてはならない。あなたの神、主があなたと共に行かれるからである。主は決してあなたを見放さず、またあなたを見捨てられないであろう」（申命記三一・六）時々折々にまことに適切なおことばとすすめ、導きをいただき、どうしていいか分らない、弱いものに、力強い励ましをいただき、私の生涯の幸い、如何なれば、主は私のような者に、このような導きの師と会わせて下さったのかしら、と特別な御恵みに、感謝のつきる事もございません。

大阪集会の素晴らしい、姉妹方とも、すっかりおなじみになり、連れて来て下さった加藤姉に感謝しています。御教会の上に更に勝る、素晴らしい御祝福がございますように、主の御守りを心からお祈り申し上げます。



主はわたしの牧者

堤 善 弘

「神は必ず祈りに責任をもって答えられる」

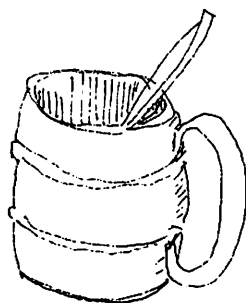
先ず感謝、私が神に捕えられたのは、今から三八年前の一九五一年。佐賀県の小城の福音ルーテル教会でした。生ぬるい信仰しか持ち得ない私ですが、今日まで、本当に人知では到底測り知る事の出来ない神の御恩寵の下で豊かに過ごさせていだいております。神のなさる事は、決してそつがなく、その時々に応じて「ああ、そうだったのか」と私の方が驚く事ばかりです。

前田教会の日曜礼拝に出席させていただくようになって約二三年にもなります。その頃は私の内なる信仰の火は既に消えかかり、素直に御言葉を捕らえる事ができない状態でした。しかし神の御意志は私を前田教会へと連れもどしました。そして常に主の御あとに謙虚に従い堂々と生きて居られる皆様の方をみて、私もその群から離れないようにと祈って歩いて

おります。

今年いよいよ六〇才という人生の節目を迎える事になりました。これからは、天国に入るにふさわしい者としての毎日の生活でありたい、そしてこれから与えられているこの生命をいとおしんで、本当に大切に生きてゆきたいと祈って居ります。詩篇 第二三篇

「主はわたしの牧者であって、わたしには乏しいことがない。主はわたしを緑の牧場に伏させ、いこいのみぎわに伴われる。主はわたしの魂をいきかえらせ、み名のためにわたしを正しい道に導かれる。たといわたしは死の陰の谷を歩むとも、わざわいを恐れませぬ。あなたがわたしと共におられるからです。」



主の御手に導かれて

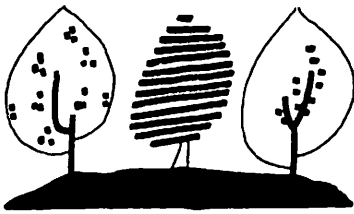
長尾 千枝子

神様の事もイエス様の事も何も知らないこんな小さい者を八幡の地に來させていたでいて、毎朝教会に出させていたでいき、先生御夫妻を始め河本様御家族の方々との交わりの中で今まで一度も出会った事のない、言葉で言い表わす事の出来ないものを感じました。先生のお話を聞いているうちに心に深く忘れる事の出来ない未だ見ざる誠の道を信じてとのお言葉は、今日までの長い間悲しみ苦しみの中にあつてただ一つの心の支えとなりました。

主人の所に参り間もなく主人に召集がかかり、四年余り戦地にありました。主人が属した松尾部隊は殆んど全滅となりましたが、その時主人は任務をおびて台湾にあり、部隊に帰る時はもう上海が危なくて、あちこちの港に隠れては、やっと帰ったと聞いておりました。そんな中にあつて無事帰還する事の出来たのも先生を始め皆様のお祈りのお陰と思いま

す。

それから今日まで色々な事がありました。一時は教会を全く離れてしまい、世の波に流されていた私が、又教会に來る様になりました。ノイローゼ気味になってしまっている私は神様を信じて行かなければどうする事も出来ないように追いつめられ、昨年洗礼を受けさせていただきました。永い間洗礼を受けようとしませんでした。去年は是非共受けなければと決心をする時が与えられた事を感謝致します。間違いだらけのこんな私、絶えず主を仰ぎ見て神のみ手によりそれを修復していただかないと人並みの事も出来ないこんな者を今日まで見守つて下さいました事を感謝します。



一つのみことばと神様のみ旨

野村 美恵子

教会が八幡の地に開かれて五〇年を迎える。神様がこの所に教会を建てて下さった。その時既に私も教会員の一人として、加えられていたのだなと目をとじて思いをめぐらせます。

「あなたの目は、まだできあがらないわたしのからだを見られた。わたしのためにつくられたわがよわいの日のまだ一日もなかったとき、その日はことごとくあなたの書にしろされた」(詩篇二三九・一六)

神様の御計画が、このいやしい者の上に貫かれた故に私は今日があります。私の罪のあがないとなって、十字架の上に死んで下さった主の御愛、又この為にひとり子をも賜わった神様の御愛、限りなきはかり知る事のできないご愛といわれますが、私はいうことのできないご愛に涙するばかりでした。今一度新しく感謝し、讚美し、よみがえって共に歩いて下

さっている主イエス様を仰ぎ、教会に近づけられて四〇年を迎えようとしている自らを省みて、記念の塚を建てさせていただく幸いを感謝します。

救にあずかった時の事は、以前「ぶどうの木」に書かせていただきましたので省略致しますが、「汝はきょう我と共にパラダイスにあるべし」と私に与えられた一つのみことばは、四〇年に近い私達の家庭の基礎の石であり、日々の生活の糧として現実の中に生きて働いて下さいました。主と共に居て下さる私達の生活、そこは真に安住の地であり、パラダイスであります。夕べの祈りの時今日も主にあつて一日を終らせていただきました、と感謝して主を見あげる時、たとえその日がきびしい一日であったとしても、既に勝利を得させていただけます。平安と明日への希望が与えられます。こうして、我と共に……と言われた主ご自身が私と共に歩いて下さったからこそ長い道のりを踏み外すことなく、今日まで来ることができたのだと思います。

いつの日かわかりませんが、必ず来る日、この一つのみことばと共に天に召されることになれば、何とすばらしい結論でしょうか！。主の十字架のかたわらに立てられた砕かれた罪人のように……。

しかし現実の戦の中で、私を支えて下さったのは、聖書の中の一つひとつのみことばでした。ある時は、アブラハムの信仰によって、教えられ、励まされ、ヨブの信仰を通し力づけられ、にぶい頭ではとても沢山なみことばは覚えられませんでした。聖書の各所から、折に合う一つの聖言をもって信仰の歩みを導かれて参りました。無から有を呼び出す神様、死人を生かすことさえできる神様の前に必死の思いで祈った事も度々でした。

まだ神様を知らなかった時の私は、神様はおられるだろう、けれど私は自分の力で歩くのだ、とツツパって懸命に苦しんで歩いていました。どんなに頑張っても、小さな人間の力しか持たない自分に力尽きて、信仰とはどう歩く事だろうか?と思いついた頃、結婚の道が開かれ、信仰の一步が始まりましたが、その頃はほんとに自分中心の御恵み信者でありました。そんな私でしたけれど、ある時自らの罪を深く知らされた時、悔い改めなければならぬ事を教えられたのです。十字架に流された御血の故に私の罪が許される。その上神の子としての身分が与えられる。こんなすばらしい救にあずかる事ができたのです。「わたしたちが神の子と呼ばれるためには、どんなに大きな愛を父から賜わったことか、よく考え

てみなさい:」

(一・ヨハネ三・一)

神様のご愛のひとかけらでも知れば、もはや自分が生きているのではない、神様のあわれみによって生かされている者である事を悟らせられ、さまざま問題の中も、あわれみに依りすがり、聖言に信頼して従う、これ以外に私の道はないのです。まことに信仰もたどたどしい、歩みも恥ずかしい歩みしかできない私を、主は忍耐をもって四〇年導いて下さいました。主は全てをご存知ですから私は安心です。み前においてつくろうものは何もないからです。今日も神様のみ旨を教えて下さい。又従う心を与えて下さい。くだいた心を与えて下さいと祈りながら更に来る日々を望んでいます。

花咲く第二の人生に

通算して二五、六年勤務したと思います。その仕事の終りに近づいた時、先生方はじめ多くの人は、これからどうするのか、毎日が日曜日ではけてしまいますよ、パートで手伝ってくれないか等いろいろ心配してくれました。私は再就職などんでもない事だと断りました。決して心配ないのですよ、私はやる事が山程あるから、どうしようかと思う程です、と

言う皆様、あきれ顔しておられましたか……。

私はこの日を大きな希望に輝いていたと言えば一寸大げさかも知れませんが、ほんとに、退職の日を花の人生だと言つてあいさつして辞めました。

第一の喜びはこれからは集会に近づく事ができる。今まで限られていたから、これからは全集会に出させていただけ、次はいろいろのやりたい事、絵を習いたい、洋裁も少し新しい事を教えていただきたい等々。遂に六一年三月三十一日仕事に終止符を打ちました。

あれから三年半たった今考えます。神様は私の願いの通りに道を備えて下さいました。一日として空しい日はありません。まだまだ時間が足りない位ですが、これは私の動きがにぶれているから、仕事がさばけないせいだと思つて、笑つてしまいます。あれもやりたい、これもしたいと思つた事は何も出来ませんでした、その事について、みじんも悔いはありません。主はいつも二つの道に、私がさしかかったら「先づ神の国と神の義を求めなさい」とすかさず語つて下さるので、従うために不必要なものは捨てる事に致しております。退職後はどういふ訳か体調も変つて、こんなはずではなかったと思う事も起つて参りますが、神様の与えられるものは全

て良いものですから、感謝致します。

「わたしの恵みはあなたに対して十分である。わたしの力は弱いところに完全にあらわれる」(一・コリント二一・九)
弱くても、強くても、問題ではありません。ただ主のあわれみをうけ、ご愛のうちにおらせていただいて私は日々是好日です感謝のほかありません。



(イザヤの預言)

恩寵の日々

秦

タネノ

私は一八歳の時父を亡くしました。その時から人の死について真剣に考えるようになりました。人はなぜ死ぬのだろう、死んだらどうなるのだろうかと、その事はいつも私の脳裏から離れることなく、むしろ恐れとして、広く輪となり波紋となり悩みとなりました。けれども神様を知るまでは解決に至りませんでした。「罪の支払う報酬は死である。しかし神の賜物は、わたしたちの主キリスト・イエスにおける永遠のいのちである」。

年月を経て世の中の矛盾に流され、事なかれ主義に心の葛藤を覚え、暗中模索の日を過ごし、自分中心に歩いた私でした。そうしたすべての道にも神の深い摂理のあった事、主のみ許に導き入れようとの恵みの試練であり、計りしれないご愛であった事を心から感謝と感激の思いで頁をめぐっております。人の本分をもわきまえず、迷いに迷った私を主はあ

れみ、最大の愛のみ手をのべて下さいました。暗から光へ尊い御救いに導き入れられ、喜びに涙して新しい生活へと変えられ、受洗にあずかったのは昭和三三年でございました(門司大里教会)。

新しく生まれ変わった生活は、今までにない新鮮な日々でした。

「先ず神の国と神の義とを求めよ」私はみことばに従う外によるこびを見い出す何物もありません。

「すべての支配、権威、権力、権勢の上におき、……教会はキリストのからだであって、すべてのものをすべてのものうちに満たしているかたが、満ちみちているものにほかならない」とありますように先ず教会に行こう、みたまの助けによって歩かせていただく、無きに等しい私を選んで下さった神様のご愛をもっと深く知りたいと切に願ひ祈りました。それでもなお予期せぬ波風は、信仰生活をゆすぶり続けることがしばしばでした。

「悩みの日にわたしを呼べ、わたしはあなたを助ける」と涙ながらに主にすがるより道なく祈り続けてきました。この様な道筋をどんなに切なく繰返してきたことでしょうか。

「わたしの恵みはあなたに対して十分である」とのみ声に励

まされつつ信仰から信仰、恵みから恵み、力から力へと、いつも主のみつばさの陰に避けどころを得させていただきました。

昭和五五年、前田教会に転入させていただきました。土の器なる私、弱く愚かな罪人にも主のご計画を遂行して下さい。素晴らしさを神の摂理と啓示であると感謝とよるこびにあふれます。(あなたがたの救われたのは神の恵みによるのである)

はじめて榎本先生を訪問しての帰り道、かつて体験した事のない平安が心に満ちあふれました。肩の荷を下ろすとよく申しますが、あの時の満たされた心境を今でも忘れる事は出来ません。(わたしは平安をあなたがたに残して行く。わたしの平安をあなたがたに与える。わたしが与えるのは、世が与えるようなものとは異なる。あなたがたは心を騒がせるな、またおじけるな。)

それから主人共々御国への歩みを進ませていただいております。十分な恵みと慰めをうけ、自分をわきまえ、思い上げる事なく主に従い行かせて下さいと祈り願っております。(足から靴を脱ぎなさい。あなたが立っているその場所は聖なる地だからである)

昨年主人が退職致しましてから、二人だけの家拝を毎朝もたせていただくように導かれ行っております。(みことばが開けると光を放って無学な者に知恵を与えます)

私達の歩みは真に小さな又つまづきの多い日々でございますが、「恥は私のもの、栄光は神のもの」とわきまえ、天に宝を積む者と変えられたことを心から感謝しております。何事もせねばならないからするのではなく、恵みに満たされ内なるものにおし出されて、あふれる力におし出されて出来るよろこびを知る者とされました。いつ主に召されても思う年齢に向かっています。私に与えられた使命を全うできるように従い歩ませて下さいと、ひたすらお祈りしております。主にすがる我に悩みはなし

十字架のみ許に荷を下ろせば

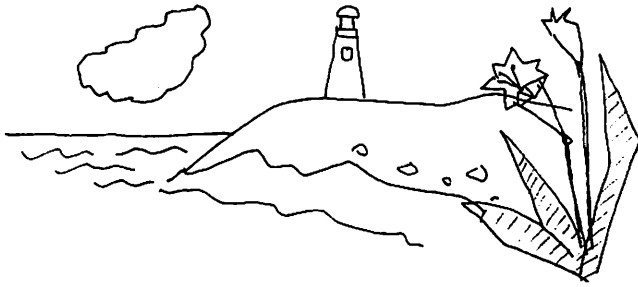
歌いつつ歩まん ハレルヤ ハレルヤ

歌いつつ歩まん

この世の旅路を

私の信仰生活のはじめより深く心にとどまり、かかわって来た今は亡きES姉、信仰の歩みを温め合い、祈り合い、励まされ合いつつ思いはたえず消える事なく、共に歌ったこの歌をいつも口ずさんで、しのんでおります。(主が与え、主

「が取り給う。主のみ名はほむべきかな」
「言いつくせない賜物の故に神に感謝致します。」



「にわか求道者」も今は救われて

原 田 駒 一 郎

私は昭和二四年一月二日、大分県日出教会ひじで受洗しました。

当時の教会は、にわか求道者やにわか信者が多く、私もその中の一人だったのです。別に人生に行き詰りを持った訳でも、また、悩みを持っていた訳でもありませんでした。

十字架の救いの確信のないまま、ただ牧師のすすめに従ったの受洗でしたので、救われた喜びなど全くなく、「イエス様が私共の罪のため死んであがないをして下さった」とお説教を聞いても、何のことやらさっぱり理解できませんでした。

受洗から三年後の昭和二七年一二月に転勤で、北九州に来ましたが、一、二年位の間は特定の教会ではなく、それも気紛れに、いろいろな教会の礼拝に行っていました。間もなく結婚と共に全く途絶えてしまいました。

それから神様に背を向け、暗くて長いトンネルの中に入っ

て、実に二二年もの間、無為な日々を過ごしました。

養命酒のコマーシャルを、私に当てはめていいいますなら「一に信仰、二、三、四、がなくて、五に信仰」ということになりましょう。

昭和五〇年五月一六日、前田教会に導かれ今日に至っていますが、この教会で、十字架の救が何であるかを初めて私に示され、深い主のご愛を知り、今までの罪深い自分を心から悔い改めることができました。

良いことにしろ、悪いことにしろ、私共の身边に起こるすべてのことを、主に信仰をもっておゆだねすれば、何一つ解決のできないことがないという確信を持たせて下さいました。

思い起こせば、戦後間もなくの「にわか求道者」を主は憐れんで下さり、多くの群れの中からお選び下さったことを思うとき感謝にたえません。

「招かれる者は多いが、選ばれる者は少ない」

(マタイ 二二・一四)

当教会に導かれて五年目の春、家内も、榎本先生を始め皆様のあついお祈りによって、イエス様を救主と信じ受洗させ

ていただくお恵みをいただきました。

一度は神様を離れた私に、主のもとに立ち返らせていただいたばかりか、家内も、主を主とあがめる信仰を持たせていただいたことは、私にとって信ぜられない驚きと喜びでした。

「わたしは地の果から、あなたを連れてき、

地のすみずみから、あなたを召して、

あなたに言った、『あなたは、わたしのしもべ、

わたしは、あなたを選んで捨てなかつた』と」

(イザヤ 四一・九)

このように、限らない主のご愛をもって救われた私共が、これからの日々を、どのようにしてお従いするのが主に喜ばれる道であるかを祈りによって悟り、皆様と共に歩ませてくださいたいと願っております。

今回、教会創立五〇周年記念誌刊行に当たり、編集委員の一人として、原稿担当という大役を仰せつかりました。皆様の書かれた文章を添削したり、校正するなど出来る訳がありませんが、折って主に支えていただき、ご一緒に編集に携わった皆様と、どうか最後までご用が出来ましたことを感謝いたします。

主の恵みふかきことを味わい知れ

萩 原 あさよ

今朝明け方、頭から真赤な血を流してうつむき、眼をつむつたまま呼吸して生きていらっしやる。遠くから見えていますと、普通の黒い着物を着ておられるのに、手を動かしながら悲しい表情をして大きく息をしている。「アッ！よみがえられたイエス様ではないかしら……」と背すじの凍る思いで、私はじっと見つめている恐しい夢を見ました。それからすぐ眼が覚めました。

私共の罪の為十字架にかかられ、世界中の人々を贖って救ってくださいましたお方に、本当に感謝しなければいけないのに、取るに足りない者が不信仰の数々を重ね、不平不満をつぶやき恥ずかしく申訳ないことばかりでございます。

私が教会に行き、信仰に入れていただき洗礼を受けましたのは、二〇才過ぎの三月でございました。それからクリスマスチャーンの主人と結婚式をあげましたが、昭和十二年一月神戸

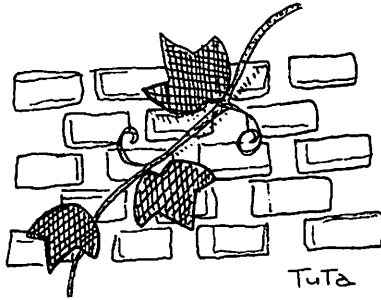
の教会でございました。約一〇年間、その地で恵まれた何一つ言う事のない家庭生活を、勿論教会中心の生活を送らしていただきました。その間、二人の子供にも恵まれました。その幸福な生活も、おそろしい空襲が始まる様になり、昭和二〇年二月思い出すのもいやですが、主人の奨めもあり子供達も危いので、九州の実家のある現在の地に、主人を残し親子三人疎開して参りました。家族は離ればなれになり、私は子供達を育てるのに精一杯で、度々神戸からの便りはあるのですが、こちらからの便りはあまり届かなかった様です。

その年の六月、神戸大空襲で主人は帰らぬ人となり、召されてしまいました。以来四〇年余り、かぞえきれない程のいろいろの体験をさせていただきましたが、常に惜なり給うた主に支えられ、聖書のみことばのすべてが私共を守って下さいました。又先生を始め、多くの皆様のお祈りに支えられ、今日ある事が不思議な様でございます。

「エホバ家をたてたもうにあらずば、建つるものの勤労はむなしく、エホバ城をまもりたもうにあらずば、衛士のさめをるは徒^{むなしく}勞^{むなしく}なり。汝ら早く起き遅くいねて辛苦の糧をくらうはむなしきなり。かくて、エホバその愛^{いとく}しみ給う者^{ねがひ}に寝^{ねがひ}を与えたもう。」(詩一二七篇)

この聖言は、結婚の時、主人からおくられた聖書にサインされていたもので、永久に忘れることはありません。

今日まで導き給うた主が、この先どうして見捨て給うことがありましようか。信じて、一生懸命お従いして行きたく思っております。五〇周年記念の誌上を借りて、つたないペンを取らせていただきました。



主と共に歩む

東 伊津子

三年間の求道生活を経て、四七年四月五人の姉妹と共に、洗礼を受けさせていただきました。神から離れ、自分勝手に歩んできたことを示されました。そして自分がどんなに無力な存在だったかよくわかり、主に従うより他にないことを知らされ、主に従う決心をしたのです。あの日から一七年間、大きな主の恵みにあずかりました。

子供が三才になったばかりの時、ある事情で一人で育てなければならなくなり、いつも不安で一杯でした。自分の人生はこれでもいい、しかし子供には立派に大きくなって社会に巣立って行ってほしい、これが親としての責任であり、そして願いました。

しかし人生は長いもの、いろいろな事が多くありました。精神的にも肉体的にも疲れしました。よく病氣もしました。二度程入院もしました。働けなくて悩みました。しかし主は決

して信じる者はずかしめませんでした。

「主はわたしの魂をいきかえらせ

み名のためにわたしを正しい道に導かれる

たといわたしは死の陰の谷を歩むとも

わざわいを恐れません

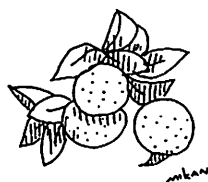
あなたがわたしと共におられるからです。」(詩二三・四)

この聖句がいつも生きる望みをあたえて下さいました。

その陰には榎本先生を始め教会の方々の熱い祈りに支えられ、主はそれにこたえて下さいました。

「主イエスを信じなさい。そうしたら、あなたもあなたの家族も救われます」(使徒一六・三一)というみことばを心の支えとし、まだイエス様をよく知らない方々のために主のお救いを日々祈っております。

そしてやがてみ国に入る日まで、主に信頼して従うことができるよう祈る日々でありたいと願っております。



「エル・ロイ」私を見給う主

匿 名

私が、神様の一方的なあわれみのゆえに、イエス様を救い主と信じさせていただき、昭和五九年四月九日北九州市大蔵川で、八幡前田教会榎本利三郎先生により洗礼を受けさせていただきました。

多くの教会の方々の見守って下さる中、まだ水に入るのに寒い時期ですので、岸辺では焚火を焚き、讚美歌一九九番の歌声の中、その一瞬息が止り、「だれでも水と霊から生れなければ神の国に入ることは出来ない」とのみことばとともに古き生涯は死に、新しい命が与えられたことをこの身にしっかりとおぼえました。

四五才のこの日まで、神様は待ち望んで下さり、イエス様は心の扉をたたき続けて下さいましたのに、自分が神様の様に思い上り、十戒のすべての罪をおかし、神様に背を向けておりました私を、神様はどの様にして打ち砕いて下さっ

たかを思い、この記念の時に主の栄光を讚美し、もう一度、はじめの信仰に立ち帰らせていただけるお恵みを感謝致します。

その頃の私は、一二年の長血を患った女の様でした。私は愛媛県に生れ、両親に大切に育てられ、幸せに過ごしました。長女ですから、何事も自分の思い通りにし、言いたいことを言つて、とても我がままで、自分が一生懸命頑張れば何でも出来ると思ひ、その様に過ごしてました。結婚し、大阪で家庭を持ち、一日五時間位働けばよい音楽教室の仕事を続けていました。

息子が高校二年の頃、学校をやめたいと言ひ出しましたが、無事卒業し、大学も受かり、本当に喜んでおりました。その頃から、自分のヒゲを気にしはじめました。このヒゲを何んとかしてほしいと私に訴えます。その頃、私はまだその奥底にあるものがわからず、息子の訴えを、私が何とか解決してやらなければと色々の方法を考え、人を頼りとしていました。そのうち、息子は明るい所はいやだと部屋にこもり、人に顔を見られるのがいやで学校も休み、死にたいと毎日私に訴える様になりました。

この頃やっと、本当の原因は、ヒゲではなく、他にあると

感じられ、キリスト教病院の柏木先生のカウンセリングを受けました。阪大病院で、若い人のカウンセリングを専門にしていると紹介をしていただき、息子と共に三回位カウンセリングを受けましたが、病院では今の悩みを忘れる様にと薬を渡されるのみで、精神的な苦しみの解決はありません。息子は薬の切れた時の方がもつと苦しいと、通院も薬もやめ、私だけが息子の日々の様子を記録し、週に一度予約をして先生に会つて一週間の状態を話し、お薬をもらつて帰ることを二ヶ月位続けました。病院では、一人づつ個室で、先生とお話をします。その様子がとなりの部屋から聞えてきます。二ヶ月通院の間、色々な苦しみを訴える若い人の様子に、この一人の様々の苦しみを薬の力で忘れさせたり、人の力ではどうすることも出来ないことを、その時はっきり知らされました。この時、私の力では息子に何もしてやることは出来ない、何でも自分で解決しよう、しなければと思つていた気持ちだが、完全に打ち砕かれました。1姉妹に、どうしたらいいかと相談しました。その時、榎本先生の大阪集會に出席して見たらと言われ、息子と一緒に、出席致しました。昭和五八年、新年の大阪集會の初めの時でした。会場は、新大阪駅近くのコロナホテルの会議室でした。その時の聖言は、「視よ、今は

恵の時、視よ、今は救いの日なり」(二・コリント六・二)

「今は、エホバを求めべき時なり」(ホセア一〇・一二)

「今は、エホバの働き給うべき時なり」(詩篇一一九・一二六)です。

今ふりかえれば、まさにこの時が恵みの時、救いの日となりました。最初に先生より私に言われたことは、「お母さんが変らないといけません」と言われましたが、どの様に変わったらいのかわからないまま、「はい」と答えました。

その頃私の家庭は、主人が独立して仕事を始めて三年目で、仕事が軌道に乗りはじめ、家庭の事より仕事第一の毎日でした。母は老人性うつ病から、脳血栓になり、寝たきりになっていました。うつ病の間、病院で一ヶ月付添いましたが、退院したら絶対家庭看護をしようと思心しました。この時ほど、家庭は天国の様だと思つたことはありませんでした。うつ病で治療中、病院でころんで骨折し、手術をしてやっとマツバ杖で歩ける様になり、退院した翌日今度は脳血栓になり、それきり歩けなくなりました。

主人の仕事の手伝い、母の看病、週三日音楽教室の仕事と、日中私の留守の間は、I姉妹に手伝っていただき、助けていただく毎日でした。この様な家庭の状態の中で息子の状態は

ますます悪くなり、暴力をふるう様になり、部屋の中はゴミ箱の様になっていました。

月一度の大阪集会の時は、母を隣の方にお願ひして出席しました。聖書は、テープを聞きながら、テープの箇所を読みました。この時私に臨んで下さいました聖言は、「わたしは神である、今より後もわたしは主である。わが手から救い出さう者はない。わたしがおこなえば、だれが、これをとどめることができよう」。(イザヤ四三・一二)

「わたしが神である、主は生きておられます」と何度もくり返し臨んで下さり、その頃大阪集会に來られました百合子奥様からも、「主は生きておられます。信じて安心する様」とはげましとなくさめをいただき、平安を与えられました。

「神を信じなさい。よく聞いておくがよい。だれでもこの山に、動き出して、海の中にはいれと言ひ、その言つたことは必ず成ると、心に疑わないで信じるなら、そのとおりになるであろう。そこで、あなたがた言うがなんでも祈り求めることは、すでにかなえられたと信じなさい……」(マルコ一・二二―二四)

イエスは彼らを見つめて言われた、「人にはできないが、神にはできる。神はなんでもできるからである」。(マルコ一

生ける神、主の御手にすべてのことをゆだね、次々と自殺の方法を考える息子を置いて家を留守にする時、アブラハムが神様にイサクをささげた時の様に、息子の命を神様におささげします。私の留守の間に命を断つことがありましても、それは神様の御心です、と御手にゆだねて祈りながら出掛けました。神様は切羽つまった時、必ず助け手を送って下さいます、その時、私の留守の間の息子の様子を娘を通して教えて下さいました。私が家に居ない時は、息子は何の変りもなく、普通の状態であることを教えられ、この時、榎本先生からの「お母さんが変らないといけません」と言われたことが少しわかって来ました。

「敵についておどろかざるは、敵にはほろびのしるし」

(ピリピ一・二八)

「人を恐れると、わなに陥る、主に信頼するものは安らかである」(箴言一九・二五)

息子の不安な気持を母親がなんとかしてやらなければとおろろする時、サタンが働き、私の気持ちをゆさぶり、息子を不安に陥入れていることがわかりました。三月生れで体も小さく、何事ものんびりしている息子に、母親として不安な

気持を持っていました。そして息子の気持を第一とせず、先々に口を出し、母親のレールの上のせていました。息子を一人の人間として認めず、母親の気持をおしつけ、その人格を傷つけていたことに気づかされました。その頃、石井完一郎先生の講演会で、どこかで間違つて組立てられたものはその所までもどり、二〇年かけて築かれたものは、二〇年かけて取りもどさなければいけないとお話しを聞きました。息子をはじめ、一人ひとりの人間が、神様から尊く造られ、神様の誉れの為に生かされていることを教えられ、神様のように思い上っていた私を、「わたしが神である」と完全に打ち砕かれ、神様の前に立ち返らせていただいた時、間髪を入れず、御手をのべてお救い下さいました。私に平安が与えられると、同時に息子にも平安が与えられました。

「神のなされることは、皆その時になつて美しい」(伝道の書三・一一) この聖言どおり、主のなさるわざは、その時になつて美しく、神様は、人の思いよりはるかに高く、天が地よりも高い思いでその人にふさわしく時を定め、守り導いて下さいますことを感謝致します。息子も日々新しく整えていただいておりますことを心から感謝致します。

昭和五九年一〇月、母は八二才で高槻バプテスト教会沢野

先生の見守って下さるなかで天に召されました。沢野先生の歌って下さる、「いつくしみ深き友なるイエスは」の讚美歌をととても喜んでいました。そして、母の後を追う様に主人の体調が悪くなり、胃潰瘍の治療をしているうちに手おくれとなり、胃癌のため、昭和六〇年七月八日五才で天に召されました。

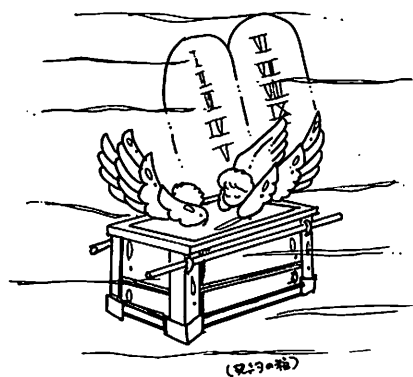
息子、母、主人の看病中、多くの方々にお祈りいただき、支えていただき、聖書からあふれるばかりの命の聖言によって、「人はパンだけで生きるものではなく、神の口から出る一つ一つの言で生きるものである」(マタイ四・四) 本当に生きることができました。主人の看病中も、テープより日毎に聖言をいただきました。この日の為に、神様は息子を通して私の前に問題を置き、神様の前に悔い改め、立ち返らせて下さいました。

「恐れるな、わたしはあなたをあがなった。わたしはあなたの名を呼んだ、あなたはわたしのものだ。あなたが水の中を過ぎるとき、わたしはあなたと共にいる。川の中を過ぎるとき、水はあなたの上にあふれることがない。あなたが火の中を行くとき、焼かれることもなく、炎もあなたに燃えつくことがない」(イザヤ四三・一一二)

洗礼式の時、榎本先生よりいただきました、神様からのこの聖言をにぎりしめ、すがりついて、日々神様の御愛から離れることが出来ない様に、この世の旅路を、主の日の為に、そなえることが出来ます様に、「いつも喜んでいなさい。絶えず祈りなさい。すべての事について感謝しなさい。これが、キリスト・イエスにあって、神があなたがたに求めておられることである」(一・テサロニケ五・一六―一八) ……

朝には喜びの祈りを夕には感謝の祈りをささげる日々を送りたいと願っています。

「われわれの神、主は唯一の主である。あなたは、心をつくし、精神をつくし、力をつくして、あなたの神、主を愛さなければならぬ」(申命記六・四―五) アーメン



(見守り)

「トロントだより」

主をたたえて

李 文 珠

この度は、先生が使徒として八幡に遣わされて五〇年と伺い、主のみ名を崇め感謝を捧げます。

先生に教えられた福音によって、父も、母も、私も、和子も救いと慰めと希望を与えられ、世の標準からすれば、どん底のような生活の中でも一つの不平もないばかりか、毎日が感謝の連続の生活であったことを顧みて、主に感謝せずにはおられません。

兄の死、その後父の死を通して、初めて前田教会に導かれた当時の生活を省みて、どのようにしてあの中を走り抜けることが出来たかと感慨にたえません。

福音の教えに救われたことよって、貧困のどん底にあった私共でも、主に在って、王候にもまさる心の平和と、希望と、喜びに満たされた生活に入れられていたことを、今しみじみ実感しています。

「ぶどうの木」の寄稿につきましては、いつも、聖徒の方々の感謝のお証を読ませてばかりいただいて、まるで、他人の庭園のブドウをただ食いしているようで、心苦しく感じておりますが急に何か書こうと思いましたが、余りにも、お証することが多くて、どれから手をつけてよいか分かりません。

今日は、私共の近況をかいつまんでお知らせいたします。

サムエルは、一三歳で、九月から二年生になりました。勉強は学校にいる間だけで、相変らずホッケー、ベースボール、オーケストラ、アンサンブルなどの課外活動に余念のない毎日です。すくすくと、ほんとうによい子に育ってくれて感謝です。サムエルのお陰で、主人も、私もいろいろな所にトーナメントや、演奏旅行に一緒にでかけることが出来てよくなっていきます。

ハンナは、今年の六月に高等学校を一年早く卒業いたしました。(こちらでは、中学二年間、高校五年間です)いつも「ヨーロッパに留学に行かせてくれ」とせがまれていたのですが、私共の財力では、とんでもないことと、あきらめさせていました。ところが、神様に直接交渉して返事が来たかのように道が開けて、先週(九月四日)パリに旅立って参りました。一年間の予定です。

私共の目から見れば、遊んでばかりのような高校生活でしたので、無事に高校だけ卒業して、大学に入学出来れば十分だと思っていたのですが、おまげが幾つもついて、びっくりいたしました。というのは、卒業式で四つも学業優秀のチャンピオンメダルをいただいで、全く、驚いてしまいました。

校長賞に、ハンナの名前が呼ばれた時は「ああよかった」とほっとし、二回目にトロントのアカデミックチャンピオン、メダルに呼ばれた時には、びっくりし、三回目にオンタリオのスカラシップ受賞者に呼ばれた時には、あまりにもおかしくて、もう少しで吹き出すところでした。

四回目にイギリス総督賞メダル（カナダは、イギリス領の中に入っていますので、形式的には、カナダの君主はイギリスのエリザベス女王となっており、エリザベス女王がカナダに在住していないため、その代理として、総督が派遣されている訳です）の受賞者にハンナの名前が呼ばれた時には、きまりがわるくて小さくなっていました。

式が終わった後、友達から「ハンナ、メダルをみんな一人じめにしたじゃない」とハンナがからかわれていました。

主人と、こんなことが分っていたなら撮影機を持って来て式を撮ればよかったと話したことでした。

それにしても、白人の父兄から学校側に圧力がかけられるのではないかと、心配しますと共に、私共のような外国人の子弟を、公平に取り扱ってくださいと、ハンナの高校の先生方に心から感謝しました。そうして、ハンナがすべての経験を主の栄光の為に用いてくれることを祈りました。

大学の入学は、高校の内申書だけで決まりますので、これも問題なく、六月までに三つ選択した大学全部から、入学通知をいただき、トロント大学を選びました。

「赤毛のアン」で有名な Queen's University は、十倍も競争率の中を無事に合格したので、とても惜しいと思い「ほんとに体が二つあったらよかったのにね」と冗談をいう程度でした。何しろ車で四時間の所ですので、学生寮に入るか下宿をするかしなければならず、トロントのように変化に富んでいないので、残念ながら断念することにしました。

オンタリオ州では、すべての大学が国立ということですが、私立の大学は皆無です。

さて、大学を選んだものの、これもまたフランス留学と時を同じくするため、どうしたものかと困っておりましたら、大学の方から条件つきで一年間、学籍を保留して下さるといふ願ってもない措置をとってくださいと、すべて水が流れるよ

うによどみなく備えられました。高校の先生方も、異例の措置だと喜んでくださいました。

その後、七月にはハワイにある友人の別荘に招待され、また八月には、サンフランシスコのカリフォルニア大学などを訪れて、全一の一人旅を無事に終えて帰って参りました。

九月からのヨーロッパ旅行のよい予行演習になったと喜んでいました。このヨーロッパ旅行は、全く天から降って来たような出来事でした。

トロントでは、毎年九月に二週間「国際映画祭」というのが催され、世界各国からの参加作品が上映されるのですが、カナダの出品作の一つに、偶然にもハンナが用いられることになったのです。

高校の英文学の先生の作品が、たまたま映画化されることになり、ハンナがこの先生のお気に入りのお学生だったということから、オーディションの推薦を受け幸いにもパスすることが出来ました。昨年の一〇月には、ロケーションの為に、トロントから飛行機で四時間もかかる北国で過ごすことになり、学校や安全のことを考えて心配の連続でしたが、その為にかえって神様との交わりが深められたと思います。

この高校の先生が、かねがねハンナのヨーロッパ留学の願

いを知っておられ、映画出演の報酬として、一年間留学を交渉してくださったのでした。これが決った時、ハンナは、が然張り切って、高校の残りの二年分の過程を一年で終える決定をしたという訳です。

私が若いころに、夢のように考えていたフランスのソルボンヌ大学や、ルーブル博物館、ドイツのハイデルベルグの数々の古い教会など、文化と宗教の宝庫のようなところで、素晴らしい一年を過ごして来るように願っています。

また、私共の保護から完全に放れて、ひとりぼっちになることによって、はじめて、神様と一対一の真剣な対話を始めることが出来るのではないかと、期待しています。出掛ける前に「いつも、お祈りすることを忘れないでね」と、言いましたら素直にうなづいておりました。

パリに着いて、「よいアパートが見つかった」と、電話があった時に「お祈りしているの」と聞きましたら、声はずませ、「早速教会を見つけて、お祈りに出掛けたところだ」とのことでした。「お祈りをしたとたんに、こんなよいアパートが見つかった」ということでした。ご利益目当ての信仰になると困ると、ちょっと心配しましたが、でも、神様はどんな幼稚な信仰でも、祈る者の信頼を裏切りたまわな

方だと信じて、心の平安を得、感謝いたしました。折に合う助けとなつて下さる主が、責任をもって、ハンナの信仰の芽を育てて下さることを信じて平安を得ています。

主人は、その後、頼まれるままに友達の教会のお手伝いを始めましたら、新しい移住者の方々から、いろいろな問題の相談があり、一生懸命奉仕させていただいております。

永い間、私の仕事になつていた、サムエルの課外活動のお世話を今は主人がほとんど引き継いでくれていますので、私は大助かりです。

暇な時には、オンタリオ湖に魚釣りに出掛け与えられた余暇を心から楽しんでいきます。

私は目下、パートタイムで、高校のコンピューターサイエンスを教えています。カナダでは、定年が六五歳ですので、もうしばらく楽しむことが出来ると思います。とても、おもしろい学問で、二〇年前にこちらに来た時にすぐ頭を切り替えて、コンピューターの勉強をしておけばよかつたと、残念に思っております。



創立五十周年に寄せて

— 信仰のあかし —

幼子のごとく

上 島 恵 子

「神様を信じ従っています」と言っているながら、つい自分の考えや自分の思いで行動しやすい私ですが、時折、子供の素直な信仰にハッとする事があります。

小学校二年の子供の日記から

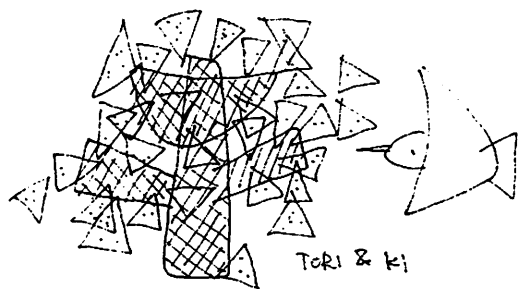
「ぼくの病気」

ぼくは、びょう気になり高いねつが出ました。四〇度のねつがなかなか下がりません。ぼくの体の中では、びょうげんきんがまるで大風のようにあばれまくっていたのです。でも、ぼくの神様が、それをやつつけてくれました。それでぼくの体の中は、ぶじにさわやかな気もちになりました。

お祈りをして必ずこたえて下さる神様を、子供は何のためらいもなく疑いもなく信じているのです。私も頭の中ではそう思いつつ、どうしよう、こうしようと心配してしまうので

す。本当に「幼子のごとく」のみ言葉どおり神様に信頼することだと、つくづくと思います。

今、我が家には、いろいろな小さな生き物があります。(カメ、金魚、ザリガニ、クワガタやカブト虫の幼虫など) 最近、ザリガニの赤ちゃんが生まれました。よく見ないと見のがしてしまうほど小さいのですが、一人前にザリガニの形をしているのです。このように、小さな小さな生命さえも神様はいつくしんでおられる事を知る時、神様のご愛の中に置いていただけのことのすばらしさを、ひしひしと感じ感謝せずにはいられないこの頃です。



主の御力に支えられて

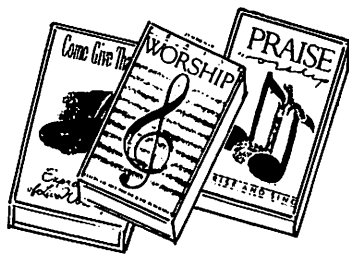
瓜 生 美知子

主イエスさまの限らない御恵みを心より感謝いたします。前田教会に導かれて六年になります。この一年たくさんの問題がありまして、その中をただ主をあえぎ求めつつ、右に左にと曲がりそうになりながら、主の御力に守られ支えられ今日を迎えております。

祈るしかありませんでした。時を構わず牧師館に押しかけ、電話をし、御指導を求めてお言葉をいただき歩ませていただきました。聖書にあるように、内には恐れ外には戦いがあり、このような試練を受けたのは初めてでした。でも、絶えず主の御手に守られ、主の聖言の御真実であることを改めて悟らせていただきました。「主は彼らの前に行かれ、昼は雲の柱をもつて彼らを導き、夜は火の柱をもつて彼らをてらし、昼も夜も彼らを進み行かせられた。」(出エジプト一三・二一) 御聖霊がいつも私を導き、聖言を与えられて支えられ、私

は失望はかけら程もなく、ただ信仰と希望と愛に満ちていました。このような力は一方的な神さまの賜物であり、恵みなしにはできないことです。賜物とは一方的に与えられたものであり、一度十字架のイエスさまを救い主と信じたからには、御聖霊の証印を押されていますから、いつも神さまの愛が心に注がれ、御言葉にありますように何ものも神さまの愛から、引き離せないことを教えていただきました。本当に十字架の救いにあずかれたことを心より主なる救い主イエスさまに感謝しています。

栄光がとこしえに主イエスさまにありますように！
力は神にあります！



恵みのあかし

大 口 和 子

記念すべき日を迎えさせていただきましたことを、心から感謝せずにはおられません。私も五〇年の長い間受けさせていただきましたお恵の数々を、お証させていただきます。

私が本当に神様を信じるようになりましたのは、この前田教会に属させていただいてからでございます。明日のお米がなくなりました時も、不思議な方法で与えられまして、また心臓の病気で死の陰の谷を歩きました時も、先生方はじめ皆様と私の切なる祈りにこたえていただきました。このように全くいやして下さいました。

一二年位前に私が失明してしまいましたけれども、このことにより点字の聖書を触読することが出来るようにしていただきました。すみからすみまで読んで聖言を自分のものにする事が出来るようになりましたことは、何よりの感謝でございます。特に大好きな聖言は「我限りなき愛をもって汝を

愛せり、故に我たえず汝を恵むなり」(エレミヤ三一・三)あふれるばかりの御愛の内に今日まで過ごさせていただきましたことは感謝に堪えません。

ある時は心配で夜も眠れなかったとき「汝ら、心を騒がすな、神を信じ、また我を信ぜよ」(ヨハネ一四・一)を通しておゆだねすることを得させていただき、また孫が脱水状態で母乳を飲む力もなくなりました時も、「我は全能の神なり」と何事をも成し得ないことのない神様は、私共の祈りにこたえて、いやしの御手を伸べて下さいました。

また、主人を安らかに天に召して下さいまして、この時も先生方にお忙しい中で臨終の時から納骨まで、大変御世話になりました。先に天に召されました主人がうらやましい程でございます。

本当に皆様方ありがとうございました。天国の主人も今日の記念すべき日を喜んでいると思います。

どうぞ今後とも私共家族のためにお祈りの内に加えていただきますようお願いして、このつたないお証を終らせていただきます。

(テープ転載)

新しい力を得て

大 田 邦 子

先日奥様がおっしゃいました、「この五〇年の記念の時は、教会だけでなく、教会員一人ひとりの五〇年でもありますね」と。その時私の胸にずしつと来るものを覚えました。

この前田教会の幹に連ならせていただいた小枝の私、聖霊の力強い御導きにより、この救いにあずかせていただきました。

波乱に富んだ人生、求道し始めて今日まで人生の節目が信仰の節目でもあり、その都度、神様のご愛、真実を示され、主を知る機会としていただきました。記念のこの時に、主のなされたみ業を思い起こし、今一度主のお恵みとあわれみを心に刻み、記念の塚を立て感謝を捧げたいと思います。

過去歩んで来ました様々な環境の中で、人間関係の煩わしさ、いつももやもや不満ばかりの日々、「真実が欲しい、真実に歩みたい」と願っていました。友の会で聖書研究会に

導かれ、榎本先生を通し神様への道が開かれ、今までに味わったことの無い魂の安らぎを覚え、私の求めていたものに出会わせていただいた思いでした。でも今にして思えば恥ずかしい事ばかり、真実が欲しいと願った心の中を探られると、自分が正しく、自分の思い通りにならないと人を裁き、神様のご愛、ご真実を少しづつ判らせていただいた時、自分のごう慢さ、醜さをいやという程知らされ、幾度となく悔い改めました。

この様な者をもあわれんで、神様のものとしていただき、次々とご自身を現して今も生きていらっしゃる主を知らせていただき感謝で一杯です。

○ 母(姑)の信仰告白

「すべて信ずる者に救いを得させる神の力である」

(ローマー・一六)

私が結婚して母と生活を共にして来た三六年の長い年月、その間この世で云う嫁姑の葛藤は避けて通る事は出来ませんでした。母にしてみれば長男の嫁が、家の神様仏様を受継がず、クリスチャンになったこと、しっかり者の母だっただけに、弟妹、親戚に対して悔やみ、又どんなにかがっかりした

ことでしょうか。でも私が教会に行くことには反対しませんでしたし、母自身も時折、新年聖会、聖日礼拝、墓前礼拝と、主の臨在に近づけていただき、皆様との温かいお交わりに加えていただいていた。これ等すべて主のご計画のもとに導かれていたことを覚えます。

九三才を迎えての或る日、突然癌末期を宣告され、闘病生活半ヶ年、その間も幾度となく「私にお迎えが来た時は、お寺さんにお経だけは上げて貰ってね」と、念を押す様に私に頼んでおりました。召される日が近づくにつれ、俄然、主のみ業が刻々と成されて行く事実に、襟を正す思いでした。

先ず母の姿勢が次第に柔らかくなり、素直に変えられて行き、召される一二日前、思いがけない母の言葉、「邦子さん、私のような者でも天国に入れて貰えるかしら？」と謙虚に問いかけて来ました。主があわれみ、救いのみ手をのべて下さいました。夜遅くでしたが、榎本先生のおとりなしで、イエス様を素直に受入れ先生の最後のお言葉「信じますか」に、「はい」と頷き「有難いことです、有難うございます」と。お祈りの後、先生の「アーメン」に続いて「アーメン」とはつきり言い現わしました。安心したのでしょうか、安らかな表情となり、二つ折に曲がっていた腰も真っ直ぐに伸び、天国に

召されて行きました。

母がとてもイエス様を信じることは無いと、半ば心に決めていたのにこの現実ノ私の不信仰を恥じると共に、十字架のご愛を確かなものにし、又望みを持たせていただき、天国を身近な処としていただいたことを感謝しました。

○ 兄の看病

「汝我に呼び求めよ、我汝に応えん、又汝の知らざる大いなる事と隠れたる事とを汝に示さん」

(エレミヤ三三・三)

早く両親と別れた私は、女学校時代から兄が親代わりとなつて面倒を見てくれました。私の結婚後暫くして兄も結婚、その兄嫁が様々な事情の中から創価学会に入信、私達を折伏しようと、あれこれ熱心につとめ、ゆさぶつて来ます。榎本先生にご相談に伺いながら、却つてこの事によって信仰を持たせていただきました。私が応じないもので、恩知らず、偽善者などとののしられ、揚句の果て絶交となりました。

その間十数年、或る日、私の全く知らない方から、兄が癌末期で重体と知らされ、義姉には電話出来ず（後どんな事をするか判らない人なので）心が騒ぎ乱れました。やっと兄と

の連絡がとれ、電話をくれましたものの、もうその時は息苦しそうな話し方、余命いくばくも無い事を自覚していました。胸が締めつけられる思い、どうしよう、もう時間が無い、すぐに駆けつけたい、でも義姉が、様々な思いが堂々巡りするばかり、折って折って、やっと聖言で支えられてはいけるけれど力が与えられない、もがく私でした。

その頃榎本先生は大病を乗り越えられ、ご退院後間もない時でしたが、厚かましくも御相談に伺いました。

先生の病後とは思えないすつきりとしたお顔にホッと、主に感謝しました。その時の御導きは、今も鮮明に私の脳裏に焼きつけられています。

先生は「兄の生死は問題ではなく、主のみ旨は何処にあるか。この様な中をお通しになるのも、主が大きな使命を与えていらっしゃるのだから、時間、空間すべてを越えて間髪容れず事を行って下さる主のみ手に一切をお委ねして祈りましょう」と。お祈りしていただきました。「有難うございました」とお暇しようと立ちかけました所、先生が「すべてをお委ねしたら、業を行われる主のみ手より決して引き戻してはいけませんよ」と、確信ある一言を付け加えられ、私に念を押されました。(この最後の一言の重み、今も事毎に力と

ならせていただいています。)

目の前の状態が如何であろうと、肉の思いでは冷酷と思われる程、主のみ旨にお従いする先生の毅然とした姿勢、それに反し肉の思いで取り乱す惨めな自分を悔い、お従いしました。

暫くして、絶交の義姉自身より、兄が重体との知らせがあり、飛んで上京、主のご用として思い残すことなく看病、兄一家にも大変喜ばれ、兄も何よりの安らぎを与えていただきました。天に召されて行きました。

具体的に「主は今も生きていらっしゃる、恐れることはありません」「この事を如実に示していただき、先生がよくおっしゃいます」「主を手ざわる様に、見えない方をあたかも見ている様に、肌で知りました」と。尊いこの時を与えていただいたことを感謝しました。

「肉に従う者は肉のことを思い、靈に従う者は靈のことを思うからである。肉の思いは死であるが、靈の思いはいのちと平安とである」(ローマ八・五一六)

○ 夫の求道

「神に近づきなさい。そうすれば神はあなた方に近づい

て下さるであろう」(ヤコブ四・八)

戦前戦後と波乱の人生、この世でいう実を結ばなかった仕事の数々、そして人生終盤、一三年間の単身赴任、種子島での自炊生活を七〇才を機に、終止符を打たせていただきました。

丁度七〇才の誕生日、会社の経営方針の事で、主人は「もうここでの自分の使命は終わった、八幡に引揚げる」と、簡単明瞭、決心し会社の引止めもきっぱりと断わり、私に「八幡に帰ったら神様に近づこう」と自分から言い現わしてくれました。

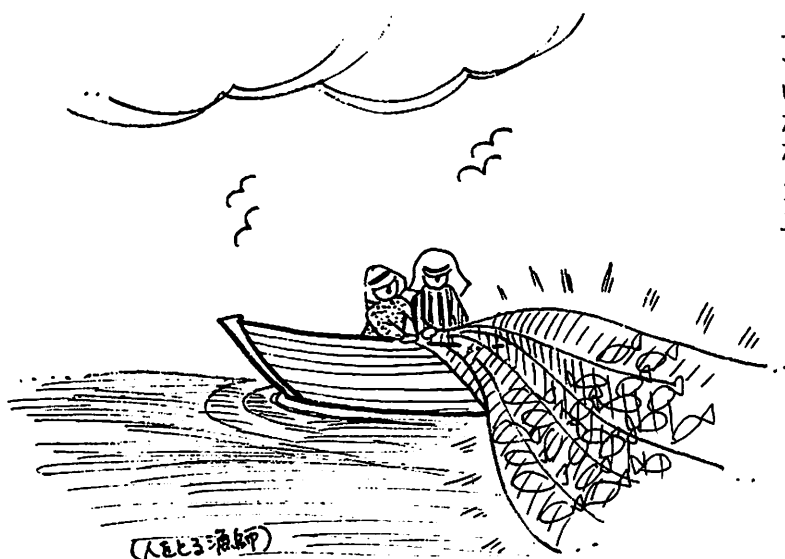
朝鮮時代から試練の連続、その渦中にある時はわかりませんでした、主が鮮やかなみ業を行って下さる過程であったと、しみじみ主の愛のご計画を感謝し引きあげました。

今迄仕事のみ的人生だっただけに、帰ったら何をしようか―野村先生にお習字をお習いして―伊規須先生にワープロをお習いして―等々、でも「主の山に備えあり」と、聖言の如くすべて考えても見なかった道が備えられていました。

長い間の願いでした主人との聖日礼拝も守らせていただき、又聖書をひもとき、祈る感謝の朝のひとときも持たせていただいているこの頃です。

まず主に近づいた時、主が近づいて下さること、聖言を信じ感謝で一杯です。

聖書に立って私達を救いに導いて下さいました主のお恵みを、しっかりと心に止め、新しい力を得て、ここから又新しく歩み出させていただきます。



一本のぶどうの木

太 田 香代子

いつからともなく、わが家に茂った一本のぶどうの木に、今年には六房の実を結ぶことが出来ました。

そもそもこの木は三、四年経ったかどうかさだかではありませんが、玄關脇のセメントのひび割れと雨といの間の三センチ位の土の上に、風に追われて根づいたものか、それとも小鳥が種を運んでくれたのか、芽を出し、茎が伸び、葉を茂らせて、今では二階のベランダにまで届くようになりました。こんな固いコンクリートの上で、どうしてこの幹はよくも耐えられ育つものかと、主人と話をしながらも、水やりだけは毎日続けていました。

夏休みに、娘親子が里帰りしましたので、この事を知らせますと、これはきつと神様の導きがあり、主の愛が我が家にとどまっている印しに違いないと娘に言われて、そういうことにも気づかず、神に愛されている幸いをなおざりにしてい

た自分が恥ずかしくなりました。

幼い孫と一緒に実ったぶどうを取り、家族みんなで食べました。ちょうど色も形も味もぶどうのようでした。「イエス様のぶどうは、あまくて、すっぱいネ…」と孫が言って、私共の心を慰めてくれました。

「わたしはぶどうの木、あなたがたはその枝である。

もし人がわたしにつながっており、

またわたしがその人とつながっておれば、

その人は実を豊かに結ぶようになる」(ヨハネ一五・五)とあるように、我が家に多くの実を与えて下さいました。

今年の春も、我が家に幼い命を授かり、いろいろと神の愛を賜っておりながら、毎日祈りはしていたものの、私は困ったときの神頼みで、真剣に主に迫った祈りではなく、姿かたちにとらわれ、真の神を忘れようとしていたことに気づき、主にごめんなさいと悔改めの祈りを捧げました。

私はもう一度、今年年頭に与えられた御言

「わたしは神、あなたの神である」(詩篇五〇・七)を味わせていただきました。

このイエス・キリストのあがないに示された神の義を、しっかりと心にとめ、主から授かった我が家の、ぶどうの枝

に示された主の恵みにつらなって、もう一度神にたちかえり、大胆に一步一步信仰を続けて行きたいと思えます。

アーメン

主の恵み

緒 方 とみ子



「お父さん、棺桶の中に、片足入れているのじゃないの?」
「死んだら、豆腐の樽に、入れておろしておくよ。」などと、私は父とよく冗談を言い合った。その日も、肩が痛いからと早く床に就いていた父を、心配しながらいつもの様に笑いながら言うと、明治生まれの固いが頭の良い父は、戦後生まれの私に負けない様な頓智で返してきた。

それから、数時間後に、父は誰一人見送る事もなく（私と母は、隣室で、テレビを見ていた）静かに、亡くなっていった。心筋梗塞という事だった。以前から血圧も高く、小さい時からの持病（喘息）もちで、これまで入・退院した回数も多かったが、急なことで本当に信じられなかった。

父が亡くなり、私は父にひき続いてと言う気持ちで、戸畑伝道所（現在、教会）に、通いました。そういえば、父もよく半身不随の体で、雨の日も風が吹く寒い日も、私と義母の

止めるのも聞かずに、出掛けていました。帰りには、親切に上島兄から車で送っていただいた時もあったそうです。そして、父は戸畑伝道所で、伊規須先生と天国行きの準備の話をすでにしていただけました。そんな事も知らないで、私はただ、父を批判したり、自分はまだ若いから「信仰なんて年寄りのする事だ」などと、本当に耳を傾けない者でした。

そんな私が、神様から呼び出しを受けて、早くも一〇年の歳月が流れました。この一〇年間、本当に多くの方々から、心配して祈っていただきました。どんなに感謝しても言い尽くせません。この気持ちを忘れないで、これからは、私が（力まないで）祈って行きたいと願っています。

主の恵みふかきことを味わい知れ、

主に寄り頼む人はさいわいである。（詩三四・八）

この地（三井郡北野町）に来て、葬儀式を迎え、今年も戸畑教会で礼拝させていただき、神様に喜ばれる子供でいたいと思う祈りも空しく、日曜出勤が続く主人に仕えています。

「神様さえも、第七日には、休まれた」とあるのに、ハードスケジュールを、きついながらもこなしている主人に、大変不満でした。主人は、福山通運(株)鳥栖支店で、今年勤統一一年になろうとしています。運転歴は長いのだが、性格は気

短で、辞めたい時もあつたらしく、喜びはかくしきれなかった。それは、会社からいただいた一〇年間勤務の三枚の表彰状だった。私は、「戸畑教会に、持って行くの」と、なにげなく聞いて見ると、「是非、伊規須先生に、見てもらいたい」と真面目なのである。本当に、天気の良い日は、鼻唄まじりで運転しているでしょうが、風が強くと雨が降る日もあれば、他の車との接触事故、先月、免がれた貨物事故（あごの緒方という異名を持つ主人は、すぐ口でいいまかす）雪深い裏日本などに行く時は、薄くなった頭の毛先が逆立つ日も少なくはないそうです。

私も結婚した年の夏、主人の仕事先が、高松だと言うので徳島県美馬郡の大前姉宅（脇町教会員）に一人で、行きたいと祈りトラックに便乗させてもらいましたが、帰宅してから、一週間余り、きつさが取れず、こまりました。勿論主人は、運転と荷物を各支所に届けなければいけませんし、本当に夜間の運転は、大変な仕事です。しかし若い時から、車が好きで、親（父はバスの運転手）の反対を、押し切ってまで覚えた運転と仕事ですから、きついながらも、頑張っています。そんなきつい仕事だと、わかっていても、息子の事で、責める事が多く、祈る事を忘れがちな私です。

六月の日曜日の夕方、八幡バイパスを通り、大阪までトラックで行く途中、なにげなく八幡前田教会を見ると、榎本先生が、ステテコ姿で家の掃除をしておられたそうです。その後姿が、とても印象的だった。帰宅してから寝て、次の日に掛けるまで興奮してその様子を言い続け、私は何回聞かされた事でしょう。まるで神様に会った様でした。そして「八幡前田教会で、榎本牧師の生ナマのお説教を聞きたい」と、言い始めたものですから、私はびっくりしました。これまで、私も牧師館で、先生とお話をしているものの、「八幡前田教会で、礼拝したい」と、祈っておりましたが、機会がありませんでしたし、福岡大濠公園教会で礼拝した時もよその教会だからと言って、上がりもせず、私が戸畑で礼拝するので、戸畑教会にこだわっていた主人ですから、別に何も言いませんでしたが、榎本先生の後姿を通して、神様が心を開いて下さった事に、深く感謝しました。

六月一八日祈りにこたえられて、夫婦揃って初めて、八幡前田教会で礼拝に出席させていただきました。この日は、息子の成人の誕生日でもあり、二重の喜びとなりました。亡父から私そして、主人から息子へと、この大きな恵みが流れて行く様に、祈らずにはおられません。又、主人は、八幡バイパ

スを走るたび、喜びを感じているそうです。そして、トラックを止めては、(本当は、止められない場所) 八幡前田教会に立ち寄って来た様子を、私に嬉しそうに話します。この恵みを測る事も、書き尽くす事も出来ませんが、色々な出来事を通して、神様の深い恵みを味わっています。



今より我は主なり

柴 田 郁 子

「今より我は主なり、我行わば誰かこれを

止むる事を得んや」(イザヤ 四三・一三)

思い起こしますと、昭和五七年この聖句にしっかりと信頼
いたしました、娘の進学を機に、東京へ参りました。

ほんとうに、神様が成して下さる事は、如何にすばらしい
か体験させていただきました。

具体的に、従兄を置いて下さり、上京の道を開いて下さい
ました。しばらく従兄宅にお世話になりながら、就職口を探
しました。娘もアルバイトをしながら、頑張りました。

「恐れてはならない。わたしはあなたと共にいる。

驚いてはならない、わたしはあなたの神である。

わたしはあなたを強くし、あなたを助け、

わが勝利の右の手をもって、あなたをささえる。」

(イザヤ 四一・一〇)

こうして、神様のお恵みに守られながら、娘を無事に卒業
させていただきました。その上に、結婚まで導いて下さいま
した。ほんとうに、あまりあるお恵みでございます。

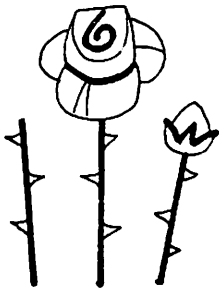
今は何のためらいもなく、おだやかにみことばに寄り頼み、
自分の仕事に精を出しております。感謝でいっぱいござい
ます。

こちらに参りまして、早や七年が過ぎましたが、聖日礼拝
を、守らせていただけるようになり、生活のリズムも整って
参りました。

この度、前田教会創立五〇周年の感謝会のお知らせをいた
だきまして、つたないペンではございますが、神様のみ救い
にあずかっている者として、感謝の言葉を述べさせていただきました。

「主の恵みふかきことを味わい知れ

主に寄り頼む人はさいわいである。」(詩篇三四・八)



主のあわれみは尽きることがない

大濠公園教会 正 野 暢 之

「わたしは聖なる者であるから、あなたがたは聖なる者とならなければならぬ。」(レビ二一・四五)

「もし信じるなら神の栄光を見るであろう。」(ヨハネ一一・四〇)

前田教会の創立五〇周年を感謝します。一〇年前まで、前田においていただき、豊かに恵んでいただきました事を、心より感謝いたします。

子供の出産について証させていただきます。

長女の出産は、妻の体調が悪く非常に困難でした。ある人は、子供も妻も助からないかもしれないと言ひ、医者に行っても原因がわかりません。

どうなるかわからない子であるならすべてを主に委ね、子供共々臨在に近づこうと思ひ、妻に話しますと「ハイ」と言つてついてきてくれました。まだ見ぬ子供と三人で各集會に近

付いて行きました。今考えると体調の悪い妻を車に乗せて連れ回るなど無暴なことであつたかもしれませんが、そんな者をも主はあわれんで下さつたのです。

臨月の日が来ましたが、出産の気配はありません。病院に行きますと、「奥さんは出血があり高齢出産のために、帝王切開をした方がよい」とのことでした。

初めてのことでですから、夫婦共に不安になります。榎本先生にご相談しますと、「神が清めたものを、清くないなどと言つてはならない」(使徒行伝一〇・一五)とお言葉をいただひて、切開することになりました。歩みだそうとすると、主は不思議に、ある人を通して手術すべき福間の病院が与えられました。そこでの診察は、前置胎盤のようだから、即、手術ということになりました。

前の医者 of 診断とちがつて、臍帯が異常に短く、下に子がおりることができなかつたのです。子供は非常に衰弱してました。もし二、三日後になると、衰弱死していただろうとのことです。危機一発だったのです。

そのような緊迫した状況の中で生まれた長女ですが、乳をよく飲んでスクスクと成長していきました。それから妻も子も共に元気よく退院できました。神のなさることはなんと素

晴らしいことでしょう。

私達はこの子に「私が聖であるからあなたがたも、聖なる者とならなければならない」とのお言葉で聖をとって、聖美と名付けました。

その後、妻は二人目の子をみごりました。

八ヶ月頃から出血が始まりました。そのころは前田教会の近くの佐々木アパートに住んでいました。

榎本先生にご相談に行つては、祈っていただいたり、はげましていただき本当に力となつて下さいました。

教会の方の世話で家の近くの病院に行くことができるようになり、そこで出血の原因もわかりました。しかし、子がお腹にいる以上手術するわけにいかず、そのままにしておきました。

その後、その病院の院長が亡くなり、代診に製鉄病院の先生が診察にこられるようになり、その先生の世話で、製鉄病院に入院することになりました。

しかし、もう一度帝王切開をしなければならなくなったのです。

妻が二度も受けて大丈夫か、子は大丈夫か、と思ひめぐらしている、病院の先生が「この病院では、四度も帝王切開

をされた方が何人もおられますよ」と言われすぐに受けることになりました。

妻は平安のうちに「私は世の終わりまでいつもあなたがたと共にいる」とのお言葉で支えられて守っていただきました。生まれた子は、二六五〇グラムの女児でした。

哺乳力もなく、泣く力もない小さな子でした。だんだんと子は細くなってゆきました。二四五〇グラムまでやせました。この子はこのまま死んでしまうのかと思つていましたが、しかしその年の新年聖会で「信せば神の栄を見るべし」(ヨハネ一・四〇)のみことが与えられ、栄光の栄をとつて榮子と名付けました。

そのお言葉に寄りすぎる力も、信仰もできません。現実には、子は細くなってゆく姿をみると、どうすることもできません。そんな不信仰な私でした。

そんな私でさえ、主はあわれんで下さり、子は急に、乳をのむようになり、日増しに、顔色も出て体重もふえてゆきました。三〇〇〇グラムまでに成長しました。予定より二週間遅れましたが、妻子共に退院できました。

「主に感謝せよ、主は恵み深く、そのいつくしみはとこしえに絶えることがない」 (詩篇一一八・二)

神のあわれみに深く感謝し、ほめたたえます。

神様のおかげで

大濠公園教会 正野 栄子

私は、昭和五三年二月一七日に八幡の製鉄病院で正野家の次女として生まれました。

その頃、私は、泣く力もお乳を飲む力もありませんでした。体重も、二六五〇グラムと他の赤ちゃんにくらべて非常に少なかったそうです。それからもお乳を飲めずに二四〇〇グラムにへりました。

お父さんやお母さんも、もう私をあきらめかけていました。でも、お父さん、お母さんも私がおなかにいるときから、私を前田教会につれていってくれました。そこで榎本先生やゆりこ先生、前田教会のみなさんが私のために祈りして下さいました。

神様が支えて下さり、また私を、みすてられませんでした。それからです。私が出来て一ヶ月くらいして、お乳をのめるようになりました。ぐんぐん体重もふえました。



私が栄子というすばらしい名前をあやかっただのは、その年の前田教会の新年聖会のメッセージが、「信ぜば神の栄をみるべし」というヨハネ一章四〇節のおことばだったからです。また、「神、我らと共にいます」という所です。

神様がいつも共にいて下さる。神様を信じれば神様の栄光を見ることが出来ます。私はこんなすばらしいおことばが生がいのおことばであってうれしいです。生まれた時に死にそうだった私をここまで守って下さった神様、ありがとうございます。



ある日の記録

下山祥子

数年前、ある障害幼児の園に転勤になったときのことである。そこに通園してくる子供たちは、重度の障害児で、体の動きがぶい子、言葉が全くでない子、多動でいつ外に飛び出すかわからない子、また、自分の気持ちを表現できず、自分で自分の体につめや歯で傷つけたり、他の子や教師に危害を加えたりなど、さまざまな行動を示す幼児たちである。

この子供たちと初めて出会った私は、どうしてよいか全くわからず、とまどう毎日であった。

ある時、ちょっと目を離れたすきに、園から飛び出し、近所の家に入りこんで冷蔵庫や机の上にあるものをかきまわしている。私は近所の方に「すみません」の連発、ただただ平あやまり。

また、ある時、かぎをかけていたはずの門があいている。「Tちゃんがない」の教師の声に、一瞬足がすくみ、私達

は青ざめた。手足が不自由で、やっと歩く程度。ころべばなかなか起き上がれない。溝にでもおちたら即、命にかかわる子供である。しかも知的にも遅れがみられ、危険ということも理解できないのである。

この間、必死で祈る。ひたすら祈りながら周囲をさがしてまわった。橋から落ちていのではないか、川におちているのではないか、とつい悪い方向に思いが走っていく。

時間は刻々とたつていくが、見つからない。一瞬、頭の中が空白になる。どうしてよいかわからずただ祈るばかり。

とにかく、園児がいなくなったことを報告しなくてはと、園にもどった瞬間、電話がなる。近隣の小学校からである。

園児がまいこんできているとのこと。そのことばに一瞬力がぬける。

園から小学校まで、大人の足でも二〇分はかかる所である。しかも、交通量がはげしく、陸橋がかかっている。どこをどのように通っていったかは、誰も全くわからない。本人は勿論、言葉も出ないし、通ってきた道さえわからないである。

とにかく、無事でいたことは本当に感謝であった。

この子供たちと一緒に過ごして、神様に祈り、すがって

かないと何もできないことを、一つ一つの事柄を通して思い知らされるばかりであった。時には祈る力もなくなってしまう、自分の弱さを思い知らされることもある。

この子供たちは、自分のことは自分で全くできない。周囲の大人たちの手がなくなると生きていくことができない。自分のすべてを相手にあずけてしまっている。しかし、この子供たちの目は本当にすんでいる。じっとみているとき、心の中をみすかされているような気さえする。

この子供たちのように、自分をすてて、すべてを神様にすがっているのだろうかと問われることしばしばであった。

私自身、これからも神様のすそをにぎっていないと何もできないことを思うのである。



御子の国に遷うつされた者

H・T

「神は、わたしたちをやみの力から救い出して、その愛する御子の支配下に移して下さった」

(コロサイ一・一三)

前の訳では、

「父は我らを暗黒くら黒の権威より救ひ出して、その愛しみ給ふ御子の国に遷うつしたまへり」とあります。

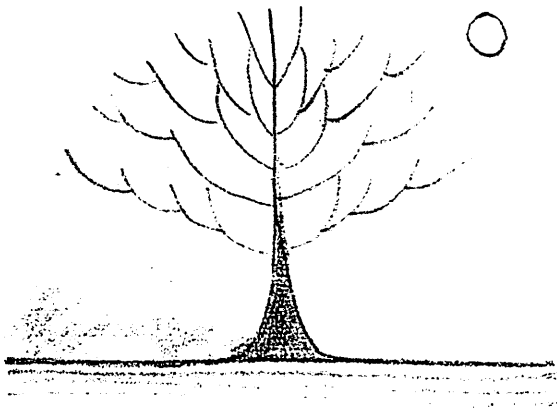
わたしには、どうも、前の訳の方がぴったりと合うような感じがいたします。

かつてのわたしは、まさに暗黒の権威の下にあがいた者でした。それだけに、御子の国へ遷うつされた現在との境をはっきりと見せていただくことができます。

これは置かれている場所を忘れやすいわたしにとって大きな恵みだと思います。今にして思えば、あの暗黒の下での時

間は、神様が与えてくださった信仰の踏み台だったのでしよう。そして、はつきり残してくださった境い目に、カルバリーの丘があり、そこで注がれた御子の血が暗黒の権威から御子の国へとわたしを運び出して下さったのです。

神の子となった以上、御旨にかなう歩みができるよう、聖霊の導きと力を求める毎日です。



詩篇 第二三篇第一節を通して

津留崎 浩 行

「主はわたしの牧者であって、わたしには乏しいことがない」
(詩二三・一)

有名なこの一節には、味わっても味わい切れない奥深い恵みがあるように思います。

私はこの一節を味わいながら、本当に主は私の牧者になってくださったのだろうか、自分の歩みを振り返り、主の恵みを確認させていただきます。そして、そのたびに主の御救いの底の深さ、あわれみの大きさに感謝いたします。

私はかつてある問題の中で、主におゆだねする以外打つ手が無い所まで追い込まれ、とうとう主の前に全く降参し、生きることに一切を主の手に譲り渡しました。そのとき以来、必要な毎日の糧を主は与えてくださいました。ザレパテのやもめの経験の主は与えてくださったのです。

「主がエリヤによって言われた言葉のように、かめの粉は尽きず、びんの油は絶えなかった。」(列王記上二七・一六)

毎日の糧を備えた養い主として、まず主は私の牧者になってくださったのです。

その上感謝すべきことは、その日々のマナを通して、甦ったイエス様に、今も現実に守られる者とされたことを教えられたことです。不信仰で不熱心、自己中心の心をどうすることもできないような者を、そのまま御子の血であがない取ってくださいなのです。

「わたしたちに、イエス・キリストによって神の子たる身分を授けるようにと、御旨のよしとするところに従い、愛のうちにあらかじめ定めて下さったのである」(エペソ一・五)
それでは、神の子とされた私に、心配ごとや恐れなど全く起こらなくなったのでしょうか。残念ながら私の信仰はそこまではいっておりません。困難な出来事に出会えばそれなりに心配もし、恐れも起こります。

では私の毎日は世の人と全く変わりないのでしょいか。それは、はっきりと違うのです。私には全ての悩みや問題

を持つていく場所ができたのです。祈りに答えて、重荷を主御自身が引き受けてくださる道が開けているのです。難問やわたしの至らなさから起こる失敗すらも、主が御自分の愛と全能を信じさせる機会として用いてくださるようになったのです。善きにつけ、悪しきにつけ、主の恵みを教えられ、感謝する道を主が開いてくださったのです。

松 尾 博 子

神は愛なり

前田教会の戸をたたいてもう六年半、その歩みの、折々に聖言をもって語りかけ、私を強め、思いを変えさせ、真の道へと導いて下さる愛の神様に心から感謝致します。

「狭い戸口からはいるように努めなさい。

事実、はいろうとしても、はいれない人が多いのだから」

(ルカ一三・二四)

振り返ってみますと、ただ一方的に多くの恵みをいただき、身に余る思いです。又その中にも喜べないこと、私の理にかなわないことに出会う事もしばしばです。

私は神様に愛されている、喜べないことなど御手のうちでないで勝手にきめつけ、心で反抗したり、つぶやいたり……でも、そこには何の解決もありませんでした。

農夫であられる神様は、それらの事を通して私の中の無駄な枝葉を刈り込み、御旨にかなって美しく、格好良く整えて

「見よ、神の幕屋が人と共にあり、神が人と共に住み、人は神の民となり、神自ら人と共にいまして、人の目から涙を全くぬぐい取ってください。もはや、死もなく、悲しみも、叫びも、痛みもない。先のが、すでに過ぎ去ったからである」(黙示録 一一・三一・三四)

私は霊肉共に主に養われ、守られる子羊となったのです。主は自ら血を流して、私の牧者となってくださいだったので、ハレルヤ！主の御名をあがめます。

下さっている事がわかり、これも大きな恵みと知りました。

「わたしはまことのぶどうの木、わたしの父は農夫である」

(ヨハネ一五・一)

私をつくり、選び、すべてを知って導いて下さる神様が、どこを切っても愛の方であること、それは何と安心な事でしょうか。以前、先走って追い求めた神様からくる平安とは、喜びとは、それは信じきった時に与えられることを教えていただきました。

「ああ神は愛なり、けがれはてし

我さえ愛したもう、神は愛なり」

(靈感賦一四九)

今日も大きな愛に包まれた尊い一日、心から感謝をお捧げします。



神の召し

水 村 光 義

神の恵みによって、わたしは今日あるを得ているのである。

(一・コリント一五・一〇)

わたしは主の導きによって、二年前に現在いる神戸の関西聖書神学校にきました。はじめて母教会を離れて、いろいろな教会の人との交わりに入りました。はじめはどうしても、信仰の面や考え方の違いで、神学校においても奉仕教会においてもなじみませんでした。それよりもむしろ、母教会と比較して批判的でした。しかしその様な私に神様は、神学校の上にある教会の頭である主御自身を見るように示してくださいました。「誇る者は主を誇れ」と聖書にあるように、私の誇りとしていた母教会をまたその信仰を砕いてしまったのです。わたしは今も、母教会をまたその信仰を誇りに思っています。しかし、それ以上に主御自身を誇りに思っています。私の様な罪深い愚かな者のために、主は私の名を呼んで下さ

り、身代わりとなって十字架にかかって下さいました。罪のないイエス様御自身の尊い血潮をありったけ流して私をあがなって下さったのです。そしてこの世に死に神に生きるようにと、主御自身が私のすべてとなって下さったのです。この方が共にいて下さる。これ以上に幸いはありません。私はこの様な者を救い、新しく造り変えて下さった主を証するため
に召されました。そして今あるものは主の恵みによるのであり、そして榎本先生をはじめ母教会のみなさまの祈りに支えられて、深く覚え感謝しています。これからも変わらず八幡前田教会の上に主の導きと祝福があることを信じてやみません。



創立五十周年に寄せて

—思い出の人々—

選びにあずかっていた父



岩 隈 多賀子

昭和五四年三月二一日、父、勝^{まさる}は一年半の闘病生活の後に天に召されました。

昭和五三年八月、仏教でいうところのお盆のころ、父は阿弥陀^{あみだ}経のカセットテープを夕食によく聴いておりました。数日して、「もう聴きたくない」と言うのでその理由を問いますと「寂しくなる」とのことでした。それからしばらくたった日の夜のこと「お前の信じているイエス様とはどういう神か」と私に尋ねるのです。このような質問を父から受けようとは予想もしていなかった私は、少々興奮気味になって懸命に十字架の救いについて話したのですが、「お前の話はよく分らん」と、いらだつような口調で言うのです。「それじゃ、教会の先生に来てもらって話していただこう」と私が申しますと、「ウン、そうしてくれ」と納得しました。

昭和五二年九月、元氣よく起きた父の姿が見えないのです。

探していましたら高熱を出して座敷にゴロツと横になっていました。早速、医者を呼んで手当をしていただいて熱も下がり食欲も出てきました。

このころから、体力も弱くなってきて、ふらつく足を何とか強めようと部屋の中を歩き回っていました。すると、また、高熱に見舞われ、床についてしまいました。この繰り返しが高熱なるにつれて「もう元気にはなれないかも知れない」という不安を覚えるようになったのかも知れません。父の救いを祈らぬ日はありませんでした。

元気な時は「イエス様を信じない人は、永遠の滅びに入れられると聖書に書いてあるのだから、いつまでも神はいないと言いつ張るなら、死んだら私は天国、父ちゃんは地獄、行く先は別々だからね」と、思いきり言い争ったこともあります。しかし、弱ってしまった父に対しては、ただ黙々と看病するほか術^{すべ}のない私でした。

神様の救いの時が来たのです。榎本先生が都合をつけて来て下さった日、父は丁度、熱もなく病状も落ち着いていました。お話を神妙に聞いていましたが、お話が終わって「先生はご存じないが、私はとても業^{ごう}の深い者です」と救いにあずかる資格の無い者であることを、しきりに訴えていました。

榎本先生が二度目に来て下さった時、父に代わって、救い
を感謝する祈りを捧げて下さいますと「アーメン」と意志表
示をいたしました。先生が帰られたあと「ただ信じるだけで
本当によいのか」と幾度も私に確かめて「有難いのう」とし
みじみと繰返し言っております。

「元気になったら一緒に教会に行こう」

「掃除くらいならおれにも出来る、させてもらえるかなあ」

「ご飯を食べる時のお祈りを紙に書いてくれ、長いのは覚
えきらんぞ」

「讃美歌を歌って聞かせてくれ」

「天国へ行く道を未だ聞いていなかった、どうしたらよい
か」

「仏壇を始末せんといかなあ」

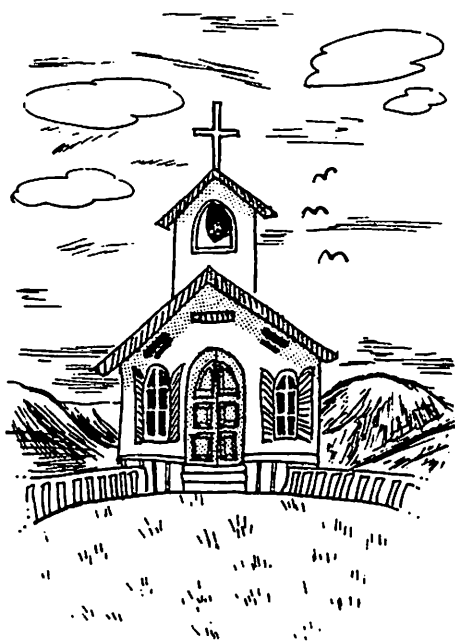
今、父の言ったこれらの言葉を断片的に思い出してみます
と、何と明確に再生の洗いを受けていたのだろうか、感謝
を新たに覚えます。(テトス二・五)

聖書物語を読んで聞かせたとき「アブラハムの話を子供の
頃、宣教師から聞いたことがある。ロトの話も聞いた。カー
ドが欲しくて聞きに行った」と打ち明けてくれました。エペ
ソ人への手紙にあるとおり、正に天地の造られる前から選ば

れていたのです。

間もなく病状が悪化して薬のせいも痴呆症に似た状態が続
きましたが、最後の一ヶ月余りは、なごやかに父娘の交わり
を持たせていただきました。

主のつきない憐れみによるものと、聖名を心から讃美して
おります。



島崎の奥様をしのんで



大 田 邦 子

「世にのこる民 去りし民と ともにまじわり、神をあおぎ、とわのやすきを 待ちのぞみて、君の来ますを せつにいのる」
(讚美歌 一九一・四)

五〇周年記念礼拝でこの讚美歌を歌っている時、私の頭の中に、あのお優しい島崎さんのお姿が浮かんで参ります。

この世での戦いを立派に果たされ、み国にお帰りになられました島崎さん、はや一一年になります。私を教会に導いて下さった方です。

今も、初めての出会いをよく覚えております。

昭和二二年頃でしたか、小倉友の会の集まりの時でした。何と美しい清らかなお声、はつきりとしたご性格、端正なお姿、誠に印象的でした。そして友の会ではリーダー格、私にはちよっと遠い存在の方でした。

でもお交わりいただいている内に、てきばきと物事を処理

され、頭の切れる方で、知的な方にありがちな冷たさは全くなく、それどころか温かく親しみやすい方、私の理想の女性像でもあり、尊敬申し上げるようになりました。その内クリスチャンでいらっしやることも判り、私なりにああそれでー、と解けることでした。

昭和二六年頃、友の会の聖書研究会が小倉の金田のF姉宅で持たれ、榎本先生がお見えになられていました。私も心の安らぎを求めて、模索中の時だっただけに、森岡姉から「いらっしやるなら」とすすめられ、島崎さんはじめ五、六人の集まりでしたが、その中に加えていただきました。

回を重ねる毎に、島崎さんは、はつきりとした信仰を持っていらっしやるから、あの様に慎しみ深く、事毎に感謝して行動が出来るのだなあ、と思っていました。

ところが或る日、突然、榎本先生のお話の後、膝を乗り出すようにして、「先生、本当に神様はいらっしやるのですか。」と真剣に、少しも憶することなく、はつきりとお尋ねになりました。クリスチャンホームでお育ちの島崎さんが。何事もあいまいにしておかれぬその態度のご立派さ、感心させられました。

先生は「主は今も生きていらっしやいますよ。み言に真心

もつてお従いする時、必ず真実をもつて応えて下さいます」と懇ろにお話し下さいました。そしてお祈りをされました。今もその時の島崎さんの晴れやかなお顔を、忘れることが出来ません。私も雲に閉ざされた心に晴間を見る思い、勇気づけられました。

私はまだ、生きていらつしやるイエス様がよく判らないながらも、先生方のお祈りに応えられ、段々と渴きを覚えるようになりました。聖書研究会では物足りなくなり、島崎さんに「教会ってどんなところですか」とお尋ねしましたら、「神様の臨在は素晴らしいですよ。先生のお説教もとても力強く、教会を出る時は、言葉では言い表すことの出来ない力が与えられますよ」とお誘いいただきました。それから私の求道が始まりました。

婦人会での心打たれるお話の数々、私もどんなに励まされたことでしょう。その中で「強く、また雄々しくあれ。あなたがどこへ行くにも、あなたの神、主が共におられるゆえ、恐れてはならない、おののいてはならない」。(ヨシユア記一九)。

この聖言で恵まれていらしたお証を思い出します。信仰の歩みは、まさしく「強く、かつ雄々しかれ」、この通りの方

でした。

「彼は死ぬれども、信仰によりて今なお語る」

(ヘブル一・四)

島崎さんの、主に堅く立つての信仰の姿勢が、今も脳裏に焼き付けられ、力づけられます。

私の受洗の時は、心から祝福し、喜んで下さいました。

津屋崎の夏期学校で、お孫さんの夏休みの宿題、植物採集など、又お菓子作りなども、ご一緒させていただき、若かった私は、教えられる事が多くありました。過ぎし日のこと、懐かしい思いで一杯です。

今では、お母様の信仰を受け継ぎ、博子様も主の前に歩んでいらつしやいます。私も主が、このような良き先輩を送り、主がお建て下さいました前田教会に導かれ、この救いにあずかせていただいた主のご計画、お恵みに心から感謝を捧げます。有難うございました。



河本かつ 遺稿



河 本 米 子

主の御愛にさされて深更に想う

ねむれぬ夜 受けし恵みの数々に

またも目がしら あつくなりける

「活水」を読む毎に強められて詠める

活水に 心潤う我が身には

夏の早も なにかはあらん

晩年、「『ぶどうの木』」に投稿したいんだけど、おかしくな
いかねえ」と案じて、寄稿を果たせなかつた母の歌です。辞
世の句とでもいうのでしょうか。

「この地上ですごしていても、天国に住まう所を備えてい
ただいているので、嬉しくて大安心でございます。ただ残る
生涯で一人でも多くのお方に、エルサレム、ユダヤ、サマリ

ヤ全土、地の果てに至るまで、この福音のほかには救いのな
いことをお証したいものです」。

召される前年、昭和五九年の感謝会の折りに「足が弱って
わたしは出席できないので、教会の皆様には伝えてほしい」。
と申しまして託された言葉でございます。

教会創立五〇年の記念誌に機会を与えられましたので、お
届けさせていただきます。



母の思い出



片山 セイ子

私の若いときの母は、自然な空気のような信仰で、私共を育ててくれました。私も母の信仰を素直に自由な気持ちで聞いておりましたが、片山との結婚話のとき、先方が望まれているようだし、きつと神様が聞いて下さった道と思うから行って見たら……、と急に私もわからないまま嫁ぎました。でも全く違う世界で、ある時母に手紙を書きました時の母の返事、「大変でしょう、でも一日の苦勞は一日にて足れり、全て感謝せよ、祈っています。母より」このとき私も思わず神様に祈ることができ、それ以来いろいろなことがあるたび祈りました。神様も答えられました。私も時間がある限り聖書を読んでおります。でもどうにもならないとき電話で一言「こういう事なので祈って……」「明日から主人のおともで海外に行くので祈って……」と母が天に召される日まで、いつも祈りを頼んでいました。そして、私も母が祈ってくれ

て安心するのです。年に一回位しか会うときがなく、今だに忙しい私共ですが、母のこの世の存在はやはり現実的に心丈夫なことでした。

それだけ母の信仰は本当に偉大なものだと思つておられます。お陰様で今の私も神にめぐまれた日々を過ごしております。

昨日与えられた聖言は母に神様がおっしゃったことだとそれを書かせていただきます。

「今から後、主にあつて、死ぬ死人はさいわいである」。御霊も言う「しかり、彼らはその労苦を解かれて休み、そのわざは彼らについていく」。

(ヨハネ黙示録一四・一三)

片山セイ子さんのおたよりから

榎本先生のお若い頃を私なりになつかしく思い出しております。あの頃から西南女学院時代まで、自然に両親の元で自由^{ただた}に育ち世の中に入り、唯々、その時どきを私なりに一生懸命で、与えられた信仰も忘れたように過ごしましたが、片山との結婚話から急に母との会話の中で信仰の火が母を通じて少しづつ燃えるようになりました。なかなか教会とか集会に

は行けません、毎日朝夕祈りと共に聖書を一章づつ読んでおられます。その時間も与えられるよう祈りながら、殊に近頃では聖書を何回も読みました。聖言が、新しい力となり、御恵みに心から涙も流れる程感謝の時もございますし、今になって、両親の信仰のお陰だどつくづく思います。人様にも両親の自慢話のように話し、神様の御栄を感謝致しております。



姑ははの思い出

島 崎 博 子

母こと島崎美知子の没後一一年の記念会を、去る八月二四日にしていただき、本當に感謝いたしております。

晩年の母とは、私が一番接触が深かったように思いますので、思い出をたどって見たいと思います。

母は本當に、何でも出来る方で、私は随分お世話になったと思います。それなのに私は我がままで申し訳なかったと思います。とてもよく働かれる方で「骨惜しみをしない」という事を信条にされていました。そして困っている人には進んで手をさしのべる方でした。私と主人は二人とも持病があつて、同時に入院した事があつたのですが、その時ももう六〇を過ぎていた母が、五才と二才になる子供を三ヶ月も立派に守って育てて下さいました。本當に感謝でした。そして恩を着せるなど絶対になさらない方でした。

母は常にもことばに、歩いておられました。主人が会社の

定期検診で持病の結核が思わしくない結果が出た時、私がよくよ心配していると、母は「私は今年の新年聖会で『悩みの日に我を呼べ』というみこばをいただいているから、ちつとも心配しない」と言われました。私はそうだと思い、一緒に祈っていると、事なくすんだこともあり、本当に感謝でした。

また、主人は常に病気がちですので、収入は多くはなく、母の家庭経営を教えていただいで生活が保たれていました。

そしてとても頭のいい方で、子供達は小学校の間ずっと勉強を見ていただき、私は本當に子育てを、助けられて来ました。

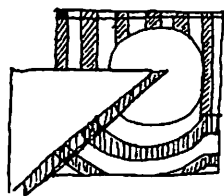
また編物がお好きで、古毛糸と新しい毛糸をまぜて編みこみ模様をし、とてもしゃれたカーディガンやセータを子供達に編んでいただきました。

声もとてもよく、学校時代ソプラノで独唱されておられたそうで、晩年オルガンを弾いて、よい声で讚美歌をうたっておられました。

とても美人でいらっしゃったのですが、一生お化粧をした事はないし、パーマをかけた事はないと言われていました。それはきつと内なるものの輝きであったのだらうと思いま

す。

私は、自力宗教に行きづまり、二、三教会の門をたたいて見たのですが、鳥崎の家に嫁いで、母がクリスチャンだと聞いて驚くとも不思議な気がしました。私の結婚は、きつと神様のお導きだったのだと思います。思い出は、沢山ありますが、このあたりで終わらせていただきます。



一粒の麦

正野サカエ

「一粒の麦、地に落ちて死なずば唯一つにてあらん。もし死なば多くの実を結ぶべし」(ヨハネ二二・二四)

忘れもしない昭和二六年二月二日の寒い朝、遂に四男弘己ちゃんは召天しました。

目のパッチリした子で可愛ざかりの満三才でした。小学校一年生の兄ちゃんの読む本を先に覚え、親に似ぬ子が出来たもの、将来何になるだろうと、親馬鹿の私は、楽しみにしておりました。病氣一つしたことのない元氣な子供でしたが、或る日突然発熱四〇度を越す程の高熱も、扁桃腺の熱くらいに軽く考え、近くに医者控えておるのに、連れて行きもせませんでした。朝になって計ると、体温計も上り放しで、顔は真赤にほてり、体も燃ゆるように熱いので驚きあわてて医者呼んで見てもらった時は、後の祭で、急性心臓弁膜症という病氣になっていました。医者の説明によるとこの病氣は

生れつきの人が多いが、この子は高熱のために悪くなったのだそう、丁度ポンプの弁が悪くなるのと同じで、ポンプならば取替がききますが、心臓の弁は、取替えるわけにはゆかぬし、丁度、茶碗のヒビと一緒に修繕がきかんというのです。即ち心臓の役目が出来なくなる病氣で、それは死を意味する残酷な宣言を受けたのでした。入信したばかりの時であったので、祈りは聞かれることも知らず、発熱した時すぐ医者にかかっていたなら、こんな恐ろしい病氣にならずにすんだかも知れないのにと、どんなに自分を責め苦しんだことでしょう。誰も知らぬ所で、永い永い年月悲しみました。然し十字架の御愛を知ってからこのことは神の深い御慈愛から出たことであり、神の御摂理であったことに気付いた時、神の計り知ることの出来ぬ御計画と御愛、選びの尊さ、キリストの奥義を御聖靈様によって教えられた時、今も生き給うキリストにふれ、ただただ感謝と喜びで一杯でした。

このことは後でくわしく書くことにして、我が家の一粒の麦となった弘己ちゃんの病床日記にふれたいと思います。

その頃事情があつて、何不自由のない身分から転落し無一物になった我が家に、中学を頭に五人の子供をかかえ、一家を支えるだけの収入はなく、私が重荷を負うことになり、な

れぬ東芝製品を行商しておりました。以前多くの人を使っていた時のことを思うと、それは耐えられぬ程のつらさでした。そのつらさも子供可愛さに忍ぶことが出来たと思います。もちろん自分のために一寸の布地を買うことも顔にクリームもつけることもありませんでした。

その日ぐらしの生活に、いつ治るとも知れぬ、いや、むしろ、もとの体には絶対になれぬと刻印を押された病人をかかえて、我が家は、ニッチもサッチも立ち行かなくなりました。私が働いてさえ、やっと、ここまで来たというのに、重病人をかかえて、働きに出ることもならず、これから先、一体どうして食べて行けばよいのかお先真暗でした。町医者も、設備の整った大病院に連れて行って下さいと、言って放してしまつた。入院するにしても貯えはなし、頼る人もなし、日頃強がりの私も人並の弱い女でした。出てくるものはため息ばかり。主様も私をお見捨てになられたかに見えた時でした。

「お母さん、僕お母さんの代りに行って来ようか」と中学二年の長男が言いました。今でこそ見上げる様に背高ですがその頃は級でも小さい方で、田舎道を二〇軒以上も走らねばならぬ遠距離では、とても無理に思われましたが他に妙案も浮ばず、やらして見ることにしました。

得意客が大体固定していたし、真宏なら案外出来るかも知れない、かすかな望みが心の中で湧き、パッと目の前が明るくなるように思われました。得意先、品物の値段、請求書の書き方、物の言い方まで教え、大人用のポロ自転車に品物を乗せると、真宏の背よりずっと高くなり足もペダルに届きません。横乗りして上下に体を大きく動かして、こいで行くのです。大きな荷物を乗せて、小さい子供の運ぶ姿は人目をひいたにちがいません。私は見えなくなるまで、涙で見送り、無事に帰って来ますように祈りました。宗像郡一円をめぐる帰るのですから、自転車でも五時間ばかりです。初めて行く先々、今頃どうしておるだろうか、後悔にも似たものを感じながら帰えって顔を見るまで折り続けていました。その間の長かったこと、無事に帰ってきた時のうれしかったことをわすれることが出来ません。

殆どの品を売りつくし、計算も間違はなく現金を手にした時のうれしさ、有難さ、しげしげと息子を眺めて、頼もしく、思わず心の中で「神様有難うございます」と叫びました。

目に見えて弘己の病状は悪化して行くので、意を決して福岡済生会病院に入院しました。一日に一〇本くらいの注射をしました。子供ばかりの病室に入れられ、回診の先生の顔を

見た瞬間子供たちは泣いて騒々しくなったが、弘己は、一度も泣いたことはありませんでした。注射の時口を真一文字に結んで手を出して、観念したかのようにとてもいぢらしい姿でした。

一週間目に計算書が手渡されました。

「八拾九円也」の請求金額を見た瞬間、卒倒しそうになりました。今なら八万九千円にも相当する金額でしたので、二週間もおりましたでしょうか、身の破滅を恐れて医者を引き止めるのを振り切って退院帰宅しました。

それは会社に支払うべき商品代金を会社に支払わずに医療代金に肩代りしたからでした。その頃弘己は床に寝かすと心臓が止まって全身紫色になって瀕死の状態になる程悪化しておりました。結局福岡まで入院して結果は悪かったです。

病人の心配と、会社に無断借用したことが苦になって夜も、ろくろくやすむことが出来ませんでした。恐れていた日がやって来ました。何日まで支払わねば商品停止という手紙を受け取ったのです。停止されたら飢え死にしなくてはならない。早速現状を訴えてあわれみを乞いました。折返し課長さんが来られたのでお叱りを覚悟していると、今まで一度も支払日を遅らせた事なく成績優秀ということで賞品を下さつ

たのみか、ねんごろに感謝して下さり見舞品をおいて帰られました。私は涙の出る程うれしく思いました。

「あなたがたの会った試練で、世の常でないものはない。

神は真実である。あなたがたを耐えられないような試練に会わせることはないばかりか、試練と同時に、それに耐えられるように、のがれる道も備えて下さるのである」アーメン

その後も弘己ちゃんの容態は思わしくなく再び町医者にかかるようになりましたが、度び重なる注射のために小さな静脈はカチカチに固くなり、何度も何度も針を突き差したり抜いたりしなければならなくなりました。それでも弘己ちゃんはグット口をかみしめて痛みをこらえ決して泣きませんでした。そうこうしているうちに腎臓病を併発し、おしっこがだんだん出なくなりました。一日の量を見るため牛乳ビンに取っておりましたが、茶褐色よりも濃く私の目には血のように見え、いつもその量を気にしておりました。幼な心にも私を安心させたいと思ってか、「おかあちゃん僕おしっこ、沢山するよ」と言うので、長いことかかえてやっても、スタンスタンと二、三滴でした。弘己は沢山しようと一生けん命いきづんでいました。そのいじらしさに、私は泣けて泣けてなりませんでした。おしっこが出ないため体中がだんだんはれ

て遂にお腹は臨月のようにふくれ、ピカピカに光って今にも破裂しそうでした。どうしても水分の制限をしなくてはなりませんので飲みたい水を制限し、大好物のみかんもわずかしか与えませんでした。弘己ちゃんも、一生けん命がまんしました。でも、のどの渇きにどうして耐えられましょう、その苦しみがよくわかるだけにいつそ心ゆくまで飲ませて上げよう好きなみかんも与えてやりたいと何度思ったか、わかりません。けれどその都度心を鬼にして、ほんのわずかしか与えず、それをうまそうに飲む様子を見てはつらい思いをしました。その上に、横にねせると心臓が圧迫して苦しみ出すのでねせることが出来ません。少し傾斜してさえ呼吸困難になります。くる日もくる日も壁にもたれて起きたままでねむらねばなりません。見るに見かねて、或る日「お母ちゃんも弘己ちゃんと並んで、ねようね」私はそう言つて、少しでも弘己ちゃんの苦しみを味わおうと思つて、同じ様にして横に並んで起きた状態のまま寝ることにしました。一時間二時間は辛捧出来ましたが、先づお尻が痛くなる、何としても上体が、きつくて夜中の二時頃には、もう耐えられなくなりました。弘己ちゃんは何のくつたくもなさそうにすやすやねむっています。私はすまないような気になりながら、床をひいて長々

と横になったのでした。初めて、その有難さが身にしみました。床の中で長々とねられる有難さ、何の感謝もなく小用していたことも、実は当り前のことではなく、神様のお恵みがなければ何も出来ないことが、身にしみてよくわかりました。私は今でもその都度感謝を捧げています。

不思議なことに弘己はただ一度も夜ねむらなかつたことも、痛みを訴えたこともないことでした。大人の私でさえ、一晩も真似ることさえ出来ないのにどうして年端もゆかぬ子に辛捧が出来ましようか、あのやすらかな寝息平安は一体どこから来るのでしょうか。

神様が支え助けて下さらないで、どうしてこのようなことがあり得ましよう。

それは私がそばについている時はいつもそうでしたが一寸私の顔が見えなくなつたら、さあ大変ノ苦しみ出すのです。それは決して芝居しているのではなくほんとうに危篤状態に陥るのでした。だから一時も離れることが出来ません。せまい部屋ですから、フスマを明けければ台所も便所も見えます。便所の戸を明け放し私の顔を見ていさえすれば、いつも平安でしたので、私はこのようにして用を足していました。

もう一つ不思議に思うことがあります。それは召天の前日

まで、イエス様のお話を聞き、さんびかを歌うことでした。
さんびか九〇番が大好きで丸暗記していました。イエス様のお話がつきてしまっても同じ話を何べんも耳を傾け身動き一つせず、またたきもせず私をじつと見つめるのです。

大きな黒い瞳は、すみ切った湖を思わせ、その中に私の顔がポツカリ写っていました。

私の顔を見つめて、またたきもしません、何か神秘的ものを感じながらイエス様のお話をしました。それは見えない方を見ているように思われました。神様が天国への準備をなさっていられたのではないのでしょうか。そして遂にその日が来たのです。

召天当時のことを当時宗像中学二年の真宏が、学校の作文の時間に書いたものが残っているので原文のまま写すことにします。



作文 永遠の命 正野真宏

「まさひろちゃん、」
と姉の呼ぶ声に目を覚めた。
「うん、」と朝、僕はぬむい目をさすりながら開いた。
「弘己ちゃんか危いのよ。」と僕は飛び起きた。
「どうして姉は台所の方向へ行って行った。
「さう言へば障子一枚へたてて寝てる弘己ちゃんの
息がつかせぬい。」
突然「ひろみちゃん、イエス様の所へ恐しくないのでよ。」
母の悲し通な声に僕が僕の胸をすきんとせした。
「まさひろちゃん早く姉の声を僕はずはやく股を着
て外に山た。外は暗く外燈が寒空にぼんやり光つ
てた。
僕は寒くも現にしくもなかつた。たゞ神さま弘己ちゃん
を守りなさいと心のけでせけななから植木病者院を
目あげて来た。
「ほくか植木先生をすつて帰って頭はよりのあは
さんか来て弘己ちゃんの足をすくって来た。
弘己ちゃんは大変苦しうだった。
先生は静かに弘己ちゃんのをこはれあかつた手をとり
ミヤクを見る。僕達は息をのんで先生の口ばを待った。
「かいどうでずかこれでは……」
僕はたぶらうぜんと弘己ちゃんを見守るばかりだった。
すると弘己ちゃんは「おはちゃん……さういよ……ホク……い……」

でしたが、

「今わからず後之を知るべし」とおっしゃったみことばのように、神様の深い御愛とお恵みを後になって知りました。わずか三年の、えにしではありましたが、私たちに多くのことを証して、使命を果たしたのでした。

聖書に書かれてある天国は正にあるということ、神のおことばは真実であること、私たちの住む世界は仮の宿であり、私たちの目標は天国にあること、救われるということは、永遠の命をいただくことであること、それは働きではなく、ただ主イエスを信じる信仰によって義とせられること、義とは主イエス御自身であり一点の罪なき方が私たちの罪の身代わりとなって死んで下さったこと、そして三日目によみがえられ、信じる私たちと共におられて、なやみの時のいと近き助けとなって下さる救主でいらっしやるのが弘己の召天を通してよくわかりました。

天が地よりも高いように神の御思いは人の思いと異なることでした。病気の進行と共に当然痛みや苦痛がともなうはずであるのにただ一度も訴えたことがないばかりかイエス様のお話しに耳をかたむける等常識では考えられない事ですが、見えないお方が弘己と共におられたに違いありません。小さ

な子でも御聖霊様のお働きで信ずる事が出来ること、信せば肉体的にも霊的にも時間空間を乗り越えて重荷を負って下さったばかりか、信せば神の栄光を見ることが出来たのです。神のことばは今も力強く生き働いて下さることがよくわかりました。

残された四人の息子娘も、言わず語らずの内にイエス様こそ私たちの救い主でいらっしやることを信じ、それ以来二〇年毎日家庭礼拝を致しております。

皆成長しそれぞれの家庭を持っておりますが、その所で続けており、主のご用に励んでおります。今年の正月遠路各地より親元に集まって来ましたら、一四名にふえて、皆で主を崇^{あが}めて礼拝致しました。

「汝主イエスを信ぜよ、さらば汝も汝の家族も救われるべし」みことばの通り家族を救いに入れて下さいました。それぞれのつかわされた地に於て、この証をしております。私も証人としてお立て下さったのでしよう。会う人毎に、お証致しておりますしたら、イエス様を選ばれた方々を集めて下さって、集會が毎週開かれ皆さんが主を崇^{あが}めるようになりました。有難いことです。主はすべての仕事から私を解放して下さい、毎日感謝讚美しております。

「一粒の麦が地に落ちて死ななければ、それはただ一粒のままである。しかし、もし死んだなら、豊かに実を結ぶようになる。」

神様は私たちの思う所、願う所に勝ることをなして下さいました。弘己ちゃんが我が家の一粒の麦となって死にました。「彼は信仰によって今なお語っています」。一粒の麦が何十倍、何百倍になるように祈って行きたいと思います。

「エホバ与え エホバ取り去り給う

エホバのみ名は ほむべきかな」 アーメン

昭和四六年七月 記

+
 改正新弘己葬儀執行順序

昭和四六年七月五日
 宛 東京市四谷区自宅
 司會 津島時教人 兼 福音堂會長 橋本和久
 一 奏 樂 津島時教人 兼 福音堂會長 橋本和久
 一 聖 書 へル書三二二三 森分牧師
 一 祈 禱 福音堂校東御分教 白山教師
 一 讃 美 歌 (八五 敬人愛唱)
 一 故人略歴 岡部桂雄
 一 式 終 葬 森分牧師
 一 祈 禱 福音堂校東御分教
 一 讚 美 歌 (四六八)
 一 告 白 詞 祝花
 一 禱 詞 祝花
 一 奏 樂 祝花

福音堂校東御分教
 司會者 津島時教人
 司會者 橋本和久



父の信仰と私



高橋 英雄

前田教会が八幡の地に神の御心により開かれて早や五〇周年とのこと、その間、戦中戦後を通しさまざまな困難な出来事の中、神様のご加護に守り支えられ、今日の我々信者の信仰の場として聖霊の導きにより真の神の教えにふれることが出来感謝で一杯である。

亡父唯市は、広島県の中国山脈の麓の景勝地、帯釈峡の近くである神石郡永渡村で、明治三四年八月に高橋善六の三男として生を受けた。尋常小学校を卒業し、叔父の話しでは成績優秀により卒業時には郡内唯一人郡長の表彰を受け、校長先生の熱心な勧めにより中学校進学を夢みたようであるが、山村の農家の三男坊で志を遂げることが出来なかった。大正末期に当時官営八幡製鉄所でにぎわいを見せていた新興地八幡に知人のつてを頼り、来幡、縁あって当時の河本商店に勤め、以来六三才で死去するまで合名会社河本商店の支配人と

してお世話になっていた。

父は謹言実直の言葉そのままの性格で、ただ仕事一途の生涯であったが、昭和初期経営者の河本小太郎氏の導きにより共に受洗した。以後神を信じ、神を恐れ敬い、ただひたすら神により頼み、恵みを感じ感謝する生活で終始し、明治生まれの人間の気質通り毎日朝早く夜遅くまで仕事に打ち込んでいた。

時には家族の者より、もう少し早く帰ってはと苦情を言われると、自分はこれが天職である、又自分には責任があると言い、最後には「どこで何をしていても神様はいつも共にいて見ていて下さる」と言うのが口癖であった。

安息日は潔くし神の前にぬかづき感謝するのが当然だと言った態度で、日曜日には集会を欠かしたことがなかった。

一途に神の前には敬けんな生活態度で子供にはその後姿を見せて、今思えば無言の教育をしていたのだなと感じている。

私と教会とのつながりは親の後姿で、戦前まだ物心もつかない頃よりで、当時の教会は私の自宅の真向かいの河本商店の事務所の二階の和室の大広間で日曜日毎に集会が開かれていた。

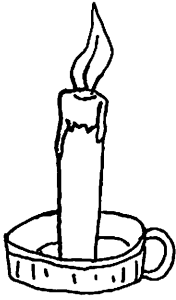
餓鬼大将のわたしは同じ年頃の子供と説教最中でも喧嘩三

味でクリスマス前になるとプレゼント欲しさに行儀良くしていたことが今は楽しく思い出されて来ます。昭和二〇年八月八幡の大空襲により戦火に会い家を失い、一時福岡に疎開していて福岡大塚公園教会折瀧先生の所に通ったこともあるが、昭和二四年頃八幡に帰り尾倉町に住まいした。前田教会も焼野原の中に神様のお恵みにより建築され信仰の場として与えられたが、父は以前と変わることなく集會に励んで、私に無言のうちに信仰の心を植えつけて呉れたと思っている。これからもこの遺産を受けついで神を敬まい、神の前に感謝の気持を持って正しい生活を続け神に喜ばれる日々を送っていきたくと念じている。

父の金言

「主に感謝せよ、主は恵みふかく、そのいつくしみはどこしえに絶えることがない」

(詩篇一一八・一)



母の想い出

「主をほめたたえよ。主に感謝せよ、主は恵みふかく、そのいつくしみはどこしえに絶えることがない。」

(詩篇一〇六・一)

私が前田教会に導かれたのは、筑山の母によって導かれ、救いにあづかったからです。三〇年前に召された母の想い出をしたためさせていただきます。私が結婚したのは、昭和二四年の秋、それから母との同居生活が始まりました。母はとても熱心なクリスチャンでした。

キリスト教のことなど何も知らない私は、わがままで勝気な性格でした。何時もおだやかでイエス様の十字架を信じ、折り深い母の姿を見て生活しました。母を悲しませたいやな思いもあります。母にさそわれ、時々前田教会の礼拝に出席させていただくようになりました。

二八年四月、長女があたえられました。月たらずで帝王切

開で生まれました。その当時では、奇蹟とも言われる程の、神様のお恵みにあずかりました。母は神様のお恵みだからと恵子と名付けてくれました。

神様は、私の心の中に、他には神はいない、私の罪のために死んで下さり、三日目により今もなお生きていらっしやる事を示して下さいました。三〇年四月、バプテスマを受けさせていただきました。母ともだんだん打ちとけて、たのしい日々を過ごしました。

その当時幸の神の大畑社宅に住んでいました。幸の神から黒崎まで歩いて、それから電車で前田町まで通っていました。電車に乗っていると母は席がほんの少しでも空いていると、声をかけて少しづつ席をゆづってもらい、子供さんをつれている人や老人の人達をかけさせてあげる、そのような母でした。思い出の一つです。何時も聖書を読んで祈っておられた姿が脳裏から離れません。

三一年八月関西に転勤になり、三才になった恵子と四人で西宮の社宅に住む様になりました。なれない所での生活不安もありましたが、神様が共にいてくださる事を経験していったから感謝でした。尼ヶ崎の竹谷教会に導かれ、教会生活を続けていました。それから一年余りして、全国的にひどい

風邪が流行して、母も風邪にかかり、その時から入院生活が始まりました。須磨の山にある病院でした。病院での生活の間に同室の人で母によって、主に導かれ救にあづかった方があつたと聞いています。病院にお見舞いに行くと、お部屋の雰囲気が違うんです。おばあちゃん、おばあちゃんと慕われていました。

「愛は寛容であり、愛は情深い。また、ねたむことをしない。愛は高ぶらない、誇らない、」(一・コリント一三・四)

このお言葉をおしえられました。母の病院生活一年あまり、その間に次女淳子が与えられました。時々病院をおとづれては、信仰についていろいろと話合い励まされて帰るのは私でした。三四年八月頃から咳もひどく普通の姿勢では寝ることが出来なくなり、つらいようでした。でもいつも感謝しておられました。その頃私の妹が九州から家に来ていました。淳子の子守など手伝ってくれていましたので、私一人で病院を尋ねる事が時どきありました。いつでしたか母のベットに私も、すわって母の髪をとかしてあげていました。その時「人は顔や姿、形ではない心だ」という言葉を聞きました。感謝しました。それから間もなく、母の病状は悪化して、一〇月一八日召されました。

忘れることのできない召された日のことです。その日は朝からどんより曇った日でした。主人の会社の慰安旅行で京都の比叡山に行くことになっていました。私はあまり気が進まなかったのですが、主人が私の妹が九州から出て来て、どこもつれて行ってないし、子供達と四人で行かないかと言われ出掛けました。主人は母のこともあり、家へのこりました。私達が出掛けて、間もなく病院から容態がよくないからすぐに来るようにとのしらせで行ったそうです。私達は（バス四台だったと思います）比叡山に近づくにつれ天気は悪くなり、すごい雨降りになってしまいました。

見物もそこそこにお昼になりました。行楽の外での中食も空しく茶店をかりての中食となりました。その時に主人の後輩の人にお会いしました。その方の友人も御一緒にその時に妹をごらんになって、（その後お話が進み結婚しました）妹のために母は何時も祈っていました。祈りが聞かれたのです。後でわかりました。

大変なお天気で五時頃家にかえりつきました。すると母が召された事を聞きました。どうして母の最後の時に一緒にいられなかったのか、くやみました。悲しんでいる間もなく、母をつれて来て下さいました。神様は私共をはづかしめる事

なくすべてをそなえてくださいました。とてもすばらしい最後だったそうです。翌日には姫路教会の末永弘海先生の司式のもとに大変おごそかな告別式をしていただきました。

母と暮らしたのは丁度一〇年でした。実家の母よりも親しくなっていました。ほんとうに尊敬できる母でした。母の信仰の十分の一の信仰でももてたらと祈っています。関西での生活九年その間二度引越しましたが、尼崎の竹谷教会での教会生活を続けさせていただきました。四〇年東京に転勤のため引越する事になり、東京での生活六年その間、宣教師が開拓なさった和泉福音教会に導かれ、礼拝を守らしていただきました。

たのしい思い出や又主人の病気等いろいろな事がありました。が、神様はいつも共にいて下さいました。

四六年三月、懐かしいふるさと黒崎に、神様は私共を導いて下さったのです。一五年間の空間も何もなかったかのように、皆様に心よくむかえていただき、たのしい教会生活を続けさせていただいています。立派な会堂をあたえていただき、神様の御業を見せていただき感謝せずにはいられません。主が生きていらっしゃる事を幾度も見せていただきました。ここに前田教会五〇年の記念の時をあたえていただき、ほんと

うに感謝します。残る生涯神様に喜ばれる歩みを導いていただきたく願っています。何時までも未熟な私です、祈りの中に加えて下さい。



母の召天



野村末義

私の家内の母は、明治三年の生まれで、この世ではいわゆる真面目人間でしたが、イエス様は知りませんでした。私が結婚した昭和二五年から一緒に住んでいました。

気持ちの優しい温和な性格でしたから、小さい子供達の面倒も良く見てくれたので私共夫婦は大変助けられました。

しかし、自分の生活を守るために仕事に出て働いていましたが、三四年の夏頃から体調を悪くして、胃腸が痛むようでした。個人病院に診てもらって薬を飲んで何とかしのぎながら仕事を続けておりました。その内に胃腸の回復は思わしく治りませんし、年令的にも又疲れがひどくなって、時々下痢をしておるようでした。暫らく仕事を休んでいましたが、お腹が大分ふくれたように見受けました。翌年の正月には、大好物の餅が喉を通らないと言いますので、家内が心配して、

「一度大きな病院で診察してもらったが良いよ」と勧めました所、やっと本人もその気になり、総合病院で検査を受けるために八幡市立病院にまいりました。早速、診察し検査をうけた結果、私共が医師によばれて、「胃癌ですから手術を致しましょう」との宣告でした。兄妹たちに相談して手術を受けるようにしたのですが、本人には、「胃の中に小さい潰瘍があるから、それを取る手術をするのよ」としか言えませんでした。

やがて、手術の日が近付きまして、本人も大変心配しておりましたが、私と家内とで、「先づ教会に行つて榎本先生に願つて神様のお話を伺つてお祈りをしていただきなさい」と勧めましたら、素直に受け入れまして前田教会に榎本先生をお尋ねして神様のお話を伺い、お祈りをいただいて幾分安心したのでしょうか、再び先生に祈つていただいよいよ手術のために入院しました。手術室に入つてから、私共は控室で祈りつつ待つておりました所、担当の医師が来られ、「家族の方が一寸立ち合つて病巣を見てください」との事で、私と家内の弟とが手術室に入り切開かれた母の腹の中を見ますと、黄色い玉子状の丸い玉がいくつも胃の部分や腹の所に見えました。医師は仕様がありませんのでこのままで縫つて

終わります。」と宣言され所謂、全く手おくれの状況でありました。

母には「悪いものはとりのけたのであとは、しっかり食べて元気になるようにしなさい。」としか言えませんでした。

僅か二日前にイエス様の話を聞いて信じたばかりなのに、本當の事を言つてはどうかと考へて、到頭、最後までそのままになりました。それから、八幡市立病院での闘病生活が続きました。私は、毎日、昼休時間に訪ねてやりました。最初のうちは少しづつ食べていきましたが、段々と食欲もなくなつて林檎のしほり汁だけしか通らなくなりましたので、毎日昼にはリンゴをすりおろして汁をしぼつて、楽呑に入れて飲ませますと、「ああおいしい」と喜んで飲みほしました。そこで枕元で母のためにお祈りを致しますと、すっかり安心致しました。

榎本先生も度々訪ねていただき祈つてもらいました。やがて腹水がたまつておなかが重いと言い出しましたが、毎日昼休に私が行つて祈る事を待つていました。祈つてやると平安であつたのだと思います。いよいよ衰弱がひどくなり、家内や兄妹たちが交替で付添つて看病しましたが、最後まで痛いとか、苦しいとか言いませんでした。母はいよいよ終の頃に

なって、「兄さんはどこにおるの？」と二、三回言ったそうです。日頃から私の事を、「兄さん」とか、「お父さん」とか、よんでおりました。

五人の子供の長女の主人である私を、兄さんと言っており最後に私の所在を確かめたのでしよう。「此処こゝにいるよ。」と書いて安心しました。私が声をかけた時はもう安らかに眠っていました。終わりに言った母の言葉は、「ああ結構、結構」といって主に感謝して行きました。信仰の道も深く知らぬ母が、ただ信じただけで主の救いに与って、胃癌の末期を主の手に支えられ、「結構、ああ結構」と、静かにのり越えて平安の裡に天国に召されました事は、本当に大感謝でございます。

本人も、子供達や孫たちに囲まれ見守られて、イエス様の所に迎えられた喜びと嬉しさに、結構な、幸せを感謝したとだと思えます。あと、数日で満六〇才でした。

「わたしは福音を恥としない。それは、ユダヤ人をはじめ、ギリシヤ人にも、すべて信じる者に、救いを得させる神の力である。」(ローマー・一六) 聖言は確かでした。

尚、召天日は、昭和三五年六月九日です。

母へのお礼

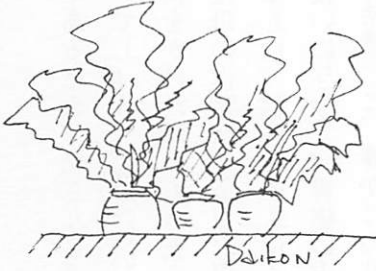
野村 美恵子

天国に迎えられた母の事を忘れる程私の母についての思いは安らかです。母が集会に出席したのはほんの瞬間に過ぎませんでした。胃の手術をするに当たって、神様から大きな恵みと御愛をいただき、死に至るまで守られ勝利をもって、主のみもとに召された事を、信じる事ができたからです。この事については霊の看護に当たってくれた主人が証しましたので省略致します。

働き者で、忍耐強い、正に明治の女性そのものだった母、苦勞の多い人でしたが、私達に愚痴を言う事もなく、ひかえ目であり、又誰に対しても「済みません」と口ぐせのように言っていました。(この事が私はとも嫌いでした。意地悪な人にも、二言目には済みませんと言うのです。悪くもないのに……)。

こんな母に、私はとても我ままに振舞ったと思っています。

子供が、二人、三人、と増えても、私が伝道集会、祈禱会、と夜出かける事ができたのは、この母と一緒に暮らしていたからです。どうしても子供一人は置いて行かなくてはならないのです。集会から帰ったら、「今晚はずっと泣き通しだったよ」と母の顔が不機嫌な時もありましたが、それでもかまわず出かけました。私は渴いて集会を求めていたからです。マイカーのない不自由な時代、こんなわがままを許してくれた母に一言、「ありがとう」、を言いたいと思っています。



絶えず祈りなさい
全てのこと感謝しなさい



前 田 千 鶴 子

「祈りなさい」

「祈っているよ」

「あなたのは祈りではない、本当の祈りをしなさい」

「本当の祈りとはどんなの」

「聖書を読みなさい」

私になにかあると口ぐせのように言う母でした。どんな事でも感謝して受けなさい、神様は全てを益と変えて下さる方だからと、よく言われました。

一見やさしそうですが、頑固で厳しい母でした。そんな母も、皆さまのお祈りにささえられ、天国に召されて、一年が過ぎました。

最後を迎える前には、榎本先生にお祈りしていただき、熱は高く苦しいと思われる状態でしたが、表情はとても穏やか

で眠っているようでした。

苦勞の多い生涯でしたが、唯一の救いは神様の子供としていただき、前田教会で不器用ながら信仰の歩みをさせていだいたことだと思えます。

鹿見島で生まれ、兄弟が多く上の学校に行かせてもらえなかった。父親は教育者だったが、子供には充分教育させなかった、と言ったりすることもありましたが、今でも父親の勤めた小学校に行くと、歴代校長の写真が掛けてあり、一番最初に自分の父親の写真があると、嬉しそうに話していました。

父親が研修などで、イエス・キリストの愛についての話を聞いて帰り、母に話してくれたことがあったそうです。幼い時の何気ない父親の言葉が何時までも心にとどまっていたこと、主の選びの中にいたことを思わずにはおれません。

尼崎に兄が居たので頼って働きに出たとき、教会に導かれ信仰生活を送ったそうです。その後、満洲に渡り結婚、戦後小倉に引き揚げ、その後、帆柱町に住むようになったのとでした。

近くで子供達を集め、イエス様の話をして讚美している熊畑さんに出会い、前田教会に導かれたそうです。(私をおんぶしている頃と言いますので、記憶にはありませんが、若い

青年が熱心に子供達にイエス様の話しをされていたと話していました。)

尼崎の教会を離れた後も他の教会に近付いたりしたそうですが満たされず、本当の福音を伝える教会に近付きたいと祈っていたそうです。

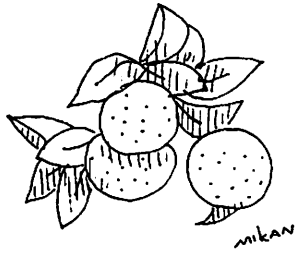
熊畑さんを通して前田教会に導かれた時、母は、「自分の行く教会はここだ、」どんなことがあっても前田教会を離れることはしたくないと思った、とよくはなしていました。

(私は信仰はまだまだですが、前田教会を離れることはしたくないとおもっています。この事だけは受け継いでいるみたいです。)

人から見れば信仰どころではない生活でした。親戚の者から「あなたのお母さんはおかしい、狂っている」など言われることもありましたが、ただ、ひたすら聖書を読み、祈り、讚美する生活でした。(大きな声でよく讚美歌を歌っていました。)

きつと現実があまりにも苦しく、主に近付くことが母の安らぎだったと思います。肉体的にも精神的にも苦しい中を、よく通れたものだと思いますが、主のご愛に支えられて、通していただいたのだと深く感謝しています。

晩年、「苦しみにあったことは、私にとって良いことです」と本当に心から感謝をもって言っていた姿を通して、「恐れるな、私はあなたをさがなった。私はあなたを助ける」どんな中であっても、いつも主と共に居てくださった、これからも共に居て下さる事を信じ、感謝して歩ませていただきたいと思います。



召天者の遺稿

入信のあかし



大野 季太郎

「酒に酔うな、放蕩はその中にあり、むしろ御霊に満されよ」(エペソ五・一八)

尊き聖名と限りなき愛の御血汐を崇め、感謝讚美いたします。

私は、大正九年一〇月二七日に大阪市元泉尾教会の門の中に迷い込みそして救われました。二三才の青年の時でした。

最初に掲げた聖言は、私にとって忘れることができません。そしてまた、この聖言を信じた故に、終始一貫、勝利を得ました。

この日は私にとりまして、最も嬉しい記念日でした。皆様にはご承知のごとく、私は建築の大大工ですが、私が初めて家を建てた喜びの記念日です。家と申しましたが、小さい鉄工所のトタン屋根のバラックでした。それでも先方には大切な宝ですから、大喜びでした。昔は上棟式には、よくお酒やご

馳走を出してくれますが、お酒の飲めない私は、そのたびに困っていました。丁度、この家は人夫の親方の知り合いの家で「大野はお酒をひとしづくも飲みません。」と伝えて下さったので、当日は「これは大野さんの分ですよ」とミリン三合が出されました。これならば、だれでも女の方でも飲むのです。それで皆様がお酒を飲んでいる間、私はお話を聞きながら、お湯呑いっぱいいただきました。ところが親方が、このおめでたい日に一杯では験が悪い、二杯は飲むべきだと勧められたので、長い時間かかってとうとう二杯飲みました。

腰をかけている間は何事もなかったのですが、やがてさよならと皆んな立ち上った時は、私の目がくらんでしまいました。そして真暗くなって、足元が平地を歩いているのに波の上を歩いているようで、歩くことができませんでした。

門から外に出るとすぐに、「ここで少し休ませて下さい。」と寝ころびました。すると「それはいかん、こんな所に寝たなればおめでたい日に験が悪い」と私の耳へ小さい声を入れて下さって、あっちまで行こうと私の手を肩にかけ、半道ほどの道を家の近くまで連れて行って下さいました。

後で聞いた話ですが、お酒よりミリンの方が強く酔うのだそう、大笑いでした。しかしこの失敗が私の一生

涯の勝利となりました。

家に帰るなり、すぐ横になりましてチョットとうとうと眠りましたようです。目がさめると、母に「今日は先方でご馳走もご祝儀もいただいたから、お芝居か活動写真でも見て来ましようか」と尋ねると「そうしなさい」と言ってくれましたので、嬉しい思いで出かけました。この時、電車にも乗りませんで、歩いて行ったことが幸いの一つとも言えます。神様はこのようにして、導いて下さいました。

教会の前を通りかゝりますと、中から讚美歌が聞えてきますので、私はハッと立ち止まりました。いつも仕事に行く道ですから、往復その前を通っているのに、見向きもせず、気もつきません。ところがその晩は不思議に神様を讚美する声、耳の遠い私に聞えてきたのです。前田教会と同じように道路から入り込んでいますが、よく見覚えていましたので、ツカツカと教会の玄関まではいってゆきました。集会が始まっていました。すると一人の婦人の方が出て来て、ご親切にお入りなさいと言って下さいました。私はこの時、キリストのキの字も知らない時でしたので、「はい、ありがとうございます。ここは何をするところでしょうか。」とお尋ね致しました。すると「キリスト教会です。神様を礼拝し、お

話しを聞くところです。」

「誰れでも入れますでしょうか。」

「はい、どなたでもはいれますよ。」

「あゝ、そうでございますか。私は今晚チョットお使いに行っておりますので、またこの次に寄せていただきます。」と帰えりかかると、「チョットお待ち下さい。」その方は牧師先生に取りつがれたので、佐野先生は玄関までおいで下さいまして「お上りなさい。」「はい、ありがとうございます。」私は今いったように申しますと、石段三段を一段降りてきて、手を伸ばし、二言目に私の手を握って、引き上げて下さいました。そしてそのまま、会堂の一番前の席まで引っぱってきて、椅子にかけさせて下さいました。

その時の説教が、最初にあげた、「酒に酔うな、放蕩はそれの中にあり、むしろ御霊に満されよ。」(エペソ五・一八)でした。

私は実に驚き入りました。永い間求めてきたところは、ここだと思いました。お説教が終って、皆さんが神様、神様といてお祈りを捧げておられますので、私はチョット不思議に思いました。この教会には幼稚園の保育室が三つあります。それ故、きっとあの戸を開けると神様をお祭りしてあるにち

がないと思いました。なぜならば、私は二三才まで他の神々に熱心にお参りをしていたからです。ことに熱心に行きましたのは、イナリさんで、その先生に頼って病人を助けてあげるつもりでした。

父が天父に召されてから一〇年間、実に大きな損失をしたものだと思います。お話を聞いているうちに、お酒の酔いがさめてしまいました。

第二の聖言はヨハネ一四・一―六でした。

「あなたがたは心を騒がせないがよい。

神を信じ、またわたしを信じなさい。」(一節)

このところを教えられた時、私は驚き入りました。これはまた素晴らしい。私の父の遺言はここに書いてあると言って、聖書はここから読み始めました。

私の父は大正二年一月一六日朝召されました。この時私は一三才でした。その前日の一五日朝、家の者全部呼び寄せて、私と次の弟の手を合わせ、真中を父が握って、兄弟は仲良くすることを忘れてはならない。父は私に、お前は兄だから弟を見てやってくれ、弟には、兄のいうことをよく守れよ、母のいうことをよくよく聞きなさい。次々に弟達に同じ言葉で遺言しました。最後にもう一度私の手を握り、お前は何処へ

行っても、神様を信じてゆけと言ってくれました。父は確かに長男である私が発育おくれで、一人前の人間にはなれないことを、日頃から不憫ふひんに思っていたに違いありません。父は自分が召された後は、母も子供も心騒こころさわくであろうと心の中に思っていたに違いありません。それゆえ父は真心こめて、もう一度手を握り、心配せんでも神様を信じてゆけと言ったのでしよう。そのときは神の「カ」の字も知りませんでした、確かに遺言は本人が召された後役立つものです。この時のお説教は、頭のとつぺんから足のつま先まで、稲光が入ったような感じが致しました。神様は私に、父の口を通して生ける真の神様を教えて下さったのだと悟りました。

こうして私は神様の救いを受けました。

今、神様の恵みを語りますときに、私は二・コリント一二・六―七を思い起こします。使徒パウロは、高慢にならないように肉体に一つのトゲが与えられたと申していますが、私には一つのトゲではありませんで、三つも四つも与えられています。このトゲゆえに神様に立ち帰えることができたのだと思います。それですからパウロと同じように、「私は自分の弱さを誇ろう。だから、私はキリストのためならば、弱さと、侮辱と、危機と、迫害と、行き詰まりとに甘んじよう。なぜ

なら、わたしが弱い時にこそ私は強いからである。」(九一〇)

その後、私は不思議なように神様に導かれて、昭和三三年二月六日、大阪から九州八幡の地におもむきました。

八幡前田教会における六年間、本当に皆様にお世話になりました。この間私の信仰に活を入れて下さり、その後も絶えずお祈りをして下さいますから、私達は今こうして神様のあわれみによっていますこと感謝にたえません。これみな主は生きていらつしやること、確信に確信が与えられ、御霊と一つになるとき無限の愛と無限の知恵、無限の能力をもつて主のみ業は働きたもう、それは限られた紙面には到底書きつくせぬほど、多くの奇しき素晴らしい出来事の連続でありました。背後にあつて多くの兄弟が私達のためにお祈り下さいまして、実に主のみ業を身に覚えしました。

六年の後、大阪へ帰りますとき、私は牧師宅で榎本先生、百合子奥様、咲子お嬢さんと三人がかりで作られたおしいご馳走にあずかり、その上、ワイシャツや下ズボンまで洗っていただき、あまりにももったいないことでした。

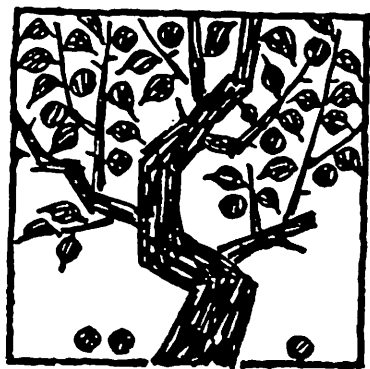
その前夜は、高木先生宅へサフラン会の皆様がお忙しいところお集まり下さいました。これみな榎本先生御夫妻はじめ

高木先生御夫妻のご指導の賜物と信じております。さらに、真心からなる贈物をいただき、主にあつて皆様のご愛で私を慰めていただきましたことは、今日までくり返し喜び感謝しております。

高木先生からは大型聖書、靈感賦、そして讚美歌と聖言をいただき、本当にうれしい思いでいっぱいでした。私も愛歌五二三番を皆様と一緒に歌わせていただきました。

最後に、御教会と皆様のうえに主イエス様の豊かなる恩恵が注がれますようお祈り申し上げます。

ぶどうの木を通して、皆様と語り合い、祈り合い、助け合うことが許されました、うれしゅうございます。



「見えない方」に生かされている



大 口 種 義

私が失明したのは二五才の誕生日でした。

伐採夫として働いていたこの日の昼前、自分の切り倒した木をきまったら長さに測って、中腰で鋸引をしていました。目が見えたのはその時まででした。

同僚の切った木が、見当違いの方に倒れてきて、私の頭に当たったのです。

意識を失って、倒れているのを、木を切った同僚と丁度これらの木を馬車で運ぶのに来合せた従兄弟が、さいわい近くにあった一軒家からリヤカーを借りて、三キロほど離れた山向こうの病院へかつぎこんだのですが、頭を強く打っているので「三日命があるかどうか分らない。もし命があっても白痴になるか、半身不随になるでしょう。」と言われたそうです。意識不明のまま眠り続けて四日目の深夜、復員したばかりの弟が、八幡から介抱にかけて付添っていました。退

屈しのぎにミカンの罐詰を開けて自分で食べながら、その一粒を私の口に入れると、モグモグしていたがゴクリと吞込んだ。という。それを見て「あつ、食べた食べた」と。それで大急ぎで七輪に炭火を起し御飯を炊いて食べさせたそうです。

また、母が食事をさせる時、煮魚の身をほぐして、骨を良く取り出したと思って、口に入れてやるといつまでも吞込まないので、取り出してみると、ほんの細い骨が一つあったそうです。

意識が無いまま、このようにして四〇日ほど経った。

五月の初め頃から、自然に、次第に急速に意識が回復してきました。

まだ失明のショックは感じない七月に、眼科の暗室で検査をしてもらったことをほんやりと、しかしはつきりと覚えております。

意識不明の四〇日間が、二〇数年経った現在であつたらと思うとゾッとすることがあります。それは、今でしたら車で総合病院へ運ばれ、さんざん研究材料に使われたうえ、心臓を、眼球を抜き出されたかも知れません。今は知らない人ばかりの中にあつても、目に見えない方が、「母の胎内にあ

る時から、私を聖別し、み恵みをもってわたしをお召しになった」(ガラテヤ一・一五)のです。

神様を全然知らなかった時から、一方的な御恵みによって守り、この救にあずからせていただいたのでした。そして視力は回復しませんが、この見えないう神によって支配され導かれていたことを確信させられました。



生涯を導いた聖言

「活水」一七五号



河 本 小太郎

「我は葡萄の樹、なんじらは枝なり。人もし我にをり、我また彼にをらば、多くの果を結ぶべし。汝ら我を離るれば、何事をもなし能はず」(ヨハネ一五・五)

私の郷里広島は、真宗の盛んな所で、先祖から真宗の熱心な信者でした。従って、私も真宗でしたが、末子でありますし、基督教はわからないながら、悪い宗教ではないと思っていました。

結婚して信者の妻を迎え、時々集会へ招かれましたが、酒類の特約大販売及び食料品の販売業をしておりました、そのため毎晩のような宴会で飲む事が多く、身体の為にも悪いと知りながら、止める事もできずに日を過ごしておりました。

その頃妻の里で母と弟が病床に臥しておりましたが、神癒のお話をきいて祈っていただき、すっかり癒されました。それで神様の全能の御力を信ずるようになり、製鉄所の社宅の

城様宅の集會に出ております間に、「神を畏れそのいましめを守れ、是は凡ての人の本分なり」と、聖言により神様の御愛がだんだんはつきりいたしまして、昭和七年に神様に従う決心をしてバプテスマを受けました。

その後、新年聖會に、三日間泊り込みで集會へ出ておりました。その時与えられた聖言が、このヨハネ伝一五章一節から五節でした。

早速、日曜日は休業して日曜礼拝を守り、夜は伝道集會をしていただくようになりました。また、酒を飲む事を止められました。自分で飲まないでも、売る事も善くないと教えられ、売上の大部分を占めていた酒類一切の販売を全部止めて、漬物佃煮製造販売を専業として今日までまいりました。その間たえず主に従った時、凡てを益と変えて下さいました。主の豊かな御恩寵のうちに、家族一同信仰に依り、平安と感謝の日々を送らしていただいております。



夫と共に―その生涯の記



河 本 か つ

主にむかって歌え、

主をほめうたえ、

そのすべてのくすしきみわざを語れ。

(詩篇一〇五・二)

主人と結婚しましたのは大正四年八月で、当時、私はまだ満年齢で一九才でした。

この結婚のいきさつについて少しお話ししますと、その頃、主人は二四才で兵隊から帰ってきて、主人の次兄がやっておりました門司の河本商店で働いていました。この河本商店は下関市内に居た私の義父、下川と同様に、味噌・醤油などの卸をしていました。河本の兄は兵隊帰りの弟(私の主人)と同じ店を一緒にやるつもりでいたようですが、主人は小さくてもいいからどうしても自分の店が持ちたいということで、八幡に店を持つ準備をしていました。独立するには一人でい

るわけにゆかず、結婚しなければなりません。そこで、丁度お嫁さんを探していたわけです。

その頃の私はどうだったかと申しますと、結婚するしばらく前に門司の岡部運送店という所で手伝いをしていましたが、大晦日の掛取りも終って風呂に入っている夜半、火事に会うというできごとがあり、しかも、とても寒い日でしたので、それが原因して肋膜炎を煩い、運送店から母の再婚先である下川の家へ帰っておりました。そこで療養かたがた弱い身体ではありましたが、お客にお茶を出したりなどの軽い家事仕事を手伝っていました。

下川と河本の兄とは同業者でしたし、その頃下川の父が味噌・醤油組合長をしていた関係で、ある日、組合の集会が下川の家でありました。その時、私も手伝ってお茶を出したりして接待しましたし、勿論、主人の兄も出席していました。恐らくこの会がきっかけになって、下川に娘が一人いるけれど、弟にどうであろうか、というような話が出てきたものと思います。よくは存じませんが、何でもその頃、主人はお嫁さんを探しに長府の方へ出かけていたとも聞いております。とにかく、こういう事が結婚への具体的な糸口だったわけです。

しかしながら、当時、私は主人のことについて何も知りません。ただ、河本商店には御主人の弟さんが居られるそうだと、いう程度のことです、殆んど知らなかったと言っているでしょう。ところが、この結婚話にとっても喜んで自分の貯金を全部出して賛成してくれたのが五つ違いの私の弟の節生でした。といいますが、弟はまだ学校へ行っていました、学校から帰宅すれば早速下川の店の手伝いで配達にまわっていましたし、しかも、お互いに同業で競争相手だということから、弟の節生は主人のことをよく知っていたわけです。ことに、弟は主人のことを「河本の弟は商売がうまい」といって認めていたようです。当時の話ですが、私達の仲人をしてくれた佐々木さんという小売店では、御主人と奥さんとがそれぞれ下川に、河本に、と好みがあつて、私の弟が配達にすれば下川の味噌を上置き、主人が配達にあれば河本の味噌を上置きなどしていた、というようなこともあつたそうです。

こんなわけで、とにかく、この結婚の話には家族の者全てが「良い人だから」と云って賛成してくれました。勿論当時のことです、結婚までに交際なんてありません。けれども、私自身結婚なぞせずに八幡あたりで店を出して、商売をやつてやろうと思つていた程に商売が好きでしたから、商売

の上手な人である以上別に異存のあるはずはありません。でも、主人の方は私がどんな人物であろうかと、二・三度下川の店の前を道の反対側から見にきたことがあるようですが、そんなことなど知りませんでした。同じ頃、私にも神戸屋という家から結婚の話があつたのですが、結局、河本に嫁ぐことになりました。

ここで、私の生い立ちと信仰についてお話ししますと、私の実父は岩佐作太郎と申しまして、父の里は吉川公に仕える指南番をしていた程の家柄だったようです。父は次男でしたから明治大学の前身である明治法律専門学校を出て警察に勤めていました。それで、よくあちこちに転勤し、移住しましたが、山口県の萩に居る時代にカトリックのミリオン神父という方から父と母が洗礼を受けました。父は伝道者になろうかと思う程に熱心なクリスチャンだったそうです。その父が仕事で台湾に行き、そこでマラリヤに罹りなかなか治らず、帰国後発病して療養のかいもなく、岩国で亡くなりました。当時、私はまだ小学校の一年生位だったと思います。家族は母の他に兄と姉、それに先にお話した弟との五人でした。父の死後は母が裁縫の指導をして、生計を立て、子供達を育て、教育してくれたわけです。もっとも、母方の里は徳山でも一

流の山中屋といふかなりの資産家でしたから、月々少しはたすけてくれましたし、兄と姉の二人を教育してもくれましたが、それでも、その頃は貧乏でかなりつらい生活でした。殊に、父が病気で療養している間、町から医者連れてくるなどで、随分お金がかかりましたので、母が嫁入りの時に持って来た着物は全て質屋へ持っていくという状態でしたから、私の子供時代は貧乏の中で過ごしたようなものです。父がサラリーマンで、死後、特に苦勞したものですから、それだけ一層、貧乏しないようにサラリーマンにはなりたくない、自分で商売をしたいという気持ちになったものと思います。

その頃、徳山に住んでいましたが、下関に居た伯母が「そんな田舎にいても」と言つて、下関に出て来るように勧めるのですから、私が一人で一二・三才の時下関へ出て、伯母の家に一年程居まして、母はその後弟をつれて下関へ移り、やはり学校で裁縫を教えて生活していましたが、母の老いた両親の希望もあり、伯母のすすめもあつて、母は下川家へ再婚したわけです。下川も先妻と死別して娘を一人抱えて商売をしていました。下川の店は本店が三田尻にあつて、下関は支店で義父は支店長というわけでした。下川の父もやはり熱心なクリスチャンでとても立派な人物でしたから、私は父親

が居ない淋しさなどを感じたことがあります。

こういうわけで、私が生まれた時すでに両親共クリスチャンでしたし、下川に行つてからもそうだったわけですが、しかし、その当時、自身の信仰は未だ幼稚なものでした。私が熱心なクリスチャンの助産婦さんで岩本さんという人の養女に一時なつていた時、ある日、私が学校から一緒に出かけたカゲ山神社に参拝したということが知られて、その人からとてもきつく叱られたことがあります。偶像礼拝の良し悪しすら解らない状態でしたから、何故その人が立腹したのかわからず、逆に、私の方が腹をたてて下川へ戻つてしまったことがありました。ですから、私の信仰はただ家の宗教がクリスト教であるという程度にすぎませんでした。今から考えますと、岩本さんという方はとてもしっかりしたクリスチャンだったのだらうと思います。

そういうわけで、義父も母も信者でしたし家庭の宗教はクリスト教だとなつていましたから、私達の結婚の時、主人の家は真宗でしたので、義父が「うちはクリスト教だがいいのか」といったところ、河本の兄は「宗教は自由だからかまわぬ」との返事だったそうです。私自身も信仰がはっきりしていたわけではありませんから、結婚にあたって信仰上の困難

はあまりなかったようです。

そこで、結婚からそれ以後のことについてお話してみますと、私達の結婚式は佐々木さんという方の仲人によって河本の店でしましたが、その時すでに、主人は八幡の中央区（現中央町）で商売を始めていました。河本は結婚してすぐに店を始める心づもりでいたのですが、私の方で母の病氣などがあつて予定していた時期より一ヶ月程遅くなり八月一三日に結婚しました。この結婚するまでの約一ヶ月程は主人とお父さんとの二人で八幡の店をやっていたのです。ですから、新婚旅行などとのんびりしたことはできません。朝出て来て式が終ると翌日から八幡の店で着物の裾をからげて仕事を始めるという状態でした。

店と申ししても、当時、中央区で銀座通りと呼ばれた所でいろんな商店が立ち並ぶ通りに、間口三間半から四間近い大きな家を借りて始めたのですから、小売店というより最初から卸店でやっていました。

こんな具合に、主人は何事にも大きく大きくやる方でしたから、仕入れなども倉庫に入りきれない程に仕入れるのが好きだったようです。それでも最初から現金を持っていて始めるわけではありませんから、みな品物を門司の兄の店から借

りて、河本商店の支店として開いたわけですが、あちこちの卸屋さんに本店時代の信用がありましたから、必要なだけ品物を出してくれました。その代り、一年間にその借りを返済しようとしたので、随分苦しい思いもしました。勿論、着物一枚作る余裕もありませんし、どうにも手形を払うお金に困って時計を質屋へ持って行かなければ、というような時もありましたが、幸い、下川の店も、又、河本の本店もありましたからそこまでせずに済みましたが、とにかく苦しい中を通りました。でも、どんなに苦しくても二人共商売をしようということでは一致していませんから、不平や不足をいうことはありません。そうやって、何とか一年で全部の借りを返えしてしまつたのです。その頃は漬物・味噌・醤油・酒・罐詰類等を扱っていました。店では主人が殆んど仕入れや配達に出歩いていましたから、私が小売りをしたり、すでに製造もやっていましたので、福神漬の茄子を切ったり、すでに製造の昆布を切ったり、味噌をすつたりしましたし、夜は、大根の浅漬を作る為に十二時・一時頃までかかっていました。こんなことですから二人では人手が足りませんので、主人の甥や高橋さんなどが一緒に働いていました。店の人は多い時には五人位居たと思います。そういう店の人の世話、家庭の仕事、

店の小売りに製造の準備など全て私が引き受け、主人は専ら外を回っていましたから、今から思いますと並大抵の苦勞ではありませんでした。しかし、私は忙しいことはあまり苦になりませんので、忙しければ忙しい程喜んでいたものです。一方、主人は仕事であちこち出歩いていましたし、よく旅行してましたから、家に居るのは月に十日程度でした。とにかく、簡単によく旅行する人でしたから、どんな所へもすぐに行つて戻つて来るといふわけで、国内は勿論、満洲・台湾・京城などへも行きましたし、行きたい所へは殆んど行つていふようです。観光旅行に出かけても必ず何か仕事をしてくるような人でしたし、又、記憶力のいい人でしたから、行つた所の産物やいろんな事を覚えていました。その上勤勉で、時間をとつても大切にしていましたから、今日すべき事を明日に延ばすようなことはありませんでした。例えば、今日は一日遊びに出かける、それも朝五時に出発となると、四時から起きて帳簿をきちんと整理しておいて出かけるといった具合でした。ですから、私も主人には店の仕事だけをしてもらっていました。一度だけ大掃除の手伝いをしてもらったくらいで、他の大掃除の時など子供たちをつれて下川の家へ遊びに行つ

でもらったものでした。その代り、主人は家庭の事で不平を
いったり、文句をつけたりすることがありませんでした。そ
の点私にとつてとても良い夫であったと思います。私が掃除
などしてきますと、いつも「ええかげんにしとけ」といった
ものです。でも、よその家へ行ってそのお宅が少しでも汚れ
ていると、帰宅して「あそこはびつたれや」といっていまし
たから、本来きれいな好きの方だったのかもしれない。また、
食事のことも、大根の煮物だろうが鯛の刺身だろうが小言
をいったことがありますでした。

こんな風にして、店の仕事も順調に伸びて、戦争前には中
央町の店の他に、大正町（現八幡駅東側付近）に倉庫を、昭
和一二年に現在の前田町に工場と倉庫を持つようになってい
ました。お正月の初荷の時などは大変なものでした。漬物の
樽を六丁程積んだ馬車が旧八幡駅（春の町にあつた）から、
店までならぶ程で、貨物で来るもの、船で来るものと次から
次へとやってきますし、仕事をしている人達は皆「河本商店」
と染め抜いた法被を着て、「初荷」と書いた旗や日の丸を立
てて、店に着くとお酒を出したりして、派手に賑わつたもの
でした。主人もこうした賑やかなことが好きでした。

だんだん店が発展していくと共に家族の方もふえて参りま

した。私が一九才で結婚して数年目だったと思いますが、主
人の兄夫妻が二人共関節炎にかかって入院したことがあります
す。その時、まだ生後八ヶ月か一〇ヶ月位だったと思いま
すが、この兄夫妻の子供で時春というのを引き取つてやりまし
た。そして、結局、この子が一四・五才になるまで育てまし
た。その間に、当時京城に居た私の姉夫妻が亡くなり、その
子実を引き取ることになります。あれは大正一三年の冬、丁
度、私が一八か九の時だったと思いますが、大陸でひどい感
冒が流行し、姉が危篤との知らせに私と母が出かけました。

その時、「まさか」とは思いましたが、下川の父がひよつと
すると大事に至るかもしれないからと申しますので、トラン
クの底に喪服を用意して出かけました。病院へ行くと姉は死
期を知っていたのか、ブドウ酒で別れをしようと言つてお別
れをして、布団をかぶると静かに亡くなりました。それから
一週間して姉の店（小間物店）の店員が同じ流感で亡くなり、
滞在していた私と母もやられて入院する仕末でした。しかも、
店が亡くなってから一週間後に姉の夫（義兄の一郎）がやは
り流感で亡くなると云う悲惨な状態でした。義兄が亡くなる
時には主人も来ていましたので、義兄は主人に「実はかつさ
んに頼んで大安心」と紙に書いて亡くなったそうです。その

時は私も母も入院中ですから、全く会うことができませんでした。姉夫妻は六人の子供を残しましたが、その中の「実」は私が京城に着くとすぐになつて離れませんでしたし、義兄の遺言もありましたので、私が「実」を引き取って、あとの子供たちもそれぞれ兄弟が引き取ってくれました。「実」は身体が弱く誕生を過ぎていましたが、満足に座ることもできない程でした。

その後、私の弟の節生が昭和九年に結核の為に亡くなりました。この時、弟はまだ三三才で、結婚後三年程しかたっていませんでしたが、弟の子「信生」を私共が引き取って育てることになりましたから、結局、多い時には三人の子供達が



昭和15年 銀婚式

いたわけです。ですからとても賑やかでした。でも私の四人兄弟は兄が早くに亡くなっていますから姉と弟の死によって、私だけがこうして生き残ることになったのです。

私共の結婚後の信仰生活は、前にお話した様に、私自身、家の宗教が単にキリスト教だからと云う程度の信仰しかありませんでしたから、時折、中央町にあった川瀬先生のルーテル教会の礼拝に出席することで満足していました。主人はそのことに少しも関心を示すこともありませんし、だからと言って反対もしませんでした。主人の母が家に参りましても床の間に阿彌陀様の掛軸をかけて、御飯を上げては拝んでいましたが、私にはキリスト教徒だと知っていますので何も申しません。主人には「小太郎さんも拝みなさい」といっていましたが、一向に主人は拝むこともありませんでした。母が帰る時にはその掛軸をくるくると丸めて持って帰りました。ある時、私が「阿彌陀様を床の間にかけてもいいのですか」と尋ねますと、「ああ、神も仏も御一体じゃけのオ」といっていました。この点、優しい、いいおばあさんでしたから、幸いに私は姑の苦勞をしたことがありません。このように、私は唯習慣的に礼拝に行く、一方、主人は宗教などには全く無関心という状態でした。その後、私も新しく信仰に目覚め

主人も救われることになるのですが、そのきつかけになったのが折滝先生（福岡キリスト伝道館、今の大濠公園教会初代牧師）との出会いなのです。

昭和五・六年の事だと思えます。私の弟（節生）が胸を悪くして寝ておりました。その頃、折滝先生は門司の鶴原さん宅で、家庭集会をやっておられました。「門司にお祈りをし、病気をなおす先生が来られるそうだ」ということを私の義弟の洋太が聞いてきて、兄さんの為に祈ってもらおう、といって、初めて折滝先生に下川へ来て頂きました。丁度その時、母がリュウマチを煩って、注射が悪かったのか、足が曲らぬようになつていました。下川は二階住いで、母の足が悪いので、お客さんの時など私が呼ばれてお茶の接待などをしていたので、この折滝先生に来て頂いた時私も行っていました。弟が祈ってもらい、母も一緒に祈ってもらいまして、そのあとで、家庭集会がありました。その集会中気がかぬうちに足のまがらなかつた母が正座していたのです。その場ですっかり癒やされていたのです。このような事を通して、私自身初めて神の力、神が全能者でいらつしやることに目覚めたのです。それまでの信仰は習慣的に家の宗教だからということにすぎませんでしたし、そういう気持ちから教会に時折行って

いたにすぎません。しかし、この事から後、はっきりと自覚して信仰生活を始めるようになり、門司までは遠いので八幡の高見町におられた城さんの家で、折滝先生が一ヶ月に一回木曜日に家庭集会をしておられましたので、そちらに出席するようにになりました。主人はそれまで私の信仰に反対することはありませんでしたし、当時、門司でキリスト教のいろんな先生による集会がありましたので、そういう会にも時には一緒に行きました。そうこうするうちに、主人もだんだん城さん宅の集会にしげしげと通うようになり、福岡のキリスト伝道館にも出かけるようになり、昭和七年に私と一緒に受洗してしまいました。私は覚えませんが、幼児洗礼は受けていたと思えます。

この時から、主人は酒を飲むこともやめ、さらにその後、ある日東京から帰る途中で盲腸になり、下関から車で帰宅しすぐに寝込んだことがありましたが、それが快復すると、自分が飲まないものを売るわけにはいかない、と申しまして酒の販売をやめてしまいました。その当時、事情のわからない人達は酒の販売をやめたことで河本さんは事業に失敗したのだと噂していましたが、戦争になるにつれて酒が統制品となつてしまいましたから、酒の販売を止めた事はとても良い

結果になりました。

信仰生活の方は城さん宅での家庭集会や福岡の伝道館まで出かけていましたが、そのうち日曜日に家で集会をして頂くことになり、折滝先生、榎本先生、野村さんの三人で交替に来て頂きました。集会は前田町にある家の二階でやっていますが、交替で先生方に来て頂くのも都合がわるいから、どなたか牧師さんを、と折滝先生に希望しましたら、「どなたがいいでしょうか」といわれたものですから、主人は「榎本先生をおくって下さい」ということで、昭和十四年に榎本先生に来て頂き、大正町の倉庫の二階に二軒分の部屋を作り、そのうちの一つに住んでいただきました。もう一つには倉庫管理の為に従業員の木屋さんが住んでいたと思います。それから終戦後まで大正町から前田町まで先生に通っていたとき、家の二階で「キリスト伝道館」と看板を出して集会をしていましたが、戦争中でしたので来会者も少なく、ただ特高刑事がたびたびきたものです。その度に、先生は近くにおられませんでした、私が応対に出たのもなつかしい思い出です。

終戦後間もない頃、主人と話している時、「教会があった方がいいな」ということになり、それなら近い所に欲しいと思います、土地がありませんので祈っておりました。

そこへ現在の教会の土地を含めて、その附近一帯の土地を所有していた方が、戦争にいられた息子さんを除いて、一家全員防空壕で全滅され、残された息子さんが戦後復員され途方にくれておられて、その方が土地を手離したいからと訪ねてこられ買うことになりました。そこで、現在の教会を建てたわけですが、戦後ですから材料がなくあちこち集めて作ったもので、あまりいい家ではありませんでしたが、将来建て増しできるようにと主人が周囲をあけて設計していました。その後何度か建て増しされて現在に至っているわけです。しかし、教会の土地が息子の名義になっていましたので、主人が居なくなつて将来息子が貧乏して、自分の土地だからといって取り戻すようでは不幸だから、早く名義を変えておかねば、といっていましたら、丁度、隣りに居た中川さん（現教会別館）が土地をわけてくれといわれたので、それと同時に教会の名義に変更したわけです。主人が生前にこれだけのことをしてくれましたので私は安心しました。

主人が病気で寝ている時、私が「子供たちはもう大学まで出たのだから、どうにかして生活していきましょうから、あなたと二人で死ぬまで家も屋敷も皆売って食べた方がいいので、別に何も残すことはない。教会が残っただけが天国

へのみやげだからね。」と主人に申しましたら、主人は「うんうん」といつてうなずいていました。

こうして、教会の基を置くことができるようになったのも、考えてみますと、「主イエスを信じなさい。そうしたら、あなたもあなたの家族も救われます」（使徒行伝一六・三一）との言葉のごとくに、父岩佐作太郎が自ら献身しようかと思われます。また、その結果私たちがこのような祝福にあずかることができたのだと思います。



妻との十二ヶ月



正野義雄

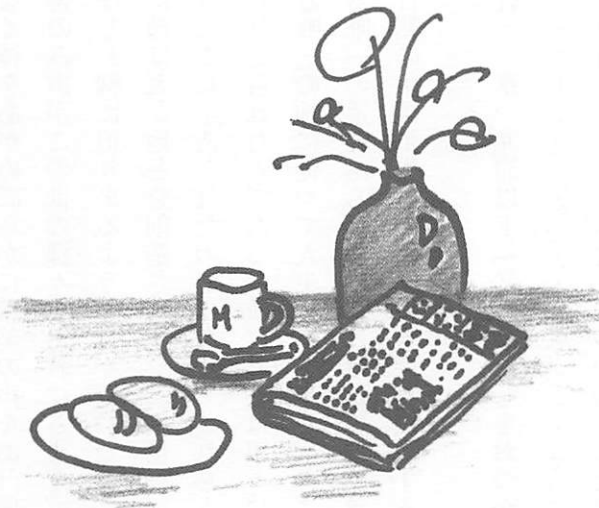
- 一月 世の隅に妻と老ひけり小豆粥
松の内だけでもと松のかくし紅
- 二月 妻病めば一人の夕餉寒玉子
着ぶくれて妻ころころと出てゆけり
- 三月 病む妻に彼岸団子を買ひにけり
探梅や妻の後おす女坂
- 四月 旅の荷に妻の替足袋加えけり
木の芽和頁繰ること妻癒えて
- 五月 うたたねの妻の団扇を借りにけり
常になき朝寝の妻に声かけて
- 六月 妻旅へ糠漬のカビ梅雨兆す
妻の病む窓辺にゆたかに水を打つ
- 七月 湯上りの妻にもビールす、めけり
小春日や妻に付合ふ小買物
- 八月
- 九月
- 十月

十一月

身に沁むや妻を支える松葉杖

十二月

よく眼鏡忘れる妻や冬ごもり
うそ寒や妻が匂はす貼薬



夏期学校雑感



島崎 美知子

幼児を連れて夏期学校に参加させて頂くことも今年で五回。年毎に迫る老を思い今年は果たしてこの事が許されるであらうかと一抹の不安を拭いきれないものがあつた。

「人の心には多くの計画がある。しかしただ主のみ旨だけが強く立つ。」(箴言一九・二一) 自分の計画を遂行し度いと祈るのではない。今年も必ず行けるものと信じて日数数えて待つ子等の願をみこころならば叶えさせ給えと祈って居る中に思うところ願うところいたくまされることを行い給う主は素晴らしい三日間の夏期学校生活をお与え下さって、今思い起こしてもただ感謝に溢れるばかりである。

太い幹をくねらせて亭々とそびえる松の巨木・数万年も前から寄せてはかえして居たのであろう海の波にも悠久の神とその偉大な御自身のわざを思わしめ、緑の山々の間から光まばゆくさし昇る朝日。遠く水平線のかなたに雲と波を紅に染

めて沈みゆく夕日を眺めては、詩篇一九篇がそのまま実感となつてこよなく神をあがめ高らかに讚美の声をあげ度いばかりである。神のみ声がこの世の様々な汚れにさまたげられず直接にひしひしと胸に迫り来るような日々だった。

「はじめに神は天と地とを創造された。」(創世一・一)

然しいたずらにこれを造られたのではなく、これを人のすまいとして造り与えられたのであるが故に私共は事々に神に相談して義なる唯一の神に従つて人生行路を歩むべきこと。これが救われる唯一の道であるとお話には殊更に感銘を覚えた。又一日朝の伊規須先生の御話にも深く決意するところがあった。

ヨハネ福音二〇章一九節以下「父がわたしをおつかわしになつたようにわたしもまたあなたがたをつかわす。」私の如き弱く小さな何事をもなし得ぬ者にもつかわされた者としての使命があるのだ。

それぞれの持場立場によつて仕事にかわりはあつても責任の重大さに大小はない。「聖霊を受けよ」といわれた主のみことばに従いどうかみたまによつて潔められ強められ使命を全うさせて頂き度く切に祈る。

老も若きも心一つにして恵を感謝していただく食事も又楽しいもの一つであつた。労をいとはず御世話下さる方々。小さい子供もそれぞれにお皿を運ぶ茶碗をならべる。若い人々のもりもりと旺盛な食欲もたのしい限り。神の家の大家族が眼前に展開されて感謝ただ感謝。

心ゆくばかり満されて感謝の終つた日の翌日のこと。三日間を宿題の勉強から全く解放されて楽しく過ごした子供の頭には、たまつた日記書きがたまたまなくいやのようであつた。

「日記書きなさい。早く書いて置かないと忘れるよ」

「もう忘れた。」

「何か覚えてるでしょう。何でもいいから一つでも書いてごらん。」

「何も覚えとらん。」吐き出すようなやけっぱちな言葉。腹の底から怒りが込み上げてくるのをグッとおさえて、つとめてやさしく、

「忘れたところは一緒に考えて上げるから少しづつでも書いてごらん。」

「イヤー できん。」はては例によつて悪口雑言。泣く。わめく。こちら心も心の平静をすっかり失つてしまつて、たまたまなく憎らしくなる。ああどうともなれ子供の事なんか今後絶

対にかまわん。

津屋崎聖愛ホームの安らかな、清らかなたたずまいが臉に浮ぶ。ふとどこからともなく細く小さいみ声が聞えて来た。

「地の果なるもろもろの人よ。わたしを仰ぎのぞめ、そうすれば救われる」(イザヤ四五・二二) ああそうでした。主の居たもうことを私はすっかり忘れて居ました。「あなた方の言い分を持ってきて述べよ。また相談せよ」とねんごろに言って下さる方にソッポを向きただ自分のみじめな敗北にえたげられる様な思いに沈むのみでした。暫くして心をとりなおし主の前に悔いて祈った時、丁度子供が部屋に入ってきた。「さつきはごめんね。」とすっかり折れて素直な調子。思わず嬉しさがこみ上げる。

「あなたが忘れて居ても神様が教えて下さるからね。お祈りして書いてごらん。」

数時間後「お祈りして書いたらね。三日間のことみんな書けたよ。」と晴やかな様子。

この幼い子にも神様が御自身をあらわして下さったことに感謝感激の至りであった。

旅



西原 ふくよ

(一)たとい、わたしたちは不真実であっても、彼は常に真実である。
(二)テモテ・二・一三

(二)かれ、その羽をもて、汝をおおいたまわん。

(詩・九一・四)

(三)神はそのひとり子を賜わったほどに、この世を愛して下さった。それは御子を信じる者がひとりも滅びないで、永遠の命を得るためである。
(ヨハネ・三・一六)

(四)彼はこの神、すなわち、死人を生かし、無から有を呼び出す

される神を信じたのである。
(ローマ・四・一七)

(一)(二)の聖言は、長女、文江の友人から、贈ってもらったのですが、(一)のみことばにあるように、私は不真実であっても、神は常に真実に守って下さいました。(二)の御言葉によって、寂しい時、悲しい時、いついかなる場合にも、主のみつばさに守られている事を思い、慰められます。(三)のみことばは、

私の主人が臨終に近づく時に、読んできかせましたら、涙を流してきてくれました。神に愛され、守られて、今に至るまで生かされ、二人の娘と孫に依り、喜びに満ちた日々を送ることが出来て、感謝でございます。(四)のみことは長女が愛し、信じているみことばです。信仰の父であるアブラハムの信仰には、到底及びませんが、このみことばを、信条として、将来に希望をいだいて、外地でがんばっています。ぶどうの木が発行されて、数年になりますが、私には、皆様のためになるような、信仰の証もないので、専ら、皆様の良き証を、むさぼっていました。ぶどうの木とは、本当によい名をつけたものだと思います。私達は弱くとも、主の力によりすがってこそ、大なる力を得る事が出来ると思います。この度、長女にもベビーが生まれ、手助けに私が暫くの間カナダへ行くことになりましたので、思いきってペンを取らせて頂きました。信仰の浅い者でございますが、神の御加護と皆様のお祈りにこたえられて、孫の主一も、心身共に、健かに育ち、感謝の毎日でございます。今年も、七月二日から二四日までの夏期学校にも、初めて参加させて頂きました。津屋崎教会は松林の中の静かな、空気の良い所でした。新築された教会で開校式があり、部屋割りも決まり、名札もいただいたら、

遠い女学校時代の昔に戻ったような気分でした。同室の方達は、高木さん、咲子さん、阿部さん、安永さんでした。出発前夜から、激しい雨が降ったりして、風雨波浪注意報が出ていましたが、やはり三日間、雨続きで、最初の夜は夜通し、強い雨と雷、稲光が絶え間なく、とうとう一睡も出来ませんでした。合間を見て適当に泳ぎ、又、色々ゲームをして楽しむ事が出来ました。海辺で拾った貝殻で思い思いの傑作も出来て、楽しいひとときを過ごし久しぶりに童心に帰ることが出来ました。御食事もおいしくいただきましたが、残念な事は、先生方とゆっくり交わりの時を持つことが出来なかったのと、出発する前に考えていたほど、御台所などの御手伝いが出来なかったことでした。帰る日に聖愛ホームを訪問しました。玄関で声をかけましたが、御返事がないので、御部屋を見ましたら、祈っておられました。私達が無事帰宅出来るようにと祈って下さったそうです。本当に感激いたしました。開校式があり、食事の仕度などの労を取って下さった姉妹にも、来年又会いましょうとお礼を言って、お別れしました。往復共皆様に守られて、無事帰宅出来て、感謝でございます。二日目の夜のキャンプファイアは印象深く、いつまでも忘れることはないでしょう。さて、私の海外旅行ですが、

手続きが手間取っている間に、あれもこれも荷物が増えてゆくばかりです。制限された重量に合わせるのに、一苦労でした。重い品物は、箱に沢山空間が出来、軽いものは箱の上に、盛り上ったりで、大変でした。私達が地上での旅装を整えるのでさえ、このように、むずかしいのに、聖なる主の御前に立つためには、いとも良きものを、携えてゆき、主によるこばれ、御国の民として受け入れられるように、信仰に励みたいものだと思いました。長女文江が、産後早期離床の為に、肥立ちがよくないとの便りがあつたきり、何も言つて来ず、不安にかられる時もありますが、神は信ずる者を、はずかしめず、見捨て給わない事を信じて祈り、平安を得ています。何処に行くとも、主、共にませば大丈夫と確信を持っています。今日この頃です。これから、ひきつづき、私達のため、覚えてお祈り下さいますよう御願ひ致します。では愛する教友の皆様方、暫くの間ごきげんよう。



家の仏壇



松村直行

昭和二八年一〇月、今から一二年前に福岡療養所から帰宅した時私は神様に忠誠を現す気持で家に在る神棚を全部焼き捨てることにしました。其の時のいささかの不安も心の動揺もなく平然と行動しましたが唯焼く前に祈りました。

「神様、私は神様に従いますので家に在るこれ等の偶像を焼き捨てます。是等の物が私にたたる事は全然ないと思いますが、若しその様な時には天地の創造主であられる神様が私と私の家族の者を守って下さいませ」と祈つて焼き捨てました。その後別に何の異常もなく私の体にも何等の異変もなく、かえって心はさっぱりとして非常な安心感と充実した力が与えられた気持でした。ひと思いに仏壇も焼きたかつたのですが祖父のお骨が四五年前から置いてあるし母のお骨も一八年前から置いてあるし他に祖父の位牌と親類の位牌も四枚ばかり仏壇の中にありますので、仏壇を焼くとお骨の置場が無く

なり困りますので、仏壇だけは気にしながら其のまま置いていました。六年前にこのお骨だけを寺に預け、それ以来位牌だけの仏壇には供養もせずにおる内に父が三年前に八三才で、弟の家で亡くなりました。両親の忌日や命日に弟の処へ行つて供養に列席していましたが、私が病弱のため父の世話も出来ないで弟が長男の私に代つて父の世話から葬儀万端の一切まで又其の後の儀式も全部弟がやってくれました。そうした儀式の度毎に列席していますが、其の度に家に在る位牌が気になって来ます。

別に供養もせぬので、或る日寺に位牌を始末してくれぬかと交渉に行きましたが、寺では預からぬといひますし、それならお寺の手で焼くとか何とか始末してくれと話しましたが、私の話が不調法なのでしよう。かえつて忌日命日には弟が儀式をやりますので、お盆とお彼岸にだけ供養に来てもらうという、全く私の気持とは反対の交渉に終つてしまいました。そして私自身はクリスチャンだから仏壇には参らぬが先祖は尊ばねばならぬから、お前達は仏壇を拝みなさいと、娘達に線香まで買ってやる結果になりました。お位牌の処置には全く困り抜きました。

仏壇に位牌があればどうしても二神に仕える事になるし、

といつて今更こうなつては仏壇を焼く気持はあつても実行する気にはならず、この事で多少ノイローゼになっていました。キリスト者と公言しておりながら、家には仏壇があつて坊さんに盆やお彼岸には回向えんこうに来させたり、位牌の足が折れておるのを修繕したりしておる私を弟は、私の息子に、お前のオヤジは馬鹿ばいと罵られ、息子は腹を立てて弟と喧嘩したり、私自身も非常に不愉快に思つたりして、それでハット気が付いて位牌を処置しようと思つても未だぐずぐずしていた私ですが、或る日思い余つて牧師に相談しました。

静かに聞いていた牧師は焼きなさいといひます。そして懇々と天の神様以外には神もほとけも、まして偶像などあつてはいけない。今は全く悔い改めて神様に仕えることです。生活態度の切替えが何よりも大切です。

「主を恐れる道は清らかで永遠に絶えることがなく主のさばきは真実であつてことごとく正しい」(詩一九・九)と懇ろに教えられました。私は非常に感激しました。

「だれが自分のあやまちを知ることが出来ましようか。どうか、私を隠れたとがから解き放つて下さい。また、あなたのももべを引き止めて故意の罪を犯させず、これに支配されることのない様にして下さい」(詩一九・二二—二三) この

御言葉をもって祈りました。しかし、彼等は私に指さしているかも知れません。

「彼は主に身をゆだねた。主に彼を助けさせよ。主は彼を喜ばれる故、主に彼を救わせよ」(詩二二・八)と。ですから神様私を助けて下さい。

「わたしは我が魂を御手にゆだねます。主、まことの神よ、あなたはわたしをあがなわれました。あなたは空しい偶像に心を寄せる者を憎まれます。然し私は主に信頼し、あなたのいつくしみを喜び樂しみます。あなたが私の苦しみをかえりみ、私の悩みに御心をとめ、私を敵の手にわたさず、わたしの足を広い所にたたせられたからです」(詩三一・五一―八)

これ等の御言葉を後でよみました。ああ私はほんとに悪かった。口先だけの信仰でキリスト者といっておきながら私の日常の生活態度は、小さな処には気を配って形だけのキリスト者でおさまり、教会には取り済ました顔で謹み深くアーメン、アーメンといっておき、肝心の一番大きな全てを神様に捧げることは忘れていた。何という大失態であることか。神様どうか私のこの大きな罪を許して下さい、心から悪かったと悔い改めあやまりました。昔モーセが山から十戒の石を持って帰ってみれば民は金の牛を造って礼拝しておるのを見

て非常に怒った。

今神様に怒られては私は全くどうする事も出来ません。どうか私の大それた罪を許して下さいと、牧師の前で泣いて詫びました。

牧師も取りなしの祈りをして下さいまして、私は泣いた顔で全くホットして今度は心の底からこみ上げてくる喜びと嬉しさで一杯でした。この喜びは何ともいい様のない清々しい全く愉しい歡喜に満ち溢れた喜びでした。又この喜びは今まで味わったどの喜びよりもホツとした最も大きな実のある喜びでした。こんなわけで私も非常に心強く思っただけでなく、壇を焼きましたが、この事をつくづく考えて見ますと、私達の心の中には日本伝来の染み着いた神仏教の因習という物が根強くこびり着いておる事を悟りました。

神棚や仏壇は何か恐い物、子供の頃より幽霊の話や映画を見て来て居るので粗末にすると罰が当りそうな気がするの、といつても別にお参りすることもせず(もつとも神仏にも毎朝毎晩お勤めをする小数の日本人はおりますが)大切にもしないが粗末にも扱われない。まあそううっと大事にしておく程度で、正月や何か祭りの時には大騒ぎしてお祭り行事をやるがその時だけ、後は忘れて何もせぬといった程度のもの、

それでいて何か恐いものだから何かの時には折れば厄払いもしてくれる物といった感情が骨の髄まで込み込んでいます。それで神棚や仏壇にはどうしても手を付け兼ねますが、牧師から神とパール像に仕える二心の信仰はいけないと教えられると、このことはわかっているのに実行出来なかつた私の優柔不断の信仰を知らされて、信仰に依る生活態度の切替を今ハッキリと確立しておかねば、入院した後では何も出来ない。終生後悔するぞと思うと、翌日早速火鉢で位牌を焼き、仏壇は叩きこわして娘に手伝わせて焼いてしまいました。この時思いましたが、生活態度の切替えということは説教には何度も聞かされ頭では理解出来ているが、実際には仲々出来辛いことです。その内には何とかしよう。これはこの位の程度で良からうと自分の都合の良い方に解釈して自分の都合の良い方に何とか都合を付けている。

之では何時まで経っても生活態度の切替えは出来ない。これ位の事は良いだろうと思っていたことが、案外神様に取つては大外れた事をしていたと後で気の付くことがままありますが、その時も其の内に改めよう其の内に改めようとそのままにして置くことが多かったと思います。生活態度の切替えは気が付いたら今日唯今早速実行することです。現に私は位

牌の事は随分前から気が付いていながらその内その内で何時か人を当にして他人に嫌な事をやらせようとする。横着な心にまで發展します。位牌を焼いた後の何と清々としたサッパリとした気持だつた事でしよう。

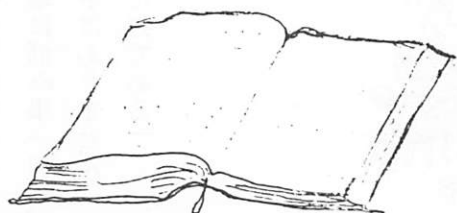
不安どころか今迄に倍して神様は私を愛して下さるのだとの嬉しさがハッキリとしました。自分が悪かつたと気が付いて即座にお詫びの祈りをして悔い改め、悔ひ改めるだけでなく実行した事の嬉しさに伴う、この平安さ。すぐその場で神様は平安を与えて下さいました。この平安は金や物質で与えられはしない。霊ですからね。この平安を与えられた精神はもう何者といえども動かす事の出来ない平安で、何者でもない。唯神様に従つたという忠誠心に与えられた平安は私だけのもの、又行う人へのみ神様が与えられる平安です。この平安の与えられた喜びは末だ十分に書き現わす事が出来ませんが仲々の物です。

案外こうした事は皆様の中にあるかも知れませんが、私はこの様に平安を与えられ、神様一辺倒で進む事の出来た事を心から感謝しています。どうか皆様の中に私の様な方がおられたら早速実行してみてください。ほんとに愉しく嬉しくなります。

「私の生活態度の切替え」の一コマを初筆として書いてみました。

(市立病院のベットにて)

アーメン



与えられた道



丸橋幸市

私は以前から信心しておりながらも、いやな事や、つらい事、腹の立つ様な事、心配事などいろいろとおもしろくない事が次から次に、殆ど毎日の様にやって来るので、其の度毎にお祈りして居りますが、或る時こんな事がございました。私は毎日電車で昭和町から陣山までの三二三分お祈りしながら通っております。腰をかけてお祈りするのはとても良いのですが、つり皮につかまってお祈りするのはどうも都合が悪く、お祈りが出来ないで困っておりました。丁度その朝も吊り皮を持ってどこか座席の空いた所はないかと見回して居ましたらこんな事が与えられました。これは道だなあと気が付かしていただきました。これも神様が私にあたえられた道だとわかると何だか重荷を下ろした様に楽に成り、空いた座席を探す気持もなくなり、早速お祈りをさせていただきます。それからというものは今迄の様ないやな事、辛い事、腹



の立つ事、心配な事、等がやって来ても、これも与えられた道だなあと気が付き、神様はこんなところも歩かして下さるのだなと思えば、其の途端に悩み事一切が消えて無くなるのですから、こんな嬉しい事はありません。

「神はわれらの避所また力である」

(詩四六・一)

「燃ゆる柴」創立五十年誌(一)

発行 一九九〇年六月三〇日

発行者 北九州市八幡東区前田二丁目一〇一三

基督伝道隊 八幡前田教会

牧師 榎本利三郎

編集委員

総括 広田 寿

原稿 正野真宏(事務局)

原田駒一郎

大田邦子

週報 野村末義

高木ツルエ

野村美恵子

年表 筑山文彦

写真 林正二郎(事務局)

名簿 河本信生

印刷製本

吉田印刷株式会社

北九州市若松区浜町二丁目一九一